

# ゾンビランドミカ

裏方さん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幸せの生活から突然ゾンビに。

この駄作はゾンビイとなってしまったオリヒロが自分の居場所を探し求める物語です。

オリヒロが最後に辿り着いた居場所とは。

※作者、佐賀弁知りません。

BD頼みです。

また知識はBDのみ、ご容赦願います。

あと不定期更新です。

# 目次

## 第一章 別れと出会いと

ゾンビイ? | 1

アイドル? | 25

ライブ? | 55

絶望それとも希望? | 90

バトル? | 129

ただいま? | 171

うれしいの? | 202

## 第二章 再会と・・・そして始まりと

それぞれの想い | 247

ガタリンピック | プライドと決意と・・・すれ違い | 295

## 番外編 マツカン日記

一本目 ある台風の日に | 348

二本目 プロム 二人の別れ(前編) | 376

# 第一章 別れと出会いと ゾンビイ？

“カチャカチャ♫”

よし出来たつと。

ふむ、見た目は上出来。

ちよつと茶色の焦げ色も美味しそう。

どれどれ、ちよつと味見。

“ぱくつ”

うーん、甘くて美味しい。

やつぱり卵焼きは甘いのが美味しい。

これをここに詰めてつと。

よし、今日のお弁当準備完了。

さてとそろそろ起こさないと、えつと今何時・・・げ、や、やば！

も、もうこんな時間。

“ドタドタドタ”

「ね、ね、起きて。

遅刻しちゃうよ。

はやく起きて朝ご飯食べて」

「ふあゝ、おはようさん」

「うん、おはよ。

あ、でもマジあんま時間ないから、顔洗っちゃつて。

すぐ朝ご飯にしよ」

「ん、あ、ああ。

ふあゝ」

すごく眠たそう。

昨日も帰り遅かったもんね。

毎日、お仕事ご苦労様。

ふふ、あんだだけ社畜にはならないって言ったのに。

でもさ、あの感じだと今日が何の日か憶えていないよね。

今日はさ、わたしと彼が初めて……  
へへ、あれからもう5年か。

あの後、なんかいつの間にか同棲しちゃって。  
……ふふ、幸せ。

あ、やば！

こんなことしてる場合じゃない。

朝ご飯朝ご飯。

“スタスタスタ”

「はあく、仕事つてのはやめることはあっても、終わることはねえんだよな。

学生時代も社会人になっても変わらん」

「はいはい。

今度からはちゃんと残業断ろうね」

ふふ、こんなバカな会話しながら彼と通ういつもの通勤の道。

とつても幸せ。

でもさ、あの交差点で彼は千葉駅の方に、わたしはバス停のある方に

別れないといけない。

寂しいなあ、また夜まで会えないんだ。

ずっと一緒にいたい、ずっとこんなバカな会話続けていたい。

ずっとこうやって手を握っていたい。

ずっと、ずっと。

「はあくあ、働きたくねえ」

「はいはい、わかったわかった。

わかったからそんなに負のオーラ出さないの。

今度、またキツネっ娘のコス着てあげるから」

「……お、おい。

お前は世話やき狐っ娘さんか」

「もふもふしたいんでしょ、もふもふ。

好きなだけさせてあげる」

「ちがう！

お、俺はあんな社畜じゃねえ」

「う、うそ」

「いや、うそって、あのな」

「だってあのアホ毛といい、目の感じといいそっくりじゃん」

「……くそ、反論できねえ」

ふふ、そうなんだよね。

昨日お布団に入って一緒に見てたあの深夜アニメ。

あの主人公、彼にそっくりなんだよ。

目の腐り具合とか。

へへ、それにロリのところなんかも。

「冗談冗談。

あのさ、わたしもつとお給料たくさんもらえるよう頑張る。

だから専業主夫の夢、もうちよつと待ってね」

「ぼくか、冗談だ。

そんなことしてみろ、お前のお父さんに殺されるってくの。

仕方ねえ、豊かな老後のために働いてくるか」

「うん、豊かな二人の老後のために頑張ろう」

“ スタスタ”

「あ、そうだ。

お前、今度の日曜日は何も予定無いか？」

「え、日曜日？」

あ、うん、特に予定無いよ。

でもなんで？

……はっ！

も、もしかして一日中、エ、エッチなことするつもりじゃ。

そ、そりゃ、わたしもあれだけど、一日中は身体が」

「ぼ、ぼっか、違うわ！

ま、まあなんだ……あ、あ、挨拶に行こうかなって。

一度ちゃんとお父さんに挨拶にな」

「え、とうちゃんに？」

ほ、ほんと？」

「ああ。

「……一応ちゃんと考えてるから、いろいろとそれなりに。

それとこれ」

「ん、なにこの小箱？」

なんだろう？

なんか綺麗に包装されて。

こんなのいつの間？」

でも開けていいのかなあ？

なんかもつたい。

「ま、まあなんだ、いいから開けてみてくれ」

「うん」

「ぱさぱさ、かぱっ」

「あ、指輪！」

「まあ、や、安物だけど。

今日はそのなんだ、い、一応、き、き、記念日だから。

そ、その、貰ってくるとありがたい」

「だき」

「う、うれしい」

「ば、ばっか離れろ。

人見てるじゃねえか」

「いいじゃん、憶えてくれてたんだ。

「……ありがと♡」

「お、おう。

「あ、か、会社遅れっから」

「うん」

「じゃあな、行ってくるわ」

「魔王さんよろしくね」

「……うー、やっぱり行きたくねえ」

はあ〜」

“とぼとぼとぼ”

「らっつてらっつしやい。

．．．．．あ、あのさ、今日は早く帰ってきてね」

「．．．．．お、おう」

“スタスタスタ”

へへ、そっか、とうちゃんに会いに来てくれるんだ。

それに指輪まで。

そういえばこの前、なんかしつこく指触つてくると思ったんだ。  
うれしいな。

どうしようかなあ〜、はめちやおうかなあ。

．．．うん、やっぱり今日帰ってからにしよう。

だって彼にはめてもらいたい。

それまで大切にリュックの中に締まっておこ。

“かばっ”

えへへ、この中に．．．．．あ、お弁当！

やばっ、お弁当渡すの忘れた。

急がないと、彼電車に乗っちゃう。

“ダー”

“イライライラ”

ん〜、な、長い。

この交差点の信号、いつも変わるまで長いんだよ。

やばいやばい、もう電車乗っちゃう。

お弁当、せっかくうまくできたのに。

えつと〜

“キヨロキヨロ”

よ、よし、だ、大丈夫だ。

あのトラック、まだあんなに遠いし。

それに誰もいないから、今のうちに渡っちゃえ。



それ！

『おねえちゃん』

えっ、な、なに？

い、今の声って！

“キヨロキヨロ”

いない。

そ、そっだよね、いるはずないか。

．．．．うん、わかった。

わたしはまだそっちに行っちゃいけない。

ごめん、ありがとう。

ちゃんと気を付けるね。

．．．ふう、さてつとスマホスマホ。

ラインで謝っておかないと。

“カチャカチャ”

ごめんなさいって、そんで

“ブオー”

え、なに？

ト、トラック！

な、なんで、だってここ歩道、歩道だよ。

“ブオー”

う．．．．そ。

“ドンツ”

「ぐはあー」

“フワ．．．．ドコー！”

「う．．．うう、死、死にたく．．．な．．．い」

“キキキ”

「え、い、いま、なにか当たって。

や、やばいー」

“ガチャ”

「ひ、人じゃないだろうな。

くそ、いつも間にかウトウトしちゃまって。

え、えつと〜」

“キヨロキヨロ”

「だ、誰もいない？」

気のせい？

い、いや確かに衝撃が。

後ろ、トラックの後ろか？」

“ダー”

「はあ、はあ、何も無い。

……は、そうだ。

き、きつと犬か猫だったんだ。

それでどっかに逃げて……

そ、そうだ、そうに違いない。

はは、そうだ、なんだそうなんだ。

だって何も無い、何も無いから。

は、はは、ははは、危なかった。

千葉から佐賀まで帰らないといけないんだ、気を付けないとな。

よ、よ、よし、い、行こう」

“キュルル、ブオー”

—————

“ちゅんちゅん”

「ん〜いい朝だ。

今日は何か良いことありそうな気がする。

もしかして今日こそは目覚めるかもしれん。

……目覚めてほしい。

今までいろいろ試してみたんだ。

だが全然目覚めてくれん。

はつきりいつて、もうどうすればいいのかさっぱりわからん」

「ワンワン」

「ん、おうロメロ。」

「今日も元気だな」

“ なでなで ”

「なんでお前だけ目覚めることができたんだろうな」

「ワンワン、はあ、はあ、はあ、はあ」

「なんだ、腹減ったのか。」

「ほらゲソだ」

“ ぽい ”

「ぐおーがうがうがうがう」

「おまえが喋れたらな」

「はあはあ、わんわん！」

「なんだもつと欲しいのか？」

「ほら、とってこい！」

“ ぽい ”

「ぐおー」

「は、しまった。」

「家の外に」

“ キュルルル、ブオー ”

「な、なんじやい？」

「トラック？」

「こんな道をなんてスピードで飛ばしてくるんじやい！」

“ ブオー ”

「は、ロ、ロメロ。」

「ちよ、ちよっと待て」

“ キキキ ”

「ば、ばかやろー」

「き、気をつけろ……………えぬ、ぬいぐるみか？」

「はあ、長距離運転で疲れてんだ。」

「さっさと帰って寝よ」

“ ブオー……………ドサツ ”

「危なか、なんて運転すんじゃない。

大丈夫かロメロ。

「…………あのトラック、荷台の屋根から何か落として」

「スタスタスタ」

「ま、マジか、お、女？

「お、おい大丈夫か？」

「ちよんちよん」

「……………し、死んどー」

「な、なんで人の家の玄関で死んでるんじゃない。」

「…………ど、どやんすつとかこれ！」

「警察になんか話したら、家宅搜索されるかもしれん。」

「もし家宅搜索されたら…………まずかことになる。」

「どやんする、どやんすつか。」

「まったく、今日はなんて日だ」

「……………」

「……………」

「う、う、うづうづ、うづうづづ」

「ふらふら、ふらふら」

「……………ちっ」

「う、う、う」

「ガブツ」

「えい、うつとうしい。」

「人の頭かじるんじゃないわい、このぼけ」

「しっしっ」

「う、う、うづう、う、うづうづ」

「ふらふらふらふらふらふら」

「はあ、しかしどうすれば目覚めるんじゃない。」

もーなしてよかかわからん」

「う、うう、う、ううう」

“ガブツ”

「お、おぉー」

や、やめんか、このふーけもん！

あっちいかんかい！」

「う、う、う、う」

“ふらふらふら”

「まったくはらんだつ。」

・・・そういえば、こいつも死んでからもう一年か。

名前はなんて言うんだ？

適当に放っておいたからなんも気にしていなかったが。

ん、確かこいつのリユックつて」

“スタスタ”

「えつと確かここらへんに。」

おお、あつた。

このリユックに何か名前わかるようなもの入っていないか？」

“ガサガサ”

「えつと・・・お、あつた、車の免許証。

・・・これがこいつの名前か。

ぷぷぷ、この写真、がばい地味な顔。

え、えつと後は何か」

“ガサガサ”

「・・・何だこの箱？」

“カパツ”

「こ、これつて・・・ふむ。

そつか、こいつ・・・

ほ、他にはなにか」

“ガサガサ”

「ん、チヨコ？」

ふむ」

“パク”

「ぶほおー」

か、辛かー

ぺっ、ぺっ！

はあ、はあ、はあ！

な、なんだこれ

ワ、ワサビ味、チョコのワサビ味だと！」

「う、うう、ううう」

“ガブツ”

「.....」

えらい、うつとしいんじやい。

ほれ、俺の頭じゃなくてこれでも食ってる！」

“ぼく”

「ほれ食ええ！」

“ぼく、ぼく”

「もつと食ええ！」

えらい、この一箱全部食ええ！」

“ぼくぼくぼくぼく”

「う、う.....う.....う.....うがぁ！」

“ドタバタドタバタ”

「うが、うが、うが、うが！」

う~~~~」

“ドタ”

「げ、ぶっ倒れた。」

お、おい大丈夫か？」

“チョンチョン”

「.....」

「し、死んだ.....い、いやもうこいつ死んでたんだ。だが」

「.....」

「ピクリとも動かん

も、もう訳わからんわい」

「……………」

「……ん、ん、ふあ」

あくよく寝た。

え、えつと、あれここつて？

“むく”

えつと、ここどこ？

わたしなんでここに？

……ん？ わたし、わたしって誰？

“フラフラフラ”

う、ん、なんかあたまが変。

それになにもわからない。

“ガチャ”

えつとそんなことよりさ。

「誰か～いませんか」

“しーん”

誰もいないのかなあ。

でも、さっきの部屋の電気ついてたし、パソコンも電源入ってたか

ら

きつと誰かいると思うんだけど。

“スタスタスタ”

はあ、しつかしどんだけでかい家なんだ？

い、いったいいくつ部屋があるの？

“ガタツ”

へ、こ、この部屋？

今この部屋から物音が。

“ガチャ”

「あの〜誰かいますか？

はあ？」

「う、うう〜」

「う、う、う、う、う〜」

「あゝ、あゝ〜」

“フラ、フラ”

な、なにこれ、ば、化け物！

化け物がいっぱい。

“すどん”

あわわわわ、こ、腰が、腰が抜けて動けない。

「う、うう、う〜」

ひ、ひやー、こ、こつち来た。

い、いやー、こ、怖い。

「だ、誰か〜」

“バタン！”

「シツ、シツ」

「う、う、う、う、うううう」

“フラ、フラ”

は、よ、よかった。

あつちいった。

「お前、目覚めたのか？」

は、誰かわからないけど人間。

こ、このサングラスの人、人間だよね。

・・・え、目覚めた？

まあさつき目が覚めたんだけど。

あ、それより

「あ、あの、あの化け物って」

「・・・」

「あなたあれ知ってるんですか？

あれなんなんですか！」



「見ての通りゾンバイじゃない」

「ゾ、ゾンバイ?」

ゾンバイって、あの映画に出てくる奴だよな。

・・・ほんとにいたんだ。

はっ、だったら危ないじゃん。

食われちゃうじゃんか。

なんでこの人平気なの?

と、とにかく警察、警察に電話しなくちや。

“ごそごそ”

あ、あれ、スマホがない?

どこやったんだ?

あ、そんなことより通報通報。

「すみません、スマホ貸して下さい」

「何をするつもりだ」

「なにをって、警察に電話を」

「・・・その前にこの鏡を見てみる」

「鏡?」

・・・ひやつ!」

な、なにこれ?

鏡の中にも化け物が・・・

うしろ、わたしの後ろに化け物がいる?

“クルツ”

あれ、何もいない?

なんで?

・・・はっ!

「こ、こ、これって」

「そうだ、これはお前だ。」

お前もゾンバイなんじゃない」

「・・・」

な、なんなんだこの人。

わ、わたしが化け物って、そんなわけないじゃん。

な、なにいつてんのかなあ

あは、あは、あはははは。

こ、これは何かの間違いなんだ、きつと。

「お前は一年前に死んだ」

「……うそ……だ」

「嘘じゃない。」

間違いなく死んだ。

そしてゾンビイとして甦ったんじゃない」

「あ、あ、あんた、な、なに言つて……」

死んだ。

わたし……死んだつて。

うそだ！

わ、わたし死んでない。

だ、だつてほら生きてる。

ちゃんと生きてるじゃん。

死、死、死んでなんかいない！

「わたしは生きてる、生きてる！

ば、馬鹿なこと言わないで！」

“ダー”

「……そつか目覚めたのか。

それならきつとこいつらも」

・  
・  
・

“ダー”

嘘、嘘、嘘、嘘、嘘だ！

わたし、死んでなんていない。

だ、だつてほら、ちゃんと生きてる。

何言つてんだあいつ！

ばつかじゃない。

「はあ、はあ、はあ」

ちゃんと、ちゃんと生きてるもん。

死んでなんかいないもん。

“スタスタ、スタ”

“……はあ、はあ。”

『この鏡を見てみる』

『お前は一年前に死んだ』

でも、あの鏡に映ったのってわたし。

やっぱり死んだの？

……もう、何が何だかわからない。

・  
・  
・

“とぼとぼとぼ”

死んだ……死んだ……死んだ。

化け物、わたしは化け物。

……化け物……なんだ。

だったらこれからどうすれば……

あいつのところに戻る？

いや、絶対いや。

あんな奴のどこなんか戻らない。

で、でももうこんなに暗いし、どこか泊るところ探さないと。

どうしよう。

「にゃ〜、にゃ〜」

あ、子猫。

へへ、かわいい。

どうしたの、捨てられたの？

おいで抱っこしてあげる。

うんしよつと。

「にゃ……ブギャー！」

「えっ？」

「シャー！」

“ガリガリ”

「ひゃっ」

い、いきなり引つ掻かれた。  
やっぱり化け物だから怖がられたのかな。

そ、そんなに怖いのかわたしの顔？

あ、あそこの喫茶店で。

“タツタツタツ”

スー、ハー、スー、ハー

こ、怖いけど、やっぱりもう一回確かめたい。

“そゝ”

「.....」

間違いない。

窓ガラスに映った顔.....やっぱりわたしは化け物なんだ。  
なんで、なんでこんなことに。

.....も、もうやだ。

“カアー、カアー”

へっ、あ、カラス？

“バサバサ、バサバサ”

はっ、いつの間にかカラスがこんなにたくさん。

な、なんか取り囲まれてる。

暗闇に目だけ光ってて、めっちゃ不気味なんだけど。

あ、あっち行こ。

“スタスタ”

“バサバサ、バサバサ”

ひえー、なんかついてくる。

みんなついてくる。

や、やだ、怖い。

“カアー!!”

「ひゃー!!」

“ダー”

「はあ、はあ、はあ」

なんとか来ました。

めっちゃ怖かったよ。

だつてずっとついてくるんだもん。

も、もういないよね。

“きよろきよろ”

はあくよかった。

でもどうしよう。

このまま明るくなって誰か見つかったら大変なことになる。

今のうちにどこか居場所見つけないと。

人に見つからないような場所無いかなあ。

“とぼとぼとぼ”

でもさ、ここってどこなんだろう。

日本なのは間違いないんだけど。

あ、橋！

そうだ、橋の下だったら隠れるとことかありそう。

雨とかも防げそうだし。

“スタスタスタ”

ん、あ、標識たつてる。

えつとなんて書いてあるんだ？

町田川、佐賀県・・・佐賀県。

そつか、ここって佐賀県なんだ。

って、佐賀県ってどこだっけ？

んとんと、四国だったけ？いや違ったような・・・

ま、まあいいか。

それより、この橋の下って住めそうかなあ。

どんな感じ？

ちよつと降りてみよう。

うんしよつと。

“スルツ”

え？

「ひゃー」

“ゴロゴロゴロ、ドカ”

うへえ〜土手から転げ落ちた。

へへ、でも全然痛くないや。

やっぱ化け物んだもんね。

へ？ あれ、あそこに見えるの、あれってわたしの………身体！

え、な、なに、なんでわたしの身体が、えつと〜

げっ！ あ、頭もげてるんだ！

やばいやばい。

「う〜ん」

だめ、頭だけじゃ動けない。

ど、どうしよう、か、身体動かせる？

「ん〜、ん〜、動け〜」

“むく”

や、やった、立ち上がった。

ほ、ほら、こつち、こつち来て。

違う、そつちじゃない！

ん〜、むずかしいよ〜

「ん〜、ん〜」

そうそう、こ、こつち、はやく誰かに見られちゃうから。

ふう〜、やつと来た。

“ガサツ”

え？ や、やば！ なんか物音がした。

もしかして誰かいるかも。

はやく頭くつつけないと。

ほ、ほら早く頭持ちあげて。

うんしよつと。

“ひよい”

えつとくつつくかなあ

「えい！」

“ガチツ”

よ、よし。

大丈夫だよね、もう取れないよね

……やっぱりわたし死んでんだ。

今更だけど実感した。

あ、そ、それよりその草むらからさつき物音が。

“そ〜”

「あ、あの〜誰か」

「ワンワン！」

え、犬？

「ウー、ウー」

はは、わたしに怯えてんだ。

仕方ないよね、こんなんだもん。

何もしないからおいで。

ほら。

“ガブツ”

いた……くない。

はは、全然痛くないや。

“なでなで”

「う〜、う〜」

「ごめんね驚かせて。

いいよ、もつと思いつきり噛んでも。

わたし全然痛くないから……痛くないんだ。

あのさ、わたしさ、死んでんだって。

へへ、へへ」

“なでなで”

「く〜ん」

……やだ、やだよ。

“ポタ、ポタポタ”

うづ、うづうづう、うぐ、うぐ、うづうづう。

「こ、こんなのやだよ。」

“ペろペろ”

お前、怖くないの？

わたしこんな顔してるのに。

「くうくん、くうくん」

ありがとう。

お前やさしいね。

“ぎゅ”

「うづうづ、うわくん、うわくん」

「くうくん、くうくん」

．．．や、やっぱりやだ。

こんなんで生きていたくない。

「死のう。」

でもどうやって。

そ、そっだそこの橋桁に紐ひっかけて、それで首吊って」

「それでは死なん。」

さつき頭もげても生きてたろ」

「じゃ、じゃあさ、そうだ川で溺れて」

「無理だ。」

ゾンビイは息しとらん」

「じゃ、じゃあさ．．．．．って、あ、あんた!」

「お前そんなに死にたいのか」

「あ、当たり前じゃん。」

「こ、こんなになつて生きてたって!」

「．．．こんなん、ど、どうしろっていうのさ」

「そうか。」

「なら、ついてこい」



「え？」

“パン、パン、パン、パン！”

「うが！」

“バシユ”

「げ、げえー！」

あ、頭吹っ飛んだ。

あのゾンビイ、頭吹っ飛ばされた。

“パン、パン”

い、いやもそのゾンビイ、死んでるから。

そ、そんなに撃たなくても。

「どうだ、このビデオのように死にたいのなら頭を吹き飛ばすしかない。

跡形もなくなるぐらいにな」

「ううう」

「お前が死にたいのなら」

“ブン、ブン、ブン！”

「さ、俺がこのバットでお前の頭吹き飛ばしてやろう。

このスイカのようにな。

見ろ！」

“バシ！”

“グシヤ！”

ひゃあ、ス、スイカが！

「死にたいなら、俺がこのスイカのようにお前の頭をグシヤグシヤにしてやる。

それとも、それが嫌なら・・・そうだ、このガソリンをぶっかけて焼き尽くしてやろう。

全てを燃やし尽くして灰になるぐらいにな。

どっちでもいいぞ、お前の好きなほうを選べ」

「・・・・・・・・」

「ほらどうした」

「・・・・・・・・」

「さっさとどつちか選ばんかい！」

「・・・わ、わたしは」

「あ、そうだ。」

「死ぬ前にこれ返しておいてやる」

「え？」

「なにこの箱？」

「お前が大事そうに持ってたもの・・・だろう、きつと  
なんだろう。」

綺麗な箱、何入ってるんかなあ。

“ かぱっ ”

えっ、指輪？

“ ぎゅ ”

な、なに、なんか変。

わ、わたし死んだはずなのに、痛みなんて感じないはずなのに。  
なんで、なんでこんなに胸が痛いのか？

・・・この指輪っていったいなに？

「さてつと。」

で、どつちがいいんじやい。

バットか灯油か、さっさと好きなほうを選べ！」

「・・・・・・・・」

「えらい、もうよか！」

ほら、さっさと頭出せえい。

このバットでグシャグシャにしてやるわい。

グシャグシャのグチャグチャの、なんかこうグワーて感じにしてやるわい」

“ ブンブン、ブンブン ”

「・・・・・・・・」

「ほれ」

「い、いや」

だ、だってこの指輪。

この指輪見ると、心が締め付けられてすごく苦しいんだけど、でも、な、なんかうれしくて……うれしいの！

だからこのままじゃ

「え、いい、往生際が悪い。

今樂にしてやる。

死ね、いい！」

「いや！ 死にたくない！」

「……」

「わたし死にたくない！

うろうろうろうろう、死にたくない、死にたくない」

「……なら生きろ」

「え？」

「お前が生きたいというのなら、俺がお前の居場所ぐらい作ってやる。だから生きろ」

「………生きたい、わたし生きたい」

アイドル？

「いつになったら目覚めるんじやい……………」

“ブルブルブルブル”

「うううううううう……………」

“ヒュ〜、ガタン！”

「ひゃー」

“ガバツ”

え、なに！

ま、窓か〜

ちやんと閉めたはずなのに今晚は風強いから。

はあく、だめだ〜怖い、怖い、怖い、怖い、怖くて眠れん！

だ、だってこの家にはさ、あの化け物……………ゾンビイっ娘達  
がいると思うと。

いやわたしも同じ化け物ってわかってるけど。

そ、そんでもさ…………

『うう〜、う、う、うう〜』

『あ〜、あ、あ〜』

“フラ〜、フラ〜”

『うがー！』

や、やっぱり怖いって！

ど、ど、どうしよう。

…………し、し、仕方ない。

今日は、あ、あいつの部屋で寝ようかなあ。

一人で眠るなんて絶対無理だもん。

そ、それにさ、いくら何でもわたしなんかには手出さない…………と、思  
うし。

だって、わたしの身体、腕も胸もお尻も包帯だらけ。

それにこの顔・・・ゾンビイだし。

“ギョ”

「ひゃー！」

“ダー”

・  
・  
・

“トボトボトボ”

んん、どこ行つたんだろ。

あいつの部屋にもいなかったし、外にでも行つたのかなあ。  
人には外出禁止って言つたのに。

しつかしほんとこの家つてすごく不気味。

この廊下なんか薄暗くて。

それにさ、なんかさっきの部屋、オリミたいなのあつたし。

何なんだろうこの家。

ううう、やつぱ今にもなんか出そう・・・

つて出てるんですけど、ここに！

はい、わたしゾンビイ！

・・・でもさ、やつぱり怖いもんは怖いんだい。

うう、やだよ、こんなところであのゾンビイツ娘達に出会つたら死

ぬほど怖い！

いや、もう死んでんだけど。

はい、わたしゾンビイ！

つておい！

でもさ、こんなバカなことでも言つてないと一人でいられないよ。

くそ、どこいったんだあいつ！

「お、おおい・・・」

・・・あれ、あいつ名前なんて言うんだっけ？

そういえばまだ聞いてなかった。

“トボトボ、トボ、スタ”

・・・名前・・・か。

わたし、名前なんていうんだろう？

ううん、名前だけじゃない、どこに住んでたの？ いくつなの？

死ぬ前って何やってたの？

・・・何もわからない。

はは、なんもわからないや・・・なんも。

知りたい！ わたしは誰？ 何者？

・・・はっ！

そうであいつなら何か知ってるかも。

うん、きつと何か知ってる！

よ、よし！

「おーい、サングラスの男！

どこだろ、出てこーい」

“スタ、スタスタ、スタスタスタ”

・  
・  
・

うーん、あいつどこにもいないや。

あ、あと探していない場所は・・・はあくあの部屋つかう

やだな

“スタスタ”

ん、あ、電気ついてる。

やっぱりあいつ、あの娘達の部屋にいるんだ。

うー、あのゾンビっ娘達は寝てるっていいんだけど。

”ドン！”

「ひゃー！」

え、な、なに？

なんかあの部屋から、いますごい音が。

「・・・なんでじゃい」

えつとこの声って・・・やっぱりあいつここにいたんだ。

でもどうしたんだろうう大声だして。

ちよつと覗いて・・・

“そう”

ん、うそ！

あ、あいつ、あのリボンの娘抱きしめてる！

げっ、あいつゾンビも守備範囲なのかよ。

あっぶなかったー

あのままあいつの部屋で二人きりになってたら、もしかしてわたしも。

い、いや、そんなことよりあの娘ってさ、まだ意識ないんだよね。

・・・なにもわからないことをいいことにあいつー

ケダモノ、女子の敵！

ぶ、ぶん殴ってやる！

「・・・さくら、お前はアイドルになりたかったんじゃないか」と

「えっ」

アイドル？

今あいつ確かアイドルって言ったの？

それにあの娘、さくらって言うんだ。

「お前をアイドルにするため、仲間も集めたんじゃない。」

最高のアイドルグループをな。

だからこんなところで寝てる場合じゃなかろうが。

さつさと目覚めんかい。

「・・・俺が、俺がお前をアイドルにしてやるんじゃない」

「う、う、ううう、あゝー」

やっぱりアイドルって言った。

それに仲間を集めたって。

なんかようわからないけど、あいつわたし達をアイドルにする気なの？

あの娘のために。

でもさ、あの娘ってあいつの何なんだ？

彼女、彼女さんの？

「・・・ふう、どっちにしろ今は何か訊ける雰囲気じゃないや。」

名前、今度にしよう。

“スタスタスタ”

「おやすみなさい」

—————

“ちゅんちゅん”

「ふあゝあ」

はあゝ、結局昨日はほとんど眠れなかった。

風が強くて、窓とか物音がする度に目が覚めちゃってさ。

“トボトボトボ”

でもほんとはさ、物音がしなくても眠れなかった。

だってさ、昨日はあんな衝撃的なもの見ちやっただもん。

そっかー、あいつはきつとあのさくらって娘のことが・・・

へへへへへ、からかってやる！

あいつどこにいるかなあ。

きつと朝ご飯だよね多分。

．．．

“ガチャ”

あ、いた！

やっぱ朝ご飯食べた。

ぐへへへへ、そうやって平然としていられるのも今のうちだぜ。

いじりまくってやる。

“スタスタスタ”

「あ、あのさ」

「お早うございます」

「えっ」



「お早うございますー！」

「あ、あ、あの、お、お、お早うございますです」

“ペコ”

「うむ、挨拶は基本だからな。

挨拶できん奴は認めてやらんからな」

“もぐもぐ”

「あ、う、うん。

へ、あ、あの何これ」

“もぐもぐ”

「ん？ これは玄海漬けじゃい。

なんだ知らんのか、このちよく有名な佐賀の名物を」

“パクパク”

「・・・そんなもん知らない」

「なんも知らんのじゃの、この馬鹿ゾンビイ。

よくそんなんで生きていられるの。

・・・つて死んでんのかお前。

まあ、なんも知らんどうしようもないお前に教えてやろう。

これはだな、クジラの」

「う、うっさい！

そんなこと聞いてんじやないやい。

この朝ご飯なんなのって聞いてんの！」

「なんなのってなんじやい」

「あのさー！

朝ご飯つてとつても大事なんだよ。

眠っている間に消費したエネルギーをしっかりと補充して、

それで身体を目覚めさせるの。

それに健康にも影響あるんだからね！

それなのになんでその大事な朝ご飯がさ、ご飯とその何とか漬けだ

けなの」

「そんなもん、面倒くさいからに決まってるじゃろ」

「あーん、もう！

そんなんじやダメじゃんか。

ちやんとしつかり栄養摂らないと。

いいからちよつと待ってて」

“スタスタスタ”

「冷蔵庫のもの使わせてもらうね。

えつと、何があるかなあ」

“ガチャ”

「ん、卵と・・・」

「・・・・・・」

・  
・  
・

「るるるるるん♪」

“カタカタ”

よしで〜きたつと。

ふむ、我ながら外見は美味しそう。

でも味のほうはちよつと心配。

だって・・・

「はいお待たせ。

卵とひき肉があつたので、そぼろ丼にしてみました。

それと、かぼちゃと豆のスープ。

どうぞ召し上がれ」

「ちやんと食べれるんだろうな」

“パク”

「んー」

“パクパク、もぐもぐ”

「ん、んー」

“ドンドン”

「あ、ほ、ほら、あんまり慌てて食べるから。

はいお茶、このお茶飲んで」

“ズズ、ズー”

「ふう〜」

「大丈夫？」

あ、それとき、味の方はどう？」

「・・・・・・美味い」

「そう？」

良かった、えへ。

なんかさ、味見しても味がわからなくて。

正直、ちよつと心配だったんだ」

「まあ、ゾンビイだからな」

「ううう、それ言わないで。

ゾンビイ忘れようとしてるのに。

・・・・・・あ、そつだ。

あ、あのね」

“もぐもぐ”

「ん、なんだ？」

「あのさ、名前、何ていうの？」

「いぬ・・・翼、翼幸太郎じゃい」

「いや、あんたのじゃなくてわたしの」

「へ？」

・・・・・・わ、わかってたわい。

冗談、冗談じゃい。

お、お前はだな・・・」

「わたしは？」

“わくわく”

「・・・・・・みか」

「みか？」

「そ、そうだ、お前の名前はみかだ」

「えつとく、わたし何も憶えて無いんだけど、それがわたしの名前？」

みか、みかか〜

なんかいい！

えへへへ、みか、みか、みか・・・わたしはみか！

あ、あのさ、どんな漢字？

ね、どんなの？

やっぱ、みかの“み”って美しいの美だよね。

実っていう字もあるけど、やっぱ美しいだよね。

あとさ、“か”は華麗とかそんな感じ？

それとも花とか夏とか？

あつ、香っていうのもあつたね。

ね、ね、どんな漢字なの？」

「・・・し、知るかそんなもん！」

「へ？」

「俺が今勝手につけた名前じゃい。

え〜い、漢字漢字ってうるさいんじゃない。

そんなもんいちいち考えてられるか。

面倒くさいから、お前なんかカタカナで十分じゃい。

それでいいじやるこのボケ〜」

「い、今つけた？」

「・・・そ、そつか、わたしの本当の名前じゃないんだ。

あんたも知らないんだねわたしの名前」

「本当の名前なんて知らん。

お前はある日突然この屋敷の玄関前に捨てられてた。

死んでな」

「・・・そ、そうなんだ」

わたし捨てられてたのか。

ははは、わたしって誰なんだろうね。

なんで死んだの？

なんで捨てられたの？

わからない、なんにもわからない。

う、ううううう。

“トボ、トボトボトボ”

「お、おい、おい」

「巽さん。」

・・・わたしって何者なんだろうね」

“ガチャ”

「う、うう、うううう、うわ〜ん」

“ダー”

「何者つか。」

教えるわけにはいかんのじやい・・・美佳」

“とぼとぼとぼ”

わたしって誰なんだろう。

死んで捨てられたって最悪じゃん。

なんか悪いことしたのかなあ。

“ワンワンワン”

え、あ、ロメロ。

そっかお前ここで見張っているんだっけ。

そうだよ、勝手にこの家の敷地から外に出るわけにはいかない。

それがあいつとの約束だった。

それに、こんな顔したのが町の中を歩き回ったら・・・パニックだよ。

「ワンワン」

わ、わかった、もどるから。

ちゃんと中にいるよ。

“スタスタスタ”

でも、今は誰にも会いたくない。

一人になりたい。

だつて・・・ちよつと辛い。

どこかにいい場所無いかなあ。

もしあいつが探しに来ても見つからないような。

“ポツ、ポツポツ、ポツポツポツ”

ん、あ、雨降ってきた！

やば、ど、どつか雨宿りできるとこない？

・  
・  
・

“ザー、ザー”

本降りになっちゃったね。

でもいいや、ここ雨防げるしなんかすごく落ち着く。  
狭くて暗くて、ちつとゲソ臭いけど。

なんにもないわたしにはちょうどいい。

ふう、なくんか落ち着いたら眠たくなっちゃった。

「ワンワンワ、ワン」

・・・ワン？

ウー、ワン！」

ん、なに？

あ、ロメロつか。

門のところで番してたんじやなかったっけ？

「ワンワン！ ワンワン！」

なに、もしかしてどけて？

ほほ、あんたこのわたしに喧嘩売ってんだ。

「うっさい、この犬小屋はわたしが占拠した。

あっち行け！

ヴー、ワンワンワン！

ガルルルル！」

「キャン！」

キャンキャンキャン」

ふっ、勝った。

この犬小屋はわたしがもらった。

・・・って何やってんだわたし。

はあ、なんか疲れた。

「スー、スー、むにやむにや」

“ガチャ”

「まあ焦らないことだ」

「はい」

ふえ、な、なんだ？

ふあ、なんか寝ちやつてた。

えつと、ん、誰、誰だあの人？

玄関であいつとなんか話してる。

“スタスタスタ”

あ、やば、こつち歩いてきた。

見つからないように隠れてなくちや。

「心が眠ったままというのなら、その心を揺さぶる何かが必要ということだな」

「心を揺さぶる何かですか」

「そうだ。」

まあ、それでも駄目なら、いつそのこと脳みそに直接刺激を与えるとか。

あ、物理的な刺激じゃないぞ、なにかこう内側からな」

「刺激ですか」

「ああ。」

それはそうと、えつと”元祖ゾンビイ村肥前夢街道プロジェクト”だったか？

あれ、お前は本気なんだな」

「ゾンビランドサガプロジェクトです。」

「・・・本気です」

「・・・そうか。」

まあいろいろ大変だけど頑張れや。

じゃあな」

“スタスタスタ”

なんだ今の話？

ゾンビランドサガプロジェクト？

そういえば、あいつ昨日さくらって娘になんか言ってたな。確かアイドルがなんだかんだとか。

マジ？ あいつマジでわたし達をアイドルに。

そっか、あいつが言ってたわたしの居場所ってそれなんだ。

……アイドル、アイドルか

ぐふふふ、わたしがアイドル。

あ、でももしアイドルになったら、わたしのことなんかわかるかも。よ、よしこうしちゃいられない。

あいつに協力して、あのゾンビっ娘達なんとか意識取り戻させなくっちゃ。

“ガシ”

「へ?」

“ガタガタ”

「あ、あれ？」

んー

“ガタガタガタ”

「……、小屋から出れん！」

あゝ、大変な目にあつた。

手とか足外して何とか抜け出せたよ。

ゾンビイで良かった。

えつと、そんなことよりあいつあいつ！

えつと、あついていた！

やっぱあの娘のところにいた。

「ううう、うう、ううう」

「あー、あー」

……当然、この娘達もいるよね。



やだなくやっぱ不気味だし。

気が付かれないようあいつのところに。

「・・・さくら」

「ねっー!」

「おわっ!」

な、なんじやい、いきなり俺の背後に立つんじやない。

その顔、怖いじやろうが」

怖い・・・ぐそ、その娘も同じゾンビイじゃん。

ま、まあいい、ここはアイドルになるため我慢我慢。

「彼女・・・目覚めないね」

「・・・そうだな」

でも、どうすれば彼女達って目が覚めるんだろう。

目を覚ましてくれないと、アイドルになれない。

んくと・・・あっ!

「ね、ね、巽さん、わたしはなんで目覚めたの?」

「え?」

「だってわたしもずっと彼女達と一緒にだったんでしょ。

だったらなんでわたしだけ?」

「なんでって・・・」

「は! ワ、ワサビじやい!」

「えっ、ワサビ?」

「お前は目覚める前に大量のワサビチョコ食べたんじやい。

そうしたら急にうゝがーって倒れて。

そうか、きつとワサビの刺激がお前の脳みそに刺激を与えて。

そ、そうだ間違いない。

ちよ、ちよつと待ってろさくら。

今、目覚めさせてやる」

“ダー”

「巽さん?」

「うー、うー、あー」

ひやくこ、こつちくんなー

や、やだよー、巽さん遅いよー

どこ行つたんだらう？

なんかすごい勢いでこの部屋を飛び出していったけど。

でもさ、ほんとワサビなんかで目覚めるのかなあ。

“バタン！”

「はあはあはあ。

さくらー、持ってきたぞ」

「え、で、でも巽さんそれチョコじゃ」

「あのチョコはもうない。

お前が全部食べたからな！

お前が」

「なんか、ご、ごめんなさい」

「それにあれは限定商品だったみたいで、どこにも売っておらんかった。

そこでだ、これじゃいー！」

「それなに？」

「き、貴様！

これを知らんとか！

本当になくんも知らんのじゃな。

これは唐津の名物、ワサビ漬けじゃーい！」

「ワサビ漬け？

で、でも巽さん、いったいいくつ買ってきたのー！」

「近所のスーパーにあったの全部じゃい」

「.....」

「これを食べさせれば、きっと目覚めるはず。

さっさとなんか皿もってこいかい。

なるべくでかいやつ、いや、この家で一番でかいのもってこんかい」

「え？ あ、うん」

“タツタツタツ”

「はい、お待ちせ」

「おお、これじゃこれ！」

「この皿にこのワサビ漬けをだな」

“ドサ”

「この皿にワサビ漬けを」

“ドサドサ”

「この皿に」

「ちよ、ちよつと巽さん！」

「どれだけワサビ漬け載せるの」

「これ全部じゃい」

「全部つて、それ50箱以上あるじゃん。」

「はあく、そんなに食べさせて大丈夫なのかなあ」

“ドサドサドサドサ”

「よし、これでよか。」

「えつと〜」

“キヨロキヨロ”

「おい、さくらはどこだ？」

「う〜んと、どこだどこだ？」

「あ、いた！」

「ほら、あの窓のどこ」

「おお、いたいた」

「ちよつとここつちに連れてきてくれ」

「あ、うん」

“タツタツタツ”

「さくらちや〜ん」

「う〜、う〜う〜、ううう、あ〜」

「ほ、ほら、巽さんが呼んでるからあつち行こ」

“ガブツ”

「ひゃく、あ、頭噛まないで」

「うく、うく、あー」

うくん、取れない！

さくらちゃん、頭離してー

「異さくん、頭噛まれた。」

さくらちゃん離してくれないく

「よかけん、そのままこっちにこんかい」

「う、うん」

“ズルズルズル”

あのく、さすがにこれちよつと重たいんだけど。

また頭もげそう。

異さんがこっち来てよつて、え？

「た、異さんうしろ！」

「うく、うくうく、うくうくうく」

「うしろつてなんじやい？」

“ガブ、ガブガブガブ”

「お、おわー、たえ、お前何してんじやい」

「うー」

「はなせ、皿離せ。」

ワサビ漬け食うな。

く、食うな、は、離せ！」

“ガブガブガブ、バリバリ”

げ、さ、皿食べてる！

い、いくらゾンビイでもそんなの食べたら。

「ね、皿は食べちゃダメ。」

身体に悪いから、ほらこっちに頂戴」

「うー」

「ぜ、全部食いおった。」

ワサビ漬け全部食いおった」

“へなへなへな”

「た、巽さん、大丈夫？」

い、いや、そんなにへこまなくても。

「うー、うー！」

え、な、なに？

“ジタバタジタバタ”

な、なんかこの娘暴れてる！

すごく苦しそう。

やっぱあんなにいっぱいワサビ漬け食べたから。

「た、巽さんこの娘大丈夫？」

えっと、確か名前は「

「こいつは山田たえ、伝説の山田たえじやい」

「おおー、この人が」

「お、お前知ってるのか？」

「うううん、知らない」

「知らんのかうい」

“ポカ”

「だ、だって、伝説って言うから・・・」

「うーがー！」

“どき”

え、なにになに？

あ、たえちゃん倒れた。

なんかピクピクしてる。

だ、大丈夫なのほんとに？

「仕方ない。」

しばらくたえの様子を見てみるか。

もしたえが目覚めれば、今度こそさくらに食べさせよう」

“つつん”

大丈夫かなあ、たえちゃん。

なんか突つついても全然動かないんだけど。

“スタスタスタ”

「ルンルンルン」

「ん、なんだ、とても機嫌良さそうだな。」

「なんかいいことあったのか?」

「だ、だってさ、えへへへへ」

「な、なんじやい、き、気持ち悪い」

「異さん! わたし頑張るね」

「なにをだ?」

「なにをって、もういけずなんだから」

ア・イ・ド・ル♡

異さんが言っていたわたしの居場所って、アイドルってことだったんだよね。

うん、わたし歌とかダンスとかいっぱい練習して頑張るから」

「お前どこで聞いてた!」

「……………言っておく、お前はアイドルじゃない家政婦だ」

「へ?」

「お前は家政婦じゃい!」

「は、はあー!」

“ふにゆ〜”

「ふにやく、な、なにを。」

ほ、ほっぺ引っ張らないで〜」

「お前のどこがアイドルじゃい。」

この地味く顔のどこがアイドルなんじやい、このボケ〜

お前の居場所はこの家の家政婦に決まっとするじやろが!」

「か、家政婦!」

で、でも、ほ、ほら地味な娘が好きだって人も。

だからわたしもアイドル」

「そんなもんいるかい」

いても小数点以下の誤差じゃい。

お前なんぞ地球がひっくり返ってもアイドルになんてなれんわい

！

「この地味女ー」

「ひどー！」

うろうろうろうう、うわくん

巽のバカー

うえくん、あんたなんか大嫌い！」

“ダー”

「…………お前をアイドルにするわけにはいかんのじやい」

．

巽の馬鹿、巽の馬鹿、巽の馬鹿！

「ワンワン！」

うっさい、ロメロあっち行け。

この犬小屋はわたしがもらったっていつてるだろうが！

「ガルルルル、ワンワンワン！」

「キャンキャンキャン」

ふん、思い知ったか！

くそ、なんでわたしだけ。

わたしだつてアイドルやりたいもん。

それなのに家政婦だとー

くそくそ、巽の馬鹿。

人の顔、地味地味地味つて言いやがって。

そんなもんゾンビイなんだからわからんだろうが。

……ゾンビイだから

……ゾンビイ……わたし達ゾンビイ。

さくらちゃん達も顔とかこんななのに、アイドルなんて無理なん  
じや。

きつと怖がられて、あのビデオのように殺されるって。

頭グシャつて！

絶対アイドル無理じゃん。

「ちゅんちゅん」

「なんだ、お前こんなところで寝てたのか」

「ふえ〜？」

「はっ、もう朝？」

「そっか昨日ここで寝ちやっただ。」

「えつと〜なに？」

「げ、巽！」

「風邪引くぞ」

「ふん、ほつといて！」

「わたし、ゾンビだから風邪引かんし。」

「あ、あと家政婦なんか絶対やらないんだから！」

「・・・まあいい。」

「ちよつと来い」

「え？」

「い、いや、絶対行かない」

「いいからくるんじやいー！」

「ぐい」

「ぐへえ〜」

「そ、そんなに頭引つ張らないで。」

「か、身体が犬小屋に引つかかっているから出れない。」

「だ、駄目だつて〜」

「ちよ、ちよつとま」

「すぽっ」

「ひゃ〜」

「ほら、そんなに引つ張るから頭もげたじゃんか！」

「いやちよつと待ってて、身体がまだ犬小屋に」



「お前の身体に興味はない」

「はあ！」

そんな問題じゃ。

……えっと、なんか今すごく傷ついた気がするんだけど」

“スタスタスタ”

「まったく、頭もげるの癖になったらどうすんのさ」

「そんな時はそんな時じゃい。」

接着剤でくっつけてやる。

二度と取れんようにがばい強かのでな」

「……」

で、たえちゃんの様子はどうなの？」

「ん、いや、まだ眠ってた」

「そう」

“スタスタ、ピタ”

「ほら入れ」

“ガチャ”

え、ここってあのゾンビっ娘達の部屋だけど？

「うゝ、うゝうゝうゝ、うゝー」

「あゝー、あゝあゝあゝー」

“フラゝ、フラゝ”

げ、やっぱ起きてるじゃん。

うゝ、いつ見ても怖いんだよ。

……あれ、たえちゃんいない。

巽さん寝てたって言ったのに。

どこに行ったんだ？

は、もしかして目覚めて、わたしの時みたいに外にいったんじゃ。

だとしたら、たいへ

“カブツ”

「へ？」

“カブカブ”

「た、たえちゃん！」

やめて、わたしの頭噛まないで〜」

「うゝうゝ、うゝ、うゝ、うゝ〜」

「ちよ、ちよつと巽さん助けて」

「はあく、駄目だったか」

「そ、そんなところで落ち込んでないで助けて〜」

「あつちいつてろ、しっしっ！」

「うゝうゝ、うゝゝ、あゝゝ」

“フラゝ、フラゝ”

はあく、助かった。

なんかよく頭噛まれるんだけど。

ゾンビイってそんなに頭が好きなのかなあ。

頭、頭

“ジー”

巽さんの頭……………

ごくり。

「な、何見てんじやい。

お、お前、いま変なこと考えて無かったじやろな。

まあいい。

ちよつとそこに座れ」

「えっ？」

あ、うん」

「さてと始めるか」

・  
・  
・

“ペタペタ、ぬりぬり”

「あ、あのを巽さん

いっただいさつきからわたしの顔になにを」

「えー、だまつとれ。」

ほらみろ、また失敗しただろうが」

“ゴシゴシ、ゴシゴシ”

「ふ、ふえー、や、やめれー」

だから顔こすらないで。」

ぷふえー」

・  
・  
・

「よし、こんなもんじやろ」

「お、終わった。」

もう！

さつきからわたしの顔で何を遊んで」

「いいからその鏡台に座って鏡をってみろ」

「え？」

あ、うん」

“スタスタスタ”

うんしょつと

まったく人の顔で何して……………

えつ！ こ、これつて。」

「た、異さん、こ、これ」

「これがお前の顔じゃい。」

生きてた時のな」

こ、これがわたしの顔

レイヤーボブに奥二重、へへ、それにちつちやい鼻。

……ほんと、なんかこれと言って特徴のない普通の顔だね。」

「これがわたしつか」

「まだじゃい、ほれ」

“サツ”

「え、眼鏡。」

「この眼鏡つて？」

「お前の死んでたところの近くに落ちた。  
おそろくお前のものだ。」

そしてこの地味眼鏡をかけた顔、これがお前だ」  
「そっか、これがわたしなんだ」

「わたしって何者なんだろうって、お前言ったな。」

お前がどこで何をしたのか俺にもわからない。

だから、お前の問いに対して俺がしてやれる答えはこれぐらいだ」  
「巽さん」

この人、結構いい人なんだ。

ときどきさ、なんかめっちゃ腹立つこと言われるけど、でもほんと  
はやさしくて。

それにわたしに生きろって言うてくれたし。

はっ、そういうえげななかよく見れば善人そうな顔して。

そうだ、謝らないと。

わたしそれなのに巽さんのこと馬鹿って、大嫌いって。

「あ、あの、巽さん」

「撤回、撤回じゃい！」

ほれさつさとそこどかんかうい！」

「へ？」

「なにボケつとしてるんじやい。」

練習は終わったんじやい。

今からが本番じやい。

さつさとさくら連れこんかい！」

「へ？」

れ、練習？

・・・あ、あのわたししてもしかして練習台だったの」

「決まってるじやろ。」

お前の顔、地味じやから練習するにはちょうどよかったんじやい。

その平べったい顔、がばいメイクやりやすかったからの」

そんなことどうでもいいんじやい、さつさとさくらを連れてこんか

「い」

「……や、やっぱこいつ嫌い！」

「やっぱどっから見ても胡散臭い顔してるし。」

「一瞬でもこいつのこと善人と思っただわたくしが恥ずかしい。」

「さっさといかんかい、この地味眼鏡ゾンビイ」

「……」

「き、今日のところはこの眼鏡に免じて許してやる。」

「でも、い、いつか仕返ししてやるからな！」

「く、くそー」

「えっと、さくらちゃんさくらちゃんと。」

「キヨロキヨロ」

「あ、いたいた。」

「あの壁のところ。」

「へへ、リボンしてるからすぐわかる。」

「えっと、さくらちゃん」

「ガブツ」

「げ、またかー！」

「また頭噛まれた。」

「も、もう噛まれてばかり。」

「これ、絶対頭に歯形ついてるよ。」

「はあく、わたしの頭ってそんなに美味しそうに見えるのかなあ。」

「さくらちゃん離してくれそうにないし、仕方ないこのまま。」

「ズルズルズル」

「異さん、さくらちゃん連れてきたけど、先にこれどうにかして」

「また噛まれてんのかい。」

「え、い、さくら口開けんかい」

「かほっ」

「うー、うー、うゝがー」

「動かないよう、さくらを押しえていてくれ」

「え、やだー」

「いいから押しえんかい」

「だ、だって、きつとまたガブツって。」

・・・も、もう！」

“だき”

「うゝ、うゝがーうゝがー！、うゝがー！」

“ジタバタ、ジタバタ”

「え〜い、ちゃんと押さえておかんかい」

「む、無理だつてこんなの。」

“なんかめっちゃ力強いし”

“ガブツ”

「ぐえー、また噛まれた」

「ち、仕方ないの。」

“さくら、これで食つてろ”

“パク”

「うゝ？ うゝが」

“もぐもぐもぐ”

げ、し、静かになった。

なにこれ？

え、えつと、ゾンビイってゲソ食べさせると静かになるの？

は、もしかしてだからこいついつも胸ポケットにゲソを。

「ね、巽さん。」

ゾンビイってゲソあげれば静かになるの？」

「そうだ」

「だ、だったらはじめっからそうせんかい！」

わたしまた頭噛まれたんだからね。

まったくー！」

「いいから始めるぞ、ちゃんと押さえているろ」

「あ、う、うん」

・  
・  
・

“ペタペタ、ぬりぬり”

へえ〜可愛い。

これがさくらちゃんなんだ。

「た、巽さん」

「なんじゃい」

「可愛い♡」

「あ、あつたりまえじゃい」

そっか、これならアイドルできるよね。

他のゾンビイっ娘達もさくらちゃんみたいに可愛いのかなあ。

………だったら敵わない、やっぱわたしには無理だ。

あ、でもあの小学生みたいな子もアイドルやるの？

「ね、巽さん、あのちっちゃい………」

“又ギ又ギ”

へ、こ、こいつ、さくらちゃんになにしてんだ。

「お、おい！」

あ、あ、あんた何してるの！

なんでさくらちゃん服腕がせてるの！

「何してるって、顔だけじゃアイドルできんじやろ。

身体の方のメイクも必要に決まっとなるじやろが」

「や、やめー！」

そ、それ以上は」

「あ、ほれ、又ギ又ギ、又ギ又ギと」

「えーい、やめんかいー！」

貴様、女の子を裸にして何をするつもりなのさ、このドスケベ！

身体の方はわたしがするから。

いいからメイクのやり方教えなさい！」

「お前なんかにできんわい。」

俺がこのメイクの技術を習得するのに、ハリウッドでどれだけ苦勞したことか」

「覚えるから！

必死で覚えるから、これは絶対ダメ」

「チッ」

あ、今、チッって言った、チッて！

まったくこの男は。

ん、あ、でもこうやって見ると、さくらちゃんも包帯だらけなんだ。手とか足首、それとお尻とかも。

“ごく”

む、胸でかい。

このブラ、何カップなんだろう。

……ん、ちよ、ちよっとまった。

……包帯……だらけって

わたしは……胸もお尻も……包帯で……

「お、おい！」

いいから正直に答えろ！

このさくらちゃんの包帯、き、貴様が巻いたのか」

「ああ、そうだ」

「わ、わたしのもか？」

わたしの包帯も貴様が」

「あたりまえじゃい。」

他に誰がするんじやい」

「き、貴様——！」

“べし”

「ぐはあ」

へ？

あ、なんかいい感じ？

チョップしたとき、なんだかすごく気持ちよくて。

なんだろう？

「な、なにをするんじやい——！」

は、そ、そんなことより、いまはこのドスケベを！

「なにをするんじやいじやないんじやい——！」

よ、よくもわたしの裸を！

貴様わたしの裸見たな！

「この馬鹿——」

「仕方なからう、その包帯には防腐剤が」



「仕方なくなーい！」

“ベシベシベシ”

「ぐはあ〜」

あゝ、快感。

ぐへへへ、日頃の恨み思い知ったか！

あゝすつきりした。

・・・で、でもわたしこいつに裸全部見られたんだ。

わたしだけでない。

このゾンビイっ娘達全員の・・・

こ、このドスケベにもう一発天罰を。

「うゝがー!!」

へ？

さ、さくらちゃん？

どうしたのいきなり。

“ドタ!”

「さ、さくらちゃんー！」

ライブ？

「はあ、はあ」

“きゅっ、きゅっ”

「よしっ」と

ふう、やっと窓拭き終わった

しっかしほんとにでっかい家。

お昼前から掃除始めたのに、まだ窓拭きしか終わらない。

もうすぐ晩ご飯作らないといけないのに。

うくん、床の拭き掃除とか明日やろうかなあ。

でもさ、こうやってお掃除とか食事の準備とかやっていると、すごく  
気持ちが悪く着く。

その時だけはゾンビだってこと忘れられるから。

……ゾンビ……っか。

「……うぐ」

くそ、落ち込んだってしょうがない。

ほらほら、さっさと床拭きやつちやおう。

……うん、頑張れ。

よ、よし、んじやまずはこの部屋から。

“ガチャ”

「……」

ほんとに異さん、さくらちゃん達をアイドルにする気なんだ。

この部屋見ればわかる。

板張りの広い空間に防音設備、それに壁一面のでっかい鏡。

ここはさくらちゃん達がレッスンするために作った部屋だよね、  
きつと。

“スタスタ”

この鏡に映った顔。

これがわたしの生きてた頃の顔なんだ。

へへ、ほんと地味な顔。

でも、でもさ

・・・うれしい。

だって、自分のこと何もわからなかったから。

やっと、少しだけ・・・

“ぎゅ”

そしてね、これがわたしの生きてた時の身体。

今朝、さくらちゃんの後、わたしにも異さんがメイクしてくれたんだ。

でもね、こうやって抱きしめても何のぬくもりも感じない。

・・・死んでんだもんね。

ね、鏡の中のわたし教えて。

わたしさ、なぜ死んだの？

死ぬ前なにしてたの？

名前は？

年は？

もしかして好きな人とかいたの？

それでさ、この指輪ってその人にもらったの？

知りたい、わたしのこともっと知りたい。

だから教えて。

「・・・・・・・・」

はあく、なにやってんだか。

無理だよね、答えてくれるわけないじゃんか。

・・・でも思い出したい、いつかちゃんと思いつきたい。

ほんとの自分が知りたい。

“ポロ、ポロポロポロ”

「ううう」

“バシ、バシ”

駄目だ駄目！

しっかりしろわたし。

泣いたって仕方ないだろう。

ほんとちよつと油断するとすぐこれだから。

頑張るって、いつも笑顔でいるんだって決めたんだ。

だからちゃんとしないと。

“にこっ♡”

うん、笑顔、笑顔。

「うしー！」

あ、でもさ、この特殊メイクほんと凄い。

異さんっていったい何者なんだろう。

ハリウッド仕込みだっけって言ったけど、これってさどこから見ても人間。

誰もゾンビなんて気が付かないよ。

顔だけじゃない、身体も……

で、でも、身体のメイクは自分でやれるようにならないと。

だっけさ！

『ほれヌリヌリ、ペタペタっ』

『うっ』

『ん、なんじやい？』

『な、なんでもない、なんでもないです。』

あは、あは、あはははは』

『……なんじやいまったく。』

あっそれ、ヌリヌリ、ヌリヌリっ』

『あくん』

『おわ！ な、なんて声出すんじやい』

『だ、だ、だっけ』

う、うううう。

は、早くメイク覚えよう、自分で出来るようにならないと。

じゃないとまた……

くそ、あのバカ！ 変なところ触りやがって。

……うう

あ、そういえばさくらちゃん大丈夫だったかなあ。

顔のメイクした後、急に倒れちゃったから。

身体のメイクしてる間もピクリとも動かなかつたし。

掃除終わったら様子見に行つて来なくちや。

“ふきふきふき”

・・・でも、さくらちゃんがかかったなあ  
くそ、ゾンビイのくせにうらやましい！

“こそこそ”

「ふむ、免許証に書いてある住所は千葉つか。

あいつ千葉に住んでたのか。

えつとあとリュックに入ってたのは財布とハンカチ、お弁当箱？

お弁当箱入っていたのか」

“パコ”

「げっ！

・・・に、臭うと思ったら。

まっ、仕方ない、このリュックずっと放置していたからな。

あ、あと他には、ん、手帳つか。

何書いてあるんだ？」

“パラパラ”

「ふむ、こいつ保母さんだったんだな。

園児のこといっぱい書いてある。

それにしても、好きなものや嫌いなもの、良いところ、注意するこ  
ととか

一人一人のこと細かく記録してある。

・・・いい先生だったんだな」

“パサツ”

「ん、写真？」

“ひよい”

「ふくん、この腕組んで一緒に写ってる奴、これが指輪の相手か。

しかしこの目・・・まるでゾンビイだな」

“ドタドタドタ”

「ん？」

は、やばっ。

ど、どこかリュック隠すところは」

「ガチャ」

「異さ〜ん、ご飯できたよ〜」

「なんじやい。」

ド、ドアを開ける時はちゃんとノックしろと言っただろうが！

常識知らん奴はもうメイクしてやらんからの」

「あ、ごめんさい。」

あのさ、ご飯できたから冷める前に来てね」

「わかった、今行く」

「うん」

「スタスタスタ」

「あ、危なかった。」

このリュック、ここに置いておくのはやばいかもな。

あいつに見つからないようにどこかに隠さないと」

・  
・  
・

「ザー、ザー」

「はっ！」

「きよろきよろ」

「……………はあ？」

「すく」

「……………」

「ギイ〜、ギイ〜」

「……………」

「トボトボトボ」

「……………」

「ガシャーン」

「はあっ？」

「あ、あ、あ、あ、あ」

「ああ！」

「うがあ〜」

「はあ！」

“ダー”

“スタスタスタ”

あ〜なんか今日はすつごく疲れた。

だって、この家無駄にでかいんだもん！

結局、掃除終わらんかったし！

もう、なんか身体中の骨がギシギシいつてるよ。

ゾンビイでも疲れることってあるんだ。

ふう〜

“ザー、ザー”

しっかし、今日はずつとすごい雨。

これじゃ外の水道使えないや。

仕方ない、今日は洗面所で身体だけ拭いて終わろうっと。

あー、わたしもお風呂入りたいよ〜

あつたかいお風呂にザブーンって入りたい。

それにさ、この服ずつと着っぱなしだし。

「.....」

“クンクン”

う〜、なんか匂うかも。

はあ〜、服ほしい。

“トボトボトボ”

ん、あれ、なんでこの窓、ガラス割れてるんだ？

朝掃除したときは何ともなかったのに。

げ、あっちの窓も割れてる。

な、何があつたんだ？

・・・あ、も、もしかして。

“ダー”

「さ、さくらちゃん」

“ガチャ”

え、えつとく

“キヨロキヨロ”

い、いない!

この部屋に寝かせておいたはずなのに。

……さくらちゃん目を覚ましたんだ。

・  
・  
・

“ドタドタドタ”

どこ? どこ行つたのさくらちゃん。

“キヨロキヨロ”

いないいないいない、どこにもさくらちゃんいない。

他のゾンビっ娘達は二階でうろついてたけど、さくらちゃんだけいない。

家の外に出て行つたのかも。

だとしたら、ヤバツ!

・

“タツタツタツ”

「はあ、はあ、はあ」

あ、玄関が開いている。

やっぱりさくらちゃん、家の外に行つたんだ。

まずい、誰かに見つからないうちに早く連れ戻さないと。

傘、傘つと。

“タツタツタツ”

で、でも、もし家の外に行こうとしてもロメロが見張ってるはず。

今日は、ロメロ吠えていない。

だったもまだ家の中に。

そうだよ、きつとまだ家の中に……



「ぐおゝ、ぐおゝ」

「ロ、ロメロ！」

「ワン？」

「き、貴様ー、なに爆睡してんじやゝい、このポケー！」

「ギャワン、キャンキャンキャン」

く、くそ、番犬のくせして。

でもやばいな、だったらやっぱり外に行ったんだ。

だとしたら、早くさくらちゃん探しに行かないと。

「何してるんだ？」

「あ、た、異さん！」

え？ な、なんでスコップ？

この雨の中で何してたの？」

「な、何でもいいじやろ。」

それよりどうしたんだ？」

「ん、あ、そうだ。」

大変なの、さくらちゃんが外に出ちやたみたい」

「家の中にはいなかったのか」

「うん、探したんだけどどこにもいない。」

それに玄関も開いてたし」

「さくらー！」

“ダー”

「あつ、待って。」

わ、わたしも行く」

“ダー”

・  
・  
・

「来るなゝ」

「ひやっ」

「なんだお前は！」

「えっ、なん？」

「くる」

「あつ、ふえー！」

「はあ、はあ、はあ」

どこ行つたんだらうさくらちゃん

この雨でメイク取れてなかったらいいんだけど。

もしゾンビになってわかったら、きっとあのビデオのように殺され  
ちやう。

「きよろきよろ」

「巽さん、どこにもいないね」

「・・・ふむ。」

もしかしたら反対の道だったかもしれない。

お前一度戻ってみてくれ」

「う、うん」

「あ、ちよつと待て。」

これ持っていけ」

「え、スマホ？」

「お前、使い方わかるだろう」

もしさくらが見つかつたら電話してくれ」

「えつとく」

うん、なんとなくわかると思う。

あ、でも電話番号は」

「ちよつと待ってる」

「カシヤ、カシヤ」

「発信、ポチツとな」

「ブ〜、ブ〜」

「この番号だ」

「わ、わかつた。」

「じゃ」

「パーン」

「た、巽さん！」

今のって」

「ああ、向こうだ」

「うん」

“ダー”

「ゾンビィ？」

“ギロツ”

「ひゃっ」

“ゴン！”

「.....」

“タツタツタツ”

「はあはあはあ、あ、さくらちゃん。

げ、お巡りさん、し、死んでるの？

巽さん、あんたまさか」

「大丈夫じゃい。

気絶してるだけじゃい」

「そ、そう？」

“つんつん”

ほんと？

ピクリともしないけど、だ、大丈夫だよね。

あ、でも雨ひどいし、こんなところに置いておくわけには。

「おい、なにしてる。

ちよつとさくらをおぶるの手伝え」

「あ、ごめん、ちよつと待って。

うんしょ、うんしょつと」

“ズル、ズルズル”

「何してるんだ？」

「だってお巡りさん、このままにしておくわけにいかないじゃん。

せめて雨のかからないところにおいてあげないと」

“ズルズル”

ふう〜、ここならあんまり雨かからないね。

“ペコ”

ごめんなさい。

あ、傘かけておきますね。

返さなくてもいいですから。

風邪ひかないでください。

ほんとにごめんなさい。

よしっと。

「巽さんお待ちませ。

えっと、さくらちゃんをおんぶさせればいいんだね」

「ああ。

それとスコップと傘を頼む」

「うん、じゃ乗せるね。

うんしょっと」

“ドサツ”

「……ぐう」

「え、どうしたの？」

「な、なんでもない」

“スク”

「か、か、帰るぞ」

“ふらふら”

「巽さん大丈夫？」

なんかふらついてるんだけど」

「なんともないわい」

“ふらふら”

「あ、待って」

“パサツ”

「はい、傘」

「お、おう」

“ふらふらふらふらふらふら”

「ね、巽さん」

「なんじゃない？」

「よかったね、さくらちゃんの意識戻って」  
「……………これからじやい」  
「うん」

—————

“ジリジリジリ”

よしつと、焼き魚完成。

ふふふ、うまく煮崩れせずに焼けた。

この最後の塩が大事なんだよね。

あとはジャガイモと人参のお味噌汁。

どれどれお味は。

“ごく”

美味い……………はず！

だって、味わからないんだもん。

でもさ、なんだろう。

不思議とお料理憶えてるんだ。

“カサ”

へ？

“カサカサ”

「ぎゃー！」

“ご、ご、ゴキちゃん！”

G、G、Gが出やがったー

ど、ど、どうしよう。

えらい、このスリッパでも食らえ！

“バシ”

“サツサツサツ”

げ、外れた、こ、この野郎！

“バシ、バシ、バシバシ”

“サツサツサツ”

く、くそ、すばしっこい。

“ブウーン”

ひゃ、こつちに飛んできたー

い、いやー

“ブンブン”

「あ、あっちいけー」

“スポツ”

げ、ぐわあー、服、服の中入ったー

“ドタバタドタバタ”

「い、いや、いや、いやー」

“ガチャ”

「なんじやい、うるさい。

なにやってんじやい」

「た、巽さん、助けてー

G、Gが服の中に。

と、とってー」

「ば、馬鹿者、服の中に手を入れて弄るわけにいかんじやろ」

「だ、だって」

“ガサガサ”

「いやー、中で動いてるー

い、いいから、弄ってもいいからGとって」

「服を脱げ」

「えっ………スケベ」

「ば、馬鹿そんなつもりじゃないわい。

服脱げば出てくるじやろう」

「うろう、み、見ないでよ」

「見ても包帯だらけじやろうが」

「うっさい」

“ぬぎぬぎ、ぱさっ”

「ね、G、身体についてない?」

“もぞもぞ”

「ほらそこ、服の中でうごめいているのがそうじやろう。」

スリッパでホイ」

“グシャ”

「ほれやつつけたぞ、これでいいだろう」

“ベしー!”

「な、なにすんじやい」

「き、貴様ー」

な、なにした、い、今なにした!」

「なにつてゴキブリを退治したんじやろうが」

「バカー」

服、服が、うわーん!」

“ベシ、ベシ、ベシ”

「や、やめーい」

“ゴシゴシ、ゴシゴシ”

あくあ、汚れはとれたけど、なんかこれ着るのやだ。

でも、服これしかもってないし。

うー、着替えほしい。

あ、それとエプロンも。

……そうだ。

“もぐもぐ、パクパク”

「ふむ、美味い。」

あいつ、料理はマジ美味いな。

味はよくわからないって言ってたけど」

「ねえ、巽さん、えへ♡」

「おわ、な、なんじやい。」

だから急に背後に立つんじやないって言ってるだろう。

まじ、その顔、怖いだろうが。

心臓に悪いんじやい、このぼけー」

「う〜」

くそ、思いつきり可愛い子ぶったのに。  
決めポーズも、か、鏡見て練習したのに。  
まあいいけど。

「・・・で、なんじやい」

「あ、あのね、一生のお願い」

「一生って、お前もう終わってるけどな」

「・・・・・・・・」

・  
・  
・

“ピョンピョンピョン”

「スキップ、スキップ、ルンルン♪」

へへ、やったー

前借り成功！

今月分の家政婦のお給料、前借りしちゃった。

どんな服買おうかなあ〜

めっちゃ可愛いのにしようかなあ〜

それとエプロンも欲しいし。

・・・でも、ちよつと心配。

ゾンビになってから人前にでるの初めてだし。

大丈夫かなあ、ほんとバレないかなあ。

あ、トイレ。

ちよつと確認してこよつと。

“スタタタタタ”

どれどれ

ふ〜、顔は大丈夫だよね、さすが巽さん。

でも身体のほう大丈夫かなあ。

自分でやったからちよつと心配。

それとき。

“くんくん”



だ、大丈夫だよね、臭くないよねわたし。  
消臭スプレーいっぱいかけてきたから。  
．．．．よ、よし、行こう。

．．．

“ムク”

「はあ？」

なんやたつけ？

あつ」

“スタタタ”

「なんなんこれ？

なんでわたし．．．

思い出せん、なんもわからん。

わたしは？」

「お前は源さくらだ」

「あつ、さつきの」

．．．

“キヨロキヨロ”

うくん、目移りしちゃう。

あれもこれもほしい。

ほんと、この商店街って結構品揃えいいんだもん。

それにいろんなお店あるし。

へへ、あの喫茶店のケーキ、美味しそうだったなあ

今度行ってみたい。

よし、次お給料もらったら、

「あつー」

“タツタツタツ”

かわいい。

こんなエプロンほしかつたんだ。

これ何のゆるキャラかなあ、鳥、緑色の鳥だよ。まあ、なんでもいいや。

とにかくこの目の感じがたまらなくいい。

うん、これにしよう。

えっと、あとは

“キヨロキヨロ”

ん？

あ、あれっ！

“ダー”

これさくらちゃんのと同じブラウスじゃない？

確かこんな感じだった。

・・・さくらちゃん、昨日撃たれちゃったんだよね。

・  
・  
・

「アイドルとしてサガを救うんじゃない」

「無理です。」

ちよつと考えたいことがあるので一人にしてください」

「・・・」

“ガチャ”

「・・・意味わからない。」

なんなのアイドルって」

“スタスタスタ”

「そんなのできるわけなかやろ」

“ガチャ”

「ただいまー」

「え？」

あ、ひゃ」

「あつ、だ、大丈夫だよさくらちゃん」

「え、わたしのこと知つとるんですか」

「ニコ」

「こんにちわ、さくらちゃん。

わたしミカつていいいます。

この家で家政婦やってるの。

えへ、これからよろしくね♡

でもよかった、ほんとによかったね意識が戻って」

「……………」

「え、あ、あのさくらちゃん」

「怖くないんですか？」

わたし、顔こんなんですよ。

普通、こんなの見たら驚くんじやなかと！」

「あ、い、いや、別に。」

あ、あの、だつて」

「よかった？」

あなた本当にそう思つとると？

こんなになつて生き返つて、あなたは本当によかったねつてそう  
思つとるんですか。

信じられん」

「あ、い、いやそういう意味じゃなくて。

えへへ、あ、あのね、わ」

「あなたにはわからんとです。

わたし、ゾンビイなんですよゾンビイ！

それだけやない！

なんも記憶がない、なんもわからない。

それなんにアイドルやれなんて。

・・・へらへら笑つてなんかいられる状況じやなかと。

あなたみたいに笑つてられないんです！」

「あ、いや、あの」

「いいです。

どうせあなたにはわからんじやろけん。

もう二度とわたしに話しかけんでください。

いいえ、もうわたしの前に現れんでください！

・・・マジウザイ」

“ガチャ”

「あ、そこわたしの部」

“ボタン！”

「あ、あのさ、さくらちゃん」

「・・・・・・・・最低」

「・・・・・・・・さくらちゃん。」

「ごめん、聞いてほしい。」

わ、わたし、わたしもねゾンビなんだ。

なんかさ、死んでこの家に捨てられてたんだって。

これね、この顔は外出するんで翼さんがメイクしてくれたの。

だからさこうやって」

“ゴシゴシ”

「ほら、メイク落としたら・・・化け物なんだ。

それとね、わたしも同じだよ。

生きてた頃のことなんてなにも憶えて無い。

・・・名前すらわからない。

ミカって名前はね、翼さんがつけてくれたんだ。

だからほんとの名前・・・知らないんだ」

「・・・・・・・・」

「・・・わたしも目覚ましてこの顔見た時、もう死にたいって思った。

だって、だって・・・・・・・・こんなやだもん。

でも、でもね、わたしこのままじゃ死ねない。

翼さんが拾ってくれたこの指輪。

この指輪を見ると、いつも“ぎゅっ”て胸が締め付けられるんだ。

きつと何か特別な想い出があると思うの。

どうしてもそれを思い出したい。

だから、それまでわたしは死ねない」

「・・・・・・・・」

「でもさ、実際どうしたらいいのかわからないんだ。

どうすれば記憶が戻るのかわからない。

・・・だから、今は笑うしかない、笑って頑張らないと。  
だ、だってそうしないと、笑っていないとわたし・・・・・・・・う、う  
うう」

「・・・・・・・・」

「ぐす。」

あ、ご、ごめんね。

えへへへ、変な話しちゃった、この話はおしまい。

あつ、ここにブラウスと替えの服置いておくね。

あんまりお金なかったからそんなに選べなくて。

気にいらぬかもしれないけど我慢してね。

じゃ、じゃあね。

・・・・・・・・ごめん、もう話しかけないね」

“トボトボトボ”

「・・・・・・・・」

「ロメロく、ご飯だよ」

「ごめんね、いつも驚かして」

「ウー、ワンワンワン！」

「ごめんっていつてるじゃん。」

そんなに吠えないでよ」

ほら、いままでのお詫びにドッグフード買ってきたんだよ。

それもちよくお高いやつ。

奮発したんだからね。

はい、どうぞ」

“クンクン”

「美味しいよ」

ほら食べな」

“プイ”

「え？」

「食べないの？」

「これ高かったんだよ、ほらここに国産原料のみ使用って書いてあるし。」

「ほら、食べなつて」

“パイ”

「な、なんで？」

“スタスタスタ”

「なにやつてんじゃない」

「あ、巽さん、お帰りなさい。」

「ロメロがさ、ドッグフード食べてくれなくて。」

「折角買ってきたのに」

「ふくん。」

「ロメロ、ほらゲソだ」

“ポイ”

「ワンワンワン♪」

“ムシヤムシヤムシヤ”

「げ、ロメロ、めっちゃ美味そうに食ってる。」

「このドッグフードよりそっちがおいしいの？」

「うん、マジ高かったんだよこれ。」

「とほほ。」

「ん、お前服買いに行ったんじゃないのか？」

「なんでいつもの服のままなんだ？」

「あ、え、えっと、まあいろいろあつて」

「まあいい。」

「それよりちよつと段ボール運ぶの手伝え。」

「あと一つ車に積んであるから」

「え、あ、うん。」

「でもこれ何入ってるの？」

「うん？」

「ああ、これじゃい。」

「ジャジャーン」

「おおー、Tシャツ、Tシャツだ。」

あ、なんか番号書いてある。

こっちはスカート。

うわーかわいい。

ね、ね、これわたしのもある?」

「……………」

「あははは、無いよね。」

これきつと衣装だよね、さくらちゃん達の」

「お前のもあるぞ」

「え、うそ、ほんと?」

あ、ありがと巽さん♡」

「そうだ。」

今、俺が着せてやろう」

「え、やだ、こんなところで服脱ぐの」

「大丈夫だ、その上からでも着れる」

「え、あ、大きいサイズのやつ?」

「ほら、ばんざーい」

「あ、うん。」

ばんざーい♡」

〃 ばさ〃

「おおー、すごく似合う。」

思った通りじゃい。

めっちゃ似合ってるじゃないかい」

「……………」

〃 わなわなわな〃

「……………なんだこれは」

「なんだってなんじゃい」

「こ、これは何だって言ってるんだ!」

「お前本当になんも知らんのじゃな。」

まったく世話のかかるゾンビじゃい。」

「これは割烹着って言うてな、」

「知ってるわ！」

〃ベシ〃

「ぐはあ」

「な、な、なんでわたしは割烹着なんだ！」

「うるさいわい。」

お前は家政婦だろうが。

それにすぐくよく似合ってるだろうが。

そうだ、そんなお前に伝説をつけてやろう。

今日からお前は伝説の割烹着マスター、給食のおばちゃんミカだ」

「いらんわいそんな伝説！」

〃ベシ、ベシ、ベシ〃

「おわ、や、やめ〜い。」

なんじやい、折角伝説つけてやったのに。

もぅいい。

ほらさつさと段ボール家まで運べ」

「ううう、くそ〜」

「あ、そうだ。」

後でその車、公園に止めておいてくれ」

「え？」

わ、わたし、車なんて運転できるの？」

「……………で、できるんじゃないか。」

ちよつと運転席座ってみろ。

俺は助手席座るから」

「あ、う、うん」

〃ガチャ〃

「うんしょつと」

〃ボタン〃

「いいか、まずこのサイドブレーキを解除する」

「うん」

「それでその左側のペダルがブレーキだ。」



ブレーキを踏みながら、このレバーをDに入れてみる  
「うん」

「それで左足をペダルから離して、右足の方のペダルをゆっくり踏め。  
いいか、ゆっくりだぞ」

「あ、はい」

“スー”

「あ、う、動いた」

「よし、じゃブレーキ踏んで、レバーをPに入れろ。

あとはバックしたときはレバーをこのRに入れろ。  
以上が基本だ。

あとはこれが方向指示器、道を曲がる時に使え。

まあ、大体これが基本だな。

どうだ、お前でも運転できるじゃろ」

「う、うん」

「それじゃ車は公園の端にでも止めておいてくれ」

“スタスタスタ”

「あ、う、うんやってみる」

・  
・  
・

“ガチャ”

ふう〜、結構時間かかった。

でもまあ何とか停められたし。

えつと〜、翼さんどこかなあ。

車のカギ返さないと。

え〜と。

“スタスタスタ”

・

あ、ここにいた。

・・・さくらちゃんも。

あと他のゾンビイっ娘達も。

“ガチャ”

「あの〜巽さん、車停めてきたけど。  
って何してるの？」

「なんでメイクを？」

“ペタペタ、ぬりぬり”

「なにボケくとみてるんじゃない。

さっさとメイク手伝わんかい。

時間が無いんじゃない」

「あ、うん。

でもさ、さっきの衣装といいメイクといいどうしたの？

それに時間がないって」

「今からライブに出るんじゃない」

「あ、そうなんだ・・・・・・ライブ？

・・・・・・はあー、ライブ!!

ラ、ラ、ライブするの。

だ、だってさくらちゃん以外の他の娘は」

「大丈夫じゃない。

ほら顔のメイク終わったやつから、身体の方を頼む」

「大丈夫ってほんとかなあ。

あ、でも身体のメイク、わたしがやってもいいの？」

「ああ。

まあ、そこそこセンスあるようだしな。

それに今日、買い物行っても気付かれなかったんじゃない？」

「う、うん」

「ほれ、まずこいつから」

えっと、このポニーテールの娘は誰ちゃんだっけ？

そういえば、さくらちゃんとたえちゃん以外は名前って聞いてないや。

「えっと〜」

「この人は伝説の特攻隊長、二階堂サキちゃん」

「えっ。

あ、さくらちゃん」

「えへ。」

あ、あのくミカさん。

さつきはごめんなさい」

“ペコ”

「わたし、ミカさんのことなんも知らんのに勝手なこと言って。

本当にごめんなさい」

「・・・さくらちゃん。

わたしなにも気にしていないよ。

わたしも最初そうだったもん。

どうしたらいいのか、どうすればいいのかなくんもわからなくて。

すつごく不安で、不安で、めっちゃ不安だった。

だから、だい」

“だき”

「さ、さくらちゃん？」

「ミカ・・・さん」

「・・・お互い、早くなにか思い出せるといいね」

「はい」

さくらちゃんも不安だったんだよね。

わたしもそうだった。

だからわたしは何も気にしてない。

・・・ん、あれ？

おかしい、わたし達ゾンビなのに。

こうやって抱き合っていると不思議にあつたかい。

あつたかいや。

・・・でも！

さくらちゃんやっぱり胸でつかい、くそ！

・  
・  
・

“キキキ”

「ついたぞ。」

さくら、今ドアを開けるからみんなを降ろしてくれ」

「あ、はい」

「ミカ、お前は車を駐車場に停めておいてくれ」

「え、た、巽さん、無理だって」

“ガチャ”

「俺はこいつらを控室に連れて行かないといけないからな。  
頼むぞ。」

スマホ、持ってたろ。

「なんかあつたら連絡しろ」

“ボタン”

「い、いや、ム、ムリだって

ちよ、ちよっと待って、た、巽さん」

“ゾロゾロゾロ”

「げっ、い、行っちゃった。」

ど、どうする、も、もう知らないからね！」

・  
・  
・

“ノロノロノロ”

えつとく、駐車場どこかなあ。

なんかすごく狭い道に入ってきたんだけど。

あ、あそこやつと広い道に出られる。

広い道に出れば何か標識があるかも。

なんとか一度会場に戻らないと。

それじゃここを右折して。

“パキツ”

へっ？

あー、か、鏡、ドアミラー取れた！

“キキキー”

やばいやばい、ドアミラーが。

“ガチャ”

うんしょつと。

えつと、ミラー、ミラー、ミラーはどこだ、どこに落ちた？

“きよろきよろ”

あ、あつた。

“ひよい”

えつと、これくつつくかなあ

ね、念じれば必ずくつつく………はず！

だ、だってわたしゾンビイだもん。

超常現象だもん。

「くっつけ、くっつけ、くっつけ、うりやくアンデッドパワー！」

ど、どうだ。

く、くつついたよね。

“ぼろ”

げー！

ど、どうしよう、どうしよう、巽さんに怒られる。

“ブツブー”

へ、あ、ト、トラック！

“ブウォー”

「ひゃー！」

「気をつけろー、ぼけーと突っ立ってんじゃねえ、このバカヤロー」

「………」

“がくがくがくがく”

「………いや、いや、いや」

“へなへなへな”

「うう、ううううう、い、いやー!!」

・  
・  
・

「だからライブなんて無理って言ったやないですか！」

「なにがじゃい。」

なかなか盛り上がっていたじゃないか」

「あれのどこが盛り上がってたって言うんですか！

たえちゃん達が暴れてただけやなかとですか。

それに会場の人にがばい叱られて、もう出入り禁止って言われたし」

「そんなちくさいこと気にするな。

それよりさっさと帰るぞ。

ん？ 車はどこじやい？」

“キヨロキヨロ”

「あいつどこに車停めたんだ？

ち、えつとスマホスマホ」

“カシヤカシヤ”

「……」

「おー、俺じやい。

今から帰るぞ。

車どこに停めたんだ？」

「……」

「おい？」

「……うろうろう」

「どうした、なにかあったのか？」

「……ト、トラックが。」

「こわい、こわくて身体が動かない」

「いまどこにいるんだ？」

「わ、わからないよ！

こんなところ来たことないし。

周り真っ暗だし。

も、もうやだよ!!」

「……わかった、このままスマホ切らず置いておけ。

今、お前を探し出してやる」

「……た、巽さん」

「お前がどこにいようと、きつと俺が探し出してやる。」

だから安心しておとなしくそこで待ってろ」  
“きゅん”

「……うん」

な、なんだろう。

胸がなんか変。

……巽さん。

もしかしてわたし巽さんのこと……

「こ、幸太郎さん！」

純子ちゃんがない、リレイちゃんも」

「はあ！」

さ、探せ、とつと探さんかい」

「あ！ サキちゃん拡声器持ってきちやったの。

だ、だめー、うるさいから怒鳴らないで」

「止めろさくら

こんな夜分に、通報されるじやろうが」

「拡声器、離してサキちゃん。

ん、離してくれない。

ちよ、ちよつと待って愛ちゃん、愛ちゃんまでどこにも行かないで」

「おわ、た、たえ、頭にかみつくんじやない。

ミ、ミカ、ちよ、ちよつと待ってろ。

必ず」

“プ、プ”

「巽さん？」

……巽さん！」

た、大変だ、みんな暴れてるんだ。

だつてみんなゾンビだもん、言うこと聞くはずない。

このままだとお巡りさん来て撃たれちゃう。

みんな撃たれちゃう。

ど、どうしよう。

で、でも身体が震えて。

『ミカ……さん』

さくらちゃん。

“バシッ”

な、何やってんだわたし。  
しつかりしろ！

さくらちゃんが、み、みんなが大変なんだ！  
わたしが、わたしが行かないとみんなが。

“ガチャ”

待っててみんな。

“バタン”

い、今行くから。

“キュルル、ブウォー”

とにかく、いま来た道を急いで戻って。

「うおりやー！」

“ガリガリガリ”

・  
・  
・

“ブロロロン”

や、やった、会場見えてきた。

あ、駐車場！

駐車場って、会場のすぐ横にあったんだ。

“キヨロキヨロ”

えつとく、あつ、巽さんいた！

「巽さくん」

“キキキー”

「お、おうここだ。」

身体、大丈夫か？」

「あ、うん、ごめんなさい」

「いや、身体が大丈夫ならそれでいい。

さくら全員いるか？

さつさと撤収するぞ」



「あ、はい」

〃 ガラ〃

「ほらみんな車のつて」

「まったく。」

さくら、お前がゲソを全部食べさせてしまうからこんなことになったんじやい」

「だ、だって、みんな控室で暴れるけん」

「ご苦労だったなミカ。」

よし運転代わろう。

いまそつちいくから、助手席に移れ」

「あ、い、いや、巽さん、わたし運転して帰ろうかなあ」

ほ、ほら巽さん、疲れたろうから」

「いや、大丈夫だ。」

お前のほうが疲れただろう。

今そつちに………

「……あ、あのく、巽さん」

「……おい」

「えへ♡」

「ミラーはどうした」

「はくい、ここにありまゝす。」

あのく、なんか取れちやったみたい。

な、な、なんでだろう、わからないな」

「この横の傷は」

「へ、傷？」

いや、暗くて見えないな」

傷なんてある？」

た、巽さん、目が悪くなったんじや」

「このボケー！」

傷だけじゃない、ここ、凹んでるやないかい！

はっ、バ、バンパー外れとる！」

「だ、だっつゝ」

「ご、ご、ご、この大ボケー!!」  
「ひやく、ご、ごめんなさい」

—————

“スタスタスタ”

「あ、ミカさん、ベランダにいたんだ。

昨日はご苦勞様でした」

「……」

「あのねミカさん。

わたし、昨日のライブの時、不思議な気持ちになったの。

心が揺さぶられるようなすごく幸せな気持ち。

わたしそれをどこかで感じたような気がして。

わたしもそれがなんなのか確かめたい。

だから、わたしアイドル続けていこうと思う。

きつとアイドル頑張っていれば、それがなにか思い出せるって

そんな感じがして」

「……」

「え、えつと、ミカさん？」

「ううう、うわくん、うわくん」

「えつ、ミカさんどうしたの？」

「異が、異が」

「幸太郎さん？」

「異が車壊したから、一生ただ働きだつて！」

「え、あ、そ、そうなんだ」

「やだー、お給料ほしい！」

・  
・  
・

“カチャ、カチャ、カチャカチャカチャ”

「ふう〜、大分プレゼンの資料できた。」

あと一息だな。

さて、さっさと終わらせ」

“又〜”

「お昼休みまでお仕事？」

“ご苦労様”

「うわー」

だ、だからいきなり顔近づけるのやめてください」

「え〜、頑張ってる君にお姉さんからのご褒美なのに〜」

「褒美っていうのなら形あるものにしてください」

「ブ〜、相変わらずだね君は」

「それより何の御用ですか。」

何か用事あるんでしょ」

「あのさ、君は有休まったく使っていないんだって。」

土曜も会社来てるっていうし」

「まあ、家においても無意味な時間を過ごすだけですし。」

それなら仕事してた方が有意義ですから」

「ふ〜ん、社畜にはならないって公言していた君がね〜」

“ つんつん”

「だ、だから頼つつつくのもやめてください」

「ね、このデータ保存した？」

「え？」

ええ、一応自動保存は三分に設定していますけど」

「さすがマメだね〜」

「じゃあ」

“ プチ”

「げっ！」

あ、あ、あんた何するんだ」

「いいじゃん。」

それよりさ、君に特別業務を与えてあげる」

「きよ、拒否します」

「ざんねくん、これは部長命令です。

だから君に拒否権はないんだなあ」

「お、横暴だ」

くそ、で、な、なんですか」

「あのね、比企谷君」

絶望それとも希望？

「ありがと、さくらちゃん。

また後でね」

“ スタスタスタ ”

ふうく、さくらちゃんにいつぱい愚痴聞いてもらったらなんか気が晴れた。

さてつと朝ご飯の準備しよつと。

今日は何作ろうかなあゝ

『お前なんか、一生給料無しじやい』

・・・ロメロのドッグフード、あつたよね。

ぐふふふ、きくめた。

「るるるるん♪」

“ スタスタ・・・スタ ”

『わたし、アイドル続けていこうと思う。』

きっとアイドル頑張つていれば、それがなにか思い出せるって

そんな感じがして』

そっか、さくらちゃんアイドル続けていくんだ。

それで何か思い出せるかもつて。

・・・わたしは・・・どうしたらいいんだろう？

どうしたら思い出せる？

わたしには、わたしにあるのは・・・この指輪だけ。

“ ギュツ ”

な、なんだろうねほんと。

なんでこの指輪見るたび、こんなに胸が締め付けられるんだろう。

とつても辛くて、でもなんか暖かいもの感じて。

“ ポロ・・・ポロポロ ”

へへ、ゾンビイでも涙出るんだ。

“ グスツ ”

ううう、はやくちゃんと思いたい。

“ トボトボトボ ”

「・・・奇跡 感じてみたいんだ♪」

へ、このなんだ？

ダンススタジオからなんか音楽聞こえる。

誰かいるの？

“ガチャ”

「よかはい、よかはい、よかよかはいはい♪」

“くねくね”

げっ、な、な、なんだあれ。

た、た、巽さんなにしてんだ。

「あく、よかよかつと」

“くねくね”

「プー！ ゲラゲラゲラ」

あっはははは、お、お、おかしいー！

な、なにあれ、よかよかつて。

「ゲラゲラゲラ」

だ、だめ、わらったらだめ。

巽さん真剣にやってるから。

「よかよかよかよかよかはいつと」

「プー！ ギャハハハ、ゲラゲラゲラ」

だ、だめだー、おかしい、し、死ぬ

いや、わたしもう死んでんだけど。

“ガチャ”

「おい！」

「ゲラゲラゲラ、はっ！」

「なにしてる」

「あ、い、いや、そ、その〜」

「お前、もうメイクしてやらんからな」

げ、やばい、マジ巽さん怒ってる。

「こ、ここは謝っておかないと。」

「ご、ごめんなさい。」

でも、何やってたの巽さん？」

「な、な、なんでもないわい」

「だ、だつてさ、こんな感じで」

“くねくね”

「よかよかつて。」

プ、クスクス」

「・・・おい」

「ご、ごめんなさい、調子にのりました。」

さくらちゃん達の新しい曲の振付だね。

・・・クスクス」

「・・・お、お前踊ってみろ。」

今見ていただろ」

「えー！ 無理だよ、ムリムリムリ。」

憶えているわけないじゃん。

「・・・笑い死にそうで、そんな余裕なかったし」

「うるさいわい！」

人のこと散々笑いよつてからに、よつぽど自信があるんじゃないが！

えらい、ミュージックスタート！」

“カチャ”

「げー！ う、うっそ」

「タタターン、タタ、タタターン」

目覚めRETURNER 願えばいいんだ」

「ちよ、ちよつと待つてー」

「刹那のソウルにCut IN」

お、終わった。

ほとんど創作、あんなの一回見ただけで憶えられるわけないじゃん。

でも巽さん、なんも笑わなかったけど・・・  
ずつとああやって腕組みして見てた。

笑うの通り越して呆れられたのかなあ。

「……だ、だから無理って言ったじゃん」

「……」

「あ、あのく、巽さん？」

「……ちよつと待ってろ」

“ スタスタスタ ”

なんだ？

なんかマジな顔してたけど。

あ、なんか持つてきた。

「あ、あのく巽さん？」

“ バサ ”

なんだこれ？

これを見ろって言うの？

えっ、これって。

「この曲の振付のメモだ。

一人一人の分のな。

これ、明日までに覚えろ」

「はあ？ はあー！」

ムリムリムリムリ、ムリー！

覚えられるわけないじゃんか！

ほ、ほらこれ7人分もある」

「そんなもん、死んだ気になって覚えんか！

……っってお前もう死んでるだ、出来るだろう」

「い、いや、そ、そうだけどさ」

「いいか、明日ビデオ撮るからな」

「げく、お、覚えられなくても知らないからね！」

くそ、ビデオ撮るって何の罰ゲームだよ。

あくあ、疲れた。

ゾンビイでも疲れんだからね。

ちよつと座ろ、えつとく

「あ、ちよつとその椅子貸して」



“ひよい”

でもなんでビデオ？

ま、まあいいけどさ。

「うんしょっと」

“ビリッ!”

「げえー!」

どこ、どこ、なんかどっか破れた。

“キヨロキヨロ”

「けつだ。」

尻が裂けてるぞ」

「えっ」

げー!

パ、パンツのお尻裂けてる。

これしか穿くものないのにどうしよう。

これってなんとかうまく縫えるかなあ。

「お前この前、服買いに行くって前借したはずだ。」

それなのになんでまだ同じ服とズボンなんじゃい」

「あ、あの、いろいろありまして〜」

「まったたく、本当に世話のかかるゾンビイじやい」

“スタスタスタ、ガチャ”

い、いやちよつと待てい。

世話のかかるって、食事に洗濯に掃除、お、お風呂だってあんたし

か入らないのに

わたしが洗ってたんだ・・・って、あれどこ行ったの？

まったたく。

“パラパラ”

この振付、巽さん一人で考えたのかなあ。

それにこの曲や歌詞も。

ほんととほすごい人なんだ。

さくらちゃんも巽さんも頑張ってたね。

それに比べてわたしは・・・

“ガチャ”

「あ、巽さんどこいった」

“バサ”

「うっぷ。」

「い、いきなりなにを」

「それでも着ておけ」

着ておけて………ジャ、ジャージ。

うわ、だっき。

げっ！ な、なんか胸のところに名前書いてある！

お、おい、こ、これ着るのかよ。

“ドサツ”

「へっ、た、巽さん、それって」

「なんじやい、見てわからんのかい。」

ジャージに決まってるだろ」

「じゃなくて、それ全部」

「あいつらもいずれ目を覚ますだろうからな。」

その時のレッスン用について、この前買っておいた」

………全部って、全部同じジャージ、紫色の。

あ、ぜ、全員の名前書いてる。

こ、こ、ここは学校かー

こんなの絶対誰も着ないって。

「あ、あの、巽さん、こ、これ」

「なんじやい、気に入ったのか？」

そうじやろ、そうじやろ、何せ俺が選んだんだからな」

……これがいいのかよ。

巽さんの感覚って、もしかしてちよつとやばかったりする？

まあ、才能のある人つてちよつとズレてるっていうけど。

「あ、それとあいつらが目を覚ましたら、服とか必要なもの

お前が準備してやってくれ。

ずっと同じ服ばかり着せておくわけにもいかんだろうからな。

……お前の分もな」

「えっ、でもわたしはもう前借して」

「昨日は怖い思いさせたからな。」

「これでチャラじやい」

「巽さん。」

「………ありがとう巽さん」

「キヤー」

“ガチャーン”

え、な、なに？

だれの悲鳴？

それになんか割れる音。

“ダー”

「あ、巽さん、ちよつと待って、わたしも」

“ダー”

・  
・  
・

“タツタツタツ”

「はあ、はあ、はあ」

あ、巽さんいた。

あの部屋の中覗いてるけど、さっきのはここからだっただの？

でもこの部屋って確か。

「巽さん、どう？」

な、なにがあつたの？」

「なんや騒がしいありますんな」

「ふあー、寝た寝た、あん！」

「あ、あの、お、おはようございます」

え、この声ってさくらちゃん？

なに、なに、中で何が起こってるの？

巽さん見えなない。

そごいいて。

「どうやらようやく目覚めたようだな」

目覚めた？

あ、あの声、そつかゾンビイっ娘達目覚めたんだ。

「お前、あいつらをミーティングルームに連れてこい」

「え、異さんは？」

「俺は先にやっておくことがあるんじゃない」

“ スタスタスタ ”

「あ、異さん、ちよつと待っ」

「お前、何か知ってんだろ！」

え、あ、部屋の中の様子はどうなってるの？

“ そ〜 ”

「あ、あの、わ、わたし達はゾンビイで」

「はあ！ なんだそりゃ。」

なんであたし達、ゾンビイになってんだ！

あ〜ー」

「あ、いや、その、わたしにもわからないかなあ〜って」

「お前なめてんのか」

「ひゃ、ご、ごめんなさい」

や、やばい。

でもあの娘ちよく怖い。

た、確かあれってサキちゃんだったっけ。

や、やだな〜

なんか関わり合いもちたくない。

「お前、ぶっ殺すぞ」

「ひい〜」

あ〜ん、もう！

“ ガチャ ”

「あ、あのみなさん！

お、おはようございますです。

ここ、ここ、この状況につきまして、今から異さんが皆さんに説明する  
とのことなので、

ミーティングルームまで来てください」

「異？」

誰だそりや。

なんであたしらが行かないといけないんだ。

そいつにここまで来いって言っとけ、おらー！」

「ひゃー！」

あ、あの、で、できましたら、ご、ご足労頂ければ幸いかと、えへ

へへへ」

「何へらへらしてんだ、あーん！」

「ひゃー！」

お願いします、お願いします、お願いします。

そ、その、あ、そうだ。

わ、わたし、今からここの部屋お掃除しないといけないので

よろしくお願いします」

“ペコペコペコ”

「ちっー！」

「さ、さくらちゃん。

ごめん、みんなを案内して。

お願い」

「え、あ、はい」

“ドカドカドカ”

びえり、こわかったり

あの娘キライ。

・・・で、でもみんな目覚めたんだ。

これでもう突然かじられる心配なくなつたんだ。

それにこれでみんなでアイドルが

“ふらり、ふらり”

えっ？

“ガブツ”

ひゃ、た、たえちゃん。

「あー、あー」

「はい皆さん、目覚めましておめでとうございます。

俺は謎のアイドルプロデューサー 異幸太郎様です。

これからお前らには佐賀を救うためにアイドルをやってもらおう」

「うんにやうんにや、お前らをアイドルにする男、異幸太郎さんじゃない。

お前らは俺が選んだ。

そして佐賀のアイドルとして、必ず世間を揺るがすことになる。

その第一歩として、早速明後日、佐賀城で行われる鯨の門ふれあい

コンサートに参加してもらおう」

「ムリに決まってるでしょ」

「決まっとらんわ。

昨日のライブのようにやっとなげばいいんじゃない」

「はあ、何昨日のライブって」

「なかなか盛り上がっておったぞ。

なあ、さくら」

「え、まあ、そのへんはいい」

「わかったらさっさとレッスンじゃいい」

“ゴシゴシゴシ”

ふう、今日のお掃除はこれでよしつと。

ん、今日も一日頑張ったつと。

そういえばさ、なんかさくらちゃん明後日コンサートに出るって  
言ってたつて。

みんなレッスン頑張ってるかなあ

きつとあのダンス練習してるんだ、くねくねって。

でも異さん、なんでわたしに明日までに覚えておけって言ったんだ

ろう。

「……ん！ あ、もしかしてわたしも一緒に？

ま、まさか。

でももしそうだったら……

ちよ、ちよつとレックスン見にいつてこよう。

“タツタツタツ”

「よかはい、よかはい、よかよか」

あ、巽さんの声聞こえる。

どれどれ。

“ガチャ”

やってるやつてる………やつてない！

レックスンしてるのさくらちゃんだけじゃん。

リレイちゃん本読んでるし、ゆうぎりさんはロメロ撫でてるし。

純子ちゃんは………げ、たえちゃんに追っかけられてる。

あと愛ちゃんは……

な、なんかさくらちゃんをすごく睨んでる。

な、なんで？

「よかったい、よかったい、よかったい」

ん、あれ？

今朝やってた振り付けと違う。

あんなのなかったけど？

まあいいや、あとで聞いてみようつと。

……ん、あれ、そういえばサキちゃんは？

“ボタン”

「あっ」

「何見てんだお前」

「あ、い、いや、べ、別になにも。

じゃ、じゃ」

「おいお前」

「はいー」

「お前はなんでアイドルやらんと?」

「へ、アイドル?」

あ、う、うん。

巽さんがさ、お前の顔は地味すぎるからアイドルなんて無理って。

へへ、だから・・・」

「お前もあいつの言いなりか」

「え?」

「言いなりかって聞いちよろうが」

わたしが巽さんの言いなり。

・・・違う。

言いなりじゃない。

『お前の居場所ぐらい俺が作ってやる』

『お前がどこにいようと、必ず俺が探し出してやる』

わたしは、わたしは巽さんを信じてる。

なんもわからなくて、どこにいればいいのかもわからないわたしに、

ちゃんと帰る場所を与えてくれる。

だからわたしは

「わ、わたしは巽さんのことを」

「お前はあいつの女やろ。」

もうよか」

“スタスタスタ”

「へっ、女?」

ち、違う、サキちゃん違うから」

・  
・  
・

“刹那のソウルにCut IN”

「はあ、はあ、はあ」

こ、こんな感じかなあ。

ふう〜、やつとさくらちゃんと愛ちゃんの分マスターしたあ。



はあく、あと5人分かあ。

これ、今晚中に覚えられるかなあ。

巽さん、明日ビデオ撮るって言ってたし。

……でもなんでわたしこんな必死に練習してんだろう。別に覚えられなくても。

『お前はあいつの女やろ』

へっ！

ち、違う、巽さんはそんなんじゃない。

……そりゃ時々すごいなあとか、やさしいなあとか思うけど。でも多分違うと思う、多分。

それにきつとそれだけじゃないと思う、頑張ってるの。

さくらちゃん、めっちゃ頑張ってる練習してた。

すつごく頑張ってるのわかった。

……少し羨ましかった。

わたしも何かこう生きてるって感じたい。

も、もう死んでるけど、それでも生きてるって感じたい。

だからこうやって頑張ってるダンス覚えれば、もしかしたらわたしも

一緒に。

それにほらサキちゃん達もライブしたら目覚めたから、

もしかしてわたしの記憶戻るかも。

よ、よし、ちゃんと覚えよう。

それで巽さんにもう一回、アイドルやりたいてっお願いしてみよう。

きつと巽さんなら。

—————

“ちゅんちゅん、ちゅんちゅん”

へへ、へへ、へへへへ。

や、やったで、ちゃんと覚えてで

“ふらふら、ふらふら”

ぎ、ざまあ見ろ、7人分全部覚えたかんなく

“どたつ”

も、もう駄目。

身体中、ギシギシって軋んでる。

こ、このまま休みたい。

あ、でも、休んだら全部忘れそう。

で、でも少しだけ……

駄目！

は、はやく巽さんにビデオ撮ってもらうんだ。

そ、そして……

“すく”

た、巽さんの部屋に行かないと。

“ふらふら、ふらふら”

・

“とんとん”

「なんじやい」

“ガチャ”

「あ、あの巽さん」

「ん、なんだ朝ご飯できたのか」

「い、いや違くて。」

あの、お、覚えたから

みんなのダンスの振付覚えたから。

それで」

「ん？」

なんじやい、朝ご飯でないんかい。

今日はちよつと忙しいんだ、さつさと朝ご飯つくらんかい。

仕事さぼってるんじゃないぞ、このボケ」

「へ、あ、あのビデオ」

「ビデオ？」

そんなもん、いつでもいいんじゃない。

そんなことより朝ご飯を」

「ベシ」

「ぐはあー」

「ベシ、ベシ、ベシ」

「や、や、やめんかい。

げ、グ、グーはやめろ」

「このボケー」

「ボコツ」

・  
・  
・

「ガタンガタン、ガタンガタン」

「ふあゝあ」

「あらやっとお目覚めかしら、居眠りケ谷君」

「お前それまだやるのか？」

「それに結構ムリあんだろ、それ」

「……いいじゃない」

「ま、まあいいけどな。

……それよりなんでお前まで新幹線なんだ。

飛行機でいけばいいだろ、向こうで合流すればいいんだし」

「あ、あなたが」

「俺が？」

「なんでもないわ。

それより、あなたの方こそよくこのプロジェクトに参加する気になっただわね」

「なんといつても魔王様からの命令だからな。

断ると後が怖い。

それに」

「それに？」

「……いやなんでもない。」

だが、大丈夫か？

このプロジェクト、東地グループとの共同事業ってことだけど、あそこ代替わりしてからあんまりいい話聞かねえぞ。結構ムリに事業拡大してるっていうじゃねえか。

このプロジェクトも全国展開するって話なんだろう」

「ええ、それは私も知ってるわ。

でもお父さんの後援会会長だし、これまでの付き合いもあるからお母さんも無下にできないの、ごめんなさい」

「そっか。

でもお前が謝るようなことじゃねえだろう。

会社としての判断だからな」

・

・

・

「なにしてんじやい、さっさと乗らんかい。

おいていくぞ」

「あ、ちよつと待って巽さん」

「ふらく、ふらく」

徹夜したから身体結構ガタきてんだって。

それなのに、それなのに。

ぐうおー

な、なんかまた怒りが込み上げてきた！

「お待たせー」

「ボタン」

「おい、また車壊す気か。

これは代車なんだから気をつけろ。

・・・なんだまだ怒ってるのか」

「ブロロン、ブー」

「ふんだ！

で、どこ行くの？

さくらちゃん達のレッスンほったらかしてさ！」

「さくらにはちやんと自主レックスンさせてある。

今日は商工会に行くんじゃない」

「商工会？」

え、ちよ、ちよつと待って、わたしジヤージのままだし」

「構わん」

「いや、わたしが構うから」

くそ、だって近くの商店街にいくもんだと思ってたから。

そろそろ食材を買ってこないとって思ってたし。

ううう、くそ、商工会に何しに行くんだ。

向こうのお偉いさんとか出てこないだろうな。

やだなあ、このジヤージ名前書いてあるし。

「ミカ」

「え、あ、はい」

「お前、何か俺に話があったんじゃないのか？」

今朝、何か言いたそうな顔してたからな」

・・・巽さん。

なんやかんや言って、ちやんとわたしのこと見てくれてるんだ。

そっか。

「あ、あのね巽さん」

「却下」

「へっ？ あ、あのう、まだ何も言っていないけど」

「どうせめんどくさいことじやろがい！

そんなもん却下じやうい」

「き、貴様——！」

く、くそー、こいつのこと一瞬たりとも信じたわたしが馬鹿だった。

もう絶対信じてやらん！

「冗談だ。

言ってみろ」

め、め、めんどくさいー！

もうやめて、ただでさえ今日は疲れ切ってるのに。

・・・で、でも。

「あ、あのね巽さん。

わ、わたし、ちゃんと7人分のダンス覚えたの」

「うむ。

昨晚はずっとダンススタジオの照明ついてたからの。

帰ってから早速ビデオ撮らんとな」

「あ、う、うん。

それでね……………

「ん？」

「…………わ、わたしもアイドルやりたい！」

昨日、さくらちゃん頑張ってるのみて、わたし少し羨ましかった。

だって、わたしには何もないから。

わたしも、わたしもなんか生きてるって感じたい。

だから」

「却下だ」

「へ、な、なんで。

…………やっぱ顔が地味だから？」

「地味な顔してるアイドルだっていないわけじゃない」

「だ、だったら」

「だめだ、お前をアイドルにするわけにはいかんのじゃない」

「なんでさ！」

そ、それにさくらちゃん以外、みんなやる気ないじゃん。

どうせ明日だって。

だったらわたしが、わたしがみんなの代わりにさくらちゃんと一緒

に」

「それでは何も解決せん。

あいつらの問題はあいつらが解決するもんだ。

お前になんとかできるものじゃない」

「……………なんだよそれ。

馬鹿ー！」

〃 べし〃

「ぐはあ」

“キキキ”

「あ、危ないじやろが！」

“バタン！”

「た、巽さんの馬鹿、ボケナス、八幡!!」

大っ嫌い！」

“ダー”

「ミカ、車に戻れ……………」

馬鹿、ボケナス、八幡つか。

……やっぱり、お前をアイドルにするわけにはいかんのじやい」

・  
・  
・

“ウイーン”

「すみません、お電話頂きました巽ですが」

「あ、すみません、しばらくお待ちください」

「あ、はい」

“スタスタスタ”

「お待たせしました。」

これがさつき話していた主な観光施設とかイベントの資料です。

それではよろしく願います」

「ええ、こちらこそよろしく願います。」

では失礼します」

“スタスタスタ”

「な、雪ノ下、その観光施設とかイベント全部回るのか？」

「あまり時間もないので、折角佐賀まで来たんですもの

なるべくたくさん見て回りたいと思うの」

「そうか。」

それなら明日からは手分けして見て回るか」

「そうね。」

なるべく二人で見て回りたいけど仕方ないわ」

「じゃ明日、俺は佐賀城のイベントメインで回ってみるわ」

「ええ、お願い」

“ウイーン”

「あ、すみません異さん、お待たせいたしました」

「あ、いえ。」

あの、さっきの人達は？」

「ああ、千葉から来た雪ノ下建設の人たちですよ。」

なんでも佐賀のリゾート開発を検討されているとか」

「・・・そうですか」

「異さん、どうかしました？」

「あ、いえなんでも。」

それでお話というのは」

「あ、そうそう。」

実は久中製薬さんの慰安旅行なんですが」

くそ、異の馬鹿。

なんでだよ、なんでわたしだけ駄目なんだよ。

ダンスだつてちゃんと覚えただ。

あんなやる気のない人達よりよっぽどわたしのほうが。

・・・なんでダメなんだよ。

“トボトボトボ”

ん、あ、あれサキちゃん。

なんでこんなところに？

いや、そんなことよりメイクもしてないし、誰かに見つかったら。

止めないと・・・で、でも、もしこのままサキちゃんがいな

くなれば

もしかしてわたしが代わりに。

はっ！ な、何言ってるんだ。

・・・でも



“スタスタスタ”

ど、どうしよう、どんどん繁華街の方に行っちゃう。

幸い、暗くなってきたのもあつて、今のところ誰にも会わなかったけど、

繁華街に行けば絶対誰かに。

“スタスタ、ピタ”

「おい！」

「あ、はい！」

げ、見つかつてた！

“ズカズカズカ”

や、やば、なんかこつち来る。

ひやく、お、怒ってるし！

う、逃げたいのに足がすくんで。

「なんかようか」

「あ、い、いや、その、ど、どこに行くのかなあゝて」

「ちっ！」

ずっとコソコソつけてきやがつて」

「あ、いやゝ、そのゝなんていうか、えへ、えへへへ」

“ぐい”

「ひゃ、あ、あの、は、離してサキちゃん」

「あたしはヘラヘラしてる奴が一番気に入らねえんだ。

それに人の顔色ばかり窺いやがつて。

お前のような根性のない奴、大嫌いなんだ」

「……」

「なんとか言え！」

なんだよ、どいつもこいつも。

どうせわたしのことなんて誰も！

「……好きで笑ってるんじゃない」

「あゝーん、なんか言ったか？」

「……」

「チツ、もういい。」

「勝負しろ」

「え？」

「あたしと勝負しろって言ってんやろうが」

「勝負って？」

「あつ、ジャンケンとか？」

「ビシ！」

「ひゃっ」

「勝負ったらタイマンに決まっとするやろが。」

「言いたいことがあるんなら、こぶしとこぶしで語るのが手っ取り早い。」

「それで、あたしが勝ったらもう二度とついてくるな、わかったか。」

「まあ、ハンデはくれてやる。」

「お前に先に殴らせてやる。」

「ほら殴ってみろ」

「や、やだ」

「だ、だって、そんなの勝負ならじゃないじゃんか。」

「ど、どうみたってサキちゃんヤンキーだし。」

「絶対殺されるし。」

「やだじゃねえ、いいから殴れ！」

「殴らないならあたしから」

「ひえく、もう！」

「えい！」

「ペちよ」

「はあつ、なんだそれ？」

「お前、なめてんのか。」

「気合が入ってねえんだ気合が！」

「しっかり気合入れろ」

「あーん！」

「く、くそ。」

も、もうこうなったらやけくそ！  
ど、どうせ、もう死んでんだ。

「うおりゃー！」

“ベシ”

「ぐはあ」

“ズデン”

「ひゃー」

“ダー”

「やるじゃねえか、いいチョップって、あ、てめえ待ちやがれ」

「いやー待たない！」

“ごめんなさい！”

“ダー”

・  
・  
・

「はあっ！」

「あのく、確かにツインを一室って承ってますが」

「お、おい雪ノ下、お前知ってたのか」

「そんなわけないじゃない。」

「宿泊は姉さんが予約したって」

「………」

「あ、あのくお客様？」

「すみません。」

「他に空いてる部屋ありませんか？」

「あいにく恵比寿まつりの関係で、本日は満室となっております。」

「多分、他のホテルも同じかと。」

「明日からならなんとかもう一部屋ご準備できると思いますが」

「マジか」

「仕方ないわ。」

「それで結構です。」

「明日からはお願いできるかしら」

「畏まりました。」

それではここにサインを」

“カキカキ”

「さっ、行くわよ比企谷君」

“スタスタスタ”

「な、お、おいマジか」

「ええマジよ、仕方ないじゃない」

「だ、だけどな、俺も一応男だから」

「あなたを野宿させるわけにはいかない。」

だって間違いなく不審者で捕まるでしょ。

……それにあなたにそんな度胸ないじゃない。

この前も」

「いや、それは理性があるといえ」

「……馬鹿」

・  
・  
・

“キヨロキヨロ”

「はあ、はあ、はあ」

くっそ、あいつどこ行きやがった。

ぜってえ見つけてやつからな」

げ、サキちゃんこっち来やがった。

怖い怖い怖い、まじ怖い。

うゝ臭いけど、このゴミ箱から出れない。

めっっちゃ怒ってるから、見つかったら絶対殺される。

“パク、ムシヤムシヤ”

あ、サキちゃん、またスルメ勝手に持ってきて。

あれ、みんなのご飯なのに。

それにめっっちゃ減ってたから、巽さんにお前勝手に食ったろって

疑われてんだ。

“ごく”

でも、う、美味そう。

「ヴー」

〃ゾロゾロゾロ〃

え、なに？

「あ——ん、なんだお前ら」

「ガルルルル、ウオン！」

げ、や、野犬？

なんかいつぱい野犬集まってきた。

そ、そつか、サキちゃんのスルメの匂いにつられて。

・・・いや、それだけじゃない、きつとわたし達ゾンビイだから  
なんか引き付けるんじや。

「なんだお前ら、やんのかー！」

ちようどいい、いまあたしちヨク機嫌悪んだ。

上等、全部まとめてかかってこい。

おらあー！」

「ウオン！」

「うりやー」

〃バキツ〃

「ガルルル！」

〃ボカ、ボコ、ドス〃

「キャンキャン」

「ヴー、ガウー！」

「おりやー！」

〃バキツ〃

やばいやばい、サキちゃんすごいよ。

野犬次々って倒してる。

タ、タイマンやらなくてよかった。

ほんとに絶対殺された。

「ウ——」

「え？」

「ガウー！」

「ひゃー、こ、こつちにも来た！」

「あー、てめえそんなところにいやがったのか！」

勝負の続きすんぞ」

「サ、サキちゃん、いまそんな場合じゃ」

「ガウー！」

「サキちゃんあぶない」

〃 どん〃

「あ、てめえいきなり」

〃 ガブ〃

「ひゃっ」

〃 ドサ〃

げ、こいつ重たい。

くそ、いつまでのつかつかてんだ。

いい加減、腕を離せ！

〃 ベシ〃

「キャンキャン」

ふう、今のうちに。

「ヴー、ガルルル」

げ、いっぱい来た。

に、逃げないと。

「ガウ、ガウ、ガウ」

〃 ドカドカドカ〃

やだ、やだ、やだ、重たい！

噛まれてる、足も、手も噛まれてる。

くそ離せ！

「ガウー」

あつ顔、顔はいや。

え、えーい、あ、あっちいけ！

「えい、えい」

〃 ベシ、ベシ〃

「グウオー、ガブ、ガブ」

いや、いや。

「ガブツ！」

．．．や．．．だ．．．よ．．．

．．．

“ガチャ”

「お待たせ比企谷君。

お風呂どうぞ。

．．．え？」

“キヨロキヨロ”

「どこに行ったのかしら？」

．．．

「．．．うくん」

はっ！

あ、わ、わたし死んでないんだ。

犬、犬は？

“キヨロキヨロ”

いない。

よ、よかった、助かった

．．．でもサキちゃんもないや。

やっぱりどこか行っちゃったんだ。

そっか．．．

わたし、どうしようっかなあ。

やっぱり帰りづらい。

巽さんにあんなこと言っちゃったし。

はあゝあ。

「うんしよっと」

“バタ”

あ、あれ、なんで起き上がれ・・・  
えっ？

・・・あれ？

う、腕・・・腕がない。

左の腕が、な、なんで！

あ、どこ、どこかにおってない？

「うんしよっと」

どこ、どこだろう。

“キヨロキヨロ”

うくん、暗くてわからない。

・  
・  
・

“カランカラン”

「いらっしやい」

「あ、すみません客じゃないんで」

「ああん？」

「じゃ何の用だ？」

「すみません。」

「ちよっと人捜してるんですが。」

「えっと」

“ガサガサ”

「この写真の女の人、どこかで見かけた覚えないですか？」

「お客さんできたことがあるとか」

「うん？」

「さあ、覚えはないな。」

「あんた、なんでこの人捜してるんだ？」

「え、あ、ま、まあちよっと連絡がつかないからって、」

「知り合いから頼まれたもので」

「そうかい。」

「すまなかつたな見覚えがなくて」



「あ、いえ。」

「こちらこそお仕事の邪魔してすみません」

「よかったら一杯飲んでいくか」

「他にも探してみたいのですみません」

「そうかい」

「ガチャ、カランカラン」

「お邪魔しました」

「スタスタスタ」

「……ふむ」

「カシヤカシヤ」

「もしもし」

「ああ俺だ」

「どうも」

「なあ、この前写真見せてくれたお前のところの家政婦ゾンビイだが」

「ミカですか」

「ああ、それ。」

「今、そいつを探してるって男が店に来てな」

「……」

「一応、お前に伝えておこうと思ってな」

「どんな男でした？」

「何か特徴とか」

「そうだな。」

「ああ、目が腐ってたぞ。」

「なんかゾンビイみたいにな」

「……そうですか」

「ガサガサ」

「無い、無い、無い。」

「どこにも無いよ、わたしの左腕。」

ど、どうしよう。

だって、あの左の指には……  
やだ、やだよ。

どこ、どこ、どこ。

な、なんでないんだ！

—————

“ガチャ”

「……………」

“とぼとぼ、とぼ、とぼ”

「ん、やっと帰ってきたんかい。

今までどこについて、お前その恰好は」

「……………」

“ボタン！”

「お、おい」

「うっさい、

ほっといて！」

「なにがあつたんじゃい。

アイドルのことなら」

「うるさいうるさいうるさいうるさい。

うるさいんじゃい、このボケー！

どっかいけー！」

「……………」

“スタスタスタ”

「うっ、うっ、うううう、うわくん、うわくん」

やっぱ腕無かった。

どこ探しても無かった。

きつとあの犬に持ってかれちゃったんだ。

それで今頃……もう食われちゃったんだ。  
腕だけじゃない指輪も、あの指輪ももう。

「うづうづうづう」

……死のう。

も、もう、生きてたつてしようがない。

だって、だってあの指輪がなかったら、

あの指輪の秘密知りたかったからわたしは。

もう生きてる意味なんて……ない。

“ドンドン”

「うっさい、あつちいけつて言つてんだろ。

もうほつといてよ、バカー！」

“シーン”

「……もう……ほつといて」

でも、どうやって死のう。

やつぱり灯油かなんかで。

……灰になつたらさ、どつかいろんなどこ飛んで行けるか  
なあ。

今度、今度生まれ変われたら、わたしもう少しだけでいいから……

「うりゃー！」

「へっ、なに？」

窓の方？」

“ガツシャーン”

げ、あ、足！

“ボコツ”

「ぐはあく、な、なんで足が」

“ズデン”

「あ、わりい。

そこにいるなんて思つてなかつたからよ」

「……な、な、なんなのよ」

「いやだってな、ドア鍵かかつてるし。

窓から入るしかねえだろ。

そんなことより、ほら」

“ポイ”

「え、あ、う、腕！

わたしの腕」

「取り返すのにちよつと時間かかっちゃまってな」

「よ、よかった！

指輪ある、指輪あった」

「なんだお前、腕よりその指輪のほうが大事なのか」

“こく”

「だって、この指輪はわたしの宝物。

わたしなんも憶えて無いけど、この指輪を見つめると、

いつも心がキュツて締めつけられる。

きつとこの指輪にはわたしの大事な想い出があるはずなんだ。

わたしは、それを思い出したい。

いつか必ずきつと。

だから」

“ぎゅつ”

「この指輪はわたしの宝物」

「ふくん。

まあなんでもいいけどな。

じゃあな」

“ガチャ”

「サキちゃん！」

「あーん」

「ありがとサキちゃん、ニコ♡」

「・・・チツ！

言つとくがな、あたしはまだお前のこと好きになれねえからな」

「あ、う、うん」

“ボタン”

「なんでえ、あんな笑顔できんじやねえか」

“スタスタスタ”

「いつてらっしやいませ」

「ウイーン」

「さてっと、じゃ俺は今日佐賀城の方行ってみるわ」

「ええ」

「んじや、また後でな」

「・・・比企谷君」

「ん？」

「あなた本当はなぜこのプロジェクトを受けたの？」

「それは昨日行っただろ。」

「お前の姉さんに逆らったら後が怖いから」

「比企谷君！」

「・・・」

「・・・」

「・・・ずっと」

「ずっと？」

「あいつ、高校の時からずっと嬉野温泉行きたいって言ってたんだ。」

「あの時からずっと」

『旅行ってさ・・・お、温泉だよね！』

「どこ？ 嬉野温泉とか？」

「あいつすげえ行ききたがってた。」

結局、なんかいろいろあつて連れて行ってやれなかったんだけどな。

「だからもしかしたらあいつ佐賀に・・・」

「・・・」

「このプロジェクト、まずは佐賀からだっていうだろ、だから。」

「はは、本当はもっと早く来ればよかったんだ。」

「でも俺は・・・」

「なんか理由がないと来れないなんて本当に女々しいな」

「……そう。」

それで昨晚帰ってこなかったのね。

今日の夜もあなた」

「ああ。」

そのつもりだ」

「……あなたやっぱりまだ」

・  
・  
・

ヌリヌリ、ペタペタつと。

うん、これでよし。

「たえちゃんご苦労様。」

さくらちゃんありがと、もういいよ」

「うううう」

「た、巽さん、みんなのメイク終わったよ」

「お前ら、メイク終わったのならさつさと車に乗らんかい。

イベントに遅れるじゃろがい」

「あ、あの、た、巽さん」

「さくら——！」

さつさとたえを連れて行かんかい」

「はーい。」

あ、でも幸太郎さん、顔のメイクが」

「そんなもん着いてからじゃい」

「巽さん、あのね」

「愛！ お前らもさつさと行かんかい」

「巽さん！！」

「な、なんじゃい」

「あ、あの、ごめんなさい」

≪ペコ≫

「わたしちよつとどうかしてて」

「お前は今日は留守番じゃい」

「え？」

あ、いやでもわたしも佐賀城に。  
もう、アイドルになりたいなんて言いません。  
わたしもみんなと一緒にいたい」

「お前なんか今日はどこにも連れて行ってやらん。

おとなしく家で謹慎してろ、このボケー」

「ほ、ほんとにごめんなさい。

もう二度と今回のようなことはしません。

だからわたしも一緒に」

「……ミカ。

何があったのかは知らん。

だが昨日は大変だったんじやろ。

だから今日は……」

“ なでなで”

「今日は家でおとなしく休んでろ」

「巽・さ・ん」

「お前にはきつとお前にしかできんことがあるはずだ。

俺はアイドルがお前にしかできんことだとは思えん。

いいか、それが何か探すんだ。

お前ならきつと見つけることができる。

俺はそう信じてる。

だから今日はおとなしく休んでいろ」

「うん」

「あ、そうじやい。

帰ってきたらこの前の振付、ビデオ撮るからの。

ちゃんと準備しとけ。

間違つたらもうメイクしてやらんからの」

「うん……は、はあー」

「出発じや〜」

げ、や、休んでる暇なんてないじゃん。

もう一回思い出さないと。

くそ、あのボケー！

“スタスタスタ”

「これが候補に挙がっていた洋館。

確かに、なかなか趣のある建物ね」

“カシヤ、カシヤ”

「この外観はこのまま残しておいて、内装だけを手直しすれば。裏の方はどうかしら」

「届け、届け、熱いキモチ。

刹那のソウルにCut IN♪」

「はあ、はあ、はあ」

よ、よし、な、なんとか思い出した。

ちよ、ちよつと休憩。

うんしよつと。

“ドサツ”

ふうう、まったく何が休んでいろだあの馬鹿。

やさしいんだか何だかわからない。

でも・・・

『お前ならきつと見つけることができる。』

俺はそう信じてる』

わたしにしかできないことつか。

なんだろね。ほんと。

『身体のメイク、わたしがやってもいいの？』

『ああ。』

まあ、そこそこセンスあるようだしな』

・・・メイクつか。

そつだ。

ちよつとやってみよう。



“カシャ、カシャ”

外観はこれぐらいでいいかしら。

それとこの公園、ここ駐車場にちょうどいい広さね。  
ここも押さえておかないと。

ペタペタ、ぬりぬりつと。

「ふんふんふん♪」

できた！

へへ、割といい出来。

わたし結構腕上がったんじゃない？

まあ、異さんには遠く及ばないけど。

「ウゝ、ワンワン！」

「お、怒んなくてもいいじゃんロメロ。

ほら鏡見てみ。

ちゃんと男前にメイクできたでしょ」

「・・・・・・ワン！」

“ガブ”

「ひゃ

うゝ、トラウマが」

“ダー”

「あ、ロメロちよつと待って。

そんな顔で外に出たら」

「えつと、もう少し近くから見れないかしら。

少し門の中にお邪魔して」

「ウー、ワンワン」

「えっ！」

“タツタツタツ”

「い、犬！」

「ワンワンワンワン」

「ち、違う！」

な、なにあれ、じ、じ、人面犬！

キヤー」

“ダー”

「お、いい、ロメロ機嫌直して」

ほらゲソあげるから」

「ウ、ワン♡」

—————

“ コソコソ、ひそひそ”

「・・・チツ」

「いや、比企谷君、まさか君がね」

「何のことです」

「みんな言ってるよ」

君が雪乃ちゃんに手を出したって。

それも無理やり」

「な、なにもしてないです」

「そう？」

でもさ、雪乃ちゃん逃げるように一人で佐賀から帰ってきたし。

それに帰ってからずっと寝込んでるんだよ

なんかケダモノがケダモノがって謔言言ってる」

「・・・」

「いや、君も男だったんだね」

“ つんつん”

「ケ・ダ・モ・ノ」

「あ、あんたこそ！」

俺達のホテル、ツインで予約したのあんただろうが」

「え、なんのこと？」

お姉さんよくわかんない」

「くそ！」

「ね、比企谷君……責任取ってよね」

「え、えん罪だー」

バトル？

“カシャ、カシャ”

「ふう〜、でききった！」

ダンスの編集完了つと。

あとはこの編集したDVDをみんなのところに。

へへ、でも自分の踊ってる動画を編集するってなんか恥ずかしい。

だけどさ、これで少しでもみんなの力になれるなら。

・・・ゲリラ・・・ライブつか。

急だよね。

これも彼女達のためなんだって異さん言ってたけど、

大丈夫かなあ〜

“ひよい、ひよい”

『刹那のソウルにCut IN♪』

“ピタ”

『はあ、はあ、はあ、た、異さんどう？』

『・・・OKだ』

『はあ〜、お、おわった〜

もう動けない』

『ご苦労だったな』

『で、でもさ、異さん』

『なんじやい』

『明後日、ほんとにライブするの？

急すぎない？』

『・・・あいつらが本当にアイドルをやっていくというのであれば、

自分達が今いる位置を知る必要がある。

目指すべき目標がいかに遠くにあるかをわかるためにな。

そして、それはなるべく早い方がいい』

『異さん』

『お前はこのビデオを編集してあいつらに渡してやってくれ。

愛や純子はともかく、他のやつらは覚えるのが大変だろうからな』  
『う、うん』

自分達のいる位置つか。

巽さん、さくらちゃん達をアイドルにするためいろいろ考えているんだ。

さくらちゃん達も歩き始めようとしている。

みんな動き始めてる。

それなのに、わたしは……

わたし何がしたいんだらう。

うう、わからん。

くそ！

“ゴクゴク”

ぷふあく、美味しい。

へへ、この紅茶わりとうまく淹れられたと思うんだ。

この透き通ったきれいなオレンジの色。

蒸らし方が大事なんだよね、蒸らし方が。

……てさ、ほんとは味なんかわからないんだけど。

でも不思議と心が豊かになる気がする。

あ、そういえば、

『お茶のあるところには希望がある』

たしかどっか外国の作家さんが言った言葉だ。

“ゴク”

「ふう〜」

……きつとわたしにも希望が見つけられる。

そう信じたい。

「うんー」

さてっと、みんなにこのDVD持っていつていかないよ。

あんまり時間ないと思うし。

んじや、パソコンシャットダウンし……

ん！

な、なんだこのフォルダー？

“開けたら殺す”

・・・何ていう名つけてんだ！

逆にちよ～すげ～気になんだけど。

はっ！ も、もしかしてこれ巽さん……………

ぐふ、ぐふふふ。

き、きつとエツチな画像保存してんだ。

巽さんのスケベ。

“キヨロキヨロ”

へへへ、残念でした～

わたしはもう死んでま～す。

だから開いてもいいよね～

それじゃ。

“カチツ”

「……………」

な、なにー、パスワードだと。

パスワードかけてんのか！

くそ、巽のくせして生意気な。

ええーい、絶対見てやる。

“カシヤカシヤ、カシヤカシヤ”

「ゲリラライブは明日の朝、唐津駅の駅前広場で行う」

「あ、明日！」

「今日一日で歌や振りがどうにかなるわけないでしょ」

「そんなもん寝ずに覚えろ。」

まあゾンビィのお前らに睡眠なんて必要ないがな」

“スタスタスタ”

「z・o・m・b・i・e・l・a・n・d・s・a・g・a・つと」

“カチヤ”

「……………うー！」

これも違うのかー！  
パスワードなんなんだ。

くそ、こうなったらなんとしても見たい見たい見たい、見たーい！  
うんにや、絶対見てやるー

他に巽さんがパスワードにするとしたら……ま、まさか。

「S・A・K・U・R・Aっ」と

“カシャカシャカシャ”

あ、開いた！

……巽さん……ま、まあいいけどさ。

そんなことより、どれどれ巽さんはどんなエッチな映像を。

“わくわく”

「でへへ」

「何してんじやい」

「え？」

げ、げえー、巽さん！

あ、い、いや、あの、その」

「えー、DVDの準備ができたのなら

さっさとあいつらにもっていかんかい、このボケー！」

「は、はい、ごめんなさーい」

“ダー”

「まったく油断も隙も無い」

“カチャ”

「……ふう〜」

・  
・  
・

“スタスタスタ”

くそ、あと少しでフォルダーの中を見れたのに。

でも今度こそ隙をみて。

「……」

さ、さ、さてつと、みんなもうレッスンしてるかなあ。

あとから差し入れに飲み物もつてこないと。

“ガチャ”

「えつとく、こんにち……わ」

「目覚めReturmer 願えばいいんだ♪

気持ち 光り始めたんだ♪」

“ シュパツ、シュパツ”

愛ちゃん、純子ちゃん、二人で振りを合わせてる。

へえ、もう歌もダンスも覚えたんだ。

すごつ、さすが元トップアイドル！

それに比べこつちは……

「なんだこれ、グラサンの置いていった資料じゃなんもわからん。

なあさくら、ここんとこの振付わかるか」

「えくと、あ、そこは多分こんな感じだと」

“ フリフリ”

「さくらちゃんここは？」

「リリーちゃんここはね」

苦戦中つか。

へへ、さくらちゃんみんなから聞かれて、これじゃ自分の練習  
できないや。

よし、ここはやっぱりこのDVDの順番。

「ご苦労さま、さくらちゃん」

「あ、ミカさん」

「あんね、これ一人一人のダンスの振付を録画してきたんだけど、  
見てみる？」

多分、その資料よりはわかりやすいかと」

「え、本当ですか。

ありがとうございます。

愛ちゃん、純子ちゃん、ミカさんがダンスの振付ビデオを」

「わたしはもう覚えたからいい」

「わたしも大丈夫です」

「そ、そうなんだ。」



「じゃあ、ミカさん早速だけどお願いします」

「ま、まあ二人は別格だからね。」

「さっきの見てたらわかるし。」

「じゃ、じゃ〜二人の分は覚えなくてもよかつたかなあ〜」

「・・・う〜、せつかく徹夜して7人の分覚えたのに。」

「それに、たえちゃんの分だつていらなかつたし。」

「ん、あ、そういえば、ゆうぎりさんは？」

「キヨロキヨロ」

「あ、いた。」

「な、なんか正座して瞑想してるんだけど？」

「も、もしかしてそれで覚えてたりして・・・」

「ミカさん？」

「あ、ごめん。」

「じゃ、まずさくらちゃんのからね」

「カチ」

「あ〜、ビデオ見ても難しいな。」

「これ明日までに覚えられるのかよ」

「リリイも自信なくい」

「あ、あのさ、よかつたらわたし教えよう・・・かな？」

「一応、わたしみんなの振付覚えてるから。」

「ほら、さくらちゃんも自分の分覚えなないといけないし」

「お前すげえな。」

「みんなの振付、よく覚えられたな」

「う、うん。」

「じゃあさ、まずリリイちゃんからね」

「だからサキちゃん、そこ恥ずかしがらない！」  
「だ、だけだよ」

「あのね、恥ずかしがってる方が目立つから」  
「えーい、こ、これでいいか」

“ふりふり”

「サキちゃん可愛い。」  
くすくす」

「て、てめえ、ちんちく！」

・  
・  
・

「刹那のソウルにCut IN♪」

“ピタ”

「はあはあ、どうだミカ？」

「うん、OKだと思う。」

それじゃ、あとはみんなとのフォーメーション覚えないといけない  
ね」

「フォーメーション。」

マ、マジか」

「うんマジ。」

さくらちゃん達もね」

「そうだね。」

サキちゃん、リリイちゃん、早速、休憩してから全員練習しよう。

ね、愛ちゃん、純子ちゃんもよかと？」

「ええ」

「そうですね」

「あつ、ゆうぎりさん。」

あのく振付けもう覚え」

「さくらはん、任せておきなさいまし」

マ、マジか。

ゆうぎりさん、ずっと瞑想していただけなのに覚えたっていうの

か。

「そ、そういえばゆうぎりさんも、生前は結構有名な花魁さんだったっけ。」

「なにげに凄いメンバーなんだよね。」

「わいわい、がやがや」

でもなんかさくらちゃん、すごく楽しそう。

すっかりサキちゃん達と打ち解けて。

愛ちゃん達とは……まだちよつとみたいけど。

あ、そうだ。

「じゃ、わたし何か飲み物持ってくるね」

「ミカさん、わたしも一緒に」

“スタスタスタ”

「へえ、佐賀城のイベントの時にそんなことがあったんだ」

そっか、それでイベントから帰ってきてから、さくらちゃん達の雰

囲気

変わったんだ。

……でも、たえちゃんステージで頭取れたんだ。

よくゾンビイって気が付かれなかったよね。

「……あのミカさん」

「ん、なにさくらちゃん？」

「ミカさん、幸太郎さんと付き合ってるんですか？」

「え？」

は、はあー！

い、いや付き合ってるんじゃないから。

で、でもなんで？」

「あ、サキちゃんが付き合ってるんじゃないかとかって。」

それにお二人、なんかいい感じだし」

げ、そ、そんな風に見られていたのか。

そりゃさ、異さんつときどきめっちゃやさしいし。

それで、ナデナデって頭を撫でられた時なんか、わたしすごくう

れ・・・

いや！ ないない。

異さんはさくらちゃんが好きで。

このプロジェクトもさくらちゃんの希望をかなえたいからで。

だから

「さくらちゃん、それは絶対ない！」

「え？」

「だって考えてみ。

あのちよくテキトーな奴だよ。

あんな人と付き合ったらさ、いつも振り回されて疲れるだけだし。

それに、知ってる？

あの人、同じ服ばかり5着も持ってたよ、上下まったく同じやつ。

まったく、どんなこだわりだよっていうの

「そ、そうなんだ。

・・・あつ」

「それにさ、知ってる？」

あいつ、パソコンにエッチな画像とか保存してるの」

「あ、あの〜」

「きつと夜中にコソコソそれ見てるんだよ。

いや〜キモ！」

「ミ、ミカさん」

「だから、あんなキモ男と付き合うことなんて絶対ないって」

「キモくて悪かったな」

「え？」

「お前なんか、もう絶対メイクしてやらんからの」

“ スタスタスタ”

「あ、い、いや、ち、ちがう！

異さん待って〜、違ってます〜」

「ふん！」

「あ〜ん、話聞いて。

お願い」

“ギョ”

「え、えらい、腕離さんかい」

「いや、メイクして」

“ドタドタ”

「……やっぱりがばい仲よかと」

・

・

・

“コンコン”

「異さん」

「……」

ん、あれ？ 異さんいないのかなあ。

“ガチャ”

あ、いるじゃん。

……まだ怒ってるのかなあ。

「異さん。」

あ、あのさ、晩ご飯できたよ。

腕よりをかけてつくったから、きつとメツチャ美味しいよ。

だから、さ、さっきのことは平にご容赦を」

「……」

“カシヤ、カシヤ”

ん、なんかすごく集中してパソコンしてる。

気が付かないのかなあ。

でも、なにしてんだろう？

は、ま、まさかあのエツチな画像を。

異さんも男だからね。

……ぐへへへ。

“そ”

気付かれないように後ろに回ってつと。

どれどれ、どんなエツチなやつを。

“チラ”

「へ、な、なに！ エッチなのじゃない」

「うおー、び、びっくりした。」

何してんじやい」

「へ、あ、あの〜晩ご飯ができたからって。」

でも異さん、これ何してるの？」

「あいつらのホームページじやい」

「へ〜」

“ぐい、ピタ”

「え、え〜い、顔近いわい。」

か、髪の毛がこそばいじやろうが」

「いいじゃん、サービスサービス。」

ふえ〜、異さんこんなこともできんだ」

「あたりまえじやい。」

そうだ、お前ビデオぐらい撮れるじやろ。

明日、あいつらのゲリラライブを撮影しろ。

このホームページにアップするからの」

「え、う、うん。」

あ、それよりも、冷めちゃうから早くご飯食べちゃって」

「気合が足りねえんだ！」

「気合いっぱい入れてるもん」

「喧嘩はおやめなんし」

「えへへ」

“スタスタスタ”

「.....」

“ガチャ、バタン”

「.....ごめんなさい」

“スタスタスタ”

「あ……」

“ガチャ、ボタン”

「さくら、今はやる気あるやつだけでやるしかねえ」  
「……うん」

「もう一回最初からだ。」

音楽流すぜ」

“ガチャ”

「巽さんごめん、ちよつとビデオカメラの使い方が……  
ん、あれ？」

“キョロキョロ”

巽さん、どこいったんだ？

さつきまでここでホームページ作ってたはずなのに。  
お風呂にでも行ったのかなあ。

「……」

チャ、チャーンズ！

巽さん、お風呂に入ったら20分は出てこないからね。  
早速パソコン立ち上げてっと。

“カチ”

ぐふふふ、今度こそあのフォルダーの中を。

「出来るわけないでしょ」

「本気でそう思っているのか？」

「あ、あたりまえでしょ」

「ならば、なぜお前らはアイドルだった。」

あいつらはゾンビイだが生きようとしている。  
お前らはいつまで腐ったままにいるつもりだ」

“スタスタスタ”

よ、よしそれじゃパスワードを

S・A・K・U・R・Aと。

“カシャ、カシャ”

へへ、さて巽さん、どんなエッチな画像保存してんだ。  
カチツとな。

“カチツ”

ん、あれ、フォルダーの中は写真一つだけ？

ま、いつか。

それじゃこの写真をと。

“カチツ”

．．．．．さくらちゃん．．．か。

—————

“ブロロン”

二．．．．．二

な、なんか車の中の雰囲気重い。

だって愛ちゃんと純子ちゃん、車に乗ってからずっと黙って外見て  
て

一言もは喋らない。

どうしちゃんだろう。

メイクの時も喋らなかつたけど。

もしかして緊張してるとか。

い、いや二人にそれはないっか。

“ちら”

それに比べて、さくらちゃん達はなんかすつごく緊張してるのわか  
る。

メイクする時も顔色悪かったし。

．．．．．まあ、メイク前はゾンビイだからね。

“ドクンドクン！”

げっ、リレイちゃん心臓飛び出してる！



ど、どんだけ緊張してんの。

もうすぐ唐津駅に着くけど、こんな雰囲気で大丈夫かなあ。

うーん、やばいよねなんとかしないと。

えーと、そ、そうだ、

「いや、今日はほんと天気いいねえ」

空なんかも、さすが唐津だけにからつと晴れて」

「……………」

げ、す、滑った！

く、空気おも！

雰囲気なんかさらに悪くなったし。

はっ、なに！

なんかみんなの目が……いや、そんな冷めた目で見ないで。

ううううう、みんなの緊張和らげようと思ったただけなのに」

「……………」

だ、だめだ、耐えきれん！

「た、巽さん、ここらへんで降ろして」

「ん、なんでじゃい」

「わたし駅のホームから撮影するから。」

ほらここ高架だから公園全体撮れると思う」

「そうか」

“キキキ”

「じゃあ、ライブ終わったら合流するね」

「ああ。」

また後でな」

“ガチャ”

「うん」

“ボタン”

ふう、なんとか脱出できた。

でもあんな雰囲気、ほんとライブできんのかなあ。

すごく心配なんだけど。

「この駅前という戦場で、道行く人々に奇襲をかけ攪乱し勝利をもぎ取ってこい！」

「………」

「ハイOK, ハイGOGOGOGOGOGOGO。」

ハイGO、ハイGOGOGOGO。

ハイGO、GOGO」

ハイGO・・・GO」

“ゾロゾロ”

あ、みんな出てきた。

そろそろだ。

えつと、ビデオはつと。

うん、バッテリーも十分。

よし、じゃ早速。

あれ？ 愛ちゃんと純子ちゃんは？

車から出てこないんだけど・・・

「えく、うちらフランシユシユつて言います。

気合入れて歌うけん、よろしくー！」

は、はじまった。

やば、とにかく録画スタートつと。

みんな、頑張り。

「目覚めR e t e r n e r 目覚めたなら♪」

「振り返ってみて ぐるぐるぐるぐる♪」

“ドン”

「あっ、いたい」

「リリイちゃん！」

あ、リリイちゃんぶつかつた。

ちよつと心配だったんだ。

個々の振付覚えるのに時間かかって、フォーメーションの練習あんまり  
できなかつたからなあ

“ゾロゾロゾロゾロ”

ん、げ、見てた人みんな行っちゃう。

そっか、さくらちゃんダンスやめたから。

やばいやばい、は、はやく続けないとこのままじゃ誰もいなくなる。

「みんな、落ち着いていこう」

さくらちゃん頑張れ〜

「……………」

え、ど、どうしたの？

なんかさくらちゃん、固まってる……………あ、歌詞忘れたんだ。ど、どうしよう。

……………わたしが代わりに。

あ、でも、ここからじゃ遠くて、間に合わない。

「あ〜、でも少し怖いの〜」  
へ？

「そんなことないから、ほらね」

あ、愛ちゃん、純子ちゃん。

車から出てきくれたんだ。

よ、よかった〜

「無敵、夢見るキモチ」

超、超、超、超、大、大、大、大、DIE!

へ〜、やっぱり二人が入ると全然違う。

やっぱり元トップアイドルは伊達じゃない。

なんか一気に華やかになった。

他のみんなも引つ張られて、なんかいい感じ。

へへ、みんないい表情。

「届け届け、熱いキモチ」

刹那のソウルにCut IN

「以上！ フランシユシユでしたー」

……………終わったー、何とか最後まで踊りきった。

でもこの動画、ホームページにアップできるかなあ〜

……………ま、まあいつか、初めてのライブだもん。

みんな頑張った。

さてつと、それじゃ急いでみんなに合流して。

「撤収じゃ〜い、ハイGOGGOGGGO！」

GOGGOGGGO、ハイGO!

ハイGO、GO、GO〜」

え？

“ブロロロ〜ン、キュルルル、ブオー”

あ、あれ？

え、えつと〜

い、いや〜ちよつと待ってほしいな〜

「……………」

ま、マジか！

げえ〜、行っちゃまった、ひ、ひどい！

ど、ど、どすんだよ。

わたしどうやって帰ればいいのか〜

・

“ブロロ〜ン”

「ね、ねえ、幸太郎さん」

「なんじやいさくら〜？」

「あの〜ミカさんは？」

「え？」

……………あ、あ〜」

・

・

“ギシ、ギシ”

うへ〜、く、く、く、あ、足が……

う〜ひどい目にあった。

くそ、巽の野郎おいてきやがって。

結局、ここまで歩かされて、道だつてよくわからないのに。

絶対許さねえからな、ふん！

“カシヤカシヤ”

ん？

あつ、今日のゲリラライブ、もうネットに載ってる。

……やっぱ厳しいなあ

でも、まあこうなるよね。

たえちゃんがゲソ食べてたのは仕方ないとしても、途中でダンスやめちゃったし、

歌詞も忘れたからね。

“コンコン”

「ミカいる？」

え、あれ、この声って愛ちゃん？

どうしたんだろ？

さつき純子ちゃんに紅茶持っていた時は、そろそろ休むって言うてたはずだけど。

“ガチャ”

「愛ちゃんどうしたの？」

そんなパジャマ姿でうろついてたら、巽さんに襲われちゃうよ。

へへ、あれでも一応男だから」

「そんなこと……あるわけないじゃない。」

あなたも自分の顔、鏡で見て知ってるでしょ」

「……………」

「そんなことより、あなた今日のライブ撮影してたでしょ」

「う、うん」

「だったら見せてほしんだけど。」

あ、今パソコンで見てるのってライブの時の映像？

ちよつと見せてもらおうね」

“スタスタ”

「あ、ちよつと待って、これは」

「……………学園祭の方がマシ。」

なにこれ。

今日のライブに対する書き込み？」

「……………まあ、最初の方はちよつとあれだったからね。それと、今の時代はさ、こうやってなんでもすぐネットで拡散されちゃうんだ。」

「いいことや……………特に悪いことなんかはさ、すぐこうやって叩かれて」

「……………」

「あ、で、でもさ、愛ちゃんも純子ちゃんもさすがだね。ダンスなんかすごくキレキレでさ。」

「なんか二人が出てきてから、一瞬で雰囲気変わったように見えた」  
「どこが！」

「あんなあの全然ダメ。」

「まったく動けてない。」

「ここで言われているように、本当に学園祭以下の状態。」

「それは自分自身が一番よくわかってる。」

「やっぱり大分なまってる、もっと練習しないと」

「……………そ、そっかなあ」

「それと、今日わたし達はアイドルとして最もしてはいけないことをした」

「いけないこと？」

「さくらが途中でダンスをやめた。」

「わたし達がアイドルを、本物のアイドルを目指すというのなら、それは絶対にしてはいけないこと」

「愛ちゃん」

「もともと練習不足なんだからリリイが転ぶのは仕方ない。」

「でも、さくらがダンスをやめたのはアイドルとして失格。」

「……………」

「やっぱりわたし達には厳しさが足りない」

「愛ちゃん」

「……………あのさ、ちよつとお願ひしたいことがあるんだけど」  
「う、うん」

「ぐるぐるぐるぐる」

「あっ」

“ドサ”

「大丈夫、リリイちゃん」

「うくん、やっぱりここの移動難しい」

「さくらー!」

「え、愛ちゃん?」

「あなた昨日もそうやって途中でダンスやめたでしょ。」

昨日はゲリラライブだったけど、もしあれがちゃんとしたステージで

そして同じことをしたらわたし達は終わってた。

ステージを途中で投げ出すようなアイドルなんて誰も認めてくれない。

あなた本当にアイドル目指すつもりあるの?

いい、本物のアイドルを目指すというのなら、そんな仲良し小好しの甘さはいらない。

あなたには、いえ、わたし達にはもつと厳しさが必要」

「で、でも」

「だからわたしから提案がある。

入って」

え、あ、やっぱ愛ちゃんやる気なんだ。

どうしよう。

いやー、こんな雰囲気で行くなんてメツチャきついんだけど。

や、やだな

・・・で、でもこれがみんなのためになるのなら。

“ガチャ”

「あ、あのく、こんちはです」

「いい、今日からミカにフランシユシユに入ってもらおう。

そしてこの中の一人が補欠になってもらう。」

わたし達に足りないもの、それは競い合う心と現状に対する危機感。

誰よりも強い向上心をもって、他の誰よりもうまくなるという心を持たなければ

本物のアイドルなんてなれない」

「そ、そうかもしれないけどよ」

「だから……」

さくら、あなたには外れてもらう」

「え？」

「愛、ちよつと待て！」

「愛ちゃん」

「……愛さん」

「あなたは昨日アイドルとしては絶対してはいけないことをした。

だから、外れてもらう」

「何勝手なこと言っただ、あー」

そんなことはリーダーであるあたしが絶対許さねえ」

「……いいわ。」

それなら、勝負しましょう」

「勝負だど？」

「そう、さくらとミカで勝負してもらう」

「勝負ってタイマン、タイマンか」

「……ダンスバトルよ。」

さくらとミカにダンスで勝負してもらう」

「ダンスバトル？」

なんでもんさくらが勝つに決まってるだろ。

なんたって根性が違う。

な、さくら」

「そ、そげんことなかと」

「それじゃどちらのダンスがうまいか、わたし達が見て判断しましょう。」

負けた方は当分控えに回ってもらうから」



「バシッと決めたい このS u c c e e d ♪

止まっちゃいけない このP r o c e e d ♪」

“ シュパツ、パシツ”

「ま、マジか」

「ミカちゃん凄い」

へへ、だつてさ昨晚、あれだけ愛ちゃんに練習してもらったんだもん。

それこそ眠らずに。

だから、自然と身体がこの曲に反応して勝手に動いてる。

少し身体ギシギシいつてるけど、なんかすごく楽しい。

「届け届け熱い気持ち

刹那のソウルにC U T I N ♪」

「はあはあはあ」

お、終わった。

ふうう、ちよく気持ちよかった。

なんか生きてるって感じして。

「・・・・・・・・」

へ、あつ、さくらちゃん。

「さ、リーダー、どっちが勝ったか判定して」

「・・・・・・・・ミカ・・・だ」

「うっ」

・・・・・・・・さくらちゃん

「じゃ、他のみんなの意見は？」

「・・・・・・・・」

「それじゃ決まりね」

・・・・・・・・さくらちゃん。

なんかなんか。

やっぱりこんなのやめたほうが。

「あ、あは、そうだね」

え、さくらちゃん。

「うん、愛ちゃん、わたしもそう思ったと。

ミカさんのダンス、すごくキレがあった。

今のはわたしの負け。

……わたし、もっと練習するけん。

がばい練習して、そしてもっとうまくなってもう一回挑戦する。

だからミカさん、それまでフランシユシユをお願いします」

“ペコ”

「……………」

「じゃ、じゃあわたし、ちよっと」

“ダー”

「さ、さくら」

“ガチャ、バタン”

「……………」

「さ、なにしてるの。」

練習するわよ」

「愛、お前これでいいのかよ」

「なにが！」

言っておくけど、今日はさくらだったけど、次にさくらと代わるのは

この中の誰かわからないからね」

「……………」

・  
・  
・

“ドタバタ、ドタバタ”

「飯じやい飯じやい」

“ガチャ”

「ミカ、晩ご飯できたか？」

出来てるんならさっさと呼びに来んかい。

「このいけずが」

「あ、幸太郎さんちよつと待つて」

「へっ？ さ、さくらなんでお前が晩ご飯作ってんだ」

「あ、いや、まあいろいろありました。」

今日から当分の間はわたしが・・・」

・  
・  
・

“カタ”

「こ、幸太郎さん、はい、どうぞ」

「おう、おう、できたか。」

もう腹ペコじやい。

・・・な、なんじやくい、この黒い塊は！

墨、墨食わせる気か」

「あははは、ちよつとハンバーグ焼いてるときに考え事しちゃつて。」

幸太郎さん、もう一回作り直すからそれ返し」

「・・・まったく」

“パク”

「う、に、にがー」

“パクパク、パクパク”

「こ、幸太郎さん」

「た、た、たまにはこんなのもいいだろう。」

よく言うじやろう、良薬口に苦しとな」

“パク”

「・・・幸太郎さん」

・  
・  
・

“スタスタスタ”

うくん気になる

さくらちゃん大丈夫だったかなあ。

ご飯にお風呂の掃除、それに洗濯物の片付けとかやること結構いっぱいあるんだよ。

あ、そっだ！ 巽さんのシャツのアイロンかけとかないと。

「よかたいよかたいよかつと」

え、さくらちゃんの声？

家の外から？

「よかよかよか」

さくらちゃん、ここで練習してんだ。

「よかよかよかよかつと。」

ふう〜

・・・わたし負けんと。

がばい練習して、きつとあの場所に戻って見せる」

さくらちゃんすごい必死に頑張ってる。

競争心と危機感。

愛ちゃんの言ってたことってこういうことだったんだよね。

今のさくらちゃんを見たらきつとみんなも同じように。

・・・よかつた。

あとは適当な頃合い見てさくらちゃんと交代してつと。

『・・・それでいいのミカ』

えっ、だ、だれ？

『わたしはお前だ。』

それよりほんとにそれでいいのか？』

だ、だつてもともと愛ちゃんとはそういう話だったから。

『みんなが認めた通り、わたしのほうがダンス上手いじゃん。

だつたら、わたしがこのままやった方がみんなのためになるんじゃない？』

ない？』

みんなのため？

『そう、みんなとわたしのため。』

それにさ、アイドルになったら記憶も戻るかもしれない』

記憶が。

・・・わ、わたし。

「ガバツ」

「は、い、今何時？」

「8、8時！」

「やばか、寝過ぎした。」

「今日から幸太郎さんの朝ご飯作らないといけんかった」

「ドタバタ、ドタバタ」

「まだ起きてないといいんだけどなあ、幸太郎さん」

「ガチャ」

「おお、さくら、どこ行ってたんじやい。」

「なかなか今日の朝ご飯は美味かったぞ」

「え？」

「昨日の晩ご飯の出来から心配しとったんだが、なんじやいやればで  
きるじやないか」

「あ、あの〜」

「うんうん、お前はできる子だと前から思ってたぞ」

「あ、い、いや、あの」

「それより、シャツのアイロン終わってるか？」

「シャツ？」

「・・・あ、ちよ、ちよつと待ってて」

「ダー」

「そ、そうだったと。」

「昨日、幸太郎さんに言われとった。」

「やばい、すっかり忘れてた。」

「急いでアイロンかけんと」

「ガチャ」

「えつとシャツどこだっけ？」

確かクローゼットの中に。

・・・え、全部アイロン掛けてある。  
なんで?」

「ホラね振り返ってみて。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる」

「サキ、そこ入り遅い。

リリイも周りよく見て。

またぶつかるよ」

「・・・」

「ごめん愛ちゃん」

「それじゃ、もう一回初めから」

「・・・チツ」

“スタスタスタ”

「サキ、どこ行くの」

「ちつと休憩だ」

「いかんいかん。

朝ご飯もシャツのアイロンもきつとあれミカさんだ。

わたし昨日からなんもまともに出来てない。

せめてちゃんと掃除ぐらいはせんと。

よし、それじゃまず窓拭きから」

“キユキユ”

「刹那のソウルにCut IN」

「はあはあはあ、じゃ、ちよつと休憩」

「はあ、はあ、はあ」

ふうら、やつと休憩。

あ、飲み物。

みんなに飲み物持つてこないと。

・・・でも結局サキちゃん戻ってこなかった。

愛ちゃん、みんなのためだつて言つてたけど、このままじゃ・・・

「愛はん、サキはんのことよろしかったでありんすか？」

「・・・・・・・・」

「リリイ、サキちゃん呼んでくる」

「放つておきなさい。」

やる気のない人がいたらみんなの迷惑になる。

それならいい方がいい」

「・・・・・・・・でも」

ううなんかムード悪い。

この前まではみんな和気あいあい練習してたのに。

このままじゃ駄目だつてわたしにもわかる。

うん、まずはサキちゃん呼んでこよう。

そんでみんなでちゃんともう一回話し合いて。

「あ、あの、わたし、何か飲み物持つてくるね」

“ テツテツテツ ”

“ きゆきゆ ”

“ きゆきゆ ”

「ふう、きれいになつたつと。

でも、あと掃き掃除と雑巾がけ。

はあく大変。

こんなのミカさん毎日やつとつたのかなあ。

あ、そうだ今何時？

やばい、お昼ごはんの準備しないと」

“ とぼとぼ ”

「・・・・・・・・今頃、みんなレッスンしてるかなあ。

・・・目・・・覚・・・め・・・Returner ♪

願え・ば・いいんだ・・・奇跡、感じてみたいんだ ♪」

“スタスタスタ”

「ち、まったく愛のやろう、気に入らねえ。

くそ、族のころだったらよ、ぶん殴って言うこと聞かせてやるとに  
よ」

「素敵、ワクワクなほど 超大、大、大」

“ひよい、ひよい”

「ん、さくら。」

あいつ、ここで練習していたのか」

「刹那のソウルにCUT IN」

「……やっぱり納得できん」

“スタスタ”

「はあはあはあ。

あくすつきりした。

さてさつさと掃除終わらせんと」

「さくら」

「え、あ、サキちゃん」

“ぐい”

「え、サキちゃん？」

「いいからちよつとこい」

「あ、まってわたしまだ掃除が、それに昼ご飯を」

「そんなもんあとだ」

“タッタッタツ”

やばー！

ついでにお昼ご飯の準備してたら遅くなっちゃった。

……でもサキちゃんもさくらちゃんどこ行ったんだろ。

あ、でも急がないともう休憩終わってるよね。

ん、あれ、ドア開いてる。



「だからなに！」

「納得いかねえって言ってるんだろ」

え、愛ちゃんとサキちゃん？

な、なんかまずい雰囲気。

「サキ、わたし達は本物のアイドル目指すんじゃないの。」

だったら、なあなあじゃ無理。

ポジションを競い合って実力で奪い取るぐらいじゃないといけない。

あなたもリーダーなら」

「だから補欠か。」

あたしはそれが気に入らねえんだ。

仲間だったらもつとこうなんか違う方法あんだろ」

「どんな方法」

「そ、それは・・・」

「さ、サキちゃんも面白いよ」

「よくねえんだ、さくら。」

いいか愛、フランシシュのリーダーはあたしだ。

今からさくらも一緒にレッスンする」

「認めない」

「あゝーん！」

げ、愛ちゃんとサキちゃんが。

やばい、このままじゃほんとにフランシシュが駄目になっちゃうよ。

ど、ど、ど、どうする、な、なんとかしないと。

・・・く、くぞー！

「もういい。」

サキ、あなたとはもう一緒に」

“ガチャ”

「あくあ、なにやってんだか」

「あゝん！」

「ミカ」

「サキ、なんだよお前。」

折角、愛を唆してやつとこのポジション手に入れたのによ。

わたしはアイドルになりてえんだ、邪魔すんじゃないやねえ」

「てめえ」

「ミ、ミカ」

「それによ、この前のダンスバトルでわたしがさくらに勝ったんだ。文句なんてなくんもねえだろう。」

それをグダグダ言いやがって、ほんと女々しい奴だな」

「・・・お前やんのか」

「へ、また暴力？」

あんたそれしかないの、あつたまワル」

だからヤンキーなんて嫌なんだよ」

「マジ表出ろ」

「さ、サキちゃん、ミカさんも落ち着いて」

「ぎゅっ」

「さくら、手離せ」

「サキちゃん、暴力は駄目だつて」

「ちっ、仕方ねえな。」

じゃあさ、もう一回バトルしてやるよ、サキ」

「なんだと」

「聞き分けのねえお前のために、もう一度ダンスバトルしてやるつて言つてんだよ。」

それで、さくらがわたしに勝てたら補欠代わつてやるよ。

その代わり、わたしが勝つたらフランシユシユのリーダーもらうからな。

そしてサキ！ もう二度とお前にでかい口叩かせねえ」

「上等じゃねえか。」

さくら、いいかこんな奴に負けんじやねえぞ」

「あ、い、いや、でも」

「さくら、お前アイドル続けたいんじゃないかと」

「あ、う、うん」

「決まりだな。」

サキ、勝負は明日だ。

さてつと、わたしは疲れたから休憩してこよくと

“スタスタスタ”

「明日からわたしがりーダーか。」

・・・サキ、お前こき使ってやるからな

“バタン”

「・・・・・・・・」

“へなへなへな”

こ、怖かった

す、すげー怖かったよ

マジ死ぬかと思った。

絶対、寿命ちぢまったし。

・・・いや、もう死んでるから。

で、でも、もう後戻りできないよね。

やるしかない、やるしかないんだ。

だったらわたしは・・・

“スタスタスタ”

“ シュパツ、 シュパツ ”

「届け届け、 熱いキモチ」

奏でるソウルにCut IN

“ ドサツ ”

「はあ、 はあ、 はあ」

だめだ、も、もつとキレをよくしなくちや。

も、もう一回初めから。

うんしょつと。

“ スク ”

「ミカ」

「え、あ、愛ちゃん」

「なんであんなことを言ったの」

「え、な、何のことかなあ」

「あんたがわたしを唆したって嘘を」

「あ、あれ。」

あゝ、あれは本心。

わたしさ、わたしだってアイドルになりたかったんだ。

だから愛ちゃんの提案、ラッキーって思ってたんだよ。

まさに渡りに船ってやつ。

だから、愛ちゃんの誘いに乗ったフリしてたんだ。

だってさ、異さんに何回お願いしても駄目っていうから。

．．．．．だからこのポジションは絶対に渡さない！」

「ミカ」

「ほら、練習してんだから邪魔しないで。

明日は絶対に勝つんだから」

「．．．．．」

“スタスタスタ”

愛ちゃん。

．．．．．わたし負けないから。

「届け届け、熱いキモチ」

刹那のソウルにCut IN」

“ピタ”

「よし、さくら大分よくなった。

あたしが見ててもわかる」

「うん、リリイもそう思う」

「はあはあ、う、うん」

「いいか、ぜってえ明日負けんじやねえぞ」

「さくらちゃん、リリイも応援するね」

「うん、負けんばい。」

わたしは必ずあの場所に戻って見せるっちや。

・・・あ、でもそろそろ巽さんの晩ご飯作らんと

「さくら、そんなもん、あたしが作ってやる。」

お前は練習続けろ」

「サキちゃん。」

あ、で、でも」

「いいから任せとけて」

「うん」

・  
・

“ シュパツ、ピシ！”

「所為がでるな、ミカ」

「巽さん」

「純子から聞いた。」

お前、本気でアイドルやりたいのか」

「・・・巽さん。」

巽さん、わたしは！」

“ スタスタスタ”

「ん、あれは幸太郎はんと、ミカはんでありんすな。」

いったいこんなところで何を」

・  
・

「・・・だから！」

だからわたしは後悔したくない。

明日はわたしができる最高のダンス踊って見せる」

「・・・そうか。」

なら勝手にすればいい」

“ スタスタスタ”

「……ミカはん」

“ガチャ”

「サキちゃんありがとう。」

「晩ご飯できた？」

「……え、こ、これ」

「いや、里芋の煮つころがしを作ろうと思ったんだけどな。ちよつと失敗して」

“ガチャ”

「おいさくら、晩ご飯できてるか」

今日の昼ご飯もなかなか美味かつたぞ。

ん、サキなんでお前もいるんじゃない？」

「あ、ば、晩ご飯はサキちゃんが」

「……ん？」

「で、晩ご飯は」

「あ、あのここに」

“カタ”

「……な、なんじやいこの黒い塊は。」

「墨！ また墨かー！」

「うっせ。」

そんなもん食つちまえば一緒だろうが」

「こ、こんなもん食えるかボケ！」

「いいから食べろ！」

「ほら口開けろ」

「や、やめろサキ」

“パク”

「ぐうおー、に、にがー」

――

“ガチャ”

「今日は逃げんできたな、ミカ」

「はあ？」

「なんでわたしが逃げないといけないの？」

「あんたバツカじゃないの？」

「チッ！」

「んじやはじめっぞ。」

「さくら、負けんじやねえぞ」

「さくらちゃん、ガンバだよ」

「それじゃ、さくらもミカも準備はいい？」

「始めるから」

「まてえ〜い！」

“ガタン”

「お前ら俺のいないところでなに面白いことしてるんじやい」

「幸太郎さん」

「なんだ、グラサン邪魔すんな！」

「安心しろ、邪魔はせん」

「だったらおとなしく」

「チーム戦じやい」

「はあ？」

「この勝負は3対3のチーム戦で競ってもらおう。」

「お前らはグループだろうが。」

「だからやるならチームでやらんかい。」

「ダンスの出来だけじやない。」

「さくらとミカ、お前らと他のメンバーとの息の合い方でも勝負してもらおう」

「そうか。」

「ならよ、わたしはさくらのチームだ」

「リリイも」

「……………」

「さくらのチームはサキとリリイか。」

「ミカ、お前と一緒に踊ってくれる奴はいないようだな」

「……………」

「グラサン、勝負あったな。」

「見ての通りこいつには誰も」

「わたしがミカと踊る」

「愛ちゃん」

「……………勘違いしないで。」

「不戦敗は許さない」

「……………」

「ならミカはん、わちきも一緒に踊らせてもらおうでありんすな」

「ゆうぎりさん……………ありがとう」

「お前ら決まったらさっさと準備せんかい。」

「始めるぞ」

・  
・  
・

「 シュパツ、シュパツ、ビシッ! 」

「目指せ目指せ最上! 最良! 」

「怖いものなどない! ナイ! ナイ! 」

「なんだこいつ……………すげえ。」

「動きキレツキレじゃねえか。」

「昨日よりもっと」

「サキちゃん、止まってる」

「あ、わりい」

「ビシッつと変えたいこのChanning」

「ステップやめないこのdancing」

「 シュシュ、パツ」

「どうだ純子」



「見ての通りです。」

今日のミカさんのダンスは今までで一番。

見ていて引き込まれます。

それに愛さんやゆうぎりさんとも息があつて

「そうか」

「・・・でも」

「でも、なんだ？」

「ミカさんのダンス、見ていて悲しくなります。」

なぜなのかわかりませんが」

「そうか」

「刹那のソウルにCut IN♪」

はあはあはあ

終わった。

わたしが持つてるもの全て出し尽くした。

もう思い残すものはない。

あとは巽さんに・・・

「はあはあ、判定はどっちだグラサン」

「そんなもん、決まってるんだろが」

「・・・チツ、やっぱりそうか」

「ああ。」

勝負は・・・さくらの勝ちじゃ〜い!」

「は? はあー!」

な、何言ってるんだグラサン!」

「あくあ、やっぱりそうか〜

くそ、負けちまった。

もう少してリーダーになれるとこだったのにな〜

・・・仕方ない、わたしの負けだ」

「お、おい、お前もなにを」

「ガチャ」

「負け犬は去るのみ」

「スタスタスタ」

「グラサンちよつと待て。」

あたしでもわかった、今のあいつのダンス半端じゃなかった。なんか本気の魂っていうもん感じた。

だから今の勝負は」

「さくらの勝ちじゃい。」

お前は何もわかつたらんの」

「はあー！」

この勝負は誰がどう見たってあたし達の負けだったじゃねえか。個人のダンスといい、チームとしての完成度といい。

何がわかってないって言うんだグラサン！」

「いいかよく聞けサキ」

「お、おう」

「……俺はまともな飯が食いたいんじゃい。」

も、もうあんな苦いのはいらんのじゃい！」

「はあー！」

なんだそれ。

そんな理由になってないだろうが！」

「えい、うっさいわい。」

俺がさくらの勝ちと言ったら勝ちなんじゃい」

「納得いかねえって言うてんだろ！」

「納得いかなくても納得しろ、このボケ」

「なんだと！」

「まあまあサキはん。」

幸太郎はん、幸太郎はんが話さないのなら、わちきから話すでありんす」

「ゆうぎり姉さん、何か知ってんのか」

「なんでお前が？」

「や、やめろゆうぎり！」

「ぼこっ」

「ぐへえ」

「てめえは黙ってろ！」

姉さん、何知ってるんだ」

「あれは昨晚のことでしたなあ。

ミカはんと幸太郎はんが」

『わたしは、愛ちゃんの言いたいこともわかる。

本物のアイドル目指すなら競争心は絶対に必要だもん。  
なあなあで出来るもんじゃないってわたしもそう思う。

・・・でもさ、それだけじゃきつと駄目なんだと思うんだ。  
わたしたちはゾンビイ。

みんな誰も頼れるものがないんだ。

とうちゃんもかあちゃん、兄弟や友達もない。

わたし達にいるのはこの仲間だけ。

だからメンバーのこと温かく思いやる気持ちってさ、  
きつとそれと同じくらい大事なんだって思う。

だからさ』

“ペコ”

『お願いします巽さん』

『断ったらどうする』

『・・・巽さん、ゲリラライブの時、わたし置いてったよね。

帰ってくるの、めっちゃ大変だったんだけど。

足なんかギシギシして軋んじやって。

断ったら一生恨むから』

『お前の一生はもう終わってるだろう』

『そ、そうだけど』

『・・・・・・・・お前は、お前は本当にそれでいいのか』

『うん。』

それにさ、わたしさくらちゃんのダンスも歌も大好き。

なんかさ、頑張ろって感じにさせてくれるの。

そんなのどんだけ頑張ってもわたしにはできない。

それってさ、今のフランシユシユにとって、とつても大事なものだ  
と思う。

だからフランシユシユに必要なのはわたしなんかじゃない。  
・・・さくらちゃんなんだ』

『へへ、みんなとダンス出来てとっても楽しかった。  
もつとさ、みんなと一緒に踊りたかったけど、明日が最後。

・・・だから！

だからわたしは後悔したくない。

明日はわたしができる最高のダンス踊って見せる』

『・・・そうか。』

なら勝手にするがいい』

“ぐい”

「おい、グラサン！

今の話マジか」

「・・・」

「な、なんなの！

あの馬鹿」

“ダー”

「あ、愛！

ちよつと待て」

“ダー”

“とぼとぼ、とぼとぼ”  
終わった。

これで良かったんだ。

愛ちゃんもサキちゃんもみんなのことと思う気持ちは同じ。

二人が傷つけあう必要なんて何もないんだ。

だとしたら、きつとこれが一番いい解決方法。

うん、これしかない。

で、でも

「……う、うぐ……うううう、ううううう」

……もつと、もつとみんなと一緒にいたい。

“パシッ!”

くそ、負けない!

そう決めたんだ、わたし負けないって。

そんで、そんで最後は笑ってって。

“ニコ”

「さようならみんな。

……ありがとう」

“ペコ”

.

“ダー”

「ミカ!」

“ガチャ”

「あなた、勝手なこと言わな………なんで」

“へなへなへな”

「……ミカ」

“タツタツタツ”

「愛、落ち着………って、お、おいマジか」

“タツタツタツ”

「はあはあ、あ、愛ちゃん、ちゃんと話し……合お……う。

えっ!

な、なんで、なんでミカさんの荷物なかと。

ま、まさか、さ、サキちゃん!」

「あの馬鹿!」

ただいま？

「……………」

“すくっ”

「……………」

“ズカズカズカ”

「そこどいてー！」

「どこに行く気だ、愛」

「決まってるじゃない。」

あの馬鹿を連れ戻しに行くのよ！」

“スタスタ”

「そうだ、いいからそこどけグラサン！

愛、あたしも一緒に行く」

「……………やめておけ。」

今、お前らが連れ戻しに行つて、あいつが素直に戻つてくると思うのか」

「けど！

……………わたしがあんなこと言わなかったら

「いや、愛だけの所為じゃねえ。

……………あたしもムキになつてた」

「愛ちゃん、サキちゃん」

「……………」

「……………」

“ガシガシ”

「あくくそ、面倒くせー！」

確かにあいつ変なところで頑固だからなく」

「あいつもそれなりの覚悟があつて出て行つたんだろ。そう簡単に戻つてくるとは思えん。

ならば、お前らが今やることは他にあるはずだ。

お前らは、お前らにしかできないことをしろ」

「……………」

「いいな」

“ スタスタスタ ”

「……なんでこんなことに」

「愛ちゃん」

「……愛、さくら、グラサンの言う通りだ。」

今は、あたし達にできることをやるしかねえ」

“ こく ”

“ とぼとぼとぼ ”

「……」

どこ、行こうかなあ

行く当てなんかもないもんな。

でも、でもさ、できるだけ遠くに行かないと。

そうでないと、わたし弱いから。

きつとみんなのところに帰りたくなって……

だからもつと遠くに。

・  
・  
・

「届け、届け、熱いキモチ」

刹那のソウルに Cut IN」

“ シュパッ ”

「はあはあはあ。」

よし、次だ、次の曲やんぞ。

さくら、音楽スタートだ」

「あ、はい、ちよつと待って。」

今スタートするから」

“ タツタツタツ ”

「……こいつらは大丈夫そうだな。」

さて行くか」

“ ガチャ ”

「あいつはメイクをしていなかった。

ならば、人に出会うわけにはいかないから、そう動けるものじゃない。  
い。

だとしたら、まだきつとこの近くにいるはずだ。

今なら近くに」

“スタスタスタ”

・

・

・

“とぼとぼ、とぼとぼ”

あ、千代田橋？

そういえば、ここって確か前に来たところだ。

目覚めて何が何だかわからなくて、あの家飛び出して。

へへ、またここに戻ってきちやった。

“ピカ！ ゴロゴロゴロ”

「キヤー」

か、雷！

やば、それにあの雲、今にも雨も降りだしそう。

え、えつと、とりあえずこの橋の下に避難して。

“ズル”

「ひゃ」

ふう、あつぶなかった。

ここの土手、結構急だから気を付けないと。

・

・

・

“ザー、ザー”

「くそ、雨、土砂降りになってきた。

パンツまでずぶ濡れじゃい。

うゝ気持ち悪い。

・・・そういえば、あいつも傘を持っていかなかったはずだ。



いつも使ってた傘、まだあったからな。

だったらこの雨できつとどこかで雨宿りしているはずだ」

「キヨロキヨロ」

「まったく……どこにいるんじゃない、ボケが」

「バシヤバシヤバシヤ」

「……………」

「タツタツタツ」

「ヒツキー、ごめん待った？」

「おう、すぐ待った」

「むく、これでも優美子達との約束断ってきたんだからね。

急に今日の朝、電話してくるから。

今度からはちゃんと事前に言っつてよね！

……いろいろ準備とかあるんだから」

「す、すまん。」

いや、そんなに待ってないんだ。

っ、っ、っ」

「えへへ、でも安心した。

ヒツキーはヒツキーのままだ。

あの頃と何も変わってない。

……正直、少し心配してたんだ」

「由比ヶ浜。

……いや、変わったぞ」

「え？」

「今ではれっきとした正真正銘の社畜だ」

「そ、そうなんだ」

「じゃ、行くか」

「うん」

「ザー、ザー」

「雨……やまないな」

「ここ数日ずっと降ってる。」

「それも土砂降り。」

「これじゃどこにも行けない。」

「少しでも遠くに行こうと思ったのに。」

「……もつと遠くに。」

「……うそ……つき」

「ち、違う、本当だもん。」

「だ、だけどき、雨じゃ仕方ないじゃん。」

「うん、仕方ない。」

「雨が止んだらわたしは、わたしは……」

・  
・  
・

「ガチャ」

「よう」

「ゆきのん、大丈夫？」

「いらっしやい由比ヶ浜さん。」

「大丈夫よ、来週から出社しようと思っていたところだから。」

「えっと、そちらの方はどなたかしら？」

「お、おい」

「冗談よ。」

「比企谷君、あなたにも迷惑かけたわ。」

「ごめんなさい」

「ああ、まったくだ。」

「佐賀の出張先から何も言わずいなくなって、いきなり長期休暇申請だもんね。」

「会社では、変な噂で持ちきりだ」

「ええ、姉さんから聞いたわ」

「ヒツキー、変な噂って？」

「あ、い、いや、ま、まあ変なやつだ」

「んん？」

ゆきのん知ってるの？」

「……比企谷君が、あ、あの、強引に私を……その……あ、あの」

「強引に？」

「……えっ、うそ！」

ヒ、ヒツキーの馬鹿！

ちやんとゆきのんに謝って！」

“ぽかぽか”

「ば、ばっか、噂だって言ったらろ。

そんなことがあるわけないだろう」

「ほんとう？」

何もなかったの？」

「あたりまえだ

俺の理性を見くびるな」

「由比ヶ浜さん、この男にそんな度胸があると思って」

「そ、そだね。

ヒツキーにはそんな度胸ないもんね」

「お、おい！

まったく。

それより雪ノ下、東地グループとの打ち合わせって来月だったろ」

「ええ」

「来週、もう一度佐賀に行くつもりだ。

嬉野の方とか回れなかったからな。

お前は どうする？」

「わたしは……行けないわ。

会議の予定が入ってるから」

「そっか。

じゃ今度は一人で行ってくるわ。

あ、そうだ、洋館の調査は終わってたのか？

まだなら俺が」

「終わったわ!!」

「え?」

「あ、ご、ごめんなさい。」

洋館の調査はもう終わってるから。

大丈夫、そこは行かなくていい」

「そ、そうか」

「.....」

・

「ぐお、ぐお」

「おいしい、グラサン入るぞ」

「ガチャ」

「グラサン、ちよつと振付でわからないところが.....って。

てめえ、また今日も昼寝してんのか!」

「ぐうあ」

「いい加減に目を」

「寝かせておきななし」

「ゆうぎりねえさん。」

だがよ、こいつここんとこ毎日ずっと寝てるだけじゃねえか。

あたし達のレッスンは全然見に来ないでよ」

「幸太郎はん、毎晩ミカはんを探しに行ってるのであります。」

いつも夜になると出かけて、朝方までずっと」

「マ、マジか」

「マジであります」

「.....そっか」

「ペ」

「グラサン頼む、必ずあの馬鹿探し出してくれ」

「じゃ、そろそろ俺帰るわ。」

由比ヶ浜、お前はどうすんだ」

「あ、あたしは・・・」

ね、ねえゆきのん、今日久しぶりにお泊りしていい？  
いろいろお話したい」

「えっ。」

ええ、いいわ」

「よかった。」

じゃあヒツキーをエレベーターのところまで送っていくね」

「い、いや一人で帰れ」

「ぐい」

「いいから。」

ほら行くよ」

「スタスタスタ」

「ね、ヒツキー」

「ん？」

「ゆきの・・・」

「なんだ？」

「・・・ううん、何でもない」

「そっか。」

由比ヶ浜、今日はすまなかったな」

「え、あ、うん」

「さつき言った通り会社で変な噂がたってるからな。」

一人で雪ノ下のマンションに行くわけには・・・  
まあなんだ、何かお礼しないとな」

「じゃ、じゃあさ、出張のお土産お願いね」

「お、おう。」

何か希望とかあるのか」

「うくん何がいいかなあ〜」

あ、ひこにやんのキーホルダーか何か。

あんまり高いのもなんだし」

「ひこにやん?」

「え、あ、ほら兜被ってる犬のゆるキャラあるじゃん」

「………由比ヶ浜、それ滋賀のゆるキャラだろ。」

俺が行くのは滋賀じゃねえ、佐賀だ佐賀。

それに犬じゃない、あれは猫だ猫!」

「へっ?」

あ、い、い、いいじゃん、滋賀も佐賀もなんか似てるし!」

「まったく。」

まあ佐賀のゆるキャラといったら」

“カシヤカシヤ”

「こんなのどうだ、壺にやん」

「うくん」

「じゃこの唐ワンくんとか」

「ちよつとスマホよく見せて」

“ぎゆ”

「お、おまえ、ちか」

「ん?」

「い、いや、なんでもない」

「ふくん。」

あ、ほらこのゆつつらくん可愛い。

これがいいかなあ〜」

「お、お、そ、そ、そっかわかった」

「……ね、ヒツキー」

「あん?」

「いまドキドキした?」

「ぼ、ぼっか、ドキドキなんてしてねえし」

「えへへ。」

あ、エレベータ来たよ」

「おう」

「出張・・・気をつけてね」

「ああ」

「行ってらっしゃい」

「・・・・・・・・お、おう、行ってくる」

“ポツ、ポツ”

あ、雨やんできた。

そろそろ暗くなってきたし、もう行かないと。  
いつまでもここにはいたらいけないんだ。

“すく”

さてと、とりあえず橋のどこまで登ってつと。

うんしょつと

“スタスタスタ”

『あつたまワル』

だからヤンキーなんて嫌なんだよ』

・・・サキちゃんにひどいこと言っちゃったなあ  
謝りたい。

愛ちゃんにも嫌なこと言っちゃった。

さくらちゃんや純子ちゃん、リレイちゃん、ゆうぎりさんにも嫌な  
思いさせた。

みんなに謝りたい。

でも、戻れないんだみんなのところには。

あの場所にはもうわたしの居場所はない。  
もうわたしにはどこにも居場所はなんてないんだ。

“トボトボトボ”

・・・・・・・・わたし、なんでゾンビイなんかになっちゃたんだろう。  
そのまま死んでいればよかったのに。

そうしたらこんな思いしなくてよかったのに。  
もう疲れたよ。

“ズル”

へっ？

“ズルズルズル”

あ、雨で土手が濡れてるから。

げ、やばい

“ズデン！”

「ひゃー」

“ゴロゴロゴロ”

げ、こ、転がる

あつ、い、石ー！

“ゴツン！”

「ぐはあく」

．  
．  
．

“ガチャ”

「ただいま」

「え、あ、あのお帰りなさい、由比ヶ浜さん」

「さてっと」

“ドサ”

「由比ヶ浜さん？」

“ポンポン”

「．．．．．ゆきのん、ここ座って」

「え？ ええ」

「ね、本当は何があったの？」

「え、な、何がって？」

「洋館で何があったの？」

「あ、あの、い、犬に追いかけられて」

「それだけじゃないよね。」



さっきのゆきのん、すごく変だった。  
なんかわかるよ。

ね、洋館で何かあったの？」

「……べ、別に」

「そう。」

「じゃいい、もう聞かない」

「……」

「……」

「……ごめんなさい」

「ゆきのん」

「洋館で犬に追いかけられたのは本当の話。

でもそれだけじゃない。」

「あの時」

「あの時？」

「犬に追いかけられた時だけど」

『おい、ロメロ』

「聞こえたような気がしたの、彼女の声が」

「彼女？」

-----

「さて行くか」

“ガチャ”

「ん？」

「……」

「そんなところで何してるんじゃない、愛」

「……今日も探しに行くの」

「なんだ知ってたのか」

「わたしも行く」

「いや、いい。」

それよりお前たちは」

「ちゃんとレッスンはするつもり。」

あんた言ったでしよ、ゾンビに睡眠はいらないうて。」

それに今回の件は元はといえばわたしが原因。」

だからわたしが……」

「……だがメイクしている時間はないぞ」

「大丈夫。」

この帽子とマスク、それにこのジャージ、名前入りで恥ずかしいけど

あんたが買ってきたこのジャージ着ていくから。」

これなら肌の露出少ないし、下を向いていれば気付かれない」

「そうか」

“ スタスタスタ ”

「今日は商店街を抜けていくことになるが、大丈夫か」

「だ、大丈夫。」

ね、あの馬鹿、まだここら辺にいますか？」

「わからん。」

だが、あいつもメイクしていないから動けるとしても夜間だけだろう。」

移動手段も足しか無い。」

だからそんなに遠くには行ってないはずだ」

「そうよね」

“ びゅん ”

「あ、帽子！」

ちよ、ちよつと待って」

“ ガヤガヤ ”

「愛、ちよつと待て。」

人が来る」

「でも、このままじゃ」

“だき”

「ちよ、ちよつと、何を」

「いいから、しばらく静かにしてろ」

「.....」

“スタスタスタ”

「本当なんですって大古場さん。

唐津神社に幽霊が出るって噂があるんですって」

「そんなものいつものヤラセかガセネタだろ。」

「いちいち取材なんて行っつてられねえ」

「えー、よかやないですか。」

どうせ特集のネタに困つとーやけん。

行きましようよ取材〜」

「時間の無駄だ。」

ん？

「つたく、最近の若いもんはこんな路上でいちやいやちやと」

「う、羨ましか。」

「俺も彼女ほしか〜」

「おい、行くぞ」

「あ、待ってくれんね大古場さん。」

取材よかとですから、誰か紹介してくれんですか」

“スタスタスタ”

「ね、今の聞いた？」

「.....」

「ちよ、いつまで抱き着いてるつもりー！」

“ぐい”

「なんじやい、照れてんのか。」

「愛ちゃんおぼこいの〜」

「馬鹿ー！」

“ボゴ”

「ぐはあ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。ね、今の聞いた？」

「じよ、冗談だろうが。」

「ああ、唐津神社だったな」

「噂になっているのだったら急がないと。」

「さっ、行くわよ」

「テツテツテツ」

「愛、そつちじゃない、こつちだ」

「し、知ってるわよ」

「カアゝ、カアゝ」

「バサバサ」

「ひやつ」

「案外ビビリーじゃの」

「ビ、ビビッてなんかない。」

「ちよつと驚いただけよ。」

「そ、それよりミカいないわね」

「キヨロキヨロ」

「やっぱりガセネタだったのかもな」

「.....」

「もうちよつと裏の方まで行ってみるか」

「そうね」

「ガサガサ」

「ひやつ！」

「.....ち、違う、何でもないから」

「愛」

「だから何でもないって言っ」

「違う。」

あれをしてみる、境内のところだ」

「え？」

「うゝゝ、うゝゝゝゝ、うがー」

「ミ、ミカ！」

「あゝー、あゝー」

“ふらゝゝ、ふらゝゝ”

「あれって」

「ああ、目覚める前の状態に戻ってる」

「な、なんで」

「わからん。」

だがこのままここにいて誰かに見つかったらまずい。

とにかく連れて帰るんじゃない」

「ええ」

“タツタツタツ”

「ミカ、帰ろ」

「あゝー、あゝー」

“ガチヤン、ガチヤン”

「え、ねっ、これ。」

ミカの足首のところに首輪？」

「ああ、犬の首輪だ。」

そこの木に鎖でつながれているようだな」

「だ、誰がこんなことを」

「わからん。」

だが、

“キヨロキヨロ”

「・・・誰もいないようだな。」

急いで連れて帰るぞ。

それと、このことは誰にも言うな。

わかったな」

「ええ」

“ジタバタジタバタ”

「あ、暴れないでミカ。

今この首輪取ってあげるから」

「うがー、うがー」

“バタバタ”

「ミカ、大人しくして！

ちよ、ちよつとあんたも手伝いなさいよ」

「ほれ」

“パク”

「よしよし、いい子じやい。

少し大人しくしてろ」

「あー」

“ガチャン”

「よし外れた」

「え、な、なんで？」

「決まつとるじやろ。

ゾンビイにはゲソじやい。

これ食べさせておけば静かになる。

ほら愛ちゃんも、あくん」

「馬鹿！」

“ボカ”

「ぐはあ！」

「まったく」

「な、なんじやい、もうやらんからな、ゲソ」

「いらないわよ！

ほら、さつさと帰る」

“ギョコ、ギョコ”

「ちよ、ちよつと待って。

あれ、警察」

「ふむ、とにかくどこか隠れる場所……」

“キョロキョロ”

「隠れる場所なんて。」

「……!」

「バツ」

「これ貰うわよ」

「ゲソなんかどうするんじやい?」

「ミカ、ほらゲソ、ゲソよ」

「あー」

「どつてきなさい」

「ほい」

「あう、あう!」

「ダー」

「よし。」

「あとは」

「だき」

「ん、な、何の真似だ」

「いいから、さっきのように恋人のフリして」

「ん、あ、ああ」

「ぎゆ」

「ん、おくい、こんな時間に何してるのかなあ」

「さっさと帰らないと逮捕しちゃうぞ。」

「うん、これ逮捕だな逮捕」

「愛、こっちに来るぞ。」

「ミカを連れて逃げだ」

「ドン!」

「へ?」

「きやく、お巡りさんこの人チカンです」

「へなへな」

「いきなり抱き着かれて、いろんなどこ触られて。」

「お願いです、逮捕してください。」

「うわーん」

「チ、チカン!」

「おいこら、お前逮捕だ。」

「これ現行犯逮捕だな」

「あ、い、いや、あの」

「うわくん、うわくん、ううううう」

「ほらこの娘、しゃがみこんで泣いてるじゃないか。

許せないんだなこれは！」

“ガチャン”

「げ、手、手錠」

「怖いです。」

さ、さつさとこの男、交番へ連行してください。

お願い！」

「わ、わかった。」

ほら、お前いくぞ」

“ぐい、ぐい”

「い、いや、ちよつと」

「うるさい。」

話があるのなら交番でじっくり聞いてやる。

さつさとこい！」

「あ、あの、ち、違う」

“ズルズルズル”

「ふうく、行ったわね。」

さてと、今のうちにミカを連れて帰らないと」

・  
・  
・

“ドタドタドタ”

「愛！ マジか、あいつ見つかったのか！」

「ミカさん」

「ううううう、うがく！」

“ふらく、ふらく”

「な、なんだ、これどうなってんだ」

「愛ちゃん、これって」



「神社で見つけたらこうなってたの。」

ミカ、目覚める前の状態に戻ってるって異が」

「そんな」

「・・・さくら、あたし達はライブで目覚めたって言ったよな」

「あ、う、うん」

「なら、あたし達にできることは決まっとる」

「わたし達にできること?」

「行くぞ、愛、さくら」

「え、サキちゃんどこに」

「決まっとるやろうが。」

「・・・・・・・・ダンススタジオだ」

「みんな、円陣組むぞ。」

さくら、さつさとCDプレイヤーおいてこっち来い」

「あ、うん」

“ガシツ”

「あのダンスバトル、間違いなくあたし達の負けやった。」

あたしは、負けっぱなしのままなんて我慢できねえんだ」

「サキちゃん」

「だから、だからあの馬鹿、あたし達のダンスと歌でぜってえ目覚めさせてやる」

「わたしも!」

好き勝手やって出て行ったミカには言いたいことが山ほどある。

だから必ず目覚めさせる!」

「愛ちゃん」

「・・・わたしは、ミカさんが淹れてくれた紅茶がまた飲みたいです。それに美味しい紅茶の淹れ方教えてくれるという約束は必ず守ってもらいます。」

だから、きつちり目覚めてもらいます」

「純子ちゃん」

「ダンス教えてくれた時のミカちゃん、すっごくやさしかった。それにうまくできた時、たくさん褒めてくれたの。とっても嬉しかった。」

リリイ、ミカちゃんともっとお話したい。

だから、ミカちゃんに目覚めてもらいたい」

「リリイちゃん」

「あ、あ、あ、う、う、う」

「たえちゃん」

「わちきは一度ミカはんとじっくりお酒飲みたいと思ってたであります。」

大人の女同志いろいろと話したいこともありましたからな。

だからミカはんにはきちんと目覚めてもらおうであります」

「ゆうぎりさん」

「さくら、お前はどうかんだ」

「わたし、ミカさんのダンス見て負けたと思った。」

わたしのアイドルになりたいって思いがまだまだ甘かって思い知らされた。

だからあれから今日まで絶対負けられんと思ってがばい練習した。

練習してわかった。

わたしは、わたしは絶対本物のアイドルになりたかって！

わたしのこの思い、ミカさんに伝えたい。

だから絶対に目を覚ましてもらおうけん」

「・・・さくら」

「あ、それはそうと、ミカはんがこのまま戻らないのであれば、

今度から身体のメイクも幸太郎はんによってもらうしかありませんな」

「はあっ！」

「お、お、おい、絶対目覚めさせっぞー！」

「う、うん」

「絶対！」

「頑張りましたよう！」

「異やだー」

〃ガチャ〃

「あ、あ、あ、愛ー!!」

お前、なんてことしてくれたんじやい。

おかげで、おかげでひどい目にあつたじやろうが、このボケー！」

「グラサン、音楽スタート！」

「へ、あ、あの〜」

「グラサン！」

「はい」

〃カチャ〃

「目覚めRETURNAER 願えばいいんだ」

「あゝあゝあゝ．．．うゝ．．．あゝー」

〃ふら〜、ふら〜〃

「え〜い、おとなしくあいつらのステージを見ろ」

〃ガシ〃

「うがー、うがー」

〃ドタバタ、ドタバタ〃

「本物のアイドルっていうにはまだまだまだほど遠いが、

あいつらなりに必死にお前を目覚めさせようとしている。

よくその目で見るとんじやい」

〃ぐい〃

「うが」

「目指せ目指せ、最上！ 最良！」

怖いものなどない！ ナイ！ ナイ」

〃シユパツ、シユパツ〃

「うがが．．．うが．．．う．．．うう．．．ううう」

「な、涙？」

お前泣いてるのか、も、もしかして目覚め」

〃ガブ〃



「どうなんださくらー！」

「いやもともと死んではいるんだけど、死んでないというか。

あ、でも死んでるから、え、えつとく」

「どっちなんだ」

「あ、あの、う、動いとる！」

「そ、そっか、死んでねえんだな」

「いや死んでるけど」

「……」

えらい、せからしかー

よし、みんな次の曲いくぞ」

“トボトボトボ”

あれ、ここどこだ？

なんかどつかでみたような景色。

あ、あれ、あの家！

“タツタツタツ”

うん、この家なんか見たことがある。

この綺麗に整理された花壇とか、補助輪のついたちっちゃな赤い自転車。

そして

『打ったー、ホームランー！』

家の中から聞こえてくる野球中継の声。

うん、なんか憶えがある。

“ガチャ”

へ、な、何してんのわたし。

勝手に家のドア開けて。

で、でも……

「お邪魔します。」

どなたか」

『あ、おねえちゃん！』

へ？

“ドタドタドタ”

ん、なに？

なんかちっちゃい子がこっち向かってくるんだけど。

え、おねえちゃん？

今、おねえちゃんって言った？

『おねえちゃん、お帰りなさい』

「あ、あの〜」

『お帰り』

「う、うん、ただいま」

『ね、ね、おねえちゃんあそぼ！』

えっとやっぱりわたしのことおねえちゃんって。

あ、でもほら、ちっちゃい子から見たらわたしおねえちゃんだから。

きつとそうだ、そういうことなんだ。

『おねえちゃん？』

「あ、な、何でもないよ。」

えっと〜何して遊ぶ？」

『えっとね、プリキラーごっこ！』

「うん」

・  
・  
・

「ぐはあ〜、やられた〜」

『やった、やった』

へへへ、なんかすごく楽しい。

それになんだか懐かしくて。

なんでだろう。

ずっとこうやって遊んでいたい。

“すう〜”

え、あれ？

この子、なんか薄くなってきたくない？

ほ、ほら、足なんか透けて床が見えるんだけど。

「あのさ、なんか身体が透けてきてるよ」

『え？』

あっ！

「………そ、そっか、もう時間なんだ」

「え、時間？」

『うん、もうおねえちゃんが帰る時間』

「えっと、帰る時間って？」

わたしまだ帰りたくない。

「ここで一緒に遊んでいたい」

『おねえちゃんは帰らないといけないよ』

「な、なんで？」

だってわたしここが楽しい。

ずっとここにいたい。

「こうやって一緒に遊んでいたい」

『……ここは死んだ人の世界。』

おねえちゃんは死んだけど、まだ魂はこつちに来ていない。

きつと向こうの世界でやり残したことがあるから。

だから、まだこつちの世界にはいられないの』

「……やり残したこと、やり残したことって何？」

わたしにはわからない。

ね、教えて。

わたし何をやり残したの？」

『大丈夫、おねえちゃんはわかってる。』

何をやり残したのか、きつと思ひ出せる。

だから』

「やだ！」

『おねえちゃん！』

「だって、だって………」

もうわたしに帰るとこなんてない」

『大丈夫、みんなは許してくれてるよ。』

きつとおねえちゃんが帰ってくるの待ってる』

「……………でも」

『おねえちゃん、わたしはおねえちゃんのこと大好き。』

いっぱいいっぱい大好き。

本当はもつとずつとずつと一緒にいたい」

「……………」

『でも、でも我慢して待ってる。』

だって今のままじゃ、おねえちゃんいつまでも彷徨い続けることになるから。

だから、ここでいい子にしておねえちゃんのこと待ってるね』

「わたしも！」

わたしも美紀のこと大好き！」

『おねえちゃん！』

美紀のこと、美紀のこと思い出してくれたんだ。

うれしいー』

「えっ？」

あっ！」

そ、そうだ。

この子、わたしの妹。

どこに行くのも、なにもやるのもいつも一緒に。

わたしが学校から帰ると、さつきみたいに玄関まで全力で走ってきて、

そんでめいっぱい笑顔で言うんだ、

『おねえちゃんお帰り。』

ね、あそぼ』

って。

とつてもとつてもかわいくて大切だった妹。

でも、わたしの所為で、わたしの所為で……………

わたしが馬鹿だったから。

『ありがとう、おねえちゃん♡』



“すう”

「ま、待って！」

美紀、美紀ー！」

・  
・  
・

「立ち止まった日々に笑顔で手を振り」

新しい夢見よう

ヨミガエレ

ヨミガエレ

“シユパツ”

「はあ、はあ、はあ」

“タツタツタツ”

「ど、どうだグラサン」

「.....」

「まだ目覚めねえのか。」

よし、みんなもう一回初めの曲から」

“ズカズカズカ”

「ん、あ、愛？」

“ぐい”

「はあ、はあ、はあ。」

いい加減に目を覚ましなさいよ！」

“ゆさゆさ”

「愛ちゃん落ち着いて」

んん、んん

へ、あ、愛ちゃんとさくらちゃん。

あ、サキちゃんやみんなも。

えっと、あれ、ここってダンススタジオ？

わたしなんでここに？

“フリフリフリ”

「どれだけわたし達が心配してると思うのよ」

愛ちゃん泣いてる。

「……え、えくと、確かわたし橋のところで石で頭打って。なんかよくわからないけど、みんな心配してくれてる。……。……。謝らないと、うん、ちゃんと謝らないと。」

「だって、わたしはみんなと一緒にいたい。」

「で、でも、何て言えばいいんだろう。」

「目覚めたよ」

「い、いや、そんな雰囲気じゃない。」

「なんかみんなすごく重い雰囲気だし。」

「ブン!!」

「へっ?」

「なんで、なんで目を覚まさないの!」

「あ、愛、お、落ち着けて」

「ブンブンブン」

「あ、愛ちゃんそんなにゆすらないで。」

「頭が、頭がくらくらって……」

「うぷっ!」

「や、やば、なんか気分悪くなってきた。」

「も、もうやめで」

「あ、あの、も、もう、め、目覚まし」

「このバカー」

「ブン!!」

「ひゃっ」

「スポッ」

「あ、頭!」

「飛んでった」

「あらあら」

「ひえ」

「ひゅ」

「幸太郎さん、そっちにミカさんの頭が。キヤッチして」

「任せんかい！」

とおー」

〃ガシツ〃

「ど、どんなもんじやい」

「ナイス、グラサン！」

も、もうだめ、限界……………うぷつ。

「ぐうえー」

「ぐわー、や、やめんかい、や、やめー」

・  
・  
・

〃トントントントン、トントントントン〃

げ、異さん凄く怒っていらつしやる。

さつきからあっち向いて机をトントンって。

うへえ〜話しかけにくい。

で、でも、

「あ、あの〜」

〃ギロ!〃

ひゃ〜、睨まれた。

し、仕方ないよね。

だって、我慢できなくてシャツの上に……………しちやったもんね。

「……………え、えつと」

「このボケー」

「ご、ごめんなさい。

あんなに頭振り回されたから我慢できなくて」

「そんなことを怒ってるんじゃない。

なんで黙って家を出て行った」

「……………異さん」

「お前の居場所はここだ、ここしかないんじやい。

どれだけあいつらが心配してたと思うんじやい」

「……………ごめんなさい」

「ここにはお前のことを真剣に心配してくれる仲間がいる。

お前のために必死になってくれる仲間がいる。

……お前のために泣いてくれる仲間がいる。

だから」

「……だから？」

「もうどこにも行くなミカ」

「う、うん」

「わかったらもういい。

あいつらが待ってる。

さっさと謝ってこい」

「はい。」

「……………巽さん」

「なんじやい」

「ありがとう。」

「じゃ、行ってくる」

「ああ」

“ガチャ”

「うわー」

“どたどた”

「サキちゃん、さくらちゃん、愛ちゃん」

「ば、馬鹿、だから押すなって言ったらろ」

「だってリレイも心配だったんだもん」

「お怪我無かったでありんすか？」

「うううう」

「リレイちゃん、ゆうぎりさん、純子ちゃん、それにたえちゃんも。

……………みんな」

“ペコ”

「みんなごめんなさい。

……………ただいま」

うれしいの？

“ スタスタスタ ”

「ん！」

“ ダー ”

「まさか」

“ ジャラジャラ ”

「ち、逃げやがった！」

くそ、折角特注のケージ準備したのに。

えーい！」

“ ガチャン ”

「だが、どうやってどうやってこの首輪を。

とてもあの化け物には外せねえと思ったんだが。

・・・もしかして仲間いるのか？

どっちでもいい！

絶対探し出してやる！」

—————

“ のしのしのし ”

まったく！

絶対二度寝してんだ巽さん。

今日は何か大事な用事があるって言うからちゃんとしてたのに。

これじゃなんにもならないじゃん。

“ トントン ”

「おおい巽さん。

ご飯冷めちゃうから早く起きて。

それになんか大事な用事あるんでしょ？」

「……………」

「開けるよ」

“ガチャ”

「ぐうおぐ、ぐうおぐ」

はあく、やっぱりまだ寝てた。

「巽さん……」

「ぐうおぐ」

……よく寝てるや。

これだけ気持ちよさそうに寝てたら、なんか起こすのかわいそうになつてきた。

それとさ。

“なでなで”

いつもありがとね巽さん。

ほんとすごくすごく感謝してるんだ。

こんなわたしのこと心配してくれて。

「ぐあく」

へへへ、ほんとよく寝てる。

もうちよつと寝かせておいてあげたいけど、

マジそろそろ起こさないかね。

“ゆさゆさ”

「おぐい、巽さん。

はやく起きて朝ご飯食べちゃって。

ね、ねえ、たつみ」

「う、うくん」

「あ、やっと起きた。

巽さん、お・は・よ♡」

“にこ♡”

「う、うぎやー!」

「へっ」

「……な、なんじゃいこのポケ!

寝起きになんてもの見せてんじやい。

がばい怖いじやろうが!

この馬鹿ゾンビイが」

く、くそ、こ、こいつ！

“べし！”

「ぐはあく、い、いた！

な、なにすんじやい」

「ふん！

いいから、さっさと朝ごはん食べてきて。

それに今日はなんか大事な用事あったんでしょ」

「大事な用事？

お、おお、そうじゃった、そうじゃった。

ところで今何時に……

げ、もうこんな時間。

このポケー、もつと早く起こさんかい！」

“ボタン！”

ぐぐぐぐぐぐぐぐ。

お、お、おのれー

「ちゃんと起こしただろうが！」

うゝ、まったくあの男は。

それにしても。

“キヨロキヨロ”

はあくあ、部屋散らかってるなく

ほんと足の踏み場もない。

雑誌とかDVDとか観たらちゃんと片付けておけて、もう。

「うんしょ、うんしょつと」

“ぱさつ”

ん、なんだこれ？

なんかのデザイン集？

“パラパラ”

もしかして新しい衣装のデザイン？

でも……

めっちゃださ！

「・・・というわけで、活動資金が無くなりました」

「はあ！ どやんするとや！」

「無くなったら稼ぐしかないじゃろうがい。

そこでだ」

“ バタン ”

「営業？」

「でも佐賀にアイドル呼ぶ企業なんてあるの？」

「はいあるんですー

さすが俺。

営業先は佐賀の大手製薬会社久中製薬。

上手くいけばタイアップのチャンス！」

「タイアップ」

「まあわからんけど

営業つてやつはいつやると」

「今からだ」

「はあ！」

「慰安旅行に出演予定の芸人が来られなくなったらしい」

「だからなんでそうやって無茶なことさせるの」

「少なくともチャンスを逃さんためじゃい。

このご時世、アイドルの需要は限られている。

そしてお前らゾンビイは無茶しても死なん！

となればやらん手はない」

「ん〜」

「とりあえずいつも通りやって、チヨチヨチヨつと実力みせてやれい。

ちなみに場所は嬉野温泉だ」

「温泉！」



ぬりぬり、ペタペタつと。

これでよし。

「はい、リリイちゃん終わったよ」

「ミカちゃんありがとう」

「どういたしまして」

さてつと後はわたしだけだね。

それじゃヌギヌギつと。

へへ、リリイちゃん、ほんと可愛いかったなあ

でもやつぱまだ小学生だね。

胸なんかもぺったんこで。

“ちら”

ふふふふ、勝った。

見よこのそびえ立つ双璧、さすが大人の女！

……って小学生相手に何やってんだか。

さ、さっさと身体のメイクやっちゃおうつと。

“ぬりぬり、ペタペタ”

・  
・  
・

「ふんふんふんふん、ふん♪」

“ぬりぬり”

よしっ完成つと。

へへ、今日はちよつと日焼け気味にやってみました。

だつてもうすぐ夏だもんね。

上手くできてたら、今度みんなにもしてあげようつと。

どれどれ鏡、鏡はつと。

“じ”

「ふむ、ふむふむ」

よし完璧だ。

健康的な小麦色のボディの完成。

我ながらメイクの腕上がったんじゃない？

そんじやあとは巽さんに。

“スタスタスタ”

「るるるるん♪」

へへ、温泉かゝ

ちよゝ楽しみだなあゝ

確かネットに嬉野温泉は日本三大美肌の湯って書いてあったから、きつとお肌とかすべすべに。

それにみんなで一緒に入ったら楽しいだろうなあゝ

あゝ早く温泉入りたい。

「へへ、温泉、温泉♪」

さつさと巽さんに顔メイクしてもらわなくちや。

えつと巽さんのほうはどうかかな？

“ひよい”

あ、巽さんの方も今やってるさくらちゃんで終わりだね。んじや、終わるまでここで待ってよつと。

うんしよつと。

“すとん”

はあゝ、それにしてもさくらちゃんやっぱかわいいなあゝリボンとかもよく似合つて。

それにあのどやんすボデイ！

“ごくつ”

あれ、絶対F、Fカップぐらいあるよね。

うゝ、うらやましい。

・・・・・・・・・・・・・・・・重たいのかなあ。

・  
・  
・

“イライラ、イライラ”

・・・・・・・・遅い。

くそ、巽さんさくらちゃんだけ特別に時間かけてない？  
なんかすごく念入りのような。

気、気のせいかなあ。

「よし、これでよか」

あ、終わった！

よ、よし、じゃ次はわたしつと。

「さてつと。」

おい、お前らメイク終わったらすぐ出発だ。

さっさと準備しろ」

「た・つ・みさん」

「なんだ」

「なんだつて、ほら、もう一人お忘れ」

「もう一人？」

いや全員のメイク終わったが」

「へ？」

あくん、もう相変わらずイケズなんだからく

はい、次はわたしの番」

「・・・ミカ、お前は留守番だ」

「そうそう、わたしは留守番・・・・・・・・・・は？」

はあー、な、なんで！

留守番なんてやだ！

わたしも温泉行きたい！」

「お前は留守番」

な、なんだと。

こいつ真顔でなんてこと言うんだ。

い、いや、き、きつとなんかの聞き間違いだ、うん最近耳遠くなっ

たかも。

「たつ」

「留守番！」

「ぬおおおおー！」

わ、わ、わたしも連れて行け」

「駄目だ」

「ぜ、絶対にか！」

「絶対にだ」

「ま、ま、マジでか!!」

「マジだ」

「げ、げ、げ、厳密にか!!!」

「絶対、マジで、厳密にだ!」

〃ぶるぶるぶるぶる〃

「うおーて、てめえ!」

〃ベシベシベシ〃

「い、いた。」

や、やめんか。

そのチョップ、マジで痛いんじやい」

「お、おいミカ、落ち着けて。」

ほ、ほら、どうどうどう」

「ウー、ガルルル」

「・・・なあ、いいじゃねえかグラサン。」

ミカも連れて行ってやれよ」

「スポンサーから宿泊を提供されたのは、俺とお前らフランシユシユの8人分だけだ。」

だから連れて行くわけにはいかん。

お前は留守番だミカ。

それにどうせお前らは温泉には」

〃ベシ〃

「ぐはあく」

「た、巽のばあーか!

大、大、大嫌い」

〃ダー〃

「あ、み、ミカさん待って」

「いててて。」

さくら、いいから放っておけ」

「そげなわけには」

〃ダー〃

「なあ、一人ぐらい増えたって黙ってればわからねえだろう」

「そうはいかないわ」

「愛」

「いい、もしミカを連れて行って、そのことがホテルにバレたら、わたし達だけじゃないスポンサーさんにも迷惑がかかる。

一人分の宿泊代を騙したことになるのだから。

タイアップを考えているのなら、そんなリスクを負うものじゃない」

「・・・だけだよ。

なあグラサン、なんでミカはフランシユシユのメンバーに入れてやらないんだ？

初めからメンバーに入れてればなんも問題ねえのによ」

「そうだよ、ミカちゃんダンスもすごく上手だし」

「・・・地味だからじゃない」

「はあ？」

「そんなもん決まっとる。

あんな地味な顔したアイドルなんてどこにもいないんじゃないボケー」

「はあー！」

なんだよそれ」

「異ひど〜い」

「え〜い、うっさいんじゃない。

メイク終わったんならさっさと出発の準備せんかい」

・  
・  
・

「うううう」

「ミカさんもう泣かんと。

あ、そうだ、わたし温泉のお湯汲んで持って帰ってくるけん。

それで行水でも」

「いらない。

温泉の素、巽さんのがいつぱいある。

嬉野温泉のもあったから」

「……………」

じゃ、じゃあ、わたしもう一回、幸太郎さんをお願いしてくるけん」

「もういいよ。」

ありがと、さくらちゃん」

「ミカさん」

「……………あのさ、ほんと温泉なんてどうでもいいんだ」  
「え？」

「じゃなんで温泉って」

「……………たださ、みんなと一緒にいたかっただけ。」

だっていつも一人だから。」

まあ仕方ないけど、わたしはフランシシュのメンバーじゃないし。」

メンバーになりたいくてダンスとかいつぱい練習したけど、

わたしはさくらちゃんや愛ちゃん達と違って可愛くないし、

ゆうぎりさんなんかすごく綺麗だし。」

それに比べたらわたしなんか……………」

だからアイドル無理ってわかってる」

「そ、そげなこと」

「いいのいいの、自分のことは自分がよくわかってる。」

だからアイドルじゃなくてもいいんだ。」

……………ただみんなと一緒にいたらそれだけで」

「……………ミカさん。」

あ、そ、そうだ！

お土産、なんかお土産買ってくるね。」

お饅頭とかお菓子とか」

「ありがと。」

でもいいよ。」

お饅頭とかもらっても、わたし味覚ないから」

「じゃ、じゃあキーホルダーとかなにか」

やさしいなあさくらちゃん。

でもさくらちゃん達、ただ働きでお給料なんてもらってないからキーホルダーとか買えないはずじゃ。

「えーと、それとも他の何か・・・」

あ、陶芸品とか」

どうしよう、さくらちゃん真剣に悩んでる。

とてもお金ないでしょなんて言える雰囲気じゃないし。

んーと、んーと、何か・・・

あっ、そ、そうだ！

「じゃ、じゃあ、お土産入らないから、それより」

「それより？」

「お願い！」

「一回でいいから、そのどやんすおっぱいさわらせて！」

「へ、どやんすおっぱい？」

「お、お願い！」

「い、いやー」

「ミ、ミカさんやめて」

「ドタバタ、ドタバタ」

「ぐへへへへ」

「ミ、ミカさん、顔こわい。」

あっ！」

「どた」

「ちやくんす」

「ずっしり」

「げ、お、重い」

「愛、ミカは唐津神社のこと何も覚えていないんだな」  
「ええ。」

千代田橋で転んで頭を打ったところまでは覚えていたみたいだけ  
ど、

その後のことは何も覚えていないみたい。

確かに土手のところに割れた眼鏡が落ちてたから、

そこで頭を打ったのは間違いないと思う」

「そうか。」

「いいか唐津神社でのことは」

「わかってる。」

「……ね、ミカをメンバーに入れないのは、そのことがあったから  
？」

「ああ。」

「……だがそれだけじゃない」

「他に理由があるの？」

「……愛、あいつはお前らと違って死んでから

まだ一年ちよつとしかたってない。

もしかたら死んだことを知られていないかもしれない。

そんなあいつがアイドルになってネットとかで映像が広がったら、

必ずあいつを知っている人が現れる。

その時、一番辛い思いをするのはあいつだ。

俺はあいつにそんな辛い思いをさせたくないんじゃない。

それぐらいなら、俺が嫌われている方がいいに決まってる。

だからあいつをメンバーにするわけにはいかんのじゃない」

「……そう。」

意外とやさしいのね」

「意外は余計じゃない」

「タッタタッタッ」

「ごめんなさい、遅くなりました」

「ヤクラー」

なにしてたんじゃない、遅いんじゃないこのボケ。

さっさと車に乗らんかい」

「あ、はい」



「お前もだ、愛」

「ええ」

“スタスタスタ”

「・・・やさしいつか。」

そんなわけではないわい。

俺は、俺の都合であいつをあのまま死なせておいてやらなかったんじゃない。

だから、それぐらいは当たり前のことなんじゃない」

・

「ふあゝ、着いた。

電車、乗り過ごした時はどうなるかと思ったが、何とか佐賀に着いた」

“ゴキゴキ”

「うくん、さすがに千葉から佐賀までの電車移動はきつい。

身体中が悲鳴をあげてる。

それに」

“ぐうぐ”

「腹減った。

仕事の前に腹ごしらえないとな。

なんとといっても出張の醍醐味は、出張先の美味しいものを食べることにある。

そのため俺は駅弁も食べずに我慢したんだ。

しかも今日は一人。

美味しいものは一人でじっくりと味わうのが一番。

味覚はもちろん、視覚、嗅覚、聴覚、触覚。

五感の全てを研ぎ澄まし美味しさを感じるのだ。

それを邪魔する会話など、美味しいものに対し礼を失する以外何物でもない。

わいわい賑やかに楽しく・・・もとい！

わいわい喧しく騒ぎながらしか食べることができないリア充共には、

本当の美味しさを感ずることはできない。

すなわち、ボツチこそが真のグルメ家なのだ」

“ビシッ”

「……………」

“ガシガシ”

「……………メシ食べよう」

“スタスタスタ”

「佐賀の名物といえば、いかしゅうまいにシシリアンライス、わらすぼ。

そしてなんといっても佐賀牛。

黒毛和牛の最高ブランドだからな。

きつとすごく美味いに決まっている。

だが！

すでに俺の気持ちは固まっている。

折角佐賀に来たんだ、なら行くところは決まっている。

昨日、すっかり店の場所とか確認したからな。

ふふふふ、さて早速」

「ずいぶん楽しそうね」

「え？」

は、はあー、な、なんで」

「はあー」

“きゅっ、きゅっ”

よしっ、窓拭き終了。

へへ、すごく綺麗になった。

ほら、まるで鏡見たいにピツカピカで……………

へっ！

「うぎゃく、ば、ばけもの！」

“きよろきよつろ”

「……………」

なんにもいない。

そ、そつか、これわたしの顔つか。

いい加減この顔になれないと。

それにしても。

“ジー”

今日は眼鏡してないから、より一層ゾンビ感が増してるや。これなら寝起きの巽さんが驚いても仕方ないつか。

「……………はあ〜」

さてと、さつさと掃除終わらせちまおうつと。

“スタスタスタ”

あとはこのミーティングルームだけ。

それじゃ。

「失礼しやーす」

“ガチャ”

って、もうみんな嬉野温泉に行ったから誰もいないんだけど。

それにしてもこの部屋、相変わらず不気味。

部屋全体が薄暗いし、特にこれ。

“こんこん”

なんで牢屋かオリかわからんけど、こんなのあるんだろう？

もともと何の部屋だったん？

うくん、よくわからん。

ま、いつか、お掃除お掃除つと。

まずは椅子を片付けて。

“ガタガタ”

…そつか、みんなこの椅子に座ってミーティングしてるんだよね。

きつと巽さんがあの黒板のところ立って。

へへ、なんか学校みたいで楽しそう。

わたしも参加したいなあ。

アイドルは無理だとしても、せめてミーティングぐらい一緒に。そ、そうだ！

わたしの分の椅子もここにおいてといて、なんかしなくと座つてよう。

わたしあんまり存在感ないから喋らなければ絶対気付かれない。それにこの部屋の薄暗さなら。

んで、いつの間にかいるのが当たり前のようになって。

よ、よし早速椅子！

えつとく、他に椅子ないかなあ。

“キヨロキヨロ”

この部屋には無いか。

仕方ない、食堂の椅子ひとつ持ってこよう。

ん！

あ、段ボールめつけ。

この段ボール使つて椅子作っちゃおう。

この前、椅子の作り方ネットに載ってたんだ。

“スタスタ”

へへ、このくらいの大きさなら大丈夫だね。

よし、早速カッターと定規持ってきて作っちゃおう。

あ、でもこれ中に何入ってんだろう。

今までこの部屋にこんな段ボールなかったはずだし。

なんだ？

・  
・  
・

「ステージは18時開始だ」

「わかりました」

「俺が観光している間、きっちり練習して置け。

レッスン用に娯楽室借りておいたからな」

「はい。」

「……え、幸太郎さんが何の間って」  
「観光じゃい。」

「わしや観光じゃ〜い」

「キョルルル、ブロロロ〜ン」

「……………」

「さあ〜て、あたしらどやんする?」

「どやんするって?」

「はあ?」

「お前マジですぐやる気じゃないよな」

「練習せんと」

「するさ後で!」

「なんでグラスンだけ好き勝手やりよってかって話だろ」

「いかんて」

「はあ! お前ぶつ殺すぞ」

「え、ええ〜」

「うちらほとんど屋敷の中でレッスンしよるとぞ。」

「それで、今こうやって嬉野来とんだぞ」

「リリイも散歩したい」

「はい、ちんちく来たー」

「ちんちくじゃないもん、リリイだもん」

「う〜ん」

「わずかでしたら、ええやありませんか?」

「わっちにもこの時代の町、見せてくださいまし」

「メイクしてるし、みんな一緒だし。」

「リリイ達もゾンビイバレしないように気をつけるから」

「んだな、ちんちく」

「リリイだもん」

「う〜ん。」

「……………みんながいいのなら」

“パクパク、もぐもぐ”

「・・・サイゼ。」

まさか佐賀に来てまでサイゼ」

「いや、折角佐賀に来たんだ。」

“ここはサイゼ一択だろう”

「はあく、言っている意味が分からないのだけど。」

マニュアル通りに作っているのだから、どこで食べても同じじゃない」

「違うぞ雪ノ下。」

まあリア充のお前にはわからないだろうが、

サイゼのようにマニュアルを徹底しているところでも、調理前の準備や

加熱のタイミング、温度・時間の管理等で店毎に微妙に味の違いがあるんだ。

ましてや県が異なれば。

論より証拠、みろこのミラノ風ドリアの味」

“ぱく”

「うん、やはり何かが違う。」

きつと加熱時間が・・・

いや、それだけじゃないもつと何かが。

そ、そっか、何か隠し味を入れてるのに違くない

はっ、も、もしかしてこの味は、佐賀の名産、ピリ辛薬味醤油”雷様の隠し味”

を使ってるんじゃないのか」

「・・・頭が痛くなってきたのだけれど」

“パクパク”

「で、なんでお前佐賀に来たんだ？」

「飛行機で来たのよ」

「・・・お前それぼけてるのか？」

確か今週会議だから来れないって言ってたろ」

「はっ！

・・・(ぎょ)ほん。

か、会議は明後日だから、今日の夕方の飛行機で帰る予定よ。

どうしても会議の前に確認したかったことがあったの」

「確認？」

(回想：あの日の雪ノ下のマンションで)

『聞こえたような気がしたの、彼女の声が』

『彼女？』

『ええ』

『ね、ねえ、ゆきのん彼女って？』

『三ヶ木さんよ』

『美佳っち！』

『ええ。』

はつきりとはわからない。

でもあの時、洋館の方から三ヶ木さんの声が聞こえたような気がしたの』

『そっか』

『あなたも憶えてるでしょう、三ヶ木さんが突然いなくなった時の比企谷君の姿』

『う、うん』

『三ヶ木さんがなぜ突然いなくなったのかはわからない。』

でも、もし比企谷君が洋館に行つて、もしそこで三ヶ木さんと出会つて。

もし、また同じように彼女がいなくなつたら。

・・・きつと彼はあの頃、あのゾンビイのような状態に戻つてしまふと思う。

だから、わたしは比企谷君を洋館には・・・行かせたくなかつた』

『ゆきのん』

『・・・・・・・・』

『・・・ね、ゆきのん。』

あたしは違うと思うの。

美佳つちのことだから、いなくなったのはきつと何か理由があるんだと思う。

それで美佳つちがまたヒツキーの前からいなくなったとしても、でもあたしは、それでもあたしはヒツキーは美佳つちに会うべきだと思う』

『由比ヶ浜さん』

『美佳つちの理由、それが何か、ちゃんとはつきりしないといけないんだと思うんだ。』

だってこのままじゃ、今のままじゃヒツキーはずっと引きずったまま。

そんなんじゃ、ヒツキーもゆきのんも・・・・・・・・あたしも始められない。

このままじゃ誰も先に進めない』

『・・・・・・・・』

『ゆきのん』

『わ、わたしは』

「ん だき」

『行っておいで・・・佐賀に』

うううん、行くべきだよゆきのん』

『・・・・・・・・ありがとう由比ヶ浜さん』

(回想終わり：サイゼリアの二人)

「お、おい雪ノ下?」

「洋館で確認したいことが残ってたの」

「だったら連絡してくれれば、俺が明日の予定終わってからでも」  
「それではだめ。」

わたしがちゃんと確認しないとイケない」



「そっか。」

「だったらそつちの方は頼むわ。」

「俺は吉野ヶ原の方に」

「いいえ。」

「あなたも一緒に行くのよ」

「いや、それは非効率的だろ。」

「折角二人いるんだ、ここは手分けしてだな」

「これは上司命令よ。」

「いいから一緒に来なさい」

「……………」

「あ、みんな、ほら足湯あったよ」

「おお、早速入ろうぜ」

「うわーい、リリイが一番！」

「ちやぽくん」

「あ、てめえ、ちんちくー！」

「ちやぽくん」

「気持ちよかく、生き返る」

「もう生き返ってますけどね」

「……………」

「あ、ゆうぎりさん、わたし達も足湯に」

「さくらはん、こつちのこれはなんどすか？」

「こんこん」

「あ、これは足蒸し湯といって。」

「えつと」

「カタン」

「ほらここの箱の中に足を入れると」

「ここの下の方から温泉の蒸気がでてきて」

「へえー、よくできてますな」

「結構雰囲気あるじゃねえかこの洋館」

「ええ」

「で、何を確認忘れたって言うんだ？」

「それは……」

“ スタスタスタ ”

「お、おい、アポとってるのか」

「いいえ」

「だったら、いきなりはまずいんじゃない」

“ ピンポーン ”

「すいません、どなたかいらっしやいませんか？」

「ねえ、愛ちゃん」

「……」

「わたし達、これからちゃんとアイドルとしてやっていけるかな？」

「さくらが思うちゃんとしたアイドルって？」

「えっと、歌って踊ってみんなに喜んでもらって、

元気になってもらうって」

「そうなるには練習も意識もまだまだ足りない」

「……もつともつと練習すればなれるかな？」

“ バシヤ ”

「……」

“ スタスタスタ ”

“ カタン ”

「……」

“ スタスタスタ ”

“ カタン ”

「わたし一生懸命頑張るけん。」

ゲリラライブの後に言ったこと嘘じゃないけん」

「カタン」

「あたしもやるからには、半端なこととはしたくねえ」

「芸事にこの身を捧げる覚悟は当の昔に」

「リリースも業界の厳しさ知ってるよ」

「・・・」

「わたしは」

「カタン」

「ずっと一人でやってきました。」

正直、今のグループでの活動に戸惑いを感じる部分はあります。

ですが、みなさんが本気で取り組むということであれば、

わたしも努力しないといけませんよね」

「純子ちゃん」

「但し、わたしは無理だと思ったたらすぐに抜けるからね」

「絶対そうならんようにする」

「しゃっ！ 今日もアツと驚くようなライブにしてやろうぜ」

「なにになに、それどんなの？」

「わからんけど」

「どのように今宵のお相手をお慰めしたらいいのでありんしょ」

「ゆうぎりさん、言い方」

「ま、まずはその会社の商品を知らないとだめなんじゃないですか」

「そ、そうか、わたしたちまだサガンシップZを使っておらんで」

「よし、すぐもどってやってみんぞ」

「うん」

「あ、で、でもサガンシップZってどがんしたっけ」

「さくら、お前知らんのか？」

「あ、う、うん。」

「えっとう、誰か車に積んだと？」

「「・・・」」

「マジか」

「はあ、はあ、はあ」

“ギョコ、ギョコ”

や、やった、登り切った。

ここからはしばらく下り坂。

へへ、自転車の醍醐味って、やっぱり下り坂だよな。

さっきの坂もそうだったけど、下り坂を下りる時の風を切る感覚って最高。

ん〜つと。

“キヨロキヨロ”

よし前方人影無し、視界クリアー！  
それじゃ。

「ミカ、ママチャリ号、行きま〜す！

どりや〜」

“シャ〜”

うひや〜、風気持ちいい〜。

いえ〜い。

あの上り坂を頑張った甲斐があった。

はあ〜爽快だなあ〜

“シャー”

あ、でもちよつとスピード出過ぎ。

少し減速減速。

ブレーキつと。

“ギユ”

．．．．．あ、あれ？

“ビュー”

え、えつと〜

ブレーキ！

“ギユ、ギユ”

・・・う、うそ。

うぎゃー!

ブ、ブレーキが利かない。

うげ、ど、どうしよう。

あ、そ、そうだ足、足の裏の摩擦で。

はっ、だ、段差ー!

“ドン”

う、うげっ。

“ヨロヨロ、ガシヤン!”

ふえり、し、し、死ぬかと思った。

“がぼっ”

はあく、くそ、あんなところに段差あるなんて気がつかなかったよ。

あ、そ、そうだサングラス!

今日、巽さんのサングラス借りてきたんだ。

壊れて無かったらいいんだけど。

“キヨロキヨロ”

あ、あつた。

うんしよつと。

“ひよい”

うくん、大丈夫だよね、壊れていない。

よかつた

結局、今日顔のメイクしてもらえなかったからなあ。

一応、マスクして帽子も被ってきたけど、サングラスもしてないと  
バレるよね。

いくら佐賀の人口は少なめっていつても、そこそこ人とすれ違  
うし。

それにしてもここどこだ?

たしかさつき標識が。

えつとく、あ、あつた。

んと武雄市、そつかここ武雄市か。

それにあそこに見えるのきつと佐世保線だから、うん嬉野温泉まで

あと少し。

よしそれじゃもうひと踏ん張りつと。

“ぐき”

げ、あ、足首が変な方向に。

やばいやばい直さないと。

“ぐい”

ふう〜何とか向き戻った。

ゾンビイでなかったらやばかった、捻挫どころじゃなかったし。

ん、そういえばなんか膝もギシギシいつてるし、腰もなんか変。

これはすこし休まないとかなあ。

でも、確かステージは18時からって黒板に書いてあったから、

あんまし時間ない。

きつとこれ必要だと思うし。

それに……へへへ、これ持っていけばきつとわたしも温泉

に入れる。

ホテルまで行っちゃえば、巽さんもさすがに帰れとは言わないよ

ね。

ふふふ、温泉温泉、みんなと一緒に♪

よし、それじゃ急ごうつと。

“ぐき”

ぐは〜、膝が……

ど、どうしよう、動けん。

やばいやばい、やっぱり自転車で嬉野温泉までつて無理だったか

なあ。

身体中が悲鳴上げてる。

ど、どうしよう。

はあく、仕方ない、しばらくここで休んで様子を……

あつ、そうだ！

“パカ”

これこれ、サガンシップZ。

ほら、これ筋肉疲労とかねんぎ、関節痛によく効くつて書いてある。

・・・でも、ゾンビイにも効くかなあ。

ま、いつか、どうせこのままじゃ動けないし物は試しだ。

“びりびり”

それじゃこれをまずは腰に貼ってつと。

“ピタ”

は、は、はひく

な、なにこれ、なんか腰がすごく楽になって。

はあく、気持ちいい、これゾンビイにも効くんだけ

よ、よし、じゃあ次は膝につと。

・  
・  
・

“ピンポーン、ピンポーン”

「なあ、やっぱり誰もいないんじゃねえのか」

「・・・そうね、お留守なのかしら」

「俺、ちよつと裏の方見てくるわ」

「え、ええ」

“スタスタ”

「あ、もし犬が出てきたらすぐに呼べ」

「え、ええ。

ありがとう、やさしいのね」

「そのためだろ、俺を連れてきたのは。

じゃあな」

“スタスタスタ”

「・・・ばか」

“ピンポーン”

「やっぱり誰もいないのかしら」

“スタスタスタ”

「何か用か」

「え、あ、あの、すみません。

もしかしてこの洋館の方ですか？」

「いや、この家の知り合いのものだ。

それよりお前は？」

「あ、申し遅れました。

わたしは雪ノ下建設の雪ノ下といいます。

これはわたしの名刺です」

「ん、雪ノ下建設？」

なんだ千葉の会社じゃねえか。

千葉の建設会社がなんのようだ？」

「あ、あの、今、佐賀のリゾート開発事業に取り組んでまして。

それでこの洋館の方にお話が」

「そうか。

で、誰もいないのか？」

「そうみたいですな」

「なんだ、いないのか。

なら帰るか」

「あ、あの」

「ん？」

「すみません、この写真の女性がこちらにお住まいではありませんか？」

「……この人は？」

「あ、あの私の友人です。

ずっと連絡がつかなくて心配してたら、この辺で彼女を見たという  
情報が

あつたもので。

もしご存じでしたら」

「いや、この家にこんな女は住んでねえな」

「そ、そうですか」

「ああ、間違いない。

まあ、この家には同じような年頃の娘が何人か住んでるからな。

きっとその中の誰かと見間違っただらう」

「そうですか」



「すまないな、力になれなくて」  
「いえ、ありがとうございます」

「ペコ」

「じゃあな」

「スタスタスタ」

「.....よかった」

「おおい雪ノ下。」

裏の方にも誰もいないぞ」

「そう。」

それじゃ帰りましょう」

「え、も、もいいのか」

「ええ、十分よ」

.....

「さくら、どうだ車あつたか?」

「うううん、こっちの方にはなかった」

「そっか」

「さくら」

「あ、愛ちゃん、純子ちゃん。」

どう、幸太郎さんの車あつたと?」

「いいえ、向こうの駐車場にも無かったわ」

「ち、やっぱりあいつ観光楽しんどるんやなかとか」

「仕方ないですね。」

こくなつたら戻ってくるまで練習していきましょう」

「そうだな」

「ブロン、キキキ」

「お前らレッスンもしないでなにやってんじやい」

「あー、巽!」

「グラサンやっとな帰ってきたのか」

「幸太郎さん、車のドア開けて」

「ん、どうかしたのか」

「いいからさっさとドア開けろグラサン」

「なんじゃい」

「じゃ、俺はこのままこの電車で吉野ヶ里の方に行くから」  
「ご苦労様。」

あまり無理しないでね」

「え？」

「なにか？」

「い、いや、なんかお前さつきからすげえー機嫌よくない？  
ずっと鼻歌歌ってたし」

「べ、別に。」

普通だけれども」

「そうか？」

じゃあ、お前も気を付けてな」

「ええ。」

それじゃまた会社で」

「ああ」

・  
・  
・

“ガサガサ”

「どうださくら、そっちあったと？」

「うううん。」

純子ちゃん、助手席のほうはどう？」

「こちらにもありません。」

観光ガイドならありましたけど」

「はあー！」

やっぱお前観光しちよつたと」

「あたりまえじゃい。

で、お前らなに探してんじやい？」

「サガンシツプZの箱だ。

グラサンお前知らんとか？」

「そんなもん知らんわい。

そんなことよりさっさとレッスンを

「ブゥ、ブゥ」

「なんじやい」

「カシヤカシヤ」

「どうしたミカ」

「あ、巽さん、ね、今どこ？」

「どこって、ホテルの駐車場だが」

「何て言うホテルだったけ？」

「華翠苑だが」

「んと華翠苑、華翠苑・・・

あ、あつた！」

「はあ？」

お、おいミカ、お前今何て」

「いたー！」

おおい、巽さくん」

「シャー」

「は、はあ？」

ミ、ミカ、なんでお前が」

「キキ」

やっぱりブレーキの利き悪い。

やばー！ 自転車、と、止まらない。

このままだと巽さんに。

「た、巽さん、そこどいてー」

「へ？」

「ど、どいてー」

「お、おう」

“ひよい”

あ、でも!

巽さんよけたら、後ろの車に当たっちゃうじゃん。

え、えーい!

“ぐい”

「へ?」

“どごっ!”

「ぐはあく」

な、なんで避けた方に」

“どたっ”

「た、た、巽さん大丈夫?」

「ミカさん」

「なんだミカ、お前何しに」

あ、そ、そうだ。

これ渡さなきや。

「サキちゃん、はいこれ忘れ物。」

「これ必要じゃなかった?」

「あ、サガンシツプZ」

「掃除してたら見つけて。」

「きつというものだと思ったから」

「マジか。」

お前、これ持ってくるため、ここまで自転車で来たのか。

「すごか根性あるよな」

「えへへへ、でももう足ガタガタ。」

「じゃ、わたしは早速温泉に」

「まて〜い。」

「いたたた」

「巽さん大丈夫?」

「ミカ、お前メイクも無しでここまで来たのか」

「え、う、うん。」

あ、でもほらマスクしてるし、帽子も被ってきたし。

それに巽さんのサングラスも。

身体の方は一応メイクしてるし……」

「このボケー」

お前は危機意識が足りないんじゃない！」

「だ、だって」

「だってじゃないんじゃない。」

ええ、ミカお前は、この車に乗ってる。

いいか、絶対この車から出るんじゃないぞ！

わかったか、この馬鹿ゾンビイ！」

「えー」

「……暇」

今頃、みんなのステージ始まっているかなあ。

見たかったなあ。

それに温泉、入りたかったなあ。

頑張つてサガンシツプZ持ってきたのに、あれからずっと車の中。

そりやメイク無しでできたのは悪かったけどさ。

誰にも見つからなかったからいいじゃんか。

「はああ」

それにしても、あれからずっと車の中。

めっちゃ暇なんですけどさ。

んと、何か暇潰せるものないかなあ。

巽さん、どっかにエッチな本隠してない？

“ガサガサ”

「……ん、これなんだ？」

嬉野温泉観光ガイド？」

“ペラペラ”

あ、足湯、この近くに足湯あるんだ。

行ってこようかなあ。

ほ、ほらこの近くだし。

それにもう暗くなってきたから。

“キヨロキヨロ”

いいよね。

歩いてる人もいなそうだし。

万一、人と出会ってもマスクと帽子、それにこのサングラスがあるから

ゾンビイなんてバレない・・・はず。

よ、よし。

“ガチャ”

へへへ、足湯足湯足湯♪

“ダー”

“トボトボトボ”

えつとつ、確かここら辺のはずだけど。

あ、あつた。

ここだ、ほらあそこに足湯ある。

“キヨロキヨロ”

よし、誰もいないよね。

では早速。

「温泉温泉♪」

“ちやほくん”

ふえく、やっぱ気持ちいいく

サガンシツプZもよかつたけど、やっぱ温泉サイコーだよね。

入ってるの足だけだけど、それでもなんだか足元から体中がほつこりする感じで。

今日の疲れが全部とれるよう。

ほら膝もすごく楽になって。

“バシヤバシヤ”

へへ、へへへへ、やっぱ抜け出してきてよかった。

“バシヤバシヤ”

「ふんふんふん♪」

はあく生き返った」

はっ！

“キヨロキヨロ”

純子ちゃんいないよね。

へへ、いつもならここで純子ちゃんが決め顔で言うんだ。

「わたし達、もう生き返ってますけどね」

なくんつつて、なんつつて。

「.....」

みんなも今頃温泉入ってるのかなあ。

もうステージ終わってる時間だもんね。

温泉、みんなと一緒に入りたかったなあ

.....はあく

あ、そういえば、巽さんあとで食事持ってきてくれるって言って

たっけ。

抜け出したのバレたらやばいし、そろそろ帰ろ。

“ガタ”

へ、あ、やば、誰か来た。

か、顔見られないようにしないと。

とにかく、もちつと奥の方に。

“そー”

ここなら隅っこだし薄暗いから、気付かれないはず。

「はあああー」

“ちゃぼん”

な、なに？

今、なんかすごい溜息が聞こえたんだけど。

“ちら”

あの人、仕事帰りかなあ、背広姿だし。

ずっとうつむいたままで、こっちに気付いていないみたい。  
だったら今のうちに退散退散。  
うんしよと。

「はああああー」

・・・大分疲れてるんだあの人。

こっからはうす暗くてよく見えないけど、

なんか全身から黒いオーラーみたいなのが見えるような気がする。  
お仕事うまくいってないのかなあ。

ま、まあ、わたしには関係のないことだから。

「はああああー」

・・・も、もう！

「あ、あのく、大丈夫ですか?」

「ひゃっ」

え、な、なに?

なんかすごく驚かれたんだけど。

は、もしかしてゾンビイってバレた?

でも、顔見られてないはず。

薄暗いし、こんだけ離れてるし。

それにマスクもサングラスもちやんとしてるし、帽子だって。

う、うん、大丈夫なはず・・・

「あ、す、すみません。」

他に人がいるなんて思っていなかったもので」

「あ、は、はい」

よかった、気付かれてなかった。

で、でもどうしよう、なんかわからんけどつい声かけちゃったから、  
ちよつとこのままじゃ帰りづらい。

・・・少しだけなら。

「お仕事、大変そうですね?」

お忙しいんですか?」

「え、あ、まあ。」

・・・仕事つてものはやめることはできても、終わることはできな



いものですから」

え、あ、あれ？

今のって

『はあく、仕事ってのはやめることはあっても、終わることはねえんだよな』

う、うん、どこかで聞いた気が。

「それに忙しいって漢字は心を亡くすって書くんですよね。

本当、こんなに忙しいと心がなくなりますよ。

今日だって本当は夕方には嬉野温泉に着いてるはずだったのに、

横暴な上司に振り回されて結局こんな時間に・・・

あつ、す、すみません。

何言ってるんだ俺、いきなり初対面の人に」

“ ガシガシ ”

「あ、うううん。

わかるような気がします。

横暴な上司っていますもんね。

わたしだってほんとはゆっくり温泉に入りたかったのに、

横暴な上司の所為で足湯で我慢してるんですよ」

「そ、そうですか」

「雪ノ下建設・・・ですか」

「ああ、そうだ。

お前のところの家政婦ゾンビイの友人って言ってたぞ」

「・・・」

「これで二人目だ。

気をつけろよ」

「わかりました」

「じゃあな」

“ プー、プー ”

「雪ノ下建設・・・あの時の女か」

“スタスタスタ”

「・・・さてと大人しくしているか、あのボケは？」

「おいしい、飯じやい。」

「飯持ってきてやったぞ。」

「いいか、なんと佐賀牛、佐賀牛じやい。」

「がばい感謝せんかうい。」

「まあ味のわからないお前には、正にゾンビイに真珠だがな」

“シーン”

「え、あ、あれ？」

「なんじやい、まだ怒ってるのか？」

「いいか、温泉といってもお前もさくら達もメイクしてるから」

「温泉には入れないんじやい」

“ガチャ”

「だからいい加減に機嫌を・・・」

「い、いない。」

「ま、まさか」

“ダー”

「本当に魔王と氷の女王なんですよ俺の上司は」

「あははは。」

「で、でもさ、結構あなたのこと買っているからじやない？」

「それに、ほんとにはあなたもお二人のこと信頼してるって気がする」

「ま、まあ、あの二人、人格以外は完璧ですから。」

「でも俺はどっちかというと、買われているというよりも飼われているって感じで」

「え？」

「あつ、あははははは」

「はははははは」

「そうだ。」

ね、お仕事で佐賀の観光名所回ってるって言ってたでしょ」

「え、あ、はい」

「それじゃ、宝当神社にはもういったの？」

「宝当神社？」

「あ、うん。」

なんでも宝くじを買った地元の人が祈願してもらったら  
すごい高額当選したんだって。

それから宝くじの祈願に来る人が絶えないんだって。

なんかすごいご利益があるって評判になっているんだよ」

「へ〜」

それはどこにあるんですか？」

「あ、あのね高島って島にあつて、

そんで唐津城の近くに宝当棧橋って定期船の乗り場があるの」

「ありがとうございます。」

早速、明日の予定が終わったら行ってみます」

「あ、よかつたらわたしが案……」

「え？」

「あ、うううん、なんでもない」

な、何言つてんだわたし。

案内なんてできるわけないじゃん。

そんなの異さん絶対許してくれないし。

でもなんだろう。

なんかこの人と話しているとすごく楽しくて、うれしい。

……へ、うれしい？

うれしいの？

「そうですか。」

あ、じゃ俺そろそろホテルに。

このままだと、飯にありつけなくなりそうなので」

「あ、う、うん」

「……あ、あの、よかつたらホテルまで送りましょうか？」

女性一人だと危ないといけないので」

「あ、大丈夫。」

わたしの泊ってるホテルすぐそこだから。

それにもうちよつとここにいたいなあって」

「そうですか。」

それじゃ、暗いですからお気をつけて」

「あ、あの〜」

「はい？」

「え、あ、あの……な、なんでもないです」

「そうですか？」

「それでは」

“ペコ”

「あ、そうだ。」

よかったらこれどうぞ」

“ごそごそ”

「え？」

「あつた。」

えつと外観はなんか黄色と黒色で禍々しいけど、

これ、千葉の誇るソウルドリンクですので。

俺も大好物です。

ここに置いておきます」

“カタ”

「あ、ありがとう」

「ま、また会えるといいですね」

「……はい」

「じゃあ」

“スタスタスタ”

行っちゃった。

“ぎゅっ”

はあ、はあ、はあ。

あ、あれ、なんだろう、なんかすごく胸が苦しい。

な、なんで急にこんな・・・と、とりあえず深呼吸して。

“スー、ハー、スー、ハー”

だ、だめだ、どんどんひどくなる。

どうしたんだろう、なんなんだこれ。

なんでこんなに苦しいんだ？

はあゝ

ん、あ、あれ、あの人がおいてった・・・

“ヨロ、スタ、スタスタ”

えつと、なんか千葉のソウルドリンクって行ってたけど。

うわあゝ、なんかほんと禍々しい。

・・・でも、これを見ると、心なしか少し楽になってきた気が。

“ひよい”

マックスコーヒー？

このコーヒーが千葉のソウルドリンクなんだ。

美味しいのかなあ。

さっきの人も大好物だって。

まあ、でもわたしは・・・

ま、いつか。

ちよつと飲んでみつか。

“カチャ”

「頂きます」

“ゴクゴクゴク”

「えっ！」

あ、あ、甘い、めっちゃ甘い」

な、なんで？

わ、わたし味覚なかったはず。

い、いままで何食べても、何飲んでも、全然味を感じなかったのに。

“ゴク”

甘い。

すごく甘い。

な、なんでだろう。

それに……な、なんか懐かしい味。

“ポツ、ポツポツ”

あ、あれ、わたし泣いてる。

なんで泣いてんだ？

わからない！

なんかなんか、なんもわからない。

だけど！

「ううううううう」

「ミカー！」

「あつ、た、巽さん」

“ズカズカズカ”

「な、な、何してんじやい！」

車から出るなって言ったらろうが、この大ボケー！

「うううう、うわくん」

「へ？」

あ、い、いや、な、泣かんでも。

わ、わかればいいんじやい、わかれば。

まあ無事でよか」

「うわくん」

“タツタツタツ”

「お、おい、どうした？」

“ドン”

「ううううう、うわくん、うわくん」

「ど、どうしたんじやい？」

「わからない、わからない、わからない！」

わ、わからないけど、なんかわからないけど、うわくん

「……………」

—————

“ザザン、ザン、ザザン、ザン”

昨日のあれ、何だったんだろう。

なんか急に胸が苦しくなって。

そんでこのコーヒー飲んだらなんかすごく悲しくなって。

・・・マックスコーヒーつか。

なんだろうねこのコーヒー。

・・・それとあの人。

「・・・・・・・・」

ん、あ、あれ高島からの定期船。

あの人、あの船に乗ってるのかなあ。

昨日、予定が終わったら行ってみるって言ってたし。

『また会えるといいですね』

・・・もう一度、会いたい。

・  
・  
・

“ザブン、ザブン”

「宝当神社つか。

マジご利益あるんだな、なんかすごい人だった。

これは今度のプロジェクトのいい目玉になるかもしれないな。

あの人にお礼言わないとな。

・・・あつ、連絡先」

“ガシガシ”

「・・・・・・・・・・はあ」

“ザブン、ザブン”

「ん、海から見る唐津城もなかなかだな。

写真写真と」

“カシヤ”

「あ、あんなところに綺麗な砂浜もあるじゃねえか。

洋館からもそんなに遠くねえし。

一応、写真撮っておくか」

“カシヤ”

—————

“カチヤ、カチヤ”

「これでよしと。」

ふう〜、なんとか東地グループとの打ち合わせには間に合いそうだな」

「比企谷君、ご苦労様。」

紅茶淹れたのだけかどうかしら」

「え、あ、すまん頂く」

“ゴク”

「はい、これもどう？」

佐賀のお土産に白玉饅頭買ってみたのだけど」

「・・・なにが望みだ雪ノ下。」

はっ、もしかしたらまた何か仕事を」

「べ、別に何も無いわ。」

お、お土産が余ったからよ。」

いららないのなら無理にとは」

「いや、ならいたたく」

“パク”

「うまい」

「・・・そ、そう、よかった。」

で、どう？」

資料、間に合いそう？」

「あ、ああ。」

あと何枚か写真を取り込んで終わりだ」



「そう、さすがね。」

「あら、この写真って?」

「ああ、これは宝当神社だ」

「宝当神社?」

「予定していた観光のリストにはなかったと思うけど」

「ああ。」

「ちよつと嬉野温泉で教えてもらってな。」

「何でもすごいご利益がある神社らしい。」

「取材に行った時も参拝の人で凄かったからな」

「そう」

「あ、あとこれ」

“カシヤ”

「これは定期船からみた唐津城。」

「海の方から見るとまた一段とカッコいいよな。」

「それと」

“カシヤ”

「これはあの洋館の近くの……砂……浜」

「洋館ってあの洋館の近くの?」

「……」

「比企谷君?」

「どうかしたのかしら?」

「……美佳」

## 第二章 再会と・・・そして始まりと それぞれの想い

「・・・・・・・・ここにいたのか」

“ガタツ!”

「やっと、やっと見つけた」

“スタ、スタスタ”

「待ちなさい!

「仕事中にどこに行く気なのかしら」

「・・・雪ノ下、やっと見つけたんだあいつを。」

俺、俺は」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ふう。」

「いいわ、あとは私がやっておく」

“ガチャ”

「すまない」

“タツタツタツ”

「・・・・・・・・」

“カチャ、カチャカチャ”

「・・・・・・・・そう、あなたやっぱり佐賀にいたのね」

“シユパツ、シユパツ”

「届け、届け 熱い気持ち」

奏でるソウルにCut IN

へえ、みんな歌もダンスもすつごく上手になってる。  
ゲリラライブの時間が嘘みたい。

ダンスの息もぴったりでき、ほんと雰囲気が変わった。

みんなすつごくイキイキしてる。

「……………ゾンビイなのに。」

「ビシツと変えたい このChanging  
ステップやめない このDancing」

「……………何かあったのかなあ」

「……………うががががが」

「……………少し羨ましい」

「……………うが、うがががが」

「……………へ？」

「……………うが？」

「た、たえちゃん！」

「うが」

「いないと思ったら、ここでなにしてるの。」

みんなと一緒にレッスン」

“ムシャムシャ”

「あ——！」

ま、また勝手にゲソ食べてる。

いつの間に取りつてきたの、しかも袋ごと。

駄目だって、勝手に食べちゃ。

ほら、ゲソ返しなさい」

「うが——！」

「うがーじゃなくて。」

勝手に食べたなら、またわたしが巽さんに怒られるんだからね」

「うが！」

“ガブツ”

「げ、袋ごと食べたー」

吐き出しなさい！

袋ごと食べたなら死んじやうから」

「うがうが」

「ほ、ほら口開けて。」

うくん」

“ぐい”

「うががが、うががが」

「刹那のソウルに Cut IN<sup>♪</sup>」

「はあ、はあ、はあ、それじゃ少し休憩しましょう」

“スタタタタタ”

「はあはあ、今のどがんでしたミカさん」

「たえちゃん、袋出して〜」

「ミカさん？」

「え、あ、さくらちゃん。

ごめんね、ちよつとたえちゃんが。

あ、うん、ダンスとか完璧、ばっちりだったよ。

みんなの息もあつてるし、動きもキレイだったし。

なにも言うことなかったよさくらちゃん」

「本当！

よかった〜」

「……ね、さくらちゃん。

なにかあつた？」

「え？」

「あ、いや〜気の所為かもしれないけど。

なんかみんなの雰囲気が変わったような気がして」

「あ、うん。

あのね、嬉野温泉のイベントの前にみんなでフランシユシユのこれからのことを話し合ったと。

それでみんなでアイドルのトップ目指して頑張ろうってことになつて。

なんかさ、ああやってみんなで話し合ったの初めてで、がばい良かった」

「そうなんだ」

「おいさくら、次の曲やんぞ」

「あ、は〜い。

じゃ、またあとで」

「うん、頑張って」

〃 スタスタスタ〃

「……………みんなで……………か」

「……………うが……………が」

「……………はあく」

「……………うが」

〃 ムシヤムシヤ、ゴクン〃

「んっ！」

あ、たえちゃん、飲み込んだらだめー

ほら袋吐き出して！」

「どういうつもりかしら。

今日の当番は姉さんだったはずよ」

「えー、だってしようがないじゃん。

お仕事もう少しかかりそうなんだもん。

と、いうわけで雪乃ちゃん食事の準備よろしく」

〃 プー、プー、プー〃

「あ、ね、姉さん！」

……………まったく、昨日も同じこと言ってたじゃない。

はあく、なにか食材買って帰らないといけないわね」

〃 コツコツコツコツ〃

「……………今頃、もう大阪あたりかしら」

〃 コツコツコツ、コツ、コツ〃

「……………これでよかったのよね、きっと」

〃 ブく、ブく、ブく〃

「え、由比ヶ浜さん？」

〃 カシヤ〃

「もしもし」

「やつはろー、ゆきのん。」

ね、もうお仕事終わった？」

「え、ええ。」

今、もうすぐ駅に着くところだけけれど」

「あのね！」

今日、会社の帰りに偶然いろはちゃんと会ったの。

それで今からお食事に行くところなんだけど。

ね、ゆきのんも一緒にどう？」

「え、あ、わ、わたしは」

『と、いうことで雪乃ちゃん食事の準備よろしく』

「はあ〜」

「ゆきのん？」

「由比ヶ浜さん せっかくだけど」

「雪乃先輩、お久しぶりでーす！」

お食事行きましょ。

わたし、雪乃先輩といっぱいいろいろお話したいです」

「一色さん。」

「……そうね。」

「わかったわ、行きましょう」

「やったー」

あ、そうだ。

雪乃先輩、もしかして先輩もご一緒ですか？」

「いえ、比企谷君は今頃

はっ！」

「え、雪乃先輩？」

「……どうして？」

「もしもし」

「ごめんなさい。」

後から必ず連絡するわ」

“プー、プー、プー”

「……………」

「カツ、カツカツカツ」

「こんなところで何をしてるのかしら」

「え、あ、雪ノ下。」

「い、いや、ま、まあその、なんだ」

「あなた、佐賀に行ったんじゃないやなかったの」

「……」

「比企谷君！」

「あ、あのな、ほ、ほら、東地グループとの打ち合わせって明後日だろ。」

「や、やつぱり仕事を途中で投げ出すなんてって思ってたな。」

「それで」

「……そう。」

「わかったわ」

「……」

「つまりあなたは上司の私を騙して仕事をさぼったというわけね」

「いや、さぼったわけじゃ」

「これは懲罰の対象になるわ。」

「そうねお給料の30%カットってどこね」

「お、おい、別に騙したわけじゃ」

「あら、反省もしてないようね。」

「それに無理やり上司に仕事を押し付けたって、そこも考慮する必要があるわ。」

「……50%カット」

「い、いや、それはお前が」

「それともクビがいいかしら」

「……」

「クビが嫌なら本当のこと言いなさい」

「……」

「比企谷君！」

「……怖くなった」

「え？」

「怖くなったんだ、あいつに会うのが。」

はは、本当おかしいよな。

あいつが急にいなくなつて、その理由がわからなくて。ちやんと会つて、ちやんと理由聞いて、それでちやんと……ずつとずつとそのことばかり考えていたのに。

それなのに、いざ居場所がわかつたつてなつたら、やつと会えるかもしれないつて思つたら急に……怖くなつたんだ」

「怖くなつた？」

「あいつは、あいつなら俺は何も疑わず信じられるつて思つてた。でもそれは俺の勝手な思い込みで、俺だけがそう思つてただけで、本当はあいつも他のやつと一緒に」

……怖いんだ、あいつに裏切られたつてことになるのが。はは、おかしいよな。

希望を持たず、心の隙を作らず、甘い話を持ち込ませず、ボツチ道を極めた

俺なのに、あいつと出会つて、付き合つて、一緒に暮らす中で、いつの間に人間強度がリア充並みに低下してしまつてた。

……今の俺では耐えられないのかもしれない。

だから、だつたらやつぱり会わない方がいいんじゃないかつて」

「……」

「なあ雪ノ下」

“バシツ!”

「ぐはっ」

“どき”

「雪ノ下、何を」

「あまり私の親友を貶めるようなこと言わないでいただけるかしら。

あなたの目、その目はやつぱり死んだ魚の目のね。

三ヶ木さんのあなたへの想いを信じられない、そう思うなら思いなさい。

そんなあなたは一生、誰一人信じることはできない。

お望み通り、孤独の人生を歩みなさい」



「雪ノ・・・下」

「・・・ね、比企谷君。」

思い出してほしいの。

彼女の行動には必ずなにかしら理由があった。

そしてその理由はいつも大事な人を守るため。

そのため進んで自らを・・・

だから私は、そんな彼女だったから・・・だから私は!」

「ゆ、雪ノ下」

「・・・そんなのあなたが一番よく知ってるはずじゃない」

「・・・」

「いいから、佐賀に行きなさい。」

彼女に会いなさい。

そして・・・理由を聞きなさい。

そうでないと、あなたはきつと後悔する」

「雪ノ下」

「私の親友を信じてあげて」

「・・・わかった」

「そう。」

それなら今からでも」

「いや、佐賀に行くのは東地グループとの打ち合わせの後だ」

「比企谷君、あなた」

「打ち合わせ終わったら、少し休み取らせてくれないか？」

必ずあいつに会って、理由を確かめてくる」

「・・・あなた、入社してから有休をまったくとっていないって

人事部で問題になってるわ。

この際、こっちの問題も解消しなさい。

申請は私がしておいてあげる」

「すまん。」

「・・・雪ノ下」

「なにかしら?」

「ありがとう」

「……馬鹿。」

「あ、その代わり」

「その代わり？」

“ドーン！”

「まだ見つからないだと！」

「は、はい」

「あれからどんだけ経つてると思うんだこの役立たずが」

「し、しかし古怒田さん、この写真だけじゃ」

「ああん！」

「い、いえ、なんでも……」

「いつも大金渡してるんだ、それなりの働きをしろ」

「はい。」

……あ、あの〜

「なんだ？」

「この化け物は見つけれませんでしたけど、ちょっと耳に挟んだことが」

「ん？」

「なんだ言ってみろ」

「あ、はい。」

「嬉野温泉で噂になってるんですが」

……

“ゴクゴク”

「うーん、美佳先輩といえはそう見えないこともないけど。」

「この画像じゃ小さくてよくわからないですね。」

「拡大してもぼやけてるし」

“パクパク”

「それにこの人眼鏡してないじゃん。

美佳つちいつも眼鏡してたから、その印象が強くてちよつとわからないかも。

ヒツキーはわかるの?」

「いつも眼鏡してたわけじゃないだろう。

普通に寝る時は外してたし、あ、それに風呂入ってる時も眼鏡してなかったし。

だからよくシャンプーとリンス間違えてな」

「……………」

「え、あれ?」

「…………ヒツキー」

「…………一緒に風呂入ってたんですね」

「…………馬鹿」

「ガシガシ」

「まあ、まあなんだ。

……………根拠なんてないんだ。

だが、俺にはわかるんだ、これはあいつだってことが」

・  
・  
・

「キユキユ、キユキユ」

『あのね、嬉野温泉のイベントの前にみんなでフランシユシユのこれからのことを話し合ったと。』

それでみんなでアイドルのトップ目指して頑張ろうってことになつて。

なんかさ、ああやってみんなで話し合ったの初めてで、がばい良かった』

「ジャー」

……………みんなですってなんだよ。

わたしはみんなには入っていないのかよ。

「・・・」

“ゴシゴシ”

・・・ほんとほはさ、わかっただそんなの。  
わたしはアイドルじゃないから、みんなと同じ目標なんて。  
・・・なら、わたしは、わたしの目標って。  
わたしは何をやりたいんだ。

“スツ”

「あっ！」

“ガチャン！”

や、やっちゃった。

このお皿、巽さんのお気に入りであったのに。

「あゝあ、また怒られちゃう」

“カチャカチャ、カチャカチャ”

『お前にしか出来ないことがあるはずだ』

って、巽さん言ってたけど。

わたしにしかできないことってなんなんだ。

・・・わかんないよそんなもん。

第一、わたしってなにもんなのかもわからないのに。

ミカって名前も巽さんが。

・・・わたし、誰なんだよ。

「はあ〜」

兎に角、まずはお皿片付けないと。

“カチャカチャ”

「ん、あつこれ」

“ひよい”

へへ、ほんと禍々しいやこのデザイン。

マックスコーヒーつか。

めっちゃ甘くて、なんかすごく懐かしい味がしたんだ。

『これ、千葉の誇るソウルドリンクです。』

俺も大好物です』

・・・千葉か〜

あつ、もしかしたら千葉に行ったらなにか思い出せるかも。  
それで、もしかしたらわたしが何者で、そして何をしたいのかも。  
それにもしかしたらあの人にもまた・・・

『ま、また会えるといいですね』

“カー”

ま、まただ。

なんだろう、あの人のことを思うと顔がこんなに熱くなって、  
それで胸がドクンドクンって高まって、キュッって苦しくなる。  
そう、この指輪を見ている時みたいに。

・・・もう一度会いたい、あの人に。

だからわたしは

「行ってみたい、千葉に」

「千葉がどうかしました?」

「へっ!」

あ、じゅ、純子ちゃん。

い、い、いや、べ、別に何でもない、何でもない。

そ、そ、それよりどうしたの?」

「あ、あの、紅茶を」

「紅茶?」

うんわかった。

お皿片付けてから淹れるからちよつと待ってて」

「いえ、そうではなくて。」

もしお時間よろしければ、美味しい紅茶の淹れ方教えて頂けません  
か?」

「え、紅茶の淹れ方?」

あ、そうだ約束してたっけ。

いいよ、ちよつと待っててね」

「お客さん、タクシー来ましたよ」

「あ、すみません。

ゆきのん、ほら帰るよ」

「う、うとうとう」

“ふらふら”

「由比ヶ浜、大丈夫か？」

「うん大丈夫。」

それじゃ、あたしゆきのん送っていくから、いろはちゃんをよろしくね」

「おう。」

あ、そうだ由比ヶ浜」

「ん？」

「これ渡しておくわ。」

頼まれてた出張のお土産。

なんか渡しそびれてたからな」

「あ、ゆつつらくんのキーホルダー。」

憶えてくれてたんだ。

ありがとうヒツキー」

「おう」

「………あ、あのねヒツキー」

「ん？」

「……よかったね」

「ああ。」

じゃ、またな」

「うん。」

またねヒツキー、いろはちゃん」

「はい、結衣先輩もお気をつけて」

“スタスタスタ”

「さてっと、俺達も帰るか」

「うくん」

「大丈夫か一色」

「大丈夫じゃないみたいです。」

少し飲み過ぎました。

先輩、すみませんがおんぶして下さい」

「は？ はあー！」

断る、断じて断る」

「なんでですか！

こんなかわいい後輩を置いてさっさと帰る気ですか。

気分が悪くて動けない後輩を一人残して」

「いや、し、しかしだな」

「一人残されたわたしがどうなると思うんですか。

きつとどこかに無理やり連れ去られて、あんなことやこんなことを。

そうになったら、先輩、責任取ってくださいね」

「わ、わかった。

ほら、さっさと乗れ」

「へへ、ありがとうございます♡」

「どき」

「お、おも」

「パシッ」

「いて」

「今何か言いました？」

「い、いや、なにも。」

「じゃ帰るぞ」

「はーい」

「ゆさ、ゆさ」

「むにゆ」

「………あ」

「ゆさ、ゆさ、ゆさ」

「むにゆ、むにゆ」

「………う」

「ゆさゆさゆさ……ゆさ」

「むにゆむにゆむにゆ……むにゆ」

「……………」

「……先輩、わざと揺らしてますよね」

「え！」

「あ、い、いや、そ、その」

「……………いいですよ。」

「このまま大人の関係になっても」

「お、大人の関係……」

〃ごくくつ〃

「はっ！」

「ば、ばっかお前」

「げ、本気にしたんですか。」

「マジキモいんですけど」

「ち、くそ！」

「先輩」

「ああん」

「……………雪乃先輩のあんな姿、初めて見ました」

「……ああ」

「先輩、少しは雪乃先輩のことも気をかけてあげて下さいね」

「そうだな」

「それと結衣先輩のこともですよ」

「ああ」

「……………わたしのことも」

「え？」

「な、なんでもないです！」

「あ、あともう一つお願いがあります」

「断る！」

「即答！」

「いいんですか、わたしの胸の感觸楽しんで、あんなことやこんなことしたって」

「雪乃先輩と結衣先輩にチクつちやいますよ」

「お、おい、なんだあんなことやこんなことって。」



……で、なんだ」

「先輩。

……美佳先輩、見つけたら一番に教えて下さい」

「一色」

「まったく、高校の時からいっつも好き勝手ばかりやって！

どれだけわたしが……

だから、だからわたしは……今度こそいっぱい怒ってあげるんです！」

「……わかった」

「お願い……い……しま……す……ね……」

“すゝ、すゝ”

「へ、お、おい一色」

「くう、くう」

「マジか」

“ゴクゴク”

「何か違います」

「へ、あ、いや、美味しいよ。」

これはこれで十分に美味しいから」

「いえ、ミカさんがいつも淹れてくれる紅茶に比べたらやはり何か違います。」

もう一回、初めからお願いします」

「う、うん。」

それじゃお湯を沸かすところから」

・  
・  
・

「それじゃ、その沸騰したお湯を勢いよく注いで。

勢いよくがポイントね」

「はいー」

“ ジョボジョボ ”

「こ、こんな感じでよろしいでしょうか？」

「うん。」

そしたらすぐ蓋をして、あとはじっくりと蒸らすだけ。

ほら、茶葉がポットの中で浮き沈みしてるでしょ。

これが美味しい紅茶のコツ！」

「あ、はい。」

浮き沈みしてます」

“ ジー ”

へへ、純子ちゃんポットの中をじっと見てる。

なんかめっちゃ可愛い。

やっぱり昭和のトップアイドルはゾンビイになっても違うね。

昭和っか。

そういえば、純子ちゃんこう見えてわたしよりずっと年上なんだよね。

あ、でも確か純子ちゃん19歳って言ったから、わたしのほうが年上？」

えっと、この場合どうなるんだ？」

うくん。

「あ、あのくミカさん、何か？」

「え、あ、なんでも」

「そろそろでしようか？」

「あ、うん、そだね。」

それじゃカップに」

「はい」

“ とぽとぽとぽ ”

「あとは、この最後の一滴が大事なんですネ」

「そうそう。」

これが大事なんだ、このゴールドドロップが」

“ ちよぼくん ”

「それでは頂きましようか」

「うん、いったただつきまゝす」

“ゴクゴクゴク”

ぷはあゝ

うん、美味しい。

これはこれで十分美味しいと思うんだけどなく  
それに、

“たぶたぶ”

さ、さすがに6杯目はきつい。

お腹が紅茶でたつぷたつぷ。

もうここらへんにしとかないと。

“ごくごく”

「ふう〜」

「じゆ、純子ちゃんどう?」

「…….なにか違います」

へっ、う、うそ。

い、いやほんと美味しいって。

「ミカさん!」

「は、はい」

「もう一回お願いします」

「ひ、ひえゝ、も、もう飲めましえゝん。  
勘弁してゝ

うっぷ!」

や、やばい、でちやうでちやう。

も、もう絶対無理。

「仕方ないですね。」

それじゃ今日はここまでにしておきましょう。

…….ところでミカさん

「あ、はい」

「何かあったんですか?」

「ミカさんがお皿を割るなんて珍しい」



「こ、恋！」

「ええ」

「い、いや、でも、だって、い、一回しか。」

その人にはそんな時に一回しかあったことないのに。

話したのも10分か20分ぐらいだよ」

「恋に回数や時間なんて関係ないといえます。」

出会った瞬間に恋に落ちることもあるとか」

「・・・純子ちゃんもそんな経験あるの？」

「い、いえ。」

ア、アイドルに恋愛は厳禁ですから、わたしは・・・」

「・・・そっか恋っか」

えへへへへ」

「ですがミカさん!!」

「あ、は、はい」

「わたし達はゾンビイです。」

だから恋なんてものは」

「・・・ゾンビイだから人を好きになっではいけない」

「当り前です」

「・・・」

そうだ・・・よね。

わ、わかってる、わかってるけど純子ちゃん。

・・・でも、どうしてもわたしは。

だってこのままじゃ・・・このままじゃ嫌なんだ。

わたしは、わたしだって！

・・・純子ちゃんならわかってくれると思ったのに。

「ミカさん、わたしたちはもう死んでいるんです」

「う、うん」

「わかってくれればいいんです。」

わたし達はゾンビイ、だったらゾンビイはゾンビイらしく」

「・・・ゾンビイらしくってなんなのさ」

「えっ？」

「純子ちゃんだつて!!」

自分達だつてゾンビイのくせにアイドルしてるくせに!

そんでみんなでアイドルのトップとるつて!

みんなは、みんなはあんなにイキイキしてるのに!

それなのに、それなのにさ、わたしは夢とか希望とか持つちゃいけないの。

わたし生きてるんだよ。

死んでるかもしれないけど、それでも生きてる。

だからわたしも生きてるつて感じたい!

：：あの人のことと思うと、こんなにここが、この胸が痛いんだ、苦しんだよ。

だから」

“ダー”

「純子ちゃんの馬鹿!」

“バタン!”

「ミカさん、ミカさん待つて」

“ガチャ”

「あつ」

「………」

「聞いていたんですか」

「ああ」

「……わたしは間違っていたのでしょうか」

「……」

「巽さん」

「純子、お前は間違つてはいない」

「………そうですか」

“スタスタスタ”

「……だがな純子。」

この世の中、間違つていないつてことが全て正しいつていうことじゃない。

お前にはお前の、ミカにはミカの、それぞれの正解がある。

いずれお前にもわかるだろう」

「……………」

「ガチャ」

「あ、お早うございます大古場さん」

「おう、お早う」

「あ、大古場さんこれなんすけど。」

「なんかポストに匿名の投稿が入ったみたいなんすよ」

「投稿？」

「ええ。」

「なんか嬉野温泉に亡霊が出たって記事で。」

「関係者のインタビューと写真とかもあるみたいで」

「どれ見せてみる」

「あ、はい」

「……ふむ」

「なあ、本当に俺達だけで良かったのか？」

「せめて陽乃さんも」

「いえ、先方の古怒田課長さんから、まずは担当者同士で話を詰めましょうって

「ことだったから」

「そうか」

「……スタスタスタ」

「……あの、比企谷君」

「ん？」

「一昨日はごめんなさい」

「いや、俺は何もしていない。

お前を送っていったのは由比ヶ浜だしな」

「そう。」

一色さんはちゃんと帰れたのかしら。

彼女も結構飲んでいたみたいだったけど」

「……………」

「比企谷君？」

「い、いや、な、何もしていない。」

あいつ寝てたから、そ、それで仕方なく家に」

「……………家に泊めた」

〃く〃

「あきれた」

「い、いや、マジ何もしてないから。」

あんなこともこんなことかも」

「あんなこと？」

……………そんなのわかってるわ。

あなたに一色さんに手を出す度胸なんてないもの」

「……………」

「気をつけなさい。」

一色さんに変な噂でもたったらどうするの」

「ああ」

〃スタスタスタ〃

「……………私だったとしても泊めてくれた？」

「泊めない」

「え、そ、そう。」

まだアルコールが残ってるのかしら変なことを聞いたわ。

忘れてくれると嬉しいのだけど」

〃スタスタスタ〃

「……………一色の家は知らないからな」

「え？」

「お前のマンションは知ってる。」



だからちゃんと送ってやる」

「そう」

“スタスタスタ”

「……それに陽乃さん、こえくし」

“スタスタスタ”

「すみません、雪ノ下建設の方ですか？」

「え、はい」

「お待ちせしました、古怒田です。」

えっと」

“スー”

「いえ、今着いたところです。」

雪ノ下建設企画部課長の雪ノ下です」

「あ、すみません頂きます。」

課長、あなたが……」

「どうかしました？」

「あ、いえ。」

わたしはちよつと今名刺を切らせてまして。

担当の古怒田です。」

それでは、早速会議室に」

“スタ、スタスタ”

「……あ、すみません古怒田課長」

「え?」

「あの、部下の比企谷です」

「あつ。」

すみません、お一人かと」

「……なんかすみません、比企谷です」

「ムスー」

「なに不機嫌な顔してるのかしら」

「べ、別に」

「普段から存在感がないあなたが悪いんじゃないの」

「……」

「ガチャ」

「お待ちせしました。」

「えっと、コーヒーでよろしかったですか？」

「あ、課長、課長自ら」

「気になさらないでください。」

「すみません、今ちよつと手の空いてるものがいなくて」

「カタ」

「あ、いえ、ありがとうございます」

「君もすまなかったね。」

「ちよつと急いでたから」

「カタ」

「いえ、慣れてますから」

「……それでは早速始めましょうか」

「ではまず私たちの企画案からご説明します。」

比企谷君、資料を「

どうぞ」

「それでは当社の企画案をご説明します。」

今お配りました資料につきまして、詳しくご説明させて頂きますので、

スクリーンをご覧ください」

「つというように、一部の施設の改築は必要となりますが、

既存の施設の有効利用により、佐賀の魅力を高めることが可能と考

えます。

それとこちらが施設の買収リストです」

「・・・既存の施設の再利用か」

「はい。」

新たに施設を作らなくても、佐賀には魅力ある観光資源が溢れているというのが

わが社の見解です。

それらの有機的連携により」

「失礼ですが、佐賀の都道府県の魅力ランク調査結果知っていますか」

「・・・45番目」

「そう。」

47都道府県の中の45番目。

ちなみに去年は46番目。

魅力ある観光資源に溢れているというなら、この結果はどう思われますか」

「それは」

「・・・キラークンテンツがない」

「そ、その通りだ。」

えつとヒキタニ君」

「・・・比企谷です。」

福岡なら博多ラーメン、大分なら別府温泉、熊本なら阿蘇山や熊本城、

長崎ならグラバー園やちゃんぽん、そういった県をイメージするものが

佐賀にはない」

「そうなんだ。」

有田焼や伊万里焼と聞いて佐賀をイメージするだろうか。

だからこそ、だからこそなんだ。

我々の企画案通りこの一大テーマパークを作って、佐賀のキラークンテンツと

する必要があるんだ」

「ですが」

「そのためには、当然雪ノ下建設さんにも大いに力になってもらいたいと思っております」

「……」

「それではそういうことで」

「宇宙ワールドって知ってますか？」

「……ああ」

「それならよかった。」

「すぐお隣の長崎には日本最大の面積を持つテーマパーク“ハウステンボス”がある。」

「それに少し羽を伸ばせばUSJも。」

「佐賀のキラークンテンツにするには、少なくともハウステンボスに勝つぐらいの」

「ものが必要となってくる。」

「それに設備の老朽化対策やマンネリ打破のための刷新とかも必要でしょうから、」

「そういった諸々のことを考えるととても莫大な費用になる。」

「とてもこの企画でそれを回収できるとは思えない。」

「それこそ宇宙ワールドの二の舞ですよ。」

「失礼ですがお宅の企画案には乗れませんね」

「……」

「比企谷君」

「すみません、言い過ぎました」

“ガシガシ”

「……もしハウステンボスに勝てるものがあるとしたら？」

「えっ」

「古怒田課長、そんなものあるんですか」

「……まあいい。」

「わかりました、基本的には貴社の企画案で進めましょう。」

「最終的には年末の役員会の議案に上げたいと思います」

「はい」

「早速ですが、佐賀の支店に本件のプロジェクトチームを置くことになりません。」

雪ノ下建設さんのご担当の方にも是非佐賀に来て頂きたいのですが」

「・・・わかりました。」

おつてご連絡させていただきます」

「では」

「はい」

・  
・  
・

“スタスタスタ”

「つたく」

「すまない」

「もう社会人なんだから、少しは言い方に気をつけなさい」

「うつつ」

「・・・でもありがとう。」

さすがにあの企画案では」

「ああ。」

陽乃さんからもお付き合い程度のものだから、

お互いの傷が深くないようにって釘刺されてるしな」

「ええ。」

父さんの選挙の件がなかったらお断りしていたはずよ」

「向こうの社長さん、後援会会長だもんな」

「ええ」

「・・・なあ」

「なにかしら？」

「いや、ちよつと気になることがあつてな」

「気になる？」

「ハウステンボスに勝てるもの。」

あの古怒田って課長の態度なんか気になつてな」

「・・・そうね」

“ゴクゴク”

「ふう〜」

「少し飲み過ぎじゃねえか」

「・・・」

「会ってしまったんだな。」

それで記憶を思い出すため千葉に行きたいっか。

そんなに言うなら行かせてやったらどうだ」

「あいつを一人で千葉に行かすわけにはいけません」

「そうか。」

・・・なら、あれを返してやったらどうだ？」

「あれとは？」

「お前が隠したあれだ。」

あれ見たら記憶戻るんじゃないのか？

あの娘も自分が死んだことはもう納得しているんだろう。

だったら返してやってもいいんじゃないか」

「納得しても、頭で納得していても、頭と心は別です。」

あいつはすごいさみしがりなんです。

もし記憶が戻ったら、きつとあいつはさみしくて平気でいられなく

なる。

きつと・・・」

「ならどうするつもりだ」

「・・・」

—————

んくと、巽さんいるかなあ

“キヨロキヨロ”

リビングにもいないっか。

部屋にもいなかったし、どこ行ったんだらう。

お願いしたいことがあるのに。

ん？

“わなわなわな”

どうしたんだらうさくらちゃん。

なんか雑誌観て震えてるけど。

それに顔色が……それはメイクしてないだけっか。

ふむ、それにみんなもなんか様子が変？

どれどれ、雑誌に何か書いてあるの？

“ひよい”

嬉野温泉の怪？

暴れまわる亡霊？

ボ、ボウリング生首？

え、えつと、これってもしかしてみんなのこと？

あ、巽さんがスポンサーがダメになったって言ってたのもこのこと  
が。

「さ、さくらちゃん」

“のしのしのし”

あ、巽さん来た。

げっ、なんか、めっちゃ怒ってらっしやる。

とても千葉に行きたいっってお願いできる雰囲気じゃない。

ここは、君子危うきになんとかだ。

今は退散退散っつと。

ごめんねさくらちゃん！

“ダー”

「あ、ああああ」

“わなわなわな”

「次やったら坊主」

「温泉行った時のだ。」

「書かれちゃったね」

「どこの出版社だ」

「締めに行こうぜ」

「ごめんなさい。」

「次からはもっと慎重に行動します」

「まあまあ、わっちらもみんな足湯に入ったでありますから。」

「あんなふうにみんなで語らうのは初めて。」

「楽しかったであります」

「だね。」

「仲良くなった分、きつとパフォーマンスもよくなるよ」

「ゆうぎりさん、リリースちゃん」

「それにわっちらは疲れ知らずであります」

「姉さんの言う通りだ。」

「次で取り返そうぜ」

「うん」

「しゃー！」

「気合入れて、活動資金稼ごぞー」

「「おー」」

「活動資金はあくまで手段だからね」

・  
・  
・

“トボトボトボ”

『わたし達はゾンビイ、だったらゾンビイはゾンビイらしく  
ゾンビイらしくつか。』

その通りだよね、あの時のわたしどうかしてたんだ。

はあく、純子ちゃんには悪いことしちゃったなあ。

わたしのこと真剣に考えて言ってくれたのに。

ちゃんと謝らないと。

・・・でも、でもさ、やっぱりわたしは千葉に行きたい。



千葉に行ったらきつとわたしのことが何かわかる気がする。  
だから巽さんをお願いしてバイトさせてもらうんだ。

それで電車賃稼いで。

“トボトボ、ピタ”

・・・巽さん、いるかなあ。

「ミカ？」

「え？ あ、愛ちゃん」

「あなた何してるのこんなところで」

「え、あ、あの」

「巽に用事あるの？」

ちようどよかったわ

“カチャ”

「いいかしら」

「なんじゃない、ノックぐらいしろ。」

常識じゃろがい

“トントン”

「これでいい？」

「・・・」

「なにしてるの。」

あなたも用事があるんでしょ。

ほら早く入りなさい

「あ、あの〜」

「ん？」

おお、いいところに来たなミカ。

ちよつとそこに座れ

「え、あ、はい」

・  
・  
・

“ペタペタ、ぬりぬり”

・・・な、なんなんだ？

いきなり異さんメイク始めたんだけど。

今からどこか出掛けるのかなあ。

それにメイク、なんかいつもと違うような気が。

“ジー”

げ、愛ちゃんさつきからずつとこつち見てるし。

な、なんなんだ、なんかめつちや怖いんだけど。

「あ、あのく異さん、なんで今頃メイクを？」

「ふむ、こんなもんじやろ。」

「どうだ愛」

「ええ、いいんじゃない。」

「これなら」

「それなら例のものを頼む」

「ええ」

む、無視――

でも例のものってなんだ？

あ、愛ちゃんなんか紙袋持ってきた。

そういえばさつき用事があるからって愛ちゃんのメイクしたけど、

どっか行ってきたのかなあ。

「あ、あの愛ちゃん」

「いいからじつとしていて。」

あ、その前にこれ返しておくね。

眼鏡の修理終わってたから」

「あ、さつき用事があるからってこのことだったんだ。

わざわざ取りに行ってくれてありがとう。

へへ、これがないと落ち着かなくて。

あ、でも、じつとしていてって何を？」

「これでいいかしら」

「ふむ、いいじやろいいじやろ。」

ほらもういいぞ、鏡を見てみる」  
ふう〜、やつと終わった。

何だったんだ、夕飯の準備とかしないといけないのに。

あ、でもさつき愛ちゃんつけてくれたのってエクステ？  
でもいつたいなんで？

ま、とにかく鏡、鏡つと。

“スタスタスタ”

「え、あ、あれ？」

巽さん、何この顔」

「イメチェンじゃい。」

お前この前、日焼けしたメイクしていただろう。

それに合わせてみたんじやい。

これからお前のメイクはこれでいく。

どうだ、これなら今までの地味〜なイメージと違って、

お前でも少しは健康的で活発な感じがするだろう。

今までのお前から360°反転じゃ〜い」

「・・・巽さん、360°回転したら二元に戻るから。

でもなんでこんなメイクを？」

「いいか、お前には今日からフランシユシユのマネージャーになってもらう。」

そびためのメイクじゃい」

「・・・えっ、マ、マネージャー！

わ、わたしが？」

「そうだ」

「無理無理無理無理無理、絶対無理！

そ、そ、そんなのわたしでできるわけないじゃんか。

マネージャーなんてやったことないのに。

そ、それより巽さん、わたし千葉に」

「お前だけが頼りなんじやい。」

お前に俺を支えてほしい」

「わ、わ、わたしが頼り？」

「ああ、お前が頼みだ。」

俺の右腕として支えてくれ」

「頼み………異さんがわたしを？」

う、うんわかった！

わたし、マネージャーやってみる。

そ、そっかく、わたしマネージャーかく

えへへへへ、し、仕方ないなく

だ、だって右腕だって、支えてくれって。

えへへへ」

“ここにこ”

「……ちよろいな」

「ちよろいわね」

「え、ちよろ？」

「いや、なんでもない」

早速じゃが、明日テレビCMの撮影がある」

「テレビCMの撮影！」

「そうだ。」

お前は明日、あいつらのメイクが済んだら現地に先乗りしろ」  
「先乗りってわたし一人で？」

で、でもわたし何やったらいいのかわからないし」

「いつもの通りでいい。」

お前に初めから完璧なものなんて求めているない。

いつものお前のままでいいんじゃない」

“スタスタスタ”

「あ、た、異さん待って」

……いつものままでいいって言ったって。

アイドルのマネージャーってなにすればいいんだ。  
はっ！

「あ、愛ちゃん」

――

“ギョコ、ギョコ”

「はあ、はあ、はあ」

や、やっとなつた伊万里夢みさき公園。

CMの撮影って、ここで良かったよね。

えっとう

“ガヤガヤ”

あ、よかった。

あの人たち撮影の人達だ。

ほらカメラとかレフ版とか持つてる人いるし。

「……ふう〜」

よ、よし。

“スタタタタ”

ちゃんと昨日、愛ちゃんに教えてもらったんだ。

マネージャーにとって大切なこと。

それは

『あ、愛ちゃん、だずげで〜』

わ、わたしどうすればいいの?』

『はあく、まったくあの男は。

仕方ないわね。

いいミカ、まず一番大事なのは挨拶。

明るく元気に挨拶しなさい。

挨拶できない人は認めてもらえないから』

わ、わたしのマネージャーとしての第一歩。

頑張れミカ。

「おっはよーいまいすー」

今日はお世話になります。

フランシシュのマネージャーの……」

「ん?」

「なんだ？」

「だれあれ？」

え、えつと、わ、わたし名前……  
名前なんて言うんだ——！

えい、なんか適当に佐藤とか鈴木とか。

あ、で、でもどうせならなんかかっこいい方が。

そうだな、如月、神楽……

うくん、どうせなら外国人っぽいのもいいかも、ほらエリザベスとか。

あつ、クリステイナとかもいいなあ。

“ざわざわ”

げ、やば！

そんなこと考えてる場合じゃない。

えつと、

「あ、あの、フランシシュのマネージャーのローレンス・ミカです」

「ローレン、へ？」

「お、おい、あの人って」

「ああ、もしかして可哀そうな人じゃね」

“ひそひそ”

げ、や、やばい。

やつぱ、ローレンスはさすがにまずかったかも……

「あ、あの〜」

「ロ、ローレンスさん、よ、よろしくお願いします」

「よろしく、ローレンスさん……ふう、ふう、ふう」

「し、しゃーす」

げ、やばいやばい。

み、みんなから痛い子を見る目で見られてる。

あの人だ爆笑してるし。

う〜

ど、ど、どないしょ〜

ん〜

「この機材、ここでいいすつか」

「おー、テント立ててるの手伝って〜」

あ、そ、そっだ、そんなこと考えてる場合じゃない。  
みんな準備で忙しそうだし。

『いいミカ、それと周囲への気配りを忘れないこと。』

現場の雰囲気をよくすることも大事な仕事なんだからね  
わたしも手伝わなくっちゃ。

え、えつと〜、だったら何を。

“キヨロキヨロ”

「あ、それも運ぶんですか？  
わたし手伝いますね」

「あ、ロ、ローレンスさん、ありがとう。」

じゃ、テントまでお願いします。

………クスクス」

「……はい。」

あ、あの、ミカでお願いします」

・  
・  
・

「あの鳥、可愛くない」

「てめえちんちく！」

ドラ鳥の不死鳥コッコさんに失礼やろが」

「コッコさん？」

「なにやっとなるんじやいお前ら。」

「こつちこんかい」

“ゾロゾロ”

「こちらがこのドライブイン鳥の社長さんじやい」

「こんにちわ、初めまして」

「「こんに」

「ちやーっす！」

「うっせ」

「本日はありがとうございます。」

皆様には思う存分うちの宣伝をしてもらいたいと思います。

まずは中に入って、当店自慢の焼き肉を食べてください」

「うわ〜」

「ありがとうございます」

「あざーすー!」

“わいわい、がやがや”  
やっぱいな〜

そろそろ撮影始まりそうな感じだけど。

異さん達まだ到着しない。

何してんだらう。

「マネージャーさん、カメラハやりたいんですが、  
フランシユシユさんはまだですか?」

「あ、す、すみません。」

今確認します」

「はい、お願いしますね」

ほ、ほら怒られたじゃんか。

もう!

“カシヤカシヤ”

車混んでるんかなあ。

時間忘れてることはないと思うから。

と、兎に角、電話しないと。

“プルルルル、プルルルル、カチャ”

「はい、もしもし」

「あ、異さん!」

な、なんやってんの。

もう撮影始まつちやうよ」

「あー、たえちゃん、生肉は駄目だつて!」



「純子はん、そのはちみつ黒酢カルピスどうでありんすか？」

「はい、すごく美味しいです！」

「あ、サキちゃんまたリリーの育てたお肉食べたー」

「あん！」

焦げてんじやねえか」

〃ワイワイ、ガヤガヤ〃

「…………お、おい異。

お前ら何やってんだー、おらー！」

「何ってドライブイン鳥への理解を深めるためにだな。

って、お前ら食い過ぎじゃーい」

「く、食いすぎ？」

…………てめえ！

いいからさつさと来い、この馬鹿！」

〃プー、プー、プー〃

く、くっそー

あいつら、肉食ってやがった。

ま、まったく！

「あの～マネージャーさん、フランシユシユさんは」

「あ、あの、い、いまこっちに向かっています。

それまで、わたし代わりにやります。

7人分頑張りますので。

えつとく、あ、あの着ぐるみ着ればいいんですね」

「着ぐるみ？」

え、あ、はい」

・  
・  
・

「ドライブイン鳥」

〃ピシッ〃

「はい、一応OKです」

はあはあはあ、き、昨日絵コンテとかCMとかチェックしておいて

よかった。

でも

“ちら”

へへ、結構この鶏の着ぐるみ似合ってるんじゃない？

えつと鏡、鏡つと。

あ、あつた。

「ドライブイン鳥」

えへへへ、このしつぽとか可愛い。

今度自分で作ってみようかなあ

「は、いい、監督さん入ります。」

お願いしやーす！」

「ご苦労様です」

え、監督？

あ、あの緑の帽子のちよつと太めの人？

そつだ、こんなことしてる場合じゃなかった。

『それと、監督とスポンサーさんのご機嫌を損なわないこと。』

できるだけコミュニケーションをとって、顔を覚えてもらうこと。

また次のお仕事頂けるかもしれないからね』

よ、よし。

“スタタタタ”

「監督さん、おはようございます。」

フランシシュのマネージャの……ロ、ローレンス・ミカ

です。

今日はよろしくお願いします」

「ローレン……」

「……」

「よ、よろしくね。」

でも、マネージャさんがなんで衣装着てるの？」

「あは、あははは、いろいろとあります」

「そう？」

それよりそろそろ始めようか」



“カシヤカシヤ”

も、もう何やってんだ巽さん。

撮影、遅らせるのもう限界だつて。

ほら、さつさと電話出ろつてんだあの馬鹿。

「もしもし」

「もしもしじゃなくい！」

な、何やってんだ。

もしかしてまだお肉食べてんのか！」

「仕方ないじゃろうがい。

社長が次から次へとお肉出してくれるんだから、食べないと失礼じゃろうが。

まあ安心しろ。

今ドライブイン鳥を出るところだ。

そうだな、ここからならあと17分ぐらいで着く」

「じゆ、17分も！」

そんなの、もたないよ」

ほら、みんな集まってきたし。

どうすんだよ、撮影始まちやうよ」

・・・ん？

あ、いま巽さん確か。

「ね、ね、巽さんもしかして」

「君、そろそろ」

「あ、はい。」

それでは集合お願いしやーす！」

“ゾロゾロ”

「諸々準備よろしいでしょうか」

まずは出演していただく・・・

あれ、そういえばフランシユシユさんは？」

「……………」

「まさかまだ来てないんじゃないだろうね！」

「マネージャさん？」

「ぐふ」

「ぐふっ」

「ぐふふふふ。」

監督さん、フランシユシユが遅れているのには、のっぴきならない

理由が

あるからなのです！」

「理由？」

ふむ、どんな理由かね？」

「それは」

「それは？」

「それは！」

“ぐく”

「そ、それは」

「着いてからっというこつで」

「……………」

・  
・  
・

“イライライラ”

げ、や、やばい。

いくら温厚な監督さんでもそろそろ限界だよね。

巽さん、お願いだから早く来てー

「えい、もう待てない。」

主演がいないのなら今日の撮影は」

「す、すみません。」

も、もうちよつとだけ」

“キキキ”

「あつ、来た！」

き、来ました監督ー」

〃 バタン〃

「おい、お前ら早く降りてこんか〜い」

〃 スタスタスタ〃

「お待たせしましたフランシシュのプロデュ

「邪魔！」

〃 ドン！〃

「きやい〜ん！」

「皆さ〜ん、お待たせしましたー」

ドライブイン鳥の社長さんです。

はい、拍手〜」

「おおー」

〃 パチパチパチ〃

「君、連絡してなかったのかね」

「い、いえ、確か」

「すみません、私が忘れていました。

先ほどフランシシュさんから言われて思い出して。

一緒に連れてきてもらいました」

「そうですか。

いやお待ちしました。

さ、さあこちらへ。

あ、君」

「はいはい。

社長さん、椅子をどうぞ。

フランシシュのマネージャーやってます……………  
口、ローレンス・ミカです。

よろしくお願いします。

あ、紅茶どうぞ」

「ローレン……………」

あ、ありがとうございます」

「どき」

「肩凝っていませんか？」

お揉みいたしますね」

「ど、どうも」

「ぐい」

「お、おい」

「あ、異さんいたの？」

「さつき思いつきり突き飛ばしたじやろがうい。

それよりローレンスって、お前ローレンスなのか？」

「う、うっさい、いろいろあんだ。

それより、ほらみんな準備準備、あのテントに衣装あるから。

あ、さくらちゃん、たえちゃんお願い」

・  
・  
・

「ドライブイン鳥」

へへ、楽しかったなあ〜撮影。

たえちゃんなんてコッコさんに噛みついちゃってめっちゃ大変  
だったけど。

さくらちゃんや愛ちゃん、みんな頑張ってた。

鳥、最後は鳥になりきってたし。

「なんだ、まだそれ観てたのか？」

「うん、だって愛ちゃんが言ってたし。

映像チェックするのもマネージャーの仕事だって。

でもみんなすごいね、こんなに面白いCM作っちゃうんだもん」

「・・・あいつらだけの力じゃない」

「うんわかってる。

監督さんや音響さん、照明さんとか現場の皆さんの力だよね」

「お前もじゃら」

「えっ？」

「このCMは、お前も含めて全員で作り上げた作品じゃい」

「わたしもみんなと一緒に」

「ああ」

「そ、そっか、そうなんだ。」

えへへ、わたしも一緒に」

「焼き鳥1番、鳥めし2番、3はサラダで♪」

「・・・・・・異さん」

「なんじやい」

「わたしね、今日なんかすごく楽しかった。」

そりや異さん達、なかなか来ないから大変だったけど。

でも、なんかすごく生きてるって感じがした」

「ゾンビイなのにな」

「へへ、わたし生き返っちゃいました。」

「・・・・・・あのね、わたし頑張ってみるマネージャー」

「そうか」

「どれだけできるかわからないけど、自分らしく精一杯頑張ってみる」

「無理はするな」

「うん。」

あ、それはそうと異さん、今日お肉食べてたよね。

お土産は？

今日いっぱい頑張ったわたしへの、お、み、や、げ♡」

「わかつとるわい。」

ほら、ここに焼き肉用にちゃんとお肉を買って・・・」

“ムシヤムシヤ”

「た、たえ！

いつの間に」

「げ、たえちゃん！

そ、それ、わたしのお肉だかね！

うゝがー！」

“がぶつ”

「あゝー、うががー」

“がぶがぶ”



「がうがう」

「がうー！」

「や、やめんかーいー！」

お前ら生肉に齧り付くんじやない。

ミカ、お、お、お前、元のゾンビイに戻ってるやないかーい！」

「うゝがー、に、肉ー」

・  
・  
・

〃ガチャ〃

「あ、古怒田さん」

「どうだ、何か情報あったか」

「ええ、サガジンの記事の効果もあつて、ネットに結構入ってます」

「で、どうだ」

「面白い情報見つけましたよ。

古怒田さん憶えてますか、商店街の深夜の発砲事件の件」

「発砲事件？」

「ああ、あの唐津のやつか」

ガタリンピック　ープライドと決意と・・・すれ違いー

「ごめんね、もう今度のイベントの地元出演者枠決まっちゃっててね。ライブのタイムスケジュールとか出来ちゃってんだよね」

「あ、いえ、こちらこそご無理を言ってますみません。」

今日はお忙しいところ、お時間頂きありがとうございます。また次回よろしく願います」

“ペこ”

「じゃあね」

「あ、はい」

“スタスタスタ”

「あの娘、誰っすか？」

なんか最近、局内でよく見かけますけど」

「え、あくなんだっけ、フラ何とかってご当地アイドルの売り込み」

「へへ、ご当地アイドルってまだそんなのあったんすね」

「だな」

「あ、そんなことより会議の時間やばいっすよ」

「マジか」

“タッタッタッタ”

「・・・ふう。」

帰ろっか」

“トボトボトボ”

はあく、また今日もお仕事もらえなかった。

何日もこのテレビ局通って、やっと話聞いてもらえたけどさ。

“ガシガシ”

そう甘くないってわかってたけど、さすがにこう毎日駄目だと正直凹む。

・・・やっぱりわたし向いてないのかなあマネージャー

「はあく」

「キユツ、キユツ」

「発砲騒ぎのあった寿通り商店街、生首騒動のあった嬉野温泉、そして  
こー」

「キユツ」

「俺があのかげ物を見つけた千代田橋。

この地図上の三点を結んだ範囲。

きつとこの範囲のどこかに隠れているはずだ」

「でも結構広いですよ古怒田課長」

「ギロ」

「あつ、す、すみません所長、古怒田所長」

「まあいい。

いいか、金はかかってもいい。

必ず探し出せ。

俺のプロジェクトには絶対この化け物が必要だからな」

「プロジェクト……ですか」

「ああ。

みてろ、この佐賀に一大テーマパークをつくるんだ。

ホラーとスリルのテーマパーク、ゾンビランドサガをな！

既に心当たりの土地の調査も済んでいる。

そして、この化け物はそのテーマパークの目玉になるんだ。

この化け物さえ手に入れば、ハウステンボス何て目じゃない。

だからどんな手を使ってもいい。

この化け物を探し出して捕まえろ」

「捕まえた暁には」

「ああ、わかっている。

お前が今までに見たことのない大金、拝ませてやる。

一生遊んで暮らせるほどのな。

……俺はこんなくそ田舎でくすぶっている人間じゃないんだ。  
だ。

必ずこのプロジェクトを成功させて、本社に戻ってやる」

「トントン」

「どうした」

「ガチャ」

「すみません、所長。」

雪ノ下建設の雪ノ下課長と比企谷さんがお見えになりましたが」

「ああ、わかった。」

今行くから、会議室に待たせておけ」

「はい」

「スタスタスタ」

「雪ノ下建設ですか。」

確か今回の件、雪ノ下建設との共同プロジェクトだとか」

「ああ。」

なんか既存の施設を有効利用するんだとか、

しよっぽいプロジェクト案持ってきてやがった。

なあ知ってるか、二十歳そこそこのガキが課長だよ。

何の実績もねえだろうに、血縁だけで課長なんだろうよ。

まったくどこもかしこも血縁、血縁、血縁！

やだね、血縁ってのは。

気に食わねえが、下手に出て適当にいい思いさせておけばいいだろう。

まあ、大事な金鶴だからな、金引き出すまでそれなりに丁重に扱ってやる。

さてつと、あんまり待たせてご機嫌を損ねてもいけねえ。

じゃ化け物の件、頼んだぞ」

「はい」

・  
・  
・

「トボトボトボ」

ふう、疲れた。

さっさと水浴びして、今日は早く休みたい。

「ぎゃく、ぎゃく」

“ ドタバタ、ドタバタ ”

へ、なんだ？

みんな何騒いでんだ？

家の外まで、声響いているんだけど。

はっ！もしかして晩ご飯遅くなったから、

たえちゃんがお腹すかせてまた暴れてるんじゃない。

“ ガチャ ”

「ただいま」

ごめんね、今晚ご飯つくる・・・から。

へ？」

「てめえぶつ殺す！」

「は、はあー！」

“ ビュン ”

「ひ、ひえ」

ちよ、ちよつと待ってサキちゃん。

なんでいきなりバツト！

ちよ、ちよつと危ないって」

“ ビュン ”

「ひやつ、ご、ごめん今ご飯作るから許して！」

「うおりゃー！」

“ ビュン ”

「ひえっ」

“ スデン ”

あわわわわ。

いくら晩ご飯が遅くなったからって、ちよ、ちよつとやり過ぎだ。

いま避けなかったたら、間違いなく頭吹っ飛んだ。

「サキちゃん！」

“ カサカサカサ ”

「ち、逃げやがった。

愛、そっち行つたぞ」

「ひい」

「バカ、逃げてんじやねえ。

くそ、純子挟み撃ちだ」

「あ、は、はい」

〃 ドタバタ、ドタバタ〃

「ミカさん大丈夫と？」

「あくびつくりした。

サキちゃん、いきなりバットもって向かってくるんだもん。

で、どうしたのさくらちゃん？」

「Gが、Gが出たとよ」

「G？ ああ、ゴキちゃんか。

はあく、情けない。

たかがゴキちゃんごときで、大のゾンビイが何を騒いでんだか」

「ミカさん、Gは平気なんだ」

「あつたりまえじゃん、この家の台所を預かるわたしがGの一匹や2

匹」

「あ、くそ飛びやがった」

〃 パタタタタ、ピタ〃

へ、なに？

何かが背中についたような。

〃 カサカサ、スポ！〃

「へ、ぎやー！」

G、G、Gが服、服の中にー

いゝゝいゝやゝー」

〃 ビヨン！〃

「「おー」

〃 ガツン〃

「げふ、て、天井」

〃 ドタ〃

「み、ミカさん！」

「お、おい、こいつ今天井に頭ぶつけたぞ。

死んだんじやねえのか？」

“カサカサカサ”

「ん、あ、てめえこんなところにいやがった！」

ま、待ちやがれ」

“カサカサ”

「うゝー」

“パシツ”

「あ、たえちゃんが手で」

「よし、でかしたたえ。」

今処分してやるから、あたしによこせ」

「あゝー」

“にぎ”

「ば、ばつかそんなもん食おうとすんじやねえ。

ほ、ほらこっちによこせ」

「うゝー！」

「うゝじやねえつて、よこせ」

“ドタバタ、ドタバタ”

「ミカさん大丈夫と？」

「うゝ、はっ」

「あ、気がついた」

「ほらミカ、お水。」

しっかりしなさい」

“ゴクゴク”

「ぷはあく、生き返った。」

ありがと愛ちゃん。

あ、さくらちゃん、G、Gは？」

「サキちゃんが処分してくれたけん、もう大丈夫」

「ふうくよかった」

「ふふ、やっぱりミカさんも怖かったけん」

「……で、ミカ今日はどうだったの？」

「え、あ、うん、ごめん今日もお仕事駄目だった」

「はあ、また今日も駄目だったのか！」

お前気合がたんねえんじゃねえのか、気合が」

「気合、めいっばい入れてるつもりだけどなあ」

「で、明日はどうしよると」

「あ、うん、明日は唐津商工会さんにアポとつてあるから」

「よしわかった。」

明日はあたしも行く。

お前に本物の気合つてもん見せてやる」

「気合だけでどうにかなるものじゃないでしょ。」

ただお仕事くださいだけじゃ通じないんだから。

お仕事もらうにしてもいろいろ手順とかがあって」

「そっか。」

じゃ愛、お前も一緒に来てくれ。

あ、それと純子お前もな。

気合じゃぜってえ負けねえけど、そういつた芸能界のしきたりというか

ルールっていうもの、あたしじゃわからねえからよ」

「はあ、まあ確かにね。」

芸能界の経験のないミカには難しいかも」

「サキちゃん、愛ちゃん♡」

「純子、お前もいいよな」

「お断りします」

「はあ！」

「それはミカさんのお仕事かと。」

私達が安易に首を突っ込むものではありません。

ミカさんにもマネージャーとしてのプライドがあるはずですよ」

「いや、だ、だがよ」

「お手伝いすることは簡単ですよ。」

ですが、それはミカさんに失礼というものではありませんか？

ミカさんがそのような甘えた考えを持っているはずがありません。

・・・ですよねミカさん」



“ジロ”

「……………」

「……………それとも、あなたのマネージャーになるといふ思ひは、その程度のものでしたのでしょうか」

「……………」

“ドン!”

「そんな中途半端な思ひでマネージャーをやられてはこっちが迷惑です」

“スタスタスタ”

「お、おい純子」

“ガチャ”

「ちよ、ちよつと待てて」

“ボタン!”

「お、おい」

「待つてサキちゃん!

純子ちゃんの言う通りだよ。

わたし、もう少し頑張つてみる」

「しかしよ」

「大丈夫大丈夫!

明日は今まで以上に、もっとめいっぱい気合入れていくから」

「そ、そうか」

「うん。」

じゃ、明日に備えて先に水浴びしてくるね」

．  
．  
．

“ガチャ”

「ふう、いい風呂じやつた」

「……………」

「うお!

な、なんじやい、いきなりドアの外に立つてるんじゃないわい。

びつくりして心臓止まるとことだったじやろうが、この馬鹿ゾン  
ビィ」

「……………」

「で、なんだ、何か用か？」

「あ、あの」

—————

「行ってきます」

〃 トボトボトボ〃

「ミカさん」

「さくら、大丈夫かよあいつ。」

全然気合はいっちょらん」

「愛ちゃんやっぱりわたし達も」

「いまはミカを信じましょう。」

さあ、私達はレッスンを」

〃 ガチャ〃

「お前ら全員いるか」

「あ、幸太郎さんお早うございます」

「ミカ以外は全員いるけど」

「グラサン、何か用か？」

あたしら今からレッスンするところだ」

「お前らは今からプロモーションビデオの撮影を行う」

「プロモーションビデオ？」

「そうだ。」

今日から放送されるドラ鳥のCMに続く、知名度アップ作戦の第2  
弾じゃい。

プロモーションビデオをとって、YouTubeやニコニコとか  
いろんな投稿サイトにアップするんじやい。

わかったらさっさと準備しろ」

「あ、幸太郎さん。」

準備って言っても、ミカさんお仕事行かれたけん、身体のメイクが「心配ない、俺がやる」

「え？」

「顔も身体のメイクも俺がやる」

「はあっ！」

何言ってるんでめえ」

「異やだ！」

「……変態」

「えーい、うっさいんじやーい。」

お前らが目覚めるまでは、ずっとずっと俺がお前らの身体のケアしてきたんじやい。

包帯巻き直したり、身体拭いたり、他にもあんなことかこんなこととか。

お前らの裸なんか、身体の隅から隅まで見飽きてんじやいこのボケー

いいからさっさと準備せんかうい」

「う、うそ」

「はあー！」

て、てめえあたし達が眠っていることをいいことに、変なことしてたんじやねえだろうな」

「し、信じられない。」

最低、絶対嫌だからね」

「……」

「えーいっさいんじやーい！」

今更お前らのしよぼーい包帯だらけの裸見たところで、なくんも感じるかこの馬鹿ゾンビィィ」

「て、てめえー！」

「ギャーギャー、ワイワイ」

「……隅から隅まで見られた」

「リリイはندوقかしたでありますか？」

「なんや顔色悪うおますけど」

「あ、ううん、なんでもないよ。」

「それにゾンビイだもん、顔色は初めから」

「そうでありんすか？」

「ん、純子はん？」

「ツカツカツカ」

「メイク、お願いします」

「お、おい純子」

「純子ちゃん」

「純子、あんた何言ってるの」

「私は、アイドルとして自分のやるべきことをやるだけです」

「ぬぎぬぎ」

「お、おい」

「バサツ」

「これでよろしいでしょうか」

「ああ」

「ちっ。」

「グラサン、変なところ触ったらぶっ殺すぞ！」

「ツカツカツカ」

「すみません、お待たせしました」

「あ、いえ。」

「お忙しいところお時間頂きありがとうございます。」

「フランシユシユのマナージャーやってます、ローレ……………」

「ただの！」

「ただのミカです」

「多田野さん？」

「よろしくお願いします」

「は、はい、宜しくお願いします」

「さ、どうぞ座ってください。」

お話、伺いましょうか」

「うううううう」

「なんでえ、泣くぐらいだったらやめときやよかったじゃねえか。

まったく」

「サキちゃん！」

ほら、純子ちゃんもう泣かんと」

「す、すみません。」

でも、でも、うううううううう」

「お前らなにしてんじや〜い。」

さっさと準備せんかい」

「トントントントン」

「んー」

「え、えっと、お願いします。」

絶対いいステージ見せてみせます」

「熱意はわかるんだけどね。」

ね、写真だけじゃなくて、なにか動画とかかないの？

ほらさつき言ってた佐賀城でのライブのやつとか、レッスンの風景  
でも

いいんだけど」

「え、えっと・・・動画の方は・・・ちよつと」

「ふむ、写真だけじゃねえ」

「・・・」

ゲリラライブの時の動画は撮ったけど、あれはとも見せられたも

のじゃない。

佐賀城や嬉野の時はステージ見られなかったし。

レッスン風景何て・・・・・・・・みんなゾンビだもんな。

・・・・・・・・仕方ない。

土下座、もうここはやっぱり土下座しかない

今のわたしにできることはそれぐらいしか・・・・・・・・

よし！ 見せてやる、一世一代の土下座ってやつを。

“ガタ”

「あ、あの」

“ワイワイ、ガヤガヤ”

「ん、なにやってんだあんなどころで」

「え？」

「ほらあれ、外の駐車場のところ」

駐車場？

「あっ！」

「えー、あたし達フランシユシユって言います。

今日はめいっぱい頑張るんでよろしく」

「フラン・・・ね、あれ君のグループじゃない？」

「え、あ、はい」

「ミュージックスタート！」

「目覚RETURNER、願えばいいんだ♫」

「・・・・・・・・」

「あ、あの〜」

「ね、あれ許可を得てやってるの？」

今日、駐車場でなんかやるって聞いてないんだけど」

「あ、いえ、多分許可は」

「だよね。」

許可得てないのにあんなことやっていいと思ってるの？

社会のルール、守ってないよね」

げ、や、やばい。

やっぱり怒られた。

これじゃ仕事もらえないじゃんか。  
もう、何やってんだみんな！

“ガタン”

「す、すみません。」

あ、あの、すぐ止めさせてきます」

“にぎ”

「へ、あ、あのく、なんで手を」

「もう少しこのままで」

「え？」

あ、はあ」

「刹那のソウルにCUT IN♪」

「はあ、はあ、以上、フランシユシユでしたー」

“ダダダダ”

「こらー、お前ら駐車場で何撮影してんだー！」

「撤収、撤収じゃーい」

“ダー”

「ま、待てー」

“ボタン”

「出発じゃーい」

“ブロロロロ”

「……」

「あ、あのく、ほんとにすみません、すみません」

“ペーンペーン”

「……ぷっ！ あははははは。」

はあ、おもしろかった」

「え、おもしろ……かった？」

「あ、ごめんごめん。」

こんなに笑った久しぶりかな。

……ふう

あのね、今全国の商店街はどこもピンチなんだ。  
この佐賀も例外ではない。

客足が遠のき、いたるところシャッターが締まってる店がある。それが商店街の雰囲気をさらに悪くして、結果ますます客足が遠のいている。

商店街は負のスパイラルに陥っているんだ。

・・・もう、商店街なんていらぬのかもしれない」

「そ、そんなことないです！

わたし、商店街で買い物しますし、お店の人との会話も楽しいし。

それに・・・いつも負けてくれるし。

わたしは商店街大好きです」

「ありがとう。

この閉塞感に覆われている商店街を救えるのは、あの娘達のようなパワーかもしれないな。

ルールとか常識とか、今までと同じ型通りのやり方に拘っていたら救えないんじゃない  
だろうか。

・・・もしかして、私はどこかでこういうのを探していたのかもしれない。

ね、君、もう少し話聞かせてもらっていいかな」

「え、あ、はい。

こちらこそお願いします

あ、でもその前に」

「その前に？」

「あ、あの、そろそろ手を離してもらえとく

さつきからギュって」

「え、あっ！

ご、ごめん」

・  
・  
・

“ピンポーン”

「チース、佐賀運送です。



お届け物を」

「バタン！」

「はい、お待ちしてました！」

「うわっ、びっくりしたー」

えっと、乾さんでよろしかったですね。

すみません、この受け取りにサインをお願いします」

「あ、はい」

「カキカキ」

「え、巽？」

あ、あの〜ここは乾さんのお宅じゃ」

「え、あ、す、すみません、間違えました」

「カキカキ」

「どうぞ」

「あ、はい。」

それじゃ荷物はこちらに置けばよろしいですか？」

「あ、はい」

「ドサ」

「ご苦労様でした」

「お〜い、その荷物、全部こっちに持ってきてくれ」

「うっす」

「ドサ、ドサ、ドサ」

「え？」

あ、あの段ボールは一つじゃ」

「ドサ、ドサ」

「あ、あの〜」

「何でしょう？」

「あ、いえ、なんでも……………」

・  
・  
・

「タッタタッタ」

やった、やった♪

初めてお仕事もらえた。

ギヤラは少ないかもしれないけど、商店街の夏フェスすごく盛り上げて、

わたし達の方で商店街を救うんだ。

そんでそれをきっかけにフランシユシユも！

よ、よし頑張るぞ。

さ、早くみんなにこのことご報告ご報告つと

「ルンルンルン♪

たっだいま〜ロメロ〜

相変わらず、ぶ・さ・い・く♡」

「ウー、ワンワン！」

「へへ、ごめんごめん。

あとでゲソ持ってきてあげるね」

さてつと。

ん？

あ、あの後ろ姿は巽さん？

倉庫の前で何やってんだ？

“ テツテツテツ ”

「巽さん？

こんなところでなにを……………

げ、何この段ボールの山！」

“ ぎゅ ”

「ん、ん〜」

“ ジタバタ、ジタバタ ”

「し、静かにしろ。

大声出すんじゃない。

い、いいか騒ぐんじゃないぞ。

わかったか」

“ こくこく ”

「……………ふう」

“ぱっ”

「ふはあー」

いきなりなにすんだ!

口塞がれて死ぬかと思っただじやんか。

……で、どうしたのこの段ボールの山。

なにが入ってるの?」

“パサ”

「このTシャツじゃい」

げ、な、なに巽さんの着てるTシャツ。

なんかスーツ広げて、自慢げに見せびらかせてるんだけどさ、  
すごくダサ!

白地になんか虹が描かれていて、

んで、フランシユシュってロゴ……

「ぶ、ぶはははあー!

なにこのクズみたいなデザイン。

だっさ、ちよくだっさ」

「……」

「それと巽さん、Tシャツ似合わねえ」

お、おかしい、おかしくて死にそう、死んじゃう、死ぬ」

「えーい、うっさいんじやい!

死ぬ死ぬって、お前はもう死んでるんじやい。

ふん! もうお前は絶対メイクしてやらんからな!

一生そのままゾンビ顔でいろ、このボケー」

「えっ!

冗談だっけ冗談。

や、やだなあ、真に受けちゃって。

いや、そのTシャツ、よく見るとなんか味わいがあつてすごい。  
い。

うんいいなあこのデザイン。

それに巽さん、Tシャツ似合ってる。

かっこいい!

うん、まさに馬子にも衣裳！」

「ん、そうじゃろそうじゃろ……つてもう遅いんじゃない！  
それに馬子にも衣裳ってなんじゃない！」

“ぶい”

「ひえ、メイク、メイクだけはお願ひします。

ほ、ほらゾンビの顔じゃマネージャーのお仕事でないから」

「ふん！」

……仕方ない。

どうしてもメイクしてほしいと言うのなら」

「言うならっ！」

—————

“キキキキ”

「会場に着いたぞ。

俺は車を停めてくるから、お前達はさっさとこのTシャツに着替え  
て  
受付してくるんだ」

「げ、やっぱりそのTシャツ着るのか」

「リリイやだ、そんなだっさいの」

「え、うっさいんじゃない！」

お前らここに何しに来たんじゃい。

！  
遊びに来たわけじゃない、知名度アップのお仕事のためじゃろがい

お前らプロじゃろ。

ならばプロらしくさっさと仕事せんかい。

……なあ純子」

「……わかりました」

“ガタン”

「さ、いきましようお仕事です」

「あ、待って純子ちゃん」

〃 スタスタスタ〃

「ちっ、お前ら行くぞ」

〃 ゾロゾロゾロ〃

「ね、純子ちゃん。」

幸太郎さんと何かあったと?」

「いえなにも。」

巽さんの言う通り、これはお仕事です。

私達はプロのアイドルとして私達のやるべきことをやるだけです」

「純子ちゃん」

「さ、行きましよう」

「う、うん」

〃 スタスタスタ〃

「なあさくら、そういえばミカどうしたんだ?」

「え、あー、車の中にはおらんやったような。」

確かメイクの時にはいたはずなんだけど」

「もしかして置いてきたんじゃないかねえのか?」

あいつだまってるのかいねえのかわからねえからな。」

この前もよ、突然暗闇から」

〃 ワイワイ、ガヤガヤ〃

「ね、さくら。」

私達の出場する種目って」

「あ、えっと確かガタチャリとガターザンやったとよ」

「ガタチャリって干潟の上に置かれた板の上を自転車で走り抜けるやつよね。」

昨日映像見たからわかるけど、ガターザンっていうのは?」

「えっとガターザンっていうのはクレーンから下がっているロープを使って、

ターザンみたいに干潟にジャンプするとよ。」

そんな時の距離とパフォーマンスの得点で順位を競うと」

「パフォーマンス？」

さくらはん、パフォーマンスってなんでありんすか？」

「あ、えっと演技というか芸というか」

「芸？」

芸ならわつちに任せておくんなし」

・  
・  
・

う、うれねえ

はあく、どうすんだこれ。

それに異さん、露店販売の許可とってあるって言ったけど、

指定された場所ってなんか他の露店からからすぐく離れているんだけど。

そのせいでここまで人流れてこないし。

“ガヤガヤ”

あつちの方は賑やかだなあ

えっと、たこ焼きに唐揚げ、それに焼きそば？

はくいい匂い。

風に乗ってソースの焦げた美味しそうな匂いがここまで流れてくる。

“ぎゅるるるる”

は、腹減った

今日は先乗りだったからご飯食べてないもんなあ。

ううううう、でもお金持ってないし………お金。

そっだ、頑張ってるんとしてもこのTシャツ売らないといけないんだ。

じゃないと、わたし達非常にまずい。

————— 昨晚 倉庫前 —————

『え、お金がない!』

『ああ、活動資金がとうとうマジやばくなった。

どれくらいやばいかと言うと、明日の食費もないぐらいだ』

『で、でもドラ鳥のCMのギャラが確か入ったんじゃない』

『あれでこのTシャツ作ったんじゃない』

『え、えつとく、作ったってギャラ全部?』

『………ぜ、全部じゃない』

『こ、こ、このおバカ!』

『発注数の入力間違ったんじやい。

し、仕方ないじやろがい、単位の入力が変わりにくかったんじゃない。

だからちよこつと間違えて』

『でもどうすんのさ。』

たえちゃんなんて食事与えないと、手に負えないくらい暴れるんだからね』

『し、心配するな、対策はある』

『対策?』

『明日のガタリンピックでこのTシャツを売るんじゃない。

すでに販売の許可と露店の手配は済んでいる』

『………誰が売るのは?』

『お前じやい』

『やっぱりー!』

無理、絶対無理だって、こんなゴミみたいな』

『メイク』

『………うゝ』

で、でも誰がこんなTシャツ買うのさ!』

『お前は本当にこのデザインの奥深い味わいがわからんのかーい。

この馬鹿ゾンビイが。

まあいい、ガタリンピックの参加者は泥だらけになるんだ。

絶対、着替え用に売れるはずだ。

グダグダ言わずに売ってこい』

———現在———

………つて、昨日巽さん言ったけど、みんな着替え持ってきてるし。

そんなのあたりまえだよ。

はあ、でもどうしよう。

これ売らないと食費も無いんだよな

「はあ」

え、くよくよ考えてても仕方ない。

ここは死んだ気になって………つてもう死んでんだっけ。

え、え、え！

「さあいらっしやい、いらっしやい！」

ドラ鳥のCMで有名なフランシシュの公式Tシャツだよ。

今からどくんとバズること間違いなし！

そのTシャツが、今日限定でたったの1,000円！

さあ買った買った………お願い買ってえ」

「なっ！

こんなところを自転車で走るの？

それに板の上まで泥が盛られてるじゃない」

「やっぱり映像で観るのと実際とは違いますね」

「なんだ愛、ビビったのか？

まあ、板から落ちたら泥の中にダイブだからな。

ぐしやーって」

「ビ、ビビッてなんかいいわよ。

やってやろうじゃない」



「上等！」

おい、お前らいいか、ここまできたら死ぬ気で頑張つて、  
ぜってえ表彰台に立ってフランシユシアピールすつぞ！」

「……………」

「アピールすつぞ」

「……………」

「み、みんな頑張ろう、ね、ね」

「……………」

「さあ始めましたガタリンピック名物のガタチャリ。

この細い板の道を自転車で走りきるといふものです」

「は〜い、それではまずデモンストレーションとして

佐賀警察の方に走ってもらおうと思います。」

では意気込みを」

「じゃまあ〜今日は日頃の平和を」

「はい、それでは早速スタートしてもらいましょう。

位置についてよ〜い」

「え、あ、あのまだ」

「パ〜ン」

「ふんふんふん♪」

「カタカタカタ」

「へっ、お、お、お、お、お、お、お、お、おわ、落ちる！」

「ぐしや〜」

「は〜い、こんな感じになります。」

では皆さん頑張つてください〜い」

「あははは、泥だらけじゃねえか」

「それでは協議を始めます。」

第一レースの出場者の方、スタート位置までお越しく下さい」

「あ、サキちゃん頑張つてね」

「任しとけ、二輪じゃ負けんばい。」

見てろ、ぶつちぎって優勝して表彰台決めてきてやる」

「テツテツテツテツ」

「それでは第一レースいってみましょう」

「ぶっちぎってやる！」

「サキちゃん頑張れ」

「位置についてよ」

「パ～ン」

「しゃー！」

「しゃー、しゃー」

「このままぶっちぎって」

「スルツ」

「お、おわあー」

「ぐしやー」

「……サキちゃん」

「……面目ねえ」

「それでは続いて第二レースいってみましょう」

「なによ、大口叩いておいて全然だめじゃない。

見てなさい」

「愛ちゃん頑張って」

「位置についてよ」

「パ～ン」

「えいー！」

「グ～コ、グ～コ」

「これならいけ」

「グラ」

「え、う、うわあ」

「ぐしや」

「……愛ちゃん」

・  
・  
・

「キヨロキヨロ」

「あの唐揚げ、う、うまそ〜

あ、こっちのタコ焼きも」

やばいヨダレが止まらない。

どれ他にはどんな食べ物か。

“ビクッ!”

げ、な、なにこれ!

なんてグロテスクな顔してんだこの干物?

エイリアンみたいに歯なんか剥き出しにして、こっち睨んでんだけ  
ど。

んつと、わらすぼ?

わらすぼっていうのこの干物。

へえ〜佐賀の名物なんだ。

美味しいのかなあ。

“ごく”

はっ!

わたしなにしてんだ。

つい匂いに誘われて来ちゃった。

やばいやばい、早くお店に戻ってTシャツ売らないと。

“ちら”

はあく、でも腹減った。

“トボトボトボ”

「ガタチャリ、結局、純子ちゃんもゆうぎりさんもリリイちゃんも駄目  
やった。

ここは残ったわたしががばい頑張つてどぎゃんかせんと」  
「それでは次のレースにいきたいと思いまゝす。

位置について、よ〜い」

“パ〜ン”

「うおおおお」

「シャー」

「さくらちゃん、はやくい」

「お、これいけるんじゃないか。」

「さくら、そのまま行け」

「シャー」

「よし、いける。」

あ、でも少し速すぎるかも。

ちよつとブレーキ。

へ、な、なんでこの自転車ブレーキついたらんと」

「ぐら、ぐらぐら」

「う、うわー」

「ぐしゃ」

「.....」

「ま、まあ予想してたけどな。」

あいつどんくさいから」

「そうね」

.....

「スタスタスタ」

「結構、人来てんのなガタリンピック。」

お、あれ外人の参加者もいるじゃないか」

「そ、そ、そうね」

「そわそわ」

「ん、どうした雪ノ下、さつきからなんか顔色悪いぞ」

「比企谷君、あ、あの私ちよつと」

「ちら」

「ん、あ、ああ花摘みか、花摘みだろ。」

「ここで待ってるから遠慮なく花摘んできてくれ」

「馬鹿！」

「タッタタッタ」

「ふう〜」

お、焼きそばっか。

腹も減ったし、雪ノ下が花摘んでる間に一つ」

“スタ、スタスタ”

「へ？」

おわっ！

な、なんだこのグロテスクなものは。

び、びっくりした〜

えっとなになに？

佐賀名物わらすぼの干物？

これって食い物なのか？」

「切ないでありんすなあ」

「……………」

「次の方お名前を」

「あ、異幸太郎です」

「えっ」

「幸太郎さん。」

幸太郎さんもエントリーしてたんだ」

「なんであいつはTシャツ着てないわけ」

「それでは意気込みを」

「やったー、フランシユシユのアピールチャンス！」

「あ、頑張ります」

「他には」

「あ、あ、いえ」

「……………」

「なんかせ！

あの野郎、ぜってえ泥まみれになるけん笑ってやろうぜ」  
「それでは、位置についてよ〜い」

“ ぱん ”

「……………」

“ スイスイ、スイスイ ”

「……………」

“ ちりんちりん ”

「ひゃっほー♪」

「おおー」

“ パチパチパチ ”

「……………」

「落ちませんでしたね、巽さん」

「しかも一着」

「チツ！」

・  
・  
・

「さあー続きまして、こちらの会場で皆さんに挑戦していただく競技はガターザンです。

クレーンから下がっているロープを使って、干潟へジャンプする競技です」

「それでは、またまたデモンストレーションとして佐賀警察の方に飛んでいただきまゝす。

お願いしまゝす」

「よしやるぞー」

見てろよ有明かーい」

“ ヒュン ”

「あーちや。

落ちるー」

“ びちゃん ”

「わっははははは」

「こういう風に距離＋飛び込むときのパフォーマンスで競ってもらいまゝす。

それでは早速、最初の方お願いしまゝす」

「では次の方お願いしまゝす」

「サキちゃん頑張つて」

「今度こそあたしに任せろ」

“ スタスタスタ ”

「それではどうぞ」

「よし、ぜつてえテツペンとつてやる。

うりやー!」

“ ビューン ”

「おお、これはすごく高く飛んだぞー

さあ、どこまで飛距離を延ばす……………あれ?」

「う、うえ、おわあゝ」

“ びしゃゝん ”

「落ちたー、ほぼ真下に落ちましたー」

「…………前に飛べよ」

「テツペンって高く飛んでどうするの」

「…………サキちゃん」

“ ぎゅるるる、ぐうううう ”

は、腹へったゝ

でもお金ないしなゝ

…………Tシャツも売れたら、なんか買おうと思ったけど、  
お客さん一人も来ないし。

はあゝ

“ どさつ ”

「もうやだ、なにか食いたいゝ」

“ ちょんちょん ”

「ん？」

「うー」

「え、たえちゃん。

なんでたえちゃんここに？

確か今日はみんなと一緒に競技に参加してるはずじゃ？」

“ ひよい ”

「あ、あゝ」

「え、たこ焼き？」

くれるの？

ありがとたえちゃん」

“ ぱく ”

「んゝおいしい。

表面がパリパリで、中はフワって感じで。

それにこの青海苔の香りが。

うゝん、最高！

……って、でもたえちゃんこれどうしたの？」

「あのゝ」

「へ？」

「お代よろしいでしょうか？」

さっきこの人が食べた分も合わせて」

「へ？ へえー！

た、た、たえちゃん！」

げ、い、いねえ。

お、お代、お代っていったって、わたしお金なんて……

ど、どうしよう。

「あ、あのゝ」

「……は、働かせてください」

・  
・  
・



「面目ねえ」

「……………」

「愛ちゃん、サキちゃん」

「二人とも全然だね」

「んだと、ちんちく!」

「まあまあ、二人とも喧嘩はおやめなんし。」

「ここはわっちに任せておくんなんし」

「ゆうぎりさん。」

「……………でも、ゆうぎりさんこんなことやったことあると?」

「芸事なら、少しは自信があるであります。」

「まあ見てておくれなし」

「う、うん」

「スタスタスタ」

「はい、それでは次の方お願いします」

「あ、ほら次ゆうぎりさん」

「いっけえーゆうぎり姉さんー」

「それではどうぞ」

「ヒュ〜」

「はい!」

「「おおー!」」

「パチパチパチ」

「はい!」

「「お〜」」

「パチパチパチ」

「はい!」

「「うおー」」

「パチパチパチ」

「す、すごいゆうぎりさん。」

何かポーズをとる度に歓声が。

これだけパフォーマンスがいいのなら、

あとは普通に飛ぶだけでもきつと表彰台にいけるんじゃない。

ゆうぎりさん頑張つて！」

「はい！」

“ ちよこん ”

「え」

「え」

「えー」

“ ステーン ”

「は、はいじゃない。

ゆうぎりさん、どがんでスタート台に戻つてくつと！」

ほ、ほら飛距離無しだから点数が」

「……はあ」

・  
・  
・

「ふう」

「ほらそー！」

お前手が止まつてんで！

しっかり焼け」

「う、うっす」

くそーあの親父め。

金持つてないつてわかつたら、いきなり態度変えてこき使いやがつて。

……で、でもこのたこ焼き。

“ ゴク ”

う、うまそー

“ キヨロキヨロ ”

「……」

“ パク ”

「あ、またつまみ食いしやがった！」  
「ひゅ、ひゅいましえん」

「それじゃ次の方どうぞ」

「はい」

“ぐるぐる、ぐるぐる”

「えつと〜リリースちゃん、ロープを身体に巻いてなにしとつかない？」

「なにやってんだあいつ」

「よしつと。」

「いつくよく、マジカルシューティングスター」

“ビュ〜ン”

「え、あのまま飛んだ？」

“くるくるくる”

「お、おおー！」

「すごか、駒みたいに身体を回転してつと！」

「これ、飛距離も結構いけるんじゃないやねえか。」

「よし、いけー、ちんちくー！」

“びっしや〜ん”

「あへ、あへあへあへあへ」

「これは距離も稼いだぞー」

点数は！

.....暫定4位！

惜しくも表彰台には届かなかった〜」

「あ、あ〜」

「4、4位かちくしよ〜」

さくら、後はお前しかいねえ。

頼むぞ

「あ、う、うん」

“スタ、スタスタ”

「へえ、姉ちゃんフランシユシユのマネージャーやっとなるのか」  
「はい。」

でもなかなかお仕事頂けなくて。

だから活動資金稼ぐために、あの露店を」

「ふん

あ、そうだ、こんどショッピングセンターのイベントに呼べないか  
聞いてみてやる」

「ほんとですか」

「ああ、担当の奴とはちよつと知り合いだからな」

「あ、ありがとうございます」

「つで、フランシユシユって何?」

「えっ」

「ん?」

・  
・  
・

「それでは、次の方どうぞ」

“ ヒュ”

「いい風が吹いてる。」

この風に乗ればきつと……………

うん、信じれば飛べる。

絶対、絶対優勝すつとやけん」

「飛べーさくらー!」

「えい!」

“ ビュン”

「いける、このまま遠くに」

“ スル”

「え、て、手がすべっ」

“びしゃん!”

「ぐへえ〜」

「これは、は、腹からいったー」

「いたそ」

「得点は……1点。」

「今大会最低記録です」

「まあ、やっぱどんくさそうやもんな」

「……………」

・

“わいわい、がやがや”

「あつたまからいったー」

「だがこれはかなり飛距離が出たぞ〜」

「おおー」

“キヨロキヨロ”

「……………はあ〜」

「……………」

「はい、で次の方お願いします〜す」

“キヨロキヨロ、キヨロキヨロ”

「……………ふう〜、そうあまくはないか」

「……………どうかしたかしら比企谷君。」

「さつきからため息ばかりしているようだけれど」

「あ、い、いやなんでもない」

「……………」

「……………」

“キヨロキヨロ”

「……………ね、比企谷君。」

「少しのどが渴いたから飲み物買ってきてくれるかしら」

「飲み物？」

「確か露店でなにか売ってたが、それでいいのなら……………」

って、いや待て！

そんなの普通は上司が部下に奢るものだろう。  
なんで部下の俺が上司のお前に奢らなならん」

「いいからー！」

「あ、い、いや、だが」

「いいからさっさと行きなさい」

「お、横暴だ」

〃 スクツ〃

「ひ、比企谷君」

「ん？」

「……………でいいから」

「は？」

「ゆ、ゆっくりでいいから、さっさと行きなさい！」

「えっ、……………あ、ああ、そういう。

すまない」

〃 スタ、スタスタ、スタタタタ〃

「……………馬鹿」

「……………ガターザンでもフランシユシユのアピールできんやった。

結局、泥だらけになっただけ」

「さて、まだ手がある」

「え、でもサキちゃん、エントリーしてた種目はもう」

「25m自由ガタだ」

「25m自由ガタ？」

「ああ、この競技は確か当日の参加枠があつたはずだ。  
今はそれに賭けるしかねえ。

いくぞ」

「ご苦労様、すごく助かったよ。

たこ焼きを焼くの上手いんだな。

おかげさまで、お客さんの評判もよくて助かったよ。

これ持っていきな」

「え、いいんですかこんなにいっぱい。

さつきから食べたいの我慢して焼いてたんです」

「嘘つけ。

味見って、ちよいちよいつまみ食いてたじゃねえか」

「えへへへ、ありがとうございます。

それじゃ」

「おう、またな」

“ スタスタスタ”

へへ、やったやった、たこ焼きもらった。

これタコが結構新鮮でさ、美味しかったんだよね

どれどれ早速つと。

“ ぱく、もぐもぐ”

「うま〜♡」

“ スタスタ”

へへ、幸せ〜

………つて、あ、そうだこんなことしている場合じゃない。

早くTシャツ売らないとお金が。

「あ〜、あ〜」

ん、この声どこかで。

「い———」

たえちゃん。

たえちゃん、またなにか食べ物狙ってる！

「た、たえちゃん！」

「うがー」

“ ぐい”

「いいからちよつとこつち来て」

「うがうが」

“ ジタバタ、ジタバタ ”

「こ、これ、このたこ焼きあげるから暴れない。

ほらこつち」

「うがうが」

“ もぐもぐ ”

ふう、何とか大人しくなった。

もう、みんな何でたえちゃん野放しにしてんだ。

これじゃTシャツ売るのに集中できないよ。

どうしよう、目を離すときつとまた何か食べようとするはずだし。

……はあく仕方ない。

うううう、まだ一個しか食べてないのに。

「たえちゃん！」

「うが？」

「このたこ焼き全部上げるから、ここに座ってこのTシャツ見てて。

いい、このTシャツが売れないと、ご飯食べられなくなるんだから

ね。

わかった？」

「うがうが」

“ こくこく ”

よしっと、それじゃ。

“ ダー ”

「すみません、たこ焼き一つ頂けますか」

「あいよ、500円だよ」

「あ、はい。

お代、ここに置いておきます」

「へいお待ち」

「あ、あのすみません、この写真の人見たことないですか？」



「ん、どれどれ。」

うん？ これあのTシャツ売ってるねえちゃんに似てるんじゃないか？」

「ほ、本当ですか。」

えつとその人はどこに？」

・  
・  
・

「いいか、これが最後のチャンスだ。」

ぜってえ優勝して表彰台でフランシユシユアピールすつぞ」

「でもサキちゃん、表彰台に立ってもこのTシャツじゃ」

「泥だらけだもんね」

「仕方ねえだろう。」

汚れ落とそうと思って水浴びしたら、メイク全部とれちゃったんだからよ。」

泥だらけのままにいねえと……」

「んー」

「あー！ みんなここにいた！」

ね、さくらちゃん、たえちゃんをしつかり管理してくれないと」

「あ、ミカさんいた！」

しかも同じフランシユシユのTシャツ着てつと」

「おおー」

ミカ、お前いいところに来た」

「はい？」

「今からお前もこの25m自由ガタに出ろ」

「25m自由ガタ？」

「おう、この25mの干潟を突っ切るんだ。」

それでお前が1位になって表彰台でフランシユシユをアピールすんだ。」

幸い、お前のTシャツは汚れてねえからな。」

そのままTシャツを汚さずあの表彰台に立て」

「やだ！

こんな泥の中突っ切たら絶対泥だらけになるじゃんか。  
泥だらけなんて、お・こ・と・わ・り

「んだとー！

てめえガタリンピックは誰もが泥だらけになるのがいいんじゃないか。  
えか。

・・・まあそのことは今はいい。

出ねえのなら、そのTシャツよこせ！」

“ぐい”

「あたしがこのTシャツ着て出る。

ほらさっさと脱げ！」

「げ、や、やめ、こんなところじゃやだ。

それに包帯も一緒に引っ張ってるって。

そんな引っ張ったらほどけて、ポロリ、ポロリしちゃうから

「ポロリするほど胸ねえじゃねえか。

いいからTシャツよこせ」

“ぐい”

「や、やめて〜

それに胸、胸あるもん。

す、すくなくとも愛ちゃんよりあるもんね！」

「はあー！

な、なんでそこに私を出すのよ

それに・・・私のほうがあるわよ」

「そんなことないもん、わたしの方があるもんね。

いつも身体のメイクしてるからわかるもん」

「はあー！」

“ギャー、ギャー”

「お、おいお前ら、みつともねえぞ。

お前らの胸って似たり寄ったりだろうが。

どっちもどっち、そんなにたいした胸じゃ」

「は、はあー！」

あんたに言われたくないわよ」

「んだとー！」

“ざわざわ、ざわざわ”

「サキちゃんも愛ちゃんもミカさんも、そがん胸のことで喧嘩せんと。

ほら周りの人見てつとよ」

“ふるんふるん”

「うっ！

さ、さくらは引っ込んでろ!!」

“ギロ”

「ひいー」

「さくらちゃん大丈夫?」

“ふるふる、ふるふる”

「り、リリイちゃん、みんな怖かったばい。

なんかいつもよりがばい怖かったとよ〜」

「ち、なに食べてたらそんな乳牛みたいな胸になるのよ」

「にゅ、乳牛。

ひどー！」

「あははは、ちげえねえ愛の言う通り乳牛だ乳牛。

………ってそんなこと言ってる場合じゃねえー!

いいかミカ、これは仕事だ。

このガタリンピックで、あたし達はまだなんもフランシユシユを

アピールできていねえ。

なんとしてもこの最後の競技で勝って、あの表彰台でフランシユ

シユを

アピールすんだ。

お前もあたし達のマネージャーだろ、だったら協力しろ」

「………マネージャー。

う、うんわかった。

で、でもさ」

“わいわい、がやがや”

「こんなに参加者いるんだよ。

無理だよわたしが表彰台なんて。

それもこの干潟をTシャツ汚さずになんてさ」

「大丈夫だ。」

あたしに策がある」

「策？」

「この競技で一番厄介なのは干潟でも他の参加者でもねえ。」

本当の敵は」

“ビシッ！”

「あいつらだ。」

あのコースの両脇に控える奴ら、あれが一番の敵だ」

「あれなにしてるの」

「あの腕の腕章を見る。」

あいつらは、G・O・D・S」

「ゴ、ゴツズ？」

神々って、何その物騒なの」

「G a t a l y m p i c O o z e D e c o r a t i o n S e e  
k e r s !」

ガタリンピックのスタッフの中でも、この25m自由ガタの出場者を泥で装飾する

ことに、己の全てのプライドをかけているやつらだ。

泥汚れのないままゴールさせるなんて、あいつらのプライドがぜってえ許さねえ」

「迷惑！」

すっごい迷惑、そんなもんにプライドかけんなー！」

「実際、このミッシェンの最大の障壁かもしれねえ」

「だ、だったらTシャツ汚さずにゴールするなんて絶対無理じゃんか。ただでさえこの干潟だよ、足をとられて進みにくそうなのに」

「あたしらがあいつらの泥からミカのTシャツを守るんだ」

「で、でもどうやって」

「輪形陣でいく」

「り、りんけ……じん？」

なにそれ？

何かの新人類？

さくらちゃん知ってる？」

「し、知らんけん」

「はあー！」

お前ら、輪形陣もしらんどか。

いいか、こうだ」

“カキカキ”

「こうやってミカを中心に他の者で周りを囲むんだ。

そしてその身を盾にして、ミカを泥から守る」

「あ、あのく、守ってくれるのはありがたいんだけど、

あの泥の中をTシャツを汚さずに突っ切るのは……………

それも一位になって表彰台になんて、やっぱ無理！」

「心配するな。

お前はあたしがおぶってやる。

お前一人ぐらいなんでもねえ。

こんな距離ぐらいぶっ飛ばしてやる」

「へ、お、おんぶ？」

「そろそろ25m自由形の女子の部を始めます。

出場者の方はスタート地点にお集まりください」

「よし、みんな気合入れていくぞ」

「おー」

「……………おお」

・  
・  
・

“テツテツテツ”

「えっと、Tシャツ売ってる露店ってここだよな。

でも、なんでこの露店だけ他の店からこんなに離れてるんだ。

はっ、そ、そんなことより」

“キヨロキヨロ”

「い、いないか。」

だがあのたこ焼き屋の人、ここの露店にいるって言ってたよな。そうだ、さつきからずっとTシャツを凝視しているあの人に聞いてみるか」

“ ジー ”

「あ、あのくすみません」

“ ジー ”

「あ、あの」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………そ、そつだ、このTシャツを一つ頂けませんか？  
お代はここに。」

あの、それでこの写真の人を」

「ウガッ！」

ウガガガガガガ、ウガー！」

「ひ、ひいー」

“ ダー ”

・  
・  
・

“ ビシヤ！ ”

「きやつ」

“ ドバツ！ ”

「ひゃ〜」

あ、ほら、えつとGODSさんだっけ？

あの人達が泥かけしてくれてるおかげで前の人達が足止め食ってる。  
これなら何とか追いつけそう。

「チャンス！ チャンスだよサキちゃん。

前の人たち足止め食って」

「……………」

「サ、サキちゃん？」

「お、重い」

「重い言うな」

≪ビシッ≫

「つてなー、なにしやがんだおらー！」

「ご、ごめん。」

だって重いって言うから、つい条件反射で。

それより大丈夫？」

「くそ、思ったよりこの泥に足をとられて体力が削られる」

「サキちゃん」

「このままでは勝てねえ。」

……………ミカ」

「うん？」

「あたしを踏み台にしていけ。」

ゴールはもう目の前だ。

あたしを踏み台にすればお前ならゴールまで飛べるはずだ。

あの時、天井まで飛んだお前のジャンプ力を見せてみる。

それで、なんとしても前にいるあいつらを抜いて表彰台に立つんだ」

「え、で、でもあの時は」

「お、おい、あの姉ちゃんまだ泥かかってないぞ」

「あんなんでゴールされたら、俺達の恥だ」

ひい、見つかった。

GODSの人達、みんなこっち見てる。

「おりゃー、姉ちゃんこれでもくらえ〜」

≪びゅん≫

「ひゃ」

≪びしや〜≫

「ぶはっ〜」

「あ、さくらちゃん」

「構わんと行つて。」

「それできつと表彰台を」

“ぶしや”

「うぷっ」

“バタ”

「今だ、そりやくこの泥を食らえ！」

「はっ！」

“びしや”

「あ、愛ちゃん」

「なにしてるの！」

「早く行きなさい」

「だ、だって」

「その通りです。」

「ミカさん、私達がカバー出来ている間に早く！」

“びしや”

「ぶへ」

「じゅ、純子ちゃん！」

「何しているんですか。」

「あなたは、あなたの今やるべきことをやりなさい！」

「う、うん、でも」

“びゅー”

「うぷっ」

“どき”

「純子ちゃん」

「構うなミカ！」

「あいつらの死を無駄にするんじゃないやねえ」

「いや死んでねえし………ゾンビイだし」

「でもサキちゃんの言う通りだ」

「純子ちゃん………うううん、みんなの想いを無駄にはできない。」

“キッ！”



ゴールまではあと少し。  
いける、いける、いける。

あの時の、あのGの時のジャンプ力を思い出せば。  
わたしなら絶対にいける。

よし！

「サキちゃん背中ごめん」

“ぐっ！”

「うぷー！」

“ぐしや”

「うああああああー！」

“びよーん”

わたしは飛ぶ！

仲間の背を踏み台に、あのゴールを目指して！

「お、おおー、仲間の背中を踏み台にして飛んだー

……えっ」

“びしやん”

「落・ち・た」

あ、あれ？

「……………」

「お、おい」

「あ、い、いやー、サキちゃんお久しぶり」

「お久しぶりじゃねえ！

全然飛んでねえじゃねえか」

「あは、あはははは、お、おつかしいな」

「おかしいなあじゃねえ！」

「だ、だって、あんときはGが服の中に入ったからであって」

“ぐい”

「あ、や、やめてサキちゃん。

な、なにを」

「うっせ、てめえも泥だらけになれ」

“ぐしや”

「ぐへえ〜」

「トボトボトボ」

「……………」

「……………いなかったのね」

「……………ああ。」

まあ、佐賀に来た早々だ、そう簡単に見つけられるとは思っていない。

そんな展開、安物のラノベでも読んだことないからな」

「……………そう」

「まあ、時間はかかるかもしれないが」

「あ、すみませ〜ん。」

道、明けてもらっていいですか？

段ボールで前が見えにくくて」

「あらごめんなさい。」

ほらもう少しこっちによりなさい」

「あ、ああ。」

すみません」

「いえ、こっちこそです」

「ヨロヨロヨロ」

「うんしょ、うんしょっ」

「……………」

「あの人、あんなに段ボール持って大丈夫かしら?」

「……………ああ」

「……………」

「……………」

「……………」

「えつとなんの話だったっけ」

「……………時間」

「そうだった。」

「……まあ時間はある。」

佐賀に来たんだ、地道に探してみるわ」

「そう」

“トボトボトボ”

「遅いんじゃない。」

なにやっつてんじゃない!」

「仕方ないじゃんか!」

段ボール3つも持つてるんだよ。」

前も見え難いし」

「つたくしやゝねえな、ほら貸してみるミカ」

「えっ、美佳?」

“キヨロキヨロ”

「ど、どこだ」

「比企谷君あそこ、あの黒いワゴンのところ」

「黒いワゴン」

「ありがとサキちゃん♡」

「なにしてんじゃない、さっさと乗らんかい」

「あ、あれか!」

“ダー”

「いいからお前ら、帰ったら絶対車の掃除手伝うんだ。」

わかったな。」

まったく、そんな泥だらけで乗り込みやがってからに」

「しっかたねえだろうが。」

水で泥汚れ落としてたら、メイク取れたんだからよ」

“ブロロロロ”

「ま、待って……」

「はあはあはあ、美、美佳」

・  
・  
・

まったく、あんなに怒らなくてもいいじゃんか巽さん。そりゃさ、結局Tシャツ一枚しか売れなかつたけど仕方ないじゃんか。

でも明日からどうしよう。

“トボトボトボ”

とりあえずリビングで紅茶でも飲んでゆっくり考えよう。

「はあ〜」

“ガチャ”

「あっ」

「……………」

じゅ、純子ちゃん。

“キヨロキヨロ”

ふえ〜、他に誰もいない。

ど、どうしよう。

『死んでるかもしれないけど、それでも生きてる。』

だからわたしも生きてるって感じたい!』

『純子ちゃんの馬鹿!』

あれ以来、純子ちゃんとまともに話しできてないし、なんか話し辛くて。

で、でもやっぱちゃんと言わないといけない。

じゃないと、ずっとこのまま……………

う、うん!

“スタスタスタ”

「あ、あのね、ありがと純子ちゃん!」

「何がでしょう」

「今日のこと。」

ほら泥から庇ってくれたし。

あとそれと……………あのね巽さんから聞いた。

あのプロモーションビデオの撮影のこと。

純子ちゃんが巽さんをお願いしてくれたんだよね」

「……………ミカさん。」

「ミカさんはこの前、生きてるって感じたいと言われましたね」  
「あ、う、うん。」

あの時はごめん、わたしどうかした。

折角、純子ちゃんがわたしのこと思ってたのに」

「私達は一度死んだ身。」

そんな私達が、それでも生きてるって感じたいのなら、

今この時この瞬間を、プライドを持って全力で生きることではないかと。

生きてやったんだと胸を張つてと言えるぐらいに。

死んだ身でこういうのもなんです、それが私達の生きてるって証ではないでしょうか」

“だき”

「ミ、ミカさん？」

「………ありがと純子ちゃん。」

ほんと感謝してる」

「………ミカさん」

「あのね、今度はわたしの番。」

もし、わたしで何かできることがあったら言っただけね」

「ミカさん。」

「………では紅茶、お願いしていいですか？」

「あ、う、うん。」

とびつきり美味しいの淹れるね」

「いえ、そうではなく。」

また紅茶の淹れ方、教えてくれますか？」

「え、あ、うん♡」

そんなのお安いだよ………」

あ、あのく、でも拘るのはほどほどに」

「いえ、きつちりと納得するまで教えて頂きます」

「きつちりと？」

「ええ、きつちりみつちりと」

「ふえ〜」

「うふふふ」

「でへ、えへへへへへへ」

・  
・  
・

“ スタスタスタ ”

「えっと、確か連絡があつたのはこの喫茶店だな。  
しつかしガセネタばかりだからな。

今度こそ何かいい情報だといいいんだがな。

古怒田の野郎、まだかまだかつてうるせえからな」

“ カランカラン ”

「いらっしやいませ」

“ キヨロキヨロ ”

「えっと、確か一番奥のテーブルだったな。

ん、あれか」

“ スタスタスタ ”

「お待たせしました班目です。

怪奇情報の連絡をくれたのはあなたですね」

番外編 マツカン日記  
一 本 目 ある台風の日に

“ガタンガタン、ガタンガタン”  
「ス〜、ス〜」

“ガタン!”

はっ! はっ?

“キヨロキヨロ”

やば、俺寝てたのか。

「ふあ〜あ」

“ガシガシ”

新幹線乗るまでは何とか起きていないとな。

えっと、こんな時はっど。

“カチャ”

やっぱりこれだな。

“ゴクゴクゴク”

「ふう〜」

一口飲むごと、徹夜明けの疲れた脳みそにブドウ糖が染み渡り、活性化される。

まさにマツカンこそは千葉県民のソウルドリンク。

元気つづきMAX!

「.....」

“ガタンガタン、ガタンガタン”

ご〜、ごほん。

さ、さてつと・・・嬉野だな。

一応、前回回りきれなかった観光名所の最も効率的な巡り方は調べた。

何とか昼前に佐賀に着けば、明日一日はゆっくり嬉野を回れるはずだ。

唯一、気がかりといえば。

“ビュ〜”

・・・やっぱり結構、風強いな。

車窓から見える木々の枝はこれでもかかっていうぐらい揺れてる。

そうなんだ、千葉では今の季節になると風が強くと風が強く天気の変化が激しい。

今日も出がけの天気予報で低気圧がなんだかんだって言ってたな。

総武線、徐行運転にならなければいいんだが。

“ゴクゴク”

「ふう〜」

だが以前なら風が強いとすぐ運休になったもんだ。

それと比べると強くなったもんだ。

まあ、当時は風に弱いのは総武線だけじゃなくて、

もし台風なんか来ようものなら、

京葉線とか常磐線とかあまたの鉄道がマヒして、

千葉は陸の孤島と化してたからな。

台風の翌日なんか、台風の所為にして堂々と遅刻できたし。

俺自転車通学だったから本当は関係なかったのだが。

はは、あの当時がなつかしい。

・・・台風つか。

“ガタンガタン、ガタンガタン”

・・・そういえば、あいつと初めて出会ったのも台風の日だった。

“うとうと”

・・・もしあの日、台風が来てなかったら。

“こく、こく”

・・・もしあの時、廊下の窓が・・・開いて・・・なか・・・つたら。

“ガタンガタン、ガタンガタン”

・・・俺は・・・俺たち・・・は・・・

“ぐう〜、ぐう〜”



――

「起立！ 礼！」

“ガタガタ”

お、終わったく

さ、今日はぐずぐずしてられない。

速攻で帰るんだ。

なにせ今日は待ちに待ったあのラノベの新刊発売日！

どれだけ今日という日を待ったことか。

前巻の発売から約1年。

な、長かったく

もうあの作家、書くのやめたんじゃないかって思っていたぐらいだ。

それに前巻のラストがラストだっただけに、どれだけ悶々とした日々を

過ごしてきたことか。

その苦しみからようやく今日解放される。

だから、何人たりとも今日の俺を止めることはできない、許さない！

よし、早速由比ヶ浜に部活をサボることを伝えて帰るとするか。

「由比ヶ」

「比企谷、後から職員室に来たまえ。

いいな」

「へっ」

な、な、な、なんだと！

平塚先生、今何と。

「す、すみません、今日はアレがアレなもんで」

“ボキボキ”

「何か言ったかね」

「……な、なんでもないっす」

ぐ、ぐ、ぐぞー！

お、横暴だ。

こ、こうなったら部活だけでもサボって。

「由比ヶ浜」

「あ、ヒツキー、あのね、今日部活来てくれるよね」

「え、あ、い、いや」

「来ない……の？」

え、な、なんでそんな目で。

そんなウルウルした目で見られたら……

“ガシガシ”

まあ、確かに夏休みが明けてから奉仕部の雰囲気であれだからな。

……被害者と、加害者か。

「ヒツキー」

「わ、わかった。

呼び出し終わってから行くから、少し遅くなるって雪ノ下に伝えておいてくれ」

「うん。」

「じゃあ、待ってるねヒツキー」

「お、おう」

“タツタツタツ”

はあく、仕方ない。

さてつと職員室行くか。

“スタスタスタ”

夏休み、林間学校からの帰り。

校門の前に止まった一台の黒塗りの車。

見間違えようのないエンブレム。

そう、間違いない。

高校入学式の日には俺はあの車にはねられた。

その結果、三週間の入院。

俺の高校ぼつちが決まった瞬間だ。

そしてその車は校門で雪ノ下を……乗せて行った。  
被害者と加害者。

……わかつてはいるんだ。  
彼女には何の非もない。

当然彼女が運転していたわけでないし、十分な謝罪も受けたそう  
だ……親が。

俺は入院してて知らんけど。

それに轢かれそうになった由比ヶ浜の犬を助けるためとはいえ、  
いきなり飛び出した俺にも非がある。

だからあの車が彼女の家の車だったとしてもそれは終わったこと。  
彼女がだまっていたことに対し責める気なんて毛頭ない。

だが、だけど俺は……

雪ノ下は強い……だから……  
わかっている。

それは俺の勝手な思い込みだ。

勝手に彼女はこうあるべきだと決めつけ、理想を押し付け、  
そして勝手に幻滅し、裏切られた気になっていただけなのだ。

そんな俺に俺は嫌悪感を持っている。  
ただ、それだけなんだ。

“トボトボトボ”

なら、どうすればいい。

どうすれば、以前のあの関係を取り戻すことができるのだろうか。

「はあ〜」

“キャキャ”

ん、あの女子達、廊下で何騒いでんだ。

いや、そんなに窓から身体を投げ出すと危ないぞ。

……スカート短いし。

「ねえゆっこ、すごい風だね」

「本当だ、あの木なんか今にも折れそう」

“びゅ〜”

確かに今日は結構風が強そうだ。

そういえば、台風が近づいているってテレビで言ってたな。

「遙、これ部活中止じゃない?」

「あるある」

そっか、そうだよな。

この風なら部活中止もありうる。

いや、中止にならなくても早く切り上げるよう学校から指示がでるんじゃないか。

だって総武線、風に弱いから。

総武線だけじゃない、下手をすると千葉中の鉄道が止まる可能性があるからな。

よし、ならさっさと用事済ませるか。

そして部活が終わったら速攻であの書店に。

あ、その前に、マツカンでも。

“くる”

「あっ」

“どん!”

「きやっ」

「うわっ」

“どさ”

いてててて。

後ろに誰かいたのか。

えっとく、大丈夫だったのか?

“ちら”

し、白ー!

しかもリボン付き!

こ、これが噂のラ、ラッキースケベなのか。

お、おおく

“く”

……はっ、いや、そんな場合じゃない。

「すまん」

怪我はしてなさそうだな。

とりあえず散らばった資料を集めて。

“ビュ〜”

「あっ」

やばい、今の突風で資料が一枚、窓の外に落ちた。

さっきの女子達、窓閉めて行かなかったのか。

この風だと急がないとまずい。

“タツタツタツ”

「○△?□、○△?□………○△?□!」

“ちら”

あの女子、何か叫んでる。

や、やっぱり怒るよな。

だが今は………まあ、謝るの後だ。

“タツタツタツ”

・  
・  
・

“ガサガサ”

おかしいな。

ここにも落ちていないつか。

風向きからするとこっちのほうに飛んでいったのは間違いないはずなんだが。

もしかして校外にまで飛んでいったんじゃねえか。

………マズいな、そうなると思っけるのは無理だ。

“ガシガシ”

とにかく、もう少しグラウンドのほうまで探してみるか。

「お〜い、そこあぶねえべ」

“ヒュ〜”

え、ボ、ボール?

“ボゴ!”

「ぐはあ〜」

“どき”

いててて。

な、なんでサッカーボールが。

「わりいわりい大丈夫って、あれ〜ヒキタニ君じゃね。」

顔面直撃したみたいだったけど大丈夫？」

くそ、戸部か。

なんでこんなとこまでボールが。

・・・あつ！

そつか、そこにあつたのか。

探していた資料は校庭の木の枝に引つかかっていた。

見つからないはずだ、ずっと下の方ばかり探していたからな。

「ごめんなくヒキタニ君。」

いや〜ほら、今日洒落なんないほど風強いっぺ。

クリアーしたボールがよ、風に乗ってそんでここまで来たんだわ。

でもマジ大丈夫？

鼻血でつてつけど」

「戸部！」

「え、あ、いや、マジわるかったわ〜

勘弁な」

「サンキュ〜

助かった。

ほれボールだ」

「え？

あ、あの、お、おう。

じゃ、じゃあ」

“タツタツタツ”

よし、それじゃ。

「はっー」

“ピョン、ピョン”

くそ、だめだ、このままでは届かないか。

どこかに脚立か何か。

「何やっておるのだ八幡。」

さつきからピョンピョンと。

その姿は、まさにヒキガエル。

ぶぶぶぶ

「うるせえ。」

今忙しい。

材木座、あっち行け」

「ぶひー

あまりなもの言いようではないか。

我と貴様はあの地獄のような修羅場を潜り抜けてきた戦友ではないか」

げ、本当に面倒な奴。

戦友って、体育の時間に準備運動のペアだっただけじゃねえか。

今は、こいつにかまっている暇はない。

無視だ無視！

えっと、脚立か台になるものはつと。

“キヨロキヨロ”

「ね、ねえ八幡聞いてる？」

そうだ、喜べ八幡。

とうとう我の新作が完成してだな、貴様に一番に読ませてやろうと持ってきたのだ」

どこかに足場に……あ、そうだ。

材木座に肩車してもらえば。

「材木座、いや戦友。」

折り入って頼みがある」

「せ、戦友？」

ぶはははは。

なんだ言ってみろ。

貴様と我は古より主従の関係。

主としては、僕である貴様の頼みぐらい聞いてやらんでもない。さ、言ってみるがよい、我が僕、比企谷八幡！」

「……」

「八幡？」

「材木座」

“ぐい”

「へ、あ、いやなにを。」

は、八幡く」

「……足場だ」

“ぐりぐり”

「あたたた、せ、せめて靴を脱いでくれ。」

げふお、あ、頭を踏むでない」

“そー”

「えっと、庶務先輩いるかなあ。」

他の生徒会のみんなに気付かれないように、

失くした資料をもう一回印刷してもらわないと」

“キヨロキヨロ”

“タツタツタツ”

「はあはあはあ」

くそ、材木座の野郎が暴れるんで、大分遅くなったじゃねえか。

急がないと……

『比企谷、遅かったな』

“ボキボキ”

さ、さ、さっさとこの資料渡して職員室行こう。

“ピタ”

ま、待てよ。

さっきの女子、どんな顔してたっけ。

この資料は今度の文化祭の資料だから、きっと生徒会役員の誰かだ  
と思うが。



生徒会の役員って……

「ま、まあ、普通生徒会なんてあんまり関わり合いないからな。

えくと、顔、顔つと。

……白。

い、いや違う顔だ顔。

それも憶えていたいけど。

「ご、ごほん！」

絶対見ているはずなんだ。

よく考えれば必ず思い出せる！

……白。

い、いや。

……白。

あ、あのく

……リボン付き。

ぐく、だ、駄目だく

あの白いもの以外思い出せん。

ま、まあ、とにかく生徒会室に。

“スタスタスタ”

「ぶつぶつぶつ」

ん、生徒会室のドアのところになんかいるんだけど。

……何やってんだあの女子。

なんかドアの隙間から生徒会室覗いてぶつぶつ言ってるんだが。

ん、あの手に持っている資料って……そ、そうかこいつか。

後ろ姿で顔は見れないが、手に持っているのは同じ文化祭の資料

だ。

「すまん、ちょっといいか？」

“びくー！”

「あ、ごめんなさい、わたし怪しい者じゃなくて生徒会の……

え、あ、あなた」

「……地味」

「はあ？」

「い、いや何でも・・・」

やべ、つい声に出ちまった。  
だけど、それくらい地味。

肩ぐらいの髪を真ん中に分けて、それをゴムでまとめて。  
目や鼻や口は全て普通。

なんか何の特徴もないんだよな

せめて眼鏡ぐらいしていればアクセントになるんだがな。

これじゃ顔憶えられて無くても仕方・・・

はっ！

な、なんかすげー睨まれてんだけど。

・・・ま、そ、そうだな。

資料を追いかけるためとはいえ、ぶつかっただままにしてたからな。  
見たところ怪我とかはしていないようだし、面倒なことにならない  
うちに

さっさと資料渡して職員室行くか。

「あ、あのな、これお前のだろ」

「あ、うん、そうだよ」

「いやな、あんとき一枚窓の外へ落ちたのが見えただ。

急いで探しに行ったんだが、ほら、今日風が強いだろ、結構飛ばされて。

すまん、なかなか見つからず大分遅くなっちゃった」

「あ、ありがとう。」

「ごめんなさい、なんかわたし」

「じゃあな」

「さて、用事も済んだことだし、職員室行くか。」

「あ、待って」

ん、なんだ？

“ちよいちよい”

え、なんだその手？

しやがめつていうのか？

まあ、何かわからないけど。

“ズン”

は、い、いや近い近い近い。  
すげ、顔近いんだが。

な、な、なんでそんなに接近して。

もしかして資料拾ってきた俺に感動してお礼の・・・

「よつと」

“ひよい”

「うん？ お、お前何を」

「はい、木の葉ついてたよ」

え、あ、木の枝に引っかけた資料とってた時に。

・・・そ、そっか。

「お、おう、あ、ありがとうさん、じゃあ」

「うううん、こっちこそ、ありがと」

“にこ”

「じ、じゃ、じゃあ」

“スタ・・・スタ、スタ・・・スタスタスタ、ダー”

な、なんなんだ今の！

“ドキドキドキ”

まだ、心臓がどきどきしてる。

「・・・ありがとつか」

名前なんて言うんだろ。

「・・・」

はっ、何考えてんだ俺！

またそうやって勘違いを。

“ガシガシ”

くそ、また黒歴史を繰り返すところだったじゃねえか。

希望を持たず、心の隙を作らず、甘い話を持ち込ませず！

ボツチ道を極めた俺には通じない。

ちよ、ちよつと危なかったけど。

きつとあの女子にとってはあんなの普通、普通のことなんだ。

そう、それは“おはよう”とか“こんにちは”とかあいさつと同じ

程度のものなのだ。

きつと誰にでもあんな風に接して、  
きつと誰にでもあんな風にあの笑顔を見せるのだ。  
そう、それはきつと普通のことなんだ。

．．．．．俺はもう勘違いしない。

「．．．みんなが言うから、みんながそうするから、そうしないとみんなの中に  
入れてもらえないから。

誰かを貶めないと仲良くしてもらえない、そんな生贄を求めないと維持できないような

関係なら、そんなものぶっ壊してしまえばいい」

「比企谷」

「．．．．．林間学校のあの短い時間である問題は解決はできないですよ。

でも問題の解消はできる」

夏休みの林間学校での一人の女子小学生に対するいじめ。

生贄は生贄らしく。

それが子供王国の腐りきったルールだ。

『惨めなのは嫌か』

『．．．．．うん』

ぐつと嗚咽を堪えるようにうなづくその子の瞳には、今にも零れ落ちそうな

くらしいの涙が溢れていた。

だから俺は．．．

「で、人間関係に悩みを抱えるのなら、それ自体を壊してしまえば悩むことは

なくなるっか」

「負の連鎖ならもともとから断ち切らないといけない」

「ふう、そういうことか。」

まあ、一度ちゃんと言の口から事の詳細を聞いたかったからな」  
「……………うっす」

「まったく、君という奴は変わらん」

「そんなに簡単に変わるものは主義とは言わないでしょう。」

先生だつて独身主義を貫いて」

「抹殺のラスト・ブリット！」

“ドス！”

「おわ」

“ふらふら”

ぐ、い、いってえ

ぼ、暴力反対……

☒どん”

え、な、なに？

なんか柔らかくてあったかいものに顔が……………

え、えつと、も、もしかして、こ、この膨らみって。

「キヤー」

え、や、やっぱり！

“べし”

「ぐはあ」

い、いってえー

なにかが脳天にずっしりと……

“ズデン！”

し、死んだ。

「な、何すんだこの変態野郎」

「ほほう、なかなかいいチョップをしてるな。」

確か城廻のどこの三ヶ木だったかな」

「は、はい。」

あ、平塚先生、これ明日の文実の資料です」

えっ、この声ってさっきの女子？

あの女子なのか？

えつとく

“チラ”

やっぱりこの位置から顔は見れな……白！  
白にリボン。

スカートと太腿の間から見えるあの神々しいものは……ま、間違いない、

こ、これはやっぱりあの時の女子のおパンツ。

「おう、そこに置いておいてくれたまえ。

それで、君はいつまでそこでうずくまってるのかね。

それともその女子のスカートの中でも覗いているのか」

げ、げえ！

「はあ！ なにこの人、最低」

「いや、ちが、決して覗いていない。

平塚先生、あんたなんてこと言うんだ。

お、俺は決して白いものなんか見てない！」

「あつ！」

“べし”

ぐ、ぐはあく

2発目のチョップく

“ドサ”

「ひ、平塚先生、失礼します」

「おう、ぐ」苦勞だった」

“ガラガラ”

いててて。

くそ、あのチョップ、食らう度に目から火が出て頭がクラクラと。  
……しかし、あれ完全に変態を見る目だったなあ。

だ、だが、あれは覗こうと思ったわけじゃない。

か、顔を確認しようとして偶然に。

だ、だから俺は無実だ。

「ひ、平塚先生！

あんた」

「比企谷、鼻血拭きたまえ」

「えっ」

“ぼたぼた”

「あっ」

・  
・  
・

“ガタガタ、ガタガタ”

風、めつちや強くなってきたな。

部室の窓枠の悲鳴がどんどんでかくなってきた。

本格的に天気がひどくなる前に帰ればと思っていたのだが、

完全下校時間近くになって、ようやく平塚先生に帰宅を施され帰り

支度を

しているところだ。

今日はずっと早く帰りがかったのだが。

ラノベの新刊買いたいし。

それに、

『なにこの人、最低』

……いろいろあったからな。

まだあの衝撃が残ってるし。

“なでなで”

「ん？ ヒツキー頭撫でてどうしたの？」

「あ、いやなんでもない」

「ふくん。」

ヒツキー、部室閉めるよ」

「あ、ああ、いま行く」

“スタスタスタ”

「すまん待たせた」

“ガチャガチャ”

「……私は鍵を返しに行くから」

「うん。」

じゃあまた明日ね、ゆきのん」

「ええ」

“スタスタスタ”

「行くか」

「うん」

“ビュ”

うへへ、やっぱり外は風が強い。

それにあの真っ黒な雲、今にも雨が降り出しそうだ。

合羽、買ってきておいて正解だったな。

こんな強風の中、傘を差しての自転車はちよつときつい。

心折れるレベルだからな。

それじゃ帰るか。

「由比ヶ浜、俺チャリだから」

「うん。」

じゃ、バイバイヒツキー。

……あ、あのね、今日は部活来てくれてありがとう」

「お、おう」

“スタスタスタ”

……ありがとうつか。

そろそろあの雰囲気何とかしないとな。

被害者と加害者。

林間学校の帰り、あの件があつてから奉仕部の空気は重い。

全員が全員頑張つて話をしようと会話の糸口を探っている、

そんな日々が続いている。

いい加減、マジ何とかしないと。

「はあ〜」

“ガシガシ”

「……帰るか」

“テクテクテク”

「ふんふんふん♪」



ん、あ、こ、この声は。

“サツ”

え、な、なんで俺隠れてるの。

・・・ま、まあ、職員室の件があったからな。

いま顔合わせたら待ち伏せしてたんじゃないかって思われるかもしれないん。

それだけじゃない、下手したら通報されるレベル。

通報されないとしても、きつとラインとかで拡散されて明日の朝には

大変なことに。

『おい聞いたか、2―Fの比企谷、女子待ち伏せしてたんだって』

『こわ〜』

『それだけじゃなくて、一日中ずっと付け回していたんだってよ』

『マジかよ』

・・・こ、ここはやっぱり隠れておこう。

君子危うきにつてやつだ。

“キヨロキヨロ”

よし、もういないよな。

さ、さつさと帰るか。

・・・しっかし。

“ザー、ザー”

とうとう雨降りだしてきてしまった。

しかもこれ豪雨じゃねえか。

はあ、傘、自転車置き場なんだよな。

仕方ない走っていくしかないか。

まあ自転車のとこまで行けば合羽もあるし。

それじゃ行く

「ひゃ〜」

え？

“ダー”

げっ！

あ、あいつ戻ってきやがった。  
やべ。

“サツ”

く、くそ、なんで戻ってきたんだ。

“そ”

ん、なんだあいつびしょ濡れじゃねえか。

傘は・・・あ、あれは傘というものだろうか。

あいつが手に持っているもの、あれはワイヤーオブジエか。

お、おい、ついてたビニールはどうしたんだビニールは。

“びゆ”

そっか、この強風で傘が。

それであんなにびしょ濡れになって。

へっ！

あ、あのシャツから透けてるピンクのって。

「お、おい、あれ」

「うほおー」

あ、あいつ、気が付いていないのか？

通り過ぎる男子の好奇の視線に晒されているぞ。

ほ、ほら、あの男子、スマホ持ち出しやがった。

ちっ、くそ、まったく！

“スタタタ”

「はあく、雨降ってるのか」

「あー」

い、いや、何その顔。

そんなに嫌な顔しなくても、まるで食事中にGを見つけたように。

いや、まあ職員室の件があるから仕方ないけどな。

・・・マジ、シャツびしょ濡れでスケスケじゃねえか。

“ゴクツ”

はっ、い、いやそんな場合じゃなかった。

えっど

そ、そうだ、ごく自然に気が付いたように。

「お、おうっ。」

「は！ お前……」

「なに、なんか用？」

「いや、その、なんだ……透けてるぞ」

「はあ？」

「じゃあな。」

“ タツタツタツ ”

「げっ！」

……よかった、気が付いたみたいだな。

まったく。

さて、あとはつと。

“ タツタツタツ ”

「はあはあはあ」

よかった、まだいた。

玄関の片隅で雨が上がるの待っている。

まあ、傘壊れてるしな。

それにあの格好じゃ帰れない。

だが、いつまでもそんなとこにいたら……

“ スタスタスタ ”

「おい」

「へ？」

“ ばさ ”

「そんな格好じゃ風邪ひくぞ。」

あ、あのな、これ買ったばかりだから。

まだ一度も着てねえから。

まあなんだ、嫌でなかったらこれでも着ろ。

……貸してやる」

「え、あ、合羽。」

でも、あなたはどすするの？

合羽ってことはあなたはあなた自転車でしょ？」

「ははん、問題ない。」

俺には傘があるからな。

お前の傘のような根性のない傘とは違うぞ。

すげえ高かったから。

大事なことだからもう一回言う、すげえ高いやつだから」

いや本当はそこに無残な姿をさらしているお前の傘と同じビニールの傘なんだが。

ま、まあ、そう言わないと合羽受け取らないだろうからな。

「な、なによ、いいじゃん別に安くたってさ。」

無くなったって気にならないじゃん」

そうだよな。

俺も小学校の時、買ってもらったばかりの傘を

いきなり盗まれたんだ。

それもビニール傘じゃないやつを。

それで雨に濡れて帰ったら、すげえ怒られた。

めっちゃ高かったんだって。

・・・母ちゃん怒るのはそこかよ。

ま、まあだから俺もビニール傘派だ。

いつ盗まれてもいいように。

「そ、そうか。」

まあ、だから俺のことは気にするな」

「あ、でも自転車で傘って危ないって」

「ふふふ、俺のテクニクを甘くみるな。

じゃあな」

「あ、ありがと」

“ ニコ ”

「お、お、おう」

“ タッタッタツ ”

な、な、なんだあいつ。

笑うとそこそこかわ・・・・・・・・

「ご、ごほん！」

でもなんで俺ここまで。

あの女子、今日会ったばかりなのに。

「……………」

ま、まあ、これで職員室の件はチャラのはずだ。

もうネットでたたかれるようなことはないはずだ。

だからこそ俺はこんなことを……したんだ、多分。

さ、さてつと。

この時間ならまだあの帰り道の書店に寄って帰れるはずだ。

今日の新聞、ちやんと予約しておいたからな。

さつさと帰ろ。

・  
・  
・

「ザー、ザー」

「……………」

「ビュ、ビュ」

「うぐっ」

くそ、必死で自転車漕いでいるんだが、この向かい風の所為で

漕いでも漕いでも、全然前に進んでいる実感がない。

それにこの雨で濡れたYシャツが肌にくっついて、すぐく気持ちいが

悪い。

仕方ない、傘やつぱり差すか。

この風だから傘をさすと、すげえ自転車運転しづらくなるのだが、

仕方がない。

「バサ」

ふう、これで雨はしのげる。

さて行くか。

「ビューー！」

「おわあー！」

「バキ、バキバキ、グシヤ」

げ、げえー！

お、俺の傘が．．．．傘がぶつ壊れた。

．．．．はあく

い、いや、まだだ。

あの角！

あの角を曲がればラノベを予約した書店。

まだ心折れるわけにはいかない。

よし！

もともとびしょ濡れなんだ。

傘なんてなくても。

“ギョコ、ギョコ”

ペダル重てえく

だ、だがここを曲がれば！

「．．．．な、なんだと」

“ガシャン”

な、な、なんでだ！

“ダー”

なんでシャッターが下りてんだ。

朝、ここを通った時には間違いなく開いてた。

営業していたはずなんだ。

「はあはあはあ」

まだ、閉店には時間あんだろ。

なんで．．．．え、貼り紙？

『台風接近のため、安全を考慮し営業時間を短縮いたします』

なんだと．．．．

“ビュ”

強風でいろんなものが飛ばされていく街の中で、

ただ、俺だけが雨の中取り残されていた。

「びえつくしょんー」

—————

「ふあゝ」

す、すごく眠い。

昨日の台風は一晚で去ってしまい、朝方には空は晴れていつもの日常に戻った。

くそ、本当に最近の台風は根性がない。

てつきり今日は台風を理由に遅刻できると思っ  
て、昨日は思いつきり夜更かしてしまった。

だ、だつてラノベの新作を手に入れられなかったショックはあまりに大きく、

跡形もなく粉碎された俺の心の1万2000枚の装甲を修復するには、

録画していたプリキュアを全て観るしかなかった。

おかげでN・爆弾ぐらいには耐えられるくらいには修復できたが。

“ふらゝ”

や、やばい。

何とか授業は眠らずにすんだが、や、やっぱり横になって寝ないと。そうなれば行くところは決まっているのだが。

“トボトボトボ”

特別棟にある保健室までの童貞、いや道程がやけに遠く感じる。こんなに遠かったつけ。

だが、ようやくたどり着いたようだ。

“トントン”

「あ、はいどうぞ」

“ガラガラ”

ん、あ、先客がいたか。

女子生徒と養護教諭が雑談していたみたいだが、俺が入ってくるとお喋りもピタリ止まってしまう。

女子生徒は後ろ姿しか見えないが、居心地悪そうにスマホに目を落とっていた。

なんだか悪いことをした気分だ。

「おやおや、静ちゃんのことの子だね」

白衣を着た妙齢の女性、養護の先生が俺をしげしげと眺めてそう言った。

さ、ここからが俺の演技力の見せ場だ。

ちよつとだるそうな雰囲気醸し出してつと。

「なんか風邪っぽくて」

完璧だ。

こういう時は無類の演技力を発揮するのが俺だ。

そろそろ風邪の使い手と呼ばれてもおかしくない。

「素人判断は危険よ。」

見せてごらんなさい」

な、なんだと！

この養護教諭は俺の渾身の演技を軽やかにスルーした。

“ジー”

う、養護教諭の先生は俺の嘘を見破ろうとじつと目を見つめてくる。

い、いや、麗しき女性にそんなに見つめられると……

わ、わりと綺麗だし。

やば、心臓がバクバクしてきた。

……正直、年上の女性っていうのも嫌いじゃない。

むしろ10年早く生まれていたら、10年早くあの人と出会っていたら

きつと俺は……

「……これは風邪だねえ」

「診断は早いつすね……」

「だって、そんなどんよりした目をしてるんだもの。」

病気にきまつてるじゃない」

な、なんだと。



それだと、俺は四六時中病んでいることになっちゃうんだが。

「それに、心なしか顔赤いしね」

「……………」

い、いや、それはあんたがじっと見つめるから。

「どうする、ここで休んでいくかい？」

「あ、じゃあ」

“ シャー ”

「奥のベッドね」

「うっす」

“ シャー ”

手短に返され、素直に従った。

カーテンで仕切られたベッドにはきれいに折りたたまれたタオルケットがある。

それを腹にかけると俺は寝ころんだ。

「え、どうしたの、大丈夫？」

「なんかモジモジしてるけど」

「いえ、あの、そ、そのく

べ、べ、別になんでも……………ないです」

ピンクのカーテンの向こうでは、またお喋りが再開されている。

微睡みに落ちていく中、その声だけが微かに耳に残った。

……………どこか……………で聞いたような……………声……………だ……………な。

「スー、スー」

—————

“ ガタンガタン、ガタンガタン ”

「次は品川く、品川く」

「東海道新幹線をご利用の方は乗り換えです」

「ぐうおー、ぐうおー、スー、スー」

## 二本目 プロム 二人の別れ（前編）

「お兄ちゃん、本当にもう忘れものない？」  
「大丈夫だ。」

それにしばらくはホテル住まいだからな。  
最低限、生活するのには困らない。

まあ、何か必要なものがあつたら連絡するわ」

「本当に大丈夫かなあ」

“ スタスタスタ ”

「うふふ、本当にお兄さん思いなのね」

「あ、雪乃さん、どうもです。」

こんな兄ですが、どうぞ末永く宜しくお願いします」

“ ペコリ ”

「ほら、お兄ちゃんもお願いして！」

「え、お、おう。」

不束者ですがよろしくお願い………ってなんか違うだろ！」

「ちっ！」

「ちっじゃねえ。」

………まったく。

じゃそろそろ行くか」

「ええ」

「あっ！」

ちよ、ちよつと待っててお兄ちゃん」

“ ダー ”

「ん？」

お、おい小町、電車の時間まだ余裕あんから、  
走らなくていい」

「らじゃー」

「本当に仲がいいのねあなた達」

「まあ、俺は小町を愛してる」

「……はあく、本当にシスコンね。」

これじゃ小町さんがお嫁にいくときはどうなるのかしら  
「こ、こ、小町が嫁だと！」

そんなことは俺が絶対に許さん。

雪ノ下、世の中には言っていることと悪いことが

“タツタツタツ”

「お待たせー」

はあはあはあ。

はいお兄ちゃん、マツカン。

それと雪乃さんはミルクティーでよろしかったですか？

「ありがとう小町さん」

「いえいえ。」

ほらお兄ちゃんもありがとうは？」

「おう、サンキュ」

「まあ、佐賀に行ったらもうマツカン飲めないもんね。

そんなお兄ちゃんに小町の心がこもったマツカンの餞別。

あ、これって小町的にポイント高い！」

「いや、普通にネットで買えるから。

ネットならポイントもついてチョクお得！

あ、これ八幡的にポイントチョク高い！

それと餞別は現金以外受け付けないからな」

「……サイテーだこの人」

「……まったくこの男は」

“ガタンガタン、ガタンガタン”

「……」

“カチャカチャ、カチャカチャ”

「電車の中でも仕事か。」

相変わらず忙しいようだな」

「ええ、別の案件の報告があるから」

「それならお前は飛行機で行けばよかつたんじやねえのか？」

「そっちの方が時間的に楽だろう」

「ええ、私もそれは考えたわ。」

でも、またどこかの小心者さんに土壇場で佐賀に行くのキャンセルされた

ら困るから。

それより暇そうねあなた」

「ん？」

ふふふ、当り前だ。

俺は仕事のON—OFFをはっきり区別する方だ。

OFFの時は仕事のことなんて微塵も」

「あら、出張中の移動時間も勤務中になるはずよ」

「い、いや、今は休み時間、休み時間中だ！」

「随分と長い休み時間なのね」

「……………」

「そんなに暇ならこれでも読んでなさい」

“ パサ”

「ん、これは？」

「東地グループの古怒田課長から送られてきたプロジェクトの概要書よ。」

付箋紙のところをよく見ておきなさい」

「付箋紙？」

“ パラパラパラ”

「……お、おい、テーマパークって

第2案にテーマパークの建設って書いてあるじゃないか。

まだあきらめていなかったのかあの人」

「そうみたいね

でも確かに私たちの案ではキラーコンテンツになるものがない。

佐賀をアピールするには少し弱い。

そこがネックね」

「だがこんなテーマパークなんてもの作ったら」

「ええ。」

だからなんとしても役員会の議題に上がる前にキラークンテンツなるものを

探し出すの」

「そうだな」

・  
・  
・

“ガタンガタン、ガタンガタン”

「なあ、東地の古怒田課長が言ってたハウステンボスに勝てるものって

なんだろうな」

“スー、スー”

って、おい！

移動時間は勤務中でなかったのか。

「……………」

ふうく

“ガシガシ”

仕方ないな。

雪ノ下、自分の有能さを証明するため、毎日頑張ってたよな。

人一番体力がないくせに。

この若さで課長。

いくらこいつが優秀だからといっても、そこは親父さんの会社だ。

陰でいろいろ言ってる奴いるからな。

まあ、ここは寝かせておいてやるか。

“ガタンガタン、ガタンガタン”

・・・それに今回は雪ノ下に助けてもらったしな。

あのままだったら、きつと俺は今回のこの出向の話も断っていた。周りにも自分にも屁理屈をこねながら。

そして二度と佐賀には・・・

“ガシガシ”

……佐賀にいるんだな美佳。

『彼女の行動には必ずなにかしら理由があった』  
理由つか。

……バレンタイン、林間学校、文化祭、生徒会選挙、そしてプロムナード。

そう、あいつはいつも大事なものを守るため自分を傷つけた。  
そして言うんだ。

『……わたしはわたしのやりたいことをやっただけ』  
つと。

それは、もう二度と大切なものを失いたくないというあいつの願いからくるもので。

……あいつは幼い頃、目の前でお母さんと妹さんを事故で失くしている。

そしてそれは自分の所為だと決めつけ、自分を責め続けていた。

俺はそのことをわかっていながら、いやわかっていたつもりで本当はわかって

いなかった。

だから高校最後となったイベント、あのプロムの時。

あの時もあいつは、俺の……いや俺と雪ノ下、由比ヶ浜の大事なものを守るため

また自分を傷つけた。

俺は何か変だと感じながら、あいつのそんな願いに気付けず。

……そして俺達は別れた。

『……そんなのあなたが一番よく知ってるはずじゃない』  
そうだよな雪ノ下。

あいつのすることには必ず何か理由がある。

俺が一番よく知ってるはずじゃないか、そんなの。

……高校三年 三学期に遡って……

“ガタンガタン、ガタンガタン”

「ふあくあ」

うく、眠い。

今日から三学期だっというのに、昨日はちよつと勉強頑張り過ぎた。

まあ受験生だからな、そんなの当り前なのだが。

それでもこの電車の振動と相まって、すげく眠い。

えつと、どこか空いてる席はないか探すか。

“スタスタ、スタスタ”

だがこうして電車に揺られて学校に行くのもセンター試験までか。

その後はずぐに自由登校。

そう考えるとこの車窓から見る景色も愛おしく・・・

「ぐうおー」

け、景色もいと・・・

「ぐうおー、ぐうー、ぐうー、すー」

け、け、け、景色も・・・

「くー、くー、すー、すー」

へへ、お腹いっぱい、とうちゃんもう食べられないよ」

こ、こ、こいつは！

“ビシ！”

「い」だっ！」

ま、まったく。

完璧に熟睡してたじゃねえか。

不用心過ぎんだろ、こいつは。

そんなやつにはデコピンの刑だ。

「いたたたたた」

「いい加減そろそろ起きろ。

駅、乗り過ごすぞ」

こいつには一度ちやんといい聞かせないとな。

一応、女子なんだから。



何かあつてからじや遅い。

「お前、電車の中で熟睡し過ぎだろ。全く女子なんだからもう少し」

「う、おでこ痛い。」

うとうとう、い、痛いよ」

「え、そんなに痛かった？

す、すまん大丈夫か？」

「うとうとう、うわーん」

や、やばい。

マジ泣き出した。

そ、そんなに痛かったのか。

げ、周りの乗客の俺を見る目が。

「すまん三ヶ木」

“スー”

え、何？

指？

“にこ”

な、なにその笑顔。

はっ、ま、まさかデコピン返し！

や、やめて！

“ビシ！”

「い、いいてえ」

「へへへ、お返しだ」

「くそ、嘘泣きかよ。」

心配して損した。

そんなことより、ほら駅だ降りるぞ。

いてててて」

「あ、うん。」

「・・・ごめん、そんなに痛かった？」

“スタスタスタ”

うん、まだおでこが痛い。

まあ、おかげで目覚めたけどな。

えっとそれよりあいつどこだ？

俺が自転車を取りに行く時に、駅を出たところで待ってるって言うてたはずだが。

“キヨロキヨロ”

えっと、あ、いたいた。

ほんとあいつ地味だからちよっと目を離すとどこにいるのかわからん。

常時ステレスヒツキー発動してっからな。

マジ俺の上位互換かよ。

“チリンチリン”

「おう、お待たせ」

「うんしよっと」

え、き、君何するの？

いきなり荷台につて。

もしかして二人乗りする気なのか。

い、いや、この時間、他の生徒もいるんだ、そ、そんなリア充のような………

こ、断る！

断じて断る。

そ、そんな罰ゲーム受けるわけにはいかない。

「お、おい！

なに当たり前のように荷台に座ってんだ」

「だめ？」

「当たり前だ。

いいか、自転車の二人乗りは禁止されているんだ。それに重たいし」

“ベシ”

「ぐはぁー」

ま、マジ、君のその空手チョップ痛いんだからね。

食らう度に脳みそがくらくらして。

くそ、こいつと出会ってから何発食らってたんだ。

……でも最近……なんか快感になってきたんだよなあ、これ。

はっ！ やばいだろうそれ！

「うっさい、重たい言うな。」

最近、ほんと気にしてんだから……ちよ、ちよっと太ったの。

もう！ ほらさっさと行くよ」

「お、降りないのかよ」

「重たいって言った罰。」

ほら、学校に向けて出発シンコー！ 茄子のおし」

「や、やめろ、それ以上言うな！

……たく。

ちやんと掴まってる」

「ほっい」

“ぎゅ”

え、あ、いやそんなに抱き着かれると、二つのなにか柔らかいものが俺の背中を

圧迫して、えっと八幡の八幡があれになって大変で……

う、運転できないから！

「あ、い、いや、っ、掴まりすぎだから。」

もうちよっと離れてくれない？」

「やだ」

……そ、そうですか。

はあ

「ふんふんふん♪」

「……………」

“ギ〜コ〜、ギ〜コ〜”

「お、おいあれ」

「げっ、朝っぱらからむかつく」

「ちっー!」

やばいな。

学校が近くなつてすれ違う生徒の数が・・・

こいつ駅からずっと抱き着いたままだし。

このままだと俺のメンタルがもたん。

「……………あ、あの〜」

「ふんふんふんふん♪」

「も、もしもし三ヶ木さん」

「え、あ、な、なに?」

「いやご機嫌なところすまないが、そろそろ離れてくれない?」

ほ、ほら、学校近くなつて生徒の数も増えてきたから、

あの、その、な、なんだ、わかるだろ」

「ん〜なんだらう?」

わかんなくい」

こ、こいつは。

「うそつけ!」

頼むから少し離れてくれ。

それに二人乗り自体本当はまずいんだからな」

「いいじゃん。」

それにさ、どうせ帰りは結衣ちゃんとかうやって帰ってんでしょ。

いつも一緒に帰ってるんだから。

……………結衣ちゃんバス通学だし。

だからきつと」

「塾が一緒だからな

だから部室に顔出してから一緒に行ってただけだ。

それに由比ヶ浜も学校から駅までは自転車だ。

塾行くようになってから、電車間に合うように自転車にしてるん

だ」

「え、あ、そ、そうなんだ。」

そ、そっか、そっか。

えへへへへ」

「な、何その笑み」

「なんでもなくらい」

“ぎゅ、ぎゅ”

「お、おい」

「ふんふんふんふん♪」

げ、こいつ無視しやがった。

それになんかさらに機嫌よくなってるだけだ。

はあく、仕方ないっか。

ちよつと遠回りだができるだけ生徒の少ない道を。

「ふんふんふん♪」

「……」

“ガシガシ”

「あのな」

「ん？」

「あ、いや、まあなんだ。

この自転車で二人乗りしたことがあるのは、小町とお前だけだ」

「え？」

「……比企谷君♡」

—————

由比ヶ浜遅いな。

まあ帰り際に教室で三浦達につかまっていたからな。

仕方ない、参考書でも読んで待ってるか。

「お、おい、あいつ」

「ん、あ、朝のリア充野郎か」

「なんであんな奴が」

“ひそひそ”

“……まあ三学期が始まってから毎朝二人乗りだからな。こうなることは予測できていた。”

何人もの生徒に目撃されてっからな。

マジそろそろ、俺のメンタルがもたないんだが。

明日こそは何とかしないとな。

“……だけど、なんで女子ってあんないい匂いがするんだ。いつも風呂上がりのようなすげーいい匂いがして。”

「はあ〜」

もうちよつとだけ……いつか。

“にやにや”

「ヒツキーおま……キ、キモ！」

「はっ、由比ヶ浜！」

「……何考えてたんだし」

「い、いや、な、なんでもない、なんでもないぞ。」

そ、そ、それよりもいいのか」

「え、あ、うん。」

ごめんね遅くなっちゃって。

今日塾がないからさ、久しぶりに優美子達と話したら、

なんか話がすごく盛り上がった」

「そうか、まあいつもは塾あるからな。」

今日みたいに塾が休みでないと、なかなか直接会ってゆっくり話する

時間なんてないからな。

それよりそろそろ行くぞ。

きつと雪ノ下待ってるはずだ」

「えへへへ、そうだね。」

よし！ 今日はいっぱいゆきのんとお話ししようっ」と

「勉強だ！」

今日は塾は休みだから、三ヶ木も入れて4人で勉強するってはずだろ」

「べ、勉強もするし！」

「・・・少しだけど」

「ったく」

“ スタスタスタ ”

「・・・」

「でき、優美子が言うから」

「そう」

「だからあたしも言っただけなの」

“ ペちやペちや ”

お、おい勉強はどうなったんだ。

部屋に来てから鞆から参考書も出さず話し込んでるんだが。

き、君が言い出したんだよね、一緒に勉強しようって。

「だよ、ゆきのん」

「ふふふ、由比ヶ浜さんらしいわ」

・・・雪ノ下うれしそうだな。

まあ俺と由比ヶ浜は塾があるから、この部屋に来てほんの挨拶程度の会話しか

できなかつたからな。

今日ぐらいいは大目にみてやるか。

さ、そんなことより俺は勉強勉強つと。

“ カキカキ、カキカキ ”

・・・しかし三ヶ木遅いな。

いつもならとつくにここで雪ノ下と勉強している時間のはずだが。

「・・・何かあったのか」

「え、ヒツキー何か言った？」

「あ、いや、何でもない」

「それはそうといよいよ週末はセンター試験ね。

比企谷君、由比ヶ浜さん、あ、あの頑張つて」

「ああ」

「うん、ありがとうゆきのん。」

でもさ、センター試験の前にこうやってみんなで勉強会できてさ、なんかうれしい。

あと、美佳っち早く来るといいね」

・・・いいいや君は勉強してないんだけど。」

マジ、センター試験大丈夫なのか由比ヶ浜。

「そうね。」

いつもならとつくに來てるのに。

あ、由比ヶ浜さん紅茶のお替わりどうかしら?」

「うん、ありがとうゆきのん」

「あなたは?」

「あー、俺も貰うわ」

「ね、ゆきのん」

「なにかしら?」

「受験、終わってからも、うううん、卒業してからも会えるよね」

「え、ええ。」

当たり前じゃない。

そ、その、わ、わたしたちは・・・友達なんだから」

「ゆきのん!」

“ だき”

「ゆ、由比ヶ浜さん。」

あ、あのく、紅茶がこぼれて」

「あ、ご、ごめん。」

「・・・えへへ」

「うふふふ」

「あ、ヒツキーもだよ」

「そうよ」

「あ、ああ、わかった」

「よかった」

「なにかお茶請けだしましょうね」



・・・永遠というものはない。  
それはわかっている。

俺達のこの関係も卒業すれば、いずれ時とともに変わってしまうの  
だろう。

色彩鮮やかに描かれた名画もいずれは色褪せしてしまうように。  
でも、それでも俺は、この関係が少しでも長く続いてほしいと、  
このままずっと鮮やかや色のままでいてほしいと願っている。  
そのためになら俺は・・・

「・・・撞着だな、自己撞着」

維持するために努力を続けたいといけない関係。

それは俺がもつとも忌み嫌っていたものじゃないか。

でも、それでも俺は・・・

はあく、あいつならどう思うだろうかな。

あいつなら、あいつならきつと・・・

「どうかしたのかしら」

「い、いや、なんでもない」

“カチャ”

「そう。」

クッキーでよかったかしら」

「ああ、頂く」

“トントン”

「！」

「ゆきのん！」

「ええ、来たみたいね」

ふう、まったく今まで何やってたんだあの馬鹿。

まあ、驚かせようと今日のことはあいつには黙ってたからな。

さて、これだけ待ったんだ、せいぜい派手にびっくりしてもらわな  
いな。

いつも地味なんだから今日ぐらい。

「どうぞぞ」

“ガラ”

「失礼しまゝす」

「あ……いろはちゃん……だ」

「……」

「……」

「え、あ、あれ、なんか……」

「あ、あのく先輩？」

「……はあ」

「は、はあ〜つてなんですか！」

「ごめんね、いろはちゃん」

「そ、そうねごめんなさい一色さん」

「もういいです。」

「この前も同じようなことありましたから」

“ スタスタ ”

え、もう帰るのか？

よかった。

まあ、こいつがここに来ると決まって何か手伝わされたからな。

あいにく、俺達は受験生だ。

今回ばかりは手伝えないからな。

ふむ、さつさと帰り給え。

“ ガラガラ ”

「ごほん、やり直しです」

へ、やり直し？

え、君、帰らないの？

“ トントン ”

「どうぞ」

ど、どうぞって雪ノ下。

“ ガラ ”

「あ、いろはちゃんだ」

ゆ、由比ヶ浜、お前まで。

しかも何その満面の笑顔。

「失礼しまゝす。」

ああよかった。

小町ちゃんの言う通り、今日は先輩も結衣先輩もここにいたんですね。

それはそうと、えつとく」

“キヨロキヨロ”

い、いやさつき顔合わせたよね。

それに確か会話も。

って、なに、一色何か探してるのか？

さつきからずつと部室の中見まわしてるんだけど。

「んー」

「どうかしたのかしら一色さん」

「あの一、ここってパソコンってありましたよねー？」

「あるけど・・・」

「それってDVD観れます？」

「そうね確か観れたと思うのだけれど、ちよつと待ってくれるかしら」

“ガタガタ”

「古い型だから逆に観れるな」

「へえ、ヒッキー物知り」

い、いやそんなに感心しなくても。

確か生徒会は例のウイルス騒動があつてから、全て最新型のパソコンに更新したからな。

奉仕部のパソコンは生徒会のと違って結構古い奴だから観れるんだ。

・・・うちは予算ねえからなあ。

お茶代も足りないから、ほとんど雪ノ下の自腹だもんな。

ごほん、ま、まあなんだ、昔のパソコンには必ずと言っていいほどDVDドライブが

付いていたのだ。

いまは外付けが主流だが。

なんでもメーカーが調べたところ、あまり使われていないというところで

取り除かれたらしい。

けどどちらかのパソコン選べってことになったら、俺ならDVDドライブが

ついてる方を買うけどな。

メモリも容量とかもそこそこあればそんなに気にならないし。

“カチャカチャ”

「一色、なにか観るのか？」

「えっと、DVD借りてきたんですけど生徒会のパソコンでは観れなくて。」

あとそれとですね」

“ガサガサ”

「あれ、おかしいな。」

確かカバンに入れてきたんだけど。

・・・あ、あった」

“カタン”

「じゃじゃ〜ん」

「いろはちゃん、これなに？」

“つんつん”

「それ、随分小さいけれど、プロジェクターなのね」

「あ、わかります？」

さすが雪ノ下先輩。

へへ、生徒会の予算で買ったんですよ」

“スタスタスタ”

「それじゃ、ちよつとスクリーン降ろしますね」

えっと、なに？

ここで何か見るの？

いや俺達は・・・俺はここで勉強を。

あ、あの週末にセンター試験が・・・

「それじゃ再生っと」

“カチャ”

「はえ〜、すっごい」

「結構綺麗に映るのね」

「あ、これあのドラマだね、ほ、ほら海外のハイスクールもの」

「由比ヶ浜さん、静かに」

き、君達何やってるの？

お、おい由比ヶ浜、カーテン閉める場合じゃ。

い、いや、お、俺達はだな……テストが……

そんな俺の思いはよそに、海外ドラマの上映会が始まった。

お前ら、べ、勉強しろ！

・  
・  
・

「んゝ重たい」

「ふらふらふらふら」

「危ないよ舞ちゃん。

ほら少し持ってあげる。

うんしよつと」

「あ、ジミ子せんぱい♡

ありがとうございます」

「どうしたのこんなにいっぱい本持って」

「イベントの資料なんですよジミ子先輩。」

今度の役員会で使うので図書室から借りてきたんですジミ子先輩」

「……………」

「それでイベントなんですけど、ジミ子先輩」

「ちよ、ちよつと待った！

ま、舞ちゃん、あ、あんまりジミ子ジミ子って」

「えゝ、だってジミ子先輩はジミ子先輩じゃないですかゝ」

「……………」

「それにジミ子先輩だって、一色のこと会長って呼んでんじやないですか。

任期終わって生徒会の役員でなくなってからも」

「だ、だってずっと会長って呼んできたから、今さら一色さんなんて」

「だしよう。」

わたしだつて美佳先輩なんて今更ですよ、ジミ子先輩」

「ううう、でもなんか」

「そんなことよりほら行きますよ。」

落とさないようにちゃんと持つてくださいねジミ子先輩♡」

「は、は〜い」

・  
・  
・

〃スタタタタ〃

「やばいやばい、めっちゃ遅くなっちゃった。」

ゆきのん怒ってるかなあ。

えつと〜」

「はー、面白かった！」

ね、ゆきのん」

「ええ

とつても」

「だんしんくいくん♪ んふふつ、ふんふんふーん♪」

〃ワイワイ〃

「へ、あれ話し声？」

ゆきのんの他に誰かいるの?」

「な、なあ余韻に慕っているところ悪いんだが、なんで映画の上映会なんだ」

「映画? これテレビのドラマですけど」

〃ガヤガヤ〃

「あ、これって比企谷君と会長の声？」

でもなんで?」

「いやそんなのどっちでもいい」

「えつとですね、資料として見てたんですよ」

「資料?」

「はい。」

実は今度の卒業式の後、プロムをやりたいと思いまーす  
な、なんだと

プロムって今のビデオみたいなのやっだろ  
卒業式の後に高そうな衣装を着て、思いつ切りリア充リア充する奴。  
あんなの海外ドラマの中での設定だろ。

とてもうちの学校でやるものとは思えない。

お、俺は絶対手伝わないぞ

まあ、受験生だから無理だっていうのはわかっていると思うが。

「普通の卒業生を送る会でいいんじゃないの？」

俺、ああいうの苦手だから絶対嫌なんだけど」

「あたしも楽しそうだなーって思うけど……」

ちよつと難しそうかも」

「そうね……」

「はあ、まあ、それはわかっているんですけど。

……でもやります、ですから楽しみにしてくださいね」

「ちよつと待て。

お前、本気でプロムやる気なの？」

「ええ、やります！」

先輩達にも受験終わってからでも手伝ってもらえないかなあ〜つ  
て

思っただんですけど。

いいです。

わたし達生徒会だけでやります」

そう答えた一色の瞳にはとても強い決意が宿っている。

でもなんでそうまでしてプロムがやりたいんだ？

まあ卒業式まではまだ2ヶ月あるから、時間的にはやれないことはないが。

だがそれなりのものをするなら、予算とか人材、経験とか足りない  
ものが  
いっぱいある。

だが、なんでそんなにムキなってるんだ？

プロムといっても三年生が主役で、一色には何のメリットもないはず。

いつもの一色ならこんな面倒なことは。

「……………それは、何のために、誰のためにやるの?」

「もちろん、わたしのためです。」

だってこのままいつもの通り、決まり決まった送別会やって、それで終わったら、『はい、さようなら』ってなんかめっちゃつまらない

じゃないですか

ここはわたしのドバーってこれでもかってぐらいのことやって。それで、それで……………自分の心に区切りつけたいんです。

ちゃんと心置きなく、先輩達を送り出したいんです。

……………こんなんじゃ……………駄目……………ですか?」

……………一色。

「そう、答えてくれてありがとう。」

ではやりましょう」

「へ?」

あ、あのく、雪ノ下先輩?」

そうだな。

そういうことなら仕方ないよな。

でも、あの一色がな。

「まあ、上の判断でそう決まったんならしようがねえな。

俺と由比ヶ浜は受験終わってからになるがそれでいいなら」

「うん、だね」

〃ガタ〃

「雪ノ下先輩、結衣先輩!」

〃ガバ!〃

「あ、暑苦しい」

「へへ、いいじゃんゆきのん」

「お二人とも、ありがとうございます」



「あ、あのく、三人で抱き合ってるのはいいんだけど」

「え、先輩も混ぜてほしいんですか？」

「それマジキモいんですけど」

「エロ谷君あなただって人は」

「ヒッキーそれはちよつと」

「い、いや、ち、違う。」

「そ、そんなこと言っていないぞ。」

「お、俺はだな、俺もプロムを」

「冗談ですよ。」

「よろしくです、先輩」

「お、おう」

「……………」

「……………ゆきのん？」

「比企谷君、由比ヶ浜さん……………あの、ちよつといいかしらん？」

「これは私個人の意思だからあなた達に強制する気はないわ」

「……………お、おう。」

「どういうことだ？」

「つまり、その……………部長としての決断ではないから

そこに権限はないと思うの。」

「だから部としての活動とは考えなくてもいい。」

「もちろん力を貸してもらえるのはありがたいけれど。」

「ただ、私は一人でもこのプロムについて責任もってやり遂げるつもりでいる、というか……………」

「……………」

「私は、私は、その……………今回のプロムの件、

部長としてではなく、雪ノ下雪乃個人として受けたいの」

「今一つ要領を得ない言葉に、一瞬首を傾げた。」

「まあ、恐らく雪ノ下は受験生である俺達のことを考慮して言っているのだろう。」

「つまり、俺達は自由参加でいいってことか」

「違うよヒツキー」

え、違うのか？

それなら雪ノ下はなにを。

「私は私の力でやり遂げたい

．．．それを見届けてもらえたら嬉しいわ」

「ゆきのんは．．．．．自分の力でやってみたいんだよね」

「そうしないと私自身先に進めない。

あの人に追いつけない。

私はいつかあの人を超えたい．．．．超えないといけないのだから」

雪ノ下。

．．．あの人を超えたいっか。

あの人とは恐らく陽乃さんのことだろう。

雪ノ下の姉で雪ノ下以上に頭脳明晰かつ容姿端麗。

雪ノ下はそういう姉にあこがれ、いつも後をおっかけていたらしい。

自分の力でやってみたい。

それはそんな姉を超えるために彼女が決断したことなのだろう。

それなら俺達に反対する理由はない。

「．．．．．いや。」

いいんじゃないのそれで。

知らんけど」

「適当なことばかり」

「それじゃ、明日から生徒会室に来ていただいてもいいですか？」

「ええ、よろしくね一色さん。」

あ、でもごめんなさい。

放課後は少し待つてほしいの。

三ヶ木さんの受験が終わるまで待つてくれないかしら。

わたしは三ヶ木さんに東地大受かってもらいたい。

彼女はわたしにとって、とっても大切な友人なの。

申し訳ないけど、それまでは放課後以外の時間で手伝わせてもらおう

つもり。

それでもいいかしら?」

「はい、それで十分です。」

いえ、わたしの方こそ、それでお願ひします。

わたしにとつても美佳先輩は大事な人ですから」

“ワイワイ”

「……」

“スタ、スタスタ、スタタタ”

「……やっぱり、比企谷君にとってあの二人との関係は特別。

あんなの聞いたら、とても部室に入れないよ。

あの雰囲気は、わたしなんか邪魔していいものじゃない」

“テツテツテツ”

「はあはあ。

……そ、そっか、自分の力でやり遂げたいっか。

だったら、だとしたらわたしにできることは」

「結衣先輩、来年一緒に頑張らしましょう」

「い、いろはちゃんまで」

「ふふ、ごめんなさい冗談よ」

「ごめんなさい結衣先輩」

「いや、俺本気だけど。」

マジお前やばいぞ」

「ヒ、ヒツキ」

「……先輩」

「……まったくあなたは」

「いや、俺は由比ヶ浜のこと心配してだな。」

絶対無理だろ早応大なんて」

「それはみんな同じ思いよ。」

そうだとしても、もう少し言い方が……はっ！

……ゆ、由比ヶ浜さん、あ、あの」

「ゆきのんの馬鹿」

「ご、ごめんなさい」

「ブ、ブ」

「三ヶ木さん？」

「どうした雪ノ下、三ヶ木からか？」

「ええ。」

……三ヶ木さんからのラインで、どうしても外せない大事な用事が

できたので今日は帰るそうよ」

「そ、そうか」

「そうなんだ」

・  
・  
・

「ガラガラ」

「ん？」

なんだ三ヶ木、まだ残っていたのか？」

「あ、平塚先生。

ちようどよかった。

この問題わからないです、教えて頂けませんか？」  
「なんだ勉強していたのかね？」

どれ、どの問題だ」

・  
・  
・

「それじゃそろそろ帰りましょうか」

「あ、じゃ、俺力ギ返して来るわ。」

ちよつとマツカン買って帰りたいからな」

「そう。」

それじゃお願いするわね」

「おう、じゃまたな」

「ええ」

「またねヒツキー」

「さ、行きましよう先輩」

「つて、お前生徒会大丈夫だったのかよ。」

何なら今からでも」

「大丈夫ですよ。」

みんな優秀ですから」

〃 スタスタスタ〃

「な、一色、お前俺達に断られるってわかってこの話持ってきたんだろ」

「当り前じゃないですか。」

先輩たちは受験生なんですよ。」

そんな非常識じゃありません」

「じゃ、なんで」

「去年の卒業生を送る会のこと憶えてます？」

「ん、ああ、無理やり手伝わされたからな」

「なんですかその言い方。」

・・・前の子の体育館倉庫で見たあの風景が忘れられなかつたんですよ」

「前の子？」

そ、そうか、あれは去年の卒業式を送る会の前日だったな。

あの日、一色は三ヶ木に卒業する前生徒会の先輩たちとの想い出をつくらせるために一芝居うった。

無理やり三ヶ木に飾りつけを押し付け体育館に一人残した。

後から来る前生徒会の仲間と一緒に時間をつくるために。

三ヶ木にとって前生徒会の先輩たちは特別な存在だったからな。

だとしたら一色は俺達との・・・

「一色お前」

「最後の最後なんです、わたしにとつても。

雪ノ下先輩と結衣先輩、それと先輩。

みなさんたちとこうやって一緒にできるのも・・・

だから、だからわたしも想い出が。

それがたとえほんの少しの時間でも」

「一色」

「・・・先輩」

「お、おう」

「プロムは卒業生全員強制参加ですから、覚悟しておいてくださいね。

あ、なんならわたしがチークお相手してあげますね。

それではです」

チ、チークだと。

「お、おい「一色」」

「スタタタタ」

くそ、行ってしまいやがった。

プロムなんてリア充の祭典、参加するのもあれなのに。

チークなんて・・・はあく、マジありえねえ。

「ガラガラ」

「先生」苦勞様です。

部室のカギ持ってきたんですけど」

「おうござ苦勞様。」

そこに置いておきたまえ」

「うっす。」

それじゃ」

「ん、あ、そうだ比企谷。」

「一つ頼まれてくれないか」

「え？」

・  
・

「……」

“ スタスタスタ ”

『さつきまで教室に三ヶ木が残ってたんだ。』

もう帰ったと思うが念のため見てきてくれないか』

三ヶ木が教室に？

いやそんなはずはない。

“ ガチャ、ガチャ、ガチャ ”

今日は何か用事があるから帰ったはずだ。

“ ピー！ ”

だから教室にいるはずないんだが。

“ ガタン ”

……

「アチッ！」

ふう、いつも思うんだが、ここの自販機ちよつと温度高すぎない？

……… 確かミルクティーだったな。

“ ガチャガチャガチャ ”

・  
・

「ふうふうふう、ふうふうふう、うー、なんでこの解答はこうなるんだ？」

．．．．．なんでお前教室にいるんだ。  
いったい何を？

“カキカキカキ”

勉強、してるのか？

「くそくわからん。」

平塚先生に聞きに行つてこようかなあ」

“ピタツ！”

「あ、あちいー！」

「ほれ、ミルクティー。」

んで、どの問題がわからないんだ。

数学以外なら教えてやる」

「へ、あ、ひ、比企谷君。」

．．．．．あ、あのね、ここんどこ」

「ん、どれだ？」

“ぐい”

「あのね」

“ベシ！”

「ぐはあー！」

「あつちいだろうがこの馬鹿！」

乙女のうなじにいきなりなにすんだ。

まったたく、もう」

「いっててて。」

でも、なんでお前教室で勉強してるんだ？

勉強するのなら部室に来ればよかつたじゃねえか。

雪ノ下、ずっとお前が来るの待ってたんだぞ？」

「．．．ゆきのん、自分の力試してみたいんだね」

「え、お、お前もしかして聞いてたのか？」

だつたらなんで」

「．．．．．入れないよ、無理だよ。」

三人のやり取り聞いたらわたしには．．．．

あのね、めつちや羨ましかつた。



やっぱり比企谷君にとって二人は特別なんだって改めて実感した」  
「三ヶ木」

「だからわたし決めたの」

「決めた？」

「明日のゆきのんのプリントで100点取るんだ」

「プリント？」

「うん、いつもゆきのんがプリント作ってきてくれるんだ。

わたしの苦手なところとか考えてくれて。

わたしね、今まで100点取れたことがなかった。

・・・明日こそ、絶対100点取るんだ、厳密に！

そんで、そんでね、ゆきのん塾を卒業するの。

・・・ゆきのんにプロム頑張ってもらいたいから」

「そっか」

「うん、そっだ」

“ なでなで ”

「げ、な、なにすんだ！

いきなり女子の頭を」

「で、どの問題がわからなかったんだ」

「あ、うん、ここのこと」

「どれ」

・  
・  
・

「どうかな。

これであってる？」

「ああ、これでいい」

「へへ、ありがと。

あとミルクティーもね」

「おう」

「・・・比企谷君」

「ん？」

「あ、あのね・・・」

え、な、なんでここで目を瞑る。

こ、これって、あ、あのく

い、いいのか、こ、ここは教室だぞ。

・・・だ、だけど

“ゴク”

俺、俺の・・・俺のファーストは教室で。

・・・三ヶ木。

“そく”

「ごほん！」

いつまでそうやっていちゃいちゃしてるつもりかね」

「えっ」

「あっ」

「とつくに最終下校時間は過ぎているのだがな。

・・・まったくゾンビイ取りがゾンビイにとってこのことだな」

「ひ、平塚先生、違います！」

比企谷君はもともとゾンビイです。

だってもともとから目腐ってるし」

“ぎゅく”

「いたいたい、比企谷君ほっぺ離して」

「誰がもともとからゾンビイだ。」

それにそれはゾンビイじゃなくて、ミイラ取りがミイラってことで  
しよ。

現国の先生が間違ったこと教えてどうするんですか」

「ははは、そうだな。」

さ、それより本当に帰る準備をしまえ。

もう外は暗い、今日は家まで送って行ってやろう」

—————

“カキカキ”

「よしできた！」

ゆきのん先生、採点お願いします」

「ええ」

「……………」

「……………」

「……………」

「三ヶ木さん」

「え、あ、はい」

“ぐくり”

「連絡はラインでなく、ちゃんと電話をくださいね」

「あ、は、はい」

「でも、プリントはよく頑張ったわね。」

満点よ」

「ほ、ほんと！」

や、やった」

“ぎゅ”

「暑苦しい。」

み、三ヶ木さんあなたまで。

や、やめてくれるかしら」

「えへへ、今日だけでもう少し」

「…………三ヶ木さん、どうしたの？」

「ゆきのん、今まで勉強みてくれてほんとにありがとう。」

あのね、もうわたしは大丈夫。

絶対、東地大合格して見せるよ。

だから、明日からはわたし自分で勉強するね」

「え、あ、あの」

「だからさ、ゆきのん。」

ゆきのんはプロム頑張って」

「あ、あなた、もしかして昨日の話を聞いてたの？」

「あ、う、うん」

「盗み聞きはよしなさいってあれほど」

「だって、部室に入りにくかったんだもん。」

「・・・それとね、わたしも受験終わったら手伝わせてもらってもいい?」

絶対手伝いたいの」

「三ヶ木さん、あの」

「うん、ゆきのんが一人でやってみたって言うのわかっているから。だから、わたしは邪魔しない。」

作り物とかみんなへの差し入れとかそういうの手伝いたい。」

だめ・・・かな」

「・・・ええ、わかったわ。」

お願いして、いいかしら」

「ほんと! やったー」

「でもあなたはその前に受験頑張りなさい。」

くれぐれも油断しないように」

「うん。」

ゆきのん、ほんとにありがとう。」

あのね、大好きだよ」

「み、三ヶ木さん。」

あ、あの、そ、その・・・あ、あなたとここで過ごした時間。わたし嫌いではなかったわ。」

いえ、嫌いというより、す」

「ゆきのん♡」

「ぎゅ〜」

「ぐ、ぐるじい」

—————

“ピ。ピ。ピ。ピツ、ピ。ピ。ピ。ピツ”

う、うゝん

ふあくあ、もう時間か。

さしてつと。

“とんとんとんとん”

「ん、おう小町、お早うさん。

今から学校か」

「え？」

あ、お、お兄ちゃん

ど、ど、どうしたのこんなに早く起きてきて」

「あ、ああ。

そろそろ生活のリズム、試験に合わせてようと思ってるな」

「そっか、もうすぐだもんね。

あ、じゃ今から朝ご飯作るね」

「あ、いいぞ小町。

お前、プロムの準備とかで早くいかないといけないんだろう。

自分で作るわ。

あ、これ八幡的にポイント高い」

「……」

「ご、ごほん

で、どうなんだプロム」

「あ、うん。

今更なんだけど、雪乃さんって本当に凄い。

企画とか組織運営とかだけじゃなくて、準備物の手配、タイムスケ

ジュール、

予算や雑務に至るまで全てに完璧で。

もう雪乃さん一人いれば大丈夫かなって感じだよ」

「だろうな」

まあ雪ノ下の能力や経験値を考えれば、安易に雰囲気想像できる。

恐らくあいつ一人で何でもできてしまうだろうからな。

ただ、あいつは人一倍体力がない。  
そのくせ人一倍負けん気が強いからな。

事態がひっ迫すれば、平気でムリをして、それを一人でしよいこんで

限界を超えてしまう。

そしてその結果、雪ノ下が倒れたら全てが波状する。

それはあの時の文化祭で経験済みだ。

まあ、今回は一色だ。

既に生徒会会長としての実績も十分だし、能力も雪ノ下ほどではないが

十分信用おける。

だからその辺は大丈夫だと思うが、まあ一応念を押ししておくか。

「なあ小町。

確かに雪ノ下はなんでもできる。

だからってつい頼り切ってしまうと、あいつは全てを一人でしよい込んで

必ず無理をする自分の限界以上にな。

だから・・・まあなんだ、あまり無理をさせないように気をかけてやってくれ」

「うん、わかった。

あ、もうこんな時間。

じゃ、お兄ちゃんもう行くね」

“ スタスタスタ、スタ”

「ね、ねえお兄ちゃん。

お兄ちゃんは、ゆ・・・・・・・・」

「ん、なんだ？」

「あ、うとうん、なんでもない。

あんまりゆっくりしてないでちゃんと勉強してね」

「お、おう」

“ ガチャ”

「それでは行ってきますであります」

「おう、行ってこい」

〃 タツタツタツ〃

・・・さてつと、飯食う前にメール入れておくか。

〃 カシヤカシヤカシヤ〃

・  
・  
・

〃 ギュルルルルー、ブオー〃

「ひやく」

ま、麻緒さん、サ、サイドカーなんだから、  
も、もう少しゆっくりと。

さっきのカーブもこつちの方浮いてたから」

「だったら、なんでこんな大事な日に寝坊するの！」

「だ、だって緊張して眠れなかったんだもん」

「もう時間ギリなんだから我慢しなさい」

「うゝ」

〃 ブロロロン、ドドドド〃

「いやゝ、やっぱり怖い！」

ほ、ほら隣走ってる車近い、近いし！」

「うっさい。」

ほら今のうちにおにぎり食べちやいな」

「うううう、こわいよゝ」

〃 ブゝ、ブゝ〃

「ん、メール？」

えつとスマホスマホと」

〃 ガサガサ〃

「あ、比企谷君から」

〃 カシヤカシヤ〃

『今日受験だよな。』

まさかお前のことだ寝坊とかしてないだろうけど・・・  
まあ、落ち着いて頑張れ。

健闘を祈る』

「寝坊！」

げ、な、なんで知ってるの？

ま、まさか麻緒さんが」

“ちら”

「ん、なに？」

「あ、い、いや何でも。」

あははは、お、美味しいなあ、このおにぎり」

“パク”

「とりあえず返信返信つと」

“カシヤカシヤ”

『寝坊なんてするわけないじゃん。

今、東地大に向かっているよ。

受験終わったらゆっくり会おうね。

受験明けの旅行、とつても楽しみ。

じゃ、頑張ってくるね』

「えつとこれでいいかなあ。

あ！

そ、そうだ。

ぐへへへへ」

“カシヤカシヤ”

『旅行、お泊りだよね。

……わたしのを、あ・げ・る♡』

「へへ、へへへへへ、なにやっただわたし。

バカやってないで削除しないと」

“ガタン”

「ひゃ」

「あ、ごめんごめん。

大丈夫だった美佳？

ちよつと道路が悪いみたい」

「……う、うそ。」



送・・・信・・・しちや・・・た。

ま、麻緒さん！」

「ん、なに？」

「ギロ」

「・・・あ、い、いやいいです、何でもないです。

あの、安全運転でお願いします」

「……………」

ふう〜終わった〜

こうやって塾で勉強するのももう少しだな。

この前の模試の結果もまあまあだったし。

あとは受験まで風邪とかひかないようにさっさと家に帰って  
過去問でもするか。

「さてっと」

「ヒツキー、やっはろー」

「・・・由比ヶ浜、塾ではその挨拶はやめろ」

「え、なんで？」

「いやなんでって・・・」

「ん？」

あ、それよりさ、ね、ヒツキー、今時間ある？

今日の授業でき、ちよつとわからないところがあつて。

よかつたら教えてほしいなあ〜って」

「断るー！」

「そ、即答ー！」

「いいか、お前も早応大を受けるのなら俺のライバルだ。

ライバルに塩を送るような真似は」

「・・・だめ？」

うっ、か、かわいい。

くそ、だからその上目使いやめろ。  
そ、それってぜってえ反則だからな。

「・・・ドリンクバーで手を打つ」

「本当！」

やった、じゃ、じゃあさ、ほらあのサイズで」

“ぎゅ”

「ほら行く、ヒツキー」

「お、お、おう」

い、いや、その、あのそんなに腕を抱き締められると・・・  
う、腕が何かに挟まれて、その何か大きく柔らかいものに。  
・・・やっぱり90・・・あるよな。

「ヒツキー？」

「あ、い、いや、なんでも」

—————

「や、やだ、見たくない」

“ぐい”

「いたたたた、痛い。」

ま、麻緒さんそんなに耳引つ張らないで」

「え、いい、往生際の悪い。」

ほらさっさと受験番号入力する」

「だ、だって、試験、あんまりできなかつたんだもん」

「今さらしようがないでしょう。」

だめだったら諦めて、来年頑張ればいいじゃない」

「それって、ろ、浪人。」

ううう、浪人はヤダ」

「だから滑り止め受けときなさいって言ったのに」

「だって、東地大に行きたかつたんだもん」

「はあく、ほら受験番号は何番？」

「・・・・・・・・」

「受験番号！」

「上から826386のナイスボディ」

“ポカ”

「誰がスリーサイズ言えっていったの！」

「ち、違う、ぐ、偶然だし」

「まったく、えつと8、2、6、3、8、6つと」

“カチャカチャカチャ”

「あとは美佳の誕生日つと、0、3、2、0」

“カチャカチャカチャ”

「よしつと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・美佳」

「や、やだ、見ない！」

“ぶにゅ”

「ふあい？ 麻緒ひゃん、なんねえほつぺによ？」

“ぎゅ”

「いー、いっただあー！」

「よし、夢じゃないね。」

おめでとう美佳、ほら合格だつて」

「は、ほんとー！」

えつとどれどれ。

『おめでとうございます・・・・・・・・おめでとうございますだ！』

麻緒さん、おめでとうございますだつて、よ、よ、よがっだー」

「よかったね美佳」

「う、うん、ううう、よがった、よがったよー」

・  
・  
・

「ふう、やっぱり自宅と違って塾だと集中できるよな」

「それある！」

俺も家だと全然だわ」

「やっぱなんか落ち着かないよな」

“ガヤガヤ”

ふふふ、馬鹿め。

俺ぐらいのボツチになると、家でも塾でも・・・が、学校でもどこでもゾーンにはいることができる。

小学校から話しかけられたことなかったからな。

いやそれどころか学校で一言も話さなかった日もある。

そ、その時から俺は今日の今を見つめて鍛錬してきたんだ。

この受験戦争を勝ち抜くために。

やっぱボツチ最強！

「・・・・・・・・」

ご、ごほん！

確か、今日は三ヶ木の合格発表の日だったよな。

まあ、あいつのことだから不合格ってことはないと思うが。

塾の休憩時間とかスマホ見てるがまだ連絡がない。

こんなに心配するのって小町の入試以来だな。

こつちから連絡するのもあれだし、もう少し待つか。

それより、次は俺の番だな。

三ヶ木が合格して俺が落ちたら洒落にならないからな。

・・・温泉も行きにくいし。

温泉つか

『旅行、お泊りだよね。』

・・・わたしの全てを、あ・げ・る♡』

す、全てって、そういうことだよな。

「ぐふ、ぐふふふふ」

はっ、そ、そうだ、こうしてられない。

少しでも時間がもったいない。

歩きながら、一つでも単語覚えないと。

“スタスタスタ”

「はあー」

〃ゴシゴシゴシ

「寒いなあ」

手が悴んじやって」

〃びゅ〃

「うひゃ〜、寒くて死にそ〜

ううう、で、でもさ、ちゃんと会って報告したい。

それに学校が自由通学なつてからずっと会ってないし。

早く出てこないかな比企谷君」

〃ガヤガヤ〃

「あ、出てきた!」

〃トボトボトボ〃

「ぶつぶつぶつぶつ・・・」

よ、よし、完璧だ。

この調子で次の綴りの単語のチェックをつと。

〃タツタツタツ〃

「ひ、ひきが」

「ヒツキー」

〃パシツ〃

「姿勢悪いよ。

ほら、しゃんとしないと駄目だぞ〜

なんちやって」

「いってえ。

ゆ、由比ヶ浜、いきなり背中を叩くな!

憶えていた単語、全部忘れたじゃねえか。

まったく」

「え? あはは、ご、ごめん。

ね、ヒツキー、あのね今日もサイズでさ」

「ああ、わかってる」

「えへへ、やった」

「サイゼ？」

「え、あつ美佳っち！

．．．やつはろー」

「あ、あの．．．やつはろー、結衣ちゃん、比企谷君」

ん、三ヶ木？

なんでこんなところに？

なんだ頼真っ赤じゃねえか。

もしかしてずっと塾終わるの待ってたのか？

「おう、どうした」

「あ、ごめん。」

あの、ちよ、ちよつと知らせたいことがあって来ちゃったんだけど。

邪魔してごめん」

「．．．．．」

「．．．．．」

え、な、なにこの雰囲気。

三ヶ木も由比ヶ浜も、二人とも下向いたまま黙り込んでるんだが。

なんかすごく重い。

喧嘩でもしてるのかこの二人。

確かこの前、部室で勉強会．．．という名のお喋り会の際は、

少なくとも由比ヶ浜は三ヶ木とお喋りするのをすごく楽しみにし

ていたはずだ。

結局三ヶ木は来なかったのだが。

ふむ、その後に何かあったのか？

「．．．あ、ヒッキー、あたしあそこの喫茶店に行ってるね。

美佳っち、またね」

「あ、うん」

“ スタスタスタ”

気まずそうに由比ヶ浜は喫茶店に向かっていったのだが、

最後まで三ヶ木とは顔を合わせず。

ほんとなんかあったの君達。

仕方ない、三ヶ木に聞くか。

あ、そ、その前に。

三ヶ木は俺に何か話すことがあったんだろう。

そのためにこの寒空をずっと待っていた、頬を真っ赤にしながら。そして、それまでして俺に話すことと言ったらあのことしかない。

だとしたらまずはそっちの話を聞く方が先だ。

「で、どうだったんだ東地大。」

「今日発表だったんだろ」

「あ、う、うん。」

「あ、あのね………へへへ、見事合格だぜこの野郎！」

「お、おう。」

「そっか、やったな、おめでとさん」

「ありがと。」

「次は比企谷君の番だね」

「ああ、そうだな」

「……あとね、メ、メールの件だけど」

「……」

「……ごめん、変なの送った。」

「あ、あのく忘れてくれるとありがたくて。」

「冗談で打っててさ、それで消そうと思ったら、

「ちよつと手元が狂って送信……しちゃった」

「お、おうそうなのか。」

「い、いや、まあなんだ……温泉もいいかもな。」

「と、泊りがけで」

「えっ！」

「あ、う、うん、温泉いいよね。」

「……泊りがけで」

「……」

「……」

「……」

「……あ、結衣ちゃん待ってるんだよね」

「ん、ああ、今からサイゼで勉強会なんだ」  
「そっか。」

「……うん、頑張ってるね」

「あれだったら、お前も来ないか？」

「あ、わたしは……いいよ。」

えっとね、今から学校行ってくる。

平塚先生とゆきのんに合格したの報告してくるから」

「そっか」

「うん、じゃまたね」

「おう、またな」

「スタスタスタ」

そっか、合格したのか三ヶ木。

頑張ったんだな。

はは、実際よく合格できたな。

夏までは就職するって言ってたのにな。

さて、今度は俺の番だ。

温泉が待ってるし。

よし、こうしちゃられない。

早速家に帰って勉強しないと。

「よし、行くぞ温泉！」

「ダー」

「タッタッタツ」

「はあ、はあ、はあ」

「ガラガラ」

「ゆきのん！」

「三ヶ木さん、ドアを開ける時は」

「だき！」

「え？ み、三ヶ木さん」



「ゆきのん、ゆきのん、ゆきのん。」

「受かった、受験受かったよー」

「そう、よかったわね三ヶ木さん」

「うんうんうん」

「なでなで」

「よく頑張ったわ三ヶ木さん。」

「おめでとう」

「ありがとう、ゆきのん。」

「ゆきのんのおかげだよ、ほんとにほんとにありがとう」

「違うわ・・・自分の力よ、あなたは自分の力で勝ち取ったの」

「・・・ゆきのん。」

「あのね、プロムこれからいっぱいお手伝いするね。」

「作り物とか任せて、あと差し入れも」

「ええ、お願いするわ」

「うん。」

「・・・あのね、今度はゆきのんの番だね」

「え？」

「ええ、そう、わたしの番」

「頑張ってるね、ゆきのん」

「-----」

「カタ」

「ゆ、由比ヶ浜さん。」

「あ、あのく、ミルクティーでよろしかったでしょうか?」

「.....」

「す、すまない」

「スプーン」

「い、いやちよつとな、いろいろとあつてな。」

ついお前が喫茶店で待ってること忘れてしまっ……

ほ、本当にすまない」

「ムス」

「あ、あの由比ヶ浜さん、そのお詫びと言ってはなんだけど  
何でも好きなもの注文してくれ。

善処させて頂きます。

だからもうそろそろ機嫌を」

「…………ふう。」

仕方ないよね。

美佳っち合格したんだもん」

「え、なんでお前知ってるの?」

「え、だってあの後、美佳っちと電話したとき聞いたし」

「え、お、お前ら喧嘩してたんじゃないのか?」

「喧嘩?」

「だ、だってこの前のあの感じって」

「あ、あ、あれ。」

あれは何でもない」

「ん?」

いやだって」

「何でもないって言ったなら何でもないの!」

ヒツキーには関係ないんだから、馬鹿!」

「……………」

「そ、それよりさ、さっき何でも注文してくれて言ったよね」

「お、おう。」

まあ、少し手加減してくれるとありがたい」

「じゃあさ……………早応大の入試終わったら、一緒に学校行こう」

「学校?」

「ゆきのんたちのお手伝い。」

美佳っちも行ってるとっていうし。

ほら、あれだよあれ、えっと…………陣痛お見舞い!」

「ぶはあ!」

「ヒツキー、大丈夫？」

「ば、ばっか！」

それを言うのなら陣中見舞いだ陣中！」

「えっ」

「まったく、お前本当に受験大丈夫か」

「だ、大丈夫だし！」

「いやその自信ってどこから来るの？」

いいか、悪いことは言わん、本命を変えた方がいい。

早応大はあきらめて、例えば駿台とか」

「すん大？ すん大、すんだい、すん………駿台！」

そ、それって予備校だし！」

「それだけやばいってことだ。

だからだな」

「本当に大丈夫なんだから。

ほら！」

“ぐい”

え、な、なに？

自信満々で目の前に突き出したのって、それお守り？

自身の裏付けって神頼みってことかよ。

神様だって、何でも誰でも願いをかなえてくれるものじゃない。

そんなことしてたら、それこそブラック業界の社畜。

神様だって多忙で倒れてしまうっていうの。

だから神様は、願いに対して努力を尽くした人に対して最後の一押

しをしてくれるもの

なんだ。

努力失くして願いはかなわん。

……はあくまったく。

「へへ、正月にママと一緒にもらいに行ってきたの」

「な、なあ由比ヶ浜」

「あのね、このお守りってさ、すごいご利益があるんだよ。

総武校受けた時もママと一緒にもらいに行ったんだ。

先生も友達も総武校なんて絶対無理だって言ってたのに、このお守りのおかげで無事受かることができた。だから今回も絶対大丈夫！」

えっ、な、なんだと！

総武校受けた時もお守りを持っていただと。

もしそれで由比ヶ浜が総武校に受かったというのなら、だとしたら、なんとというご利益。

そ、それってレア、いや超レアアイテムじゃねえか。

マジ☆5以上のアイテム！

「ぎゅ」

「お、おい由比ヶ浜」

「ヒツキー、あ、あの顔近い。」

それに手もそんなに握られると、ちよつと痛いかなあ〜って

「あ、す、すまん。」

あのなら、そのお守りどこで頂いたものなんだ」

「えつと確か北白蛇神社っていつて、直江津つてとこだったと思うけど。」

なんか神様の引継ぎがあつてから、何でも願い事が叶うって有名なんだって」

直江津・・・新潟つか。

くそ、もう入試はすぐだ。

今は時間的にも資金的にも行けそうにもない。

もう少し早くその情報があれば、俺もその超レアアイテムを。

はあ〜

「あ、ちよつと待つてね、今ママに詳しい住所を聞いてみるね」

「いやいい。」

んで、その靈験あらたかな神社に早応大の合格をお願いしてきたのか」

「え、あ、ああ、ちよ、ちよつと違うかなあ」

「え、何違うの？」

「じゃ何をお願いしてきたんだ？」

「あ、あ、あのね……ヒツキーと同じ大学にいきますようにって」

「一緒じゃねえか」

「違う……んだけど」

「いや一緒だろう？」

「ち、違うの。」

もう、ヒツキーの馬鹿！」

「はあ？」

「ふん！」

あ、店員さん、すみません注文いいですか。

えつとこれとこのケーキ、あ、あとこのパフェも」

「お、おい」

「ヒツキーの何でも好きなもの注文してくれっていいいたよね」

「え、あ、いやでもさつき」

「ぎろー！」

「なに」

「い、いえ、なんでもありません」

・  
・  
・

「うくん、このレアチーズケーキもすごく美味しい」

ううう、お、おれの諭吉さんが。

マジどれだけ食べる気だ。

好きなものと言ったけど、好きなだけとは言ったつもりはないのだが。

はあゝ

「ヒツキー」

「ん？」

「ぱく」

「ね、美味しいでしょ」

「……」

い、いや美味しいでしょって由比ヶ浜。

君、このフオークでさつきまでケーキ食べてたんだよね。

「ヒツキー?」

「いや、ま、な、なんだ………これって」

「え?」

「………あっ!」

や、やっと気が付いたのかよ。

ど、どうすんだ、すごく気まずいんだが。

「………」

「………」

「………」

「………」

「あ、あの、ごめん」

「いや………美味かった」

「うん。」

「………あ、そ、そうだ。」

「ね、プロムの動画もう観た?」

「ああ、あのイメージ動画な。」

「小町に無理やり観せられた」

「そう、それは雪ノ下達がプロムを紹介するために作ったイメージ動画で、

生徒会の公式ホームページにアップされたものだ。」

「何でもそれは体育館に本番さながらのセットを組んで撮られたもので、

そこにはいつもの雰囲気とはかけ離れた異空間が広がっていた。」

「そしてその異空間ではドレスとタキシードに着飾った生徒たちによる華やかな

ダンスが繰り広げられていた。」

「その中でひととき目を引いたのが男装の麗人と化した雪ノ下雪乃。」

「容姿もさることながら、その一つ一つの仕草は優雅で、思わず見惚れるほどだった。」

相手をする一色もオレンジ色を基調としたドレスは鮮やかで、その仕草のあざとさと

相まって非常にかわいいものがあつた。

だが、それより俺は

「ゆきのんすごく綺麗だったね」

「いや、それより小町だ！」

あの小町のドレス姿の可憐さに比べたら、雪ノ下や一色など引き立て役にすぎん。

みる、早速スマホの待ち受けにしたぞ」

「はは、ヒッキーらしいや。」

動画以外にも準備の風景とかいろいろアップされてるみたいでさ、今日も何かアップされてるかも」

お、おい君もしかして毎日それチェックしてるの？

マジ大丈夫なのか由比ヶ浜。

“カシャカシャ”

「あつ」

ん、どうしたんだ？

由比ヶ浜、スマホの画面見て固まってるんだが。

「どうした由比ヶ浜？」

「ヒッキー、こ、これ。」

あ、あのね、他に動画があつたから見てみたら」

そうやって心配そうに差し出された由比ヶ浜のスマホには、

自撮りと思われるプロムの画像が映っていた。

この女子達には見覚えがある。

雪ノ下達が作った動画にエキストラとして映っていた女子達だ。

ただその画像に映っていた女子達のドレスは胸元が大きく開かれていて、

そして必要以上に男子生徒と密着して踊っていた。

満面の笑みを浮かべながら。

……まずいな。

「ヒッキー、これ大丈夫かなあ」

「……わからん。

だが今は受験に集中しろ。

これ食ったら勉強始めるからな」

「あ、う、うん」

—————

「ふんふんふん<sup>♪</sup>

よしで〜きった。

うん上出来上出来。

ちよ〜美味しそう。

明日はバレンタインだもんね。

毎日頑張っている生徒会のみんなへのプレゼント。

へへ、みんな喜んでくれるかなあ。

それとき……明日は比企谷君の入試最終日。

試験終わったら渡しに行くんだ。

そしてね、

『誰にも渡したくない、俺だけの人になってほしい。

だから俺と付き合ってほしいんだが』

あの時の返事、するつもり。

今更かもしれないけど、でもやっぱりちゃんと返事したい。

へへ、今頃まだ勉強頑張ってるかなあ。

えっと、今何時だっけ？

……え、もうこんな時間だ。

やば、さっさと風呂入らないと。

しっかし、今日もとうちゃん遅い。

また午前様かなあ」

“ガチャ”

「あ、おかえ……」



「ひつく

うい、ただいま美佳ちゃん」

「げ、とうちゃん、また飲んできた！」

麻緒さんが家事手伝いに来てくれてた時は全然飲んで帰らなかったのに。

麻緒さんが来なくなつてからは毎日毎日これだもん。

ね、とうちゃん、すこしは自分の体のことを」

〃だき〃

「ぷはあ〜」

「ぐへえ〜、酒くせ〜」

「美佳ちゃん、お帰りのチュ〜」

「や、やめろ、離せこの馬鹿おやじ」

〃ベッ〃

「ぐ、ぐはあ〜」

「まった〜く！」

で、何か食べれる？

それともお風呂にする？」

「美佳ちゃんの手料理たべたくい、ひつく」

「か、かわいくね〜」

はあ〜仕方ないな。

今なんか作るから、ちよつこと座つて待つてて」

「うい」

「はあ〜、麻緒さんにまた来てもらおうかなあ。

でも受験終わるまでつて約束だったし」

〃ムシヤムシヤ〃

「いくらかあちゃんのお姉さんだからといつても、あんまり甘えてばかりは悪いよね。

でも・・・」

〃ムシヤムシヤムシヤ〃

「ね、とうちゃん、ちよつと相談だけど」

〃ムシヤ〃

「へ、と、とうちゃん……」

〃ムシヤ、パク〃

「な、なに食べてんだー!」

「何って、チヨコ。」

「さつきチヨコ食べて待つててて」

「いつてねえー!」

〃パク〃

「だから、食べんな!」

「……………」

〃ふらふら、ふらふら〃

「お、お、終わった。」

「も、もう脳みそのエネルギー、全部使い果たした。」

「もう単語一つ出てこない。」

「は、はやいところ、マ、マツカンを、糖分の補給をしないと。」

「ヒツキー」

〃スタタタタ〃

「お、おう」

「大丈夫ヒツキー?」

「目がいつも以上に凄いことになってる」

「だ、大丈夫だ。」

「マツカンさえ補給すれば元に戻る。」

「で、どうだったんだお前」

「え、あ、ま、まあ、あとは神のみぞ知るってところかな」

「まあ、お前の神さん凄いからな」

「でへへへ。」

「あ、それよりさ、この前の約束憶えてる?」

「ん、あ、ああ、わかってる。」

プロムの手伝いだっとな」

はあく、今は思いつきり眠りたいのだが約束だ仕方がない。

まあそれに正直、ちよつとプロムのことも気になってたしな。

「んじや行くか」

「うん」

・  
・  
・

「ガラガラ」

「失礼するぞ。」

ん、柄沢、一色はいないのか？」

「あ、平塚先生。」

えつと、一色さんは蒔田さんとプロムのポスターを貼りに行ってますか」

「そうか。」

すまんが、至急一色に応接室に来るように伝えてくれないか」

「え、あ、はい」

「副会長、小町が連絡します」

「すまない、比企谷さん頼むよ」

「はい」

「カシヤカシヤ」

「……先生、何かあったんですか？」

「ん、ああ」

「キヨロキヨロ」

「雪ノ下はいないようだな」

「あ、はい。」

「今、貸衣装の打ち合わせで藤沢さんと外出しています」  
「そうか。」

実はな、プロムの件で保護者の方が乗り込んできてな。

君達にも一応話を聞いてもらおうと思ってるな」

「それなら、私がお話を伺わせてもらいます」

「雪ノ下！」

「・・・ふむ、だがな」

「何か問題でも？」

「・・・・・・・・・・乗り込んできた保護者というのがだな」

“スタスタスタ”

「あ、ヒッキーほらプロムのポスター提示してある。

これあの動画の時のゆきのんというはちゃんだ」

「ああ。」

あのダンスシーンの写真だな」

「本当にプロムやるんだね。」

「・・・ゆきのん達、頑張ってるんだ」

「そうだな」

“タツタツタツ”

「あ、いろはちゃん。」

「おい、いろはちゃんやつはろー」

「え？」

あ、結衣先輩、先輩！」

“ダー”

「お、おい生徒会会長様が廊下走ったら駄目だろう」

「そんなことはどうでもいいんです」

「どうでもいいのかよ。」

「いやマジそれどうなの？」

「それより大変大変なんですよ」

「一緒に来てください」

あ、結衣さんもお願ひします」

へ？

“スタスタスタ”

やっぱりあの映像か。

応接室に向かう間に一色に聞いた話では、SNSにアップされたあの女子達の映像、

あれを観た保護者が学校に乗り込んできたらしい。

まあ、あんな格好で男子生徒といちゃつく映像を見たら、親としては心配する気持ちに

なつてもおかしくない。

だがその程度のことなら、

「なあ一色、雪ノ下はどうしたんだ？」

「え、あ、雪乃先輩なら先に副会長と応接室に行ってます」

「そうか」

それなら大丈夫だろう。

大抵の保護者なら雪ノ下一人いれば説得可能だろう。

保護者が心配している点の改善を約束して安心させる。

それぐらいあいつのスキルから考えればわけのないことだ。

だとしたら、

「なあ、雪ノ下がいるのなら、俺達必要なくない？」

「はあ、それがですね……」

とにかく、いいですからお願いします」

「お、おう」

……そんなにやばいのか？

足早に先を急ぐ一色からは只ならぬ状況であることが感じられる。

それは由比ヶ浜も同じらしく、不安に表情を曇らせている。

「ね、ね、ヒッキー」。

大丈夫かなあ」

「わからん」

「……ゆきのん」

「大丈夫だ心配するな」。

いざというときは土下座でも何でもしてやる」

「ヒッキー」

そうだ、俺の108の特技のなかでも俊逸な特技・・・土下座。ふふふ、俺の土下座にかなうものなど・・・あいつ以外ない。

それにいくらなんでも土下座している生徒を目の前にして、大の大人がそれ以上何も言うことはできまい。

それこそ大人げないと非難されるものだ。

まあ動画でも撮れたらなおさらだが、そこまですることはあるまい。

唯一の気がかりは・・・

“ドン”

「ひゃ、な、何ですか先輩」

「あ、す、すまない。」

ちよ、ちよっと考え事をしてて、立ち止まったお前に

「はあくまあいいですけど。」

先輩も入試でストレス溜まつてるでしょうから、こんなに可愛い女子を

目の前にしたら」

「いや、そんな気は全くない、厳密に！」

「は、はあー！」

なんですかそれ！

しかも厳密にって。

もういいです、じゃ入りますね」

“トントン”

「失礼します」

“ガチャ”

「しつれ・・・」

マ、マジか。

いきなりのラスボス登場かよ。

一色が只ならぬ雰囲気だったのも納得できる。

気品と威厳の塊。

この応接室にピリピリと張り詰める緊張感を醸し出しているあの人。

．．．．．雪ノ下の母。

そして、その横で退屈そうにコーヒーに突っ込んだマドラーをくるくる回している魔王。

いやもとい雪ノ下の姉、陽乃さん。

全ての面で雪ノ下の上位互換であり、雪ノ下が越えようとしている壁。

その様子からすると無理やり連れてこられたのだろう。

いや、凄く機嫌わるぞ。

そして．．．．．雪ノ下。

ローテーブルをはさんでその正面に座っている雪ノ下の背中とは、

超然とした態度の母の視線を一身に受けてるためか、その背中は心なしかなし。

丸まっているように見えた。

雪ノ下と陽乃さん、この二人のこんな態度を俺は今まで見たことがない。

「お待たせしました。

プロムについてはわたし達全員で話し合って決定したものです。

．．．．．です、その実行可否についての議論は、

わたし達全員で参加させて頂きます」

俺の隣に座った一色は、そうやって敵意むき出しで雪ノ下母親に鋭い眼差しを

向けている。

そう、それはまるで追い詰められたネズミが猫に噛みつきようとしているように。

だが．．．．．相手が悪い。

相手は猫じゃない獅子、いやそれもただの獅子じゃない。

百戦錬磨の百獣の王だ。

そんなものこの人の歯牙にもかからない。

「議論だなんてそんな大げさなものじゃないのよ？」

ただ、こちらの意見を皆さんにお伝えに來ただけなんだから  
やはり簡単にいなされてしまった。  
格が違い過ぎるんだ。

「……………では、改めてお話を伺います」  
俺達がやってきてから一度もこちらを見ることなかった雪ノ下  
が、

硬い口調で切り出した。

“スタスタスタ”

「くそ、あの馬鹿おやじ！

生徒会みんなの分のチョコ全部食べやがって。

はあく、比企谷君の分は無事死守できたからまだよかったけどさ。  
もうチョコの材料あんましなかったから、めっちゃしょぼくなっ  
ちやたじゃんか。

……………で、でも！

ほ、ほら肝心なのは気持ちだから。

このしょぼ…チョコには、みんなへの気持ちがいっぱい込めら  
れている。

だから、そこら辺の豪華な義理チョコより上のはず。

……………た、多分、きつと」

“がさがさ”

「はあく、でも実際しょぼいよなあ〜」

“ドタドタドタ”

「ジ、ジミ子せんぱ〜い」

「え？ あ、舞ちゃん」

『議論だなんてそんな大げさなものじゃないのよ？』



「・・・そういうことか」

「え、ヒツキー何か言った？」

「あ、いや何でもない」

雪ノ下の父は県内有数の企業である建設会社の社長で、しかも市議会議員。

すなわち地元の名士だ。

それに陽乃さんも総武校OBということもあって、確か学校の理事にもなっていたはず。

そんな名士であり理事の雪ノ下家に、あのネットの映像を観て心配になった保護者達が

相談に行くのは当然の成り行きだろう。

つまり今日こうして学校に乗り込んできたのは、この人の意思できたのではなく、

保護者達の代表として乗り込んできたということなのだろう。

ということは、相談に乗ったという時点で、この人にとってこの件の結論は決まっている

ということなのだ。

だから既に決定事項であり、俺達と議論する余地など初めからないんだ。

雪ノ下や一色がいくら反論しようと、そうねと笑顔で軽く受け止められて、

そしていつの間にかその決まっている結論に向けて誘導されているのだ。

この流れを変えるには、まずこの人のこの冷静沈着の仮面を引き？  
がさないといけない。

だがそんなこと俺達には・・・

“ガシガシ”

無理だな。

まあ、それにもともと今回の件について、保護者達が心配するのは至極当然の

ことなのだ。

あの映像を観られたのであれば、なんと反論しようと説得力に欠ける。

それともう一つ・・・そう、駄目押しなのは、『謝恩会は卒業生のためのものでもあるけれど、保護者や先生方、地域の方々

にとっても大切なイベントよ』

そうなんだ。

雪ノ下母の指摘された通り、このプロムには大きな問題がある。机の上に置かれたプロムの概要書。

さつき改めて内容を確認してみたんだが・・・

公開告白、プロムキングにプロムクイーン、チークタイム等々。

はあく、なにこれ。

特に公開告白って、これって何かのいじめ？

ま、まあ欧米ならこれでいいのかもしれない。

だが日本ではこういった催しは、本来、卒業生が今までお世話になつた恩師や、

学費を初め面倒をみてくれた親への感謝、また卒業する先輩への在校生からの

想いを表す場でもあるのだ。

だが、このプロムにはそれがない。

ただ単に卒業生が卒業ということにかこつけ、ワイワイガヤガヤするだけ。

ま、まあもともとプロムなんてものは、リア充のリア充によるリア充のための

お祭りだからな。

畢竟、そんなものはリア充共が勝手にやりたい奴を集めてやればいい代物だ。

それに昨年まで行われてきた卒業生を送る会自体に何の問題もなかったはず。

昨年は結構好評だったって聞いているし。

だからあえてこれを生徒会主催で執り行う理由がない。

……だが、

『ここはわたしのドバーってこれでもかかってぐらいのことやって。それで、それで……自分の心に区切りつけたんです。』

ちやんと心置きなく、先輩達を送り出したんです。

……こんなんじゃ……駄目……ですか？』

「……」

『私は私の力でやり遂げたい。』

……それを見届けてもらえたら嬉しいわ』

『ゆきのんは……自分の力でやってみたいんだよね』

『そうしないと私自身先に進めない。』

あの人に追いつけない。

いつかあの人を超えたいから』

「……」

何とかしないと。

だが、既に戦略的に負けが決まっている勝負だ。

小手先な戦術で挽回できるものじゃないだろう。

それにこの議論もどきが始まってから、もう結構な時間になる。

いつ打ち切りを告げられてもおかしくない。

それは“プロムの中止”という最悪な結末で。

くそ、何とかそれを避けるだけの手立てはないのか。

せめて結論を先延ばしにできれば。

“ガシガシ”

……土下座。

そうだ、今の俺にできることはそれしかない。

それこそ額が床にめり込むほどの土下座で、あの人の前に這いつくばってやる。

そんな姿の生徒に、いくらあの人でも。

最悪の結末を避けるためなら、俺の自尊心など安いものだ。

それに、幸いこの場にあいついないからな。

はは、なんの気がかりは何もない。

“ニヤ”

くくくくく、ははははは。

いいだろう、見せてやろうではないか、究極の土下座というものを

！

それじゃ

“にぎ”

へ、由比ヶ浜？

なんで腕を？

すまんがその手を離してほしいんだが。

「由比ヶ浜」

“ギユツ”

俺が何か言おうとしたとき、由比ヶ浜は一層強く俺の腕を握りしめてきた。

凄くもの悲しげな瞳で俺を見つめながら。

きつと由比ヶ浜は俺がこれからやろうとすることを理解したのだろう。

・・・土下座、やめろつというのか。

だがそれでは・・・・・・・・それしか方法がないんだ。

「由比・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

か弱い女子の手だ。

振りほどこうとすれば簡単にできるはずだった。

だがなぜか・・・・・・・・振りほどけなかった。

その瞳が俺にそれを許さなかった。

「・・・・・・・・わかった」

「・・・・・・・・うん」

くそ、ならどうする。

このままでは間違いなくプロムは中止になる。

“ガシガシ”

入試が終わったばかりで脳みそが働かねえ。

圧倒的にブドウ糖が足りない。

・・・焦るな、考えろ、よく考えろ。  
きつと俺達にも何か有利な材料があるはずだ。  
その材料をもとに何か策を。

「それではそろそろ」

雪ノ下母から発せられようとしていた打ち切りの言葉。

この議論もどきの結論が下されようとしている。  
ど、どうする！

“キヨロキヨロ”

はっ！

「ひ、平塚先生！」

この人に頼るしかない。

だがそれはこの人に……………

だが、今はそれしかない。

「平塚先生、プロムは学校側も内諾はしてるんですよ。

どういう見なんですか？」

俺の言葉とともに、出席者が一斉に平塚先生の方に顔を向けた。

先生は口の端だけで笑顔を作り、そして口を開いた。

「そうですね、私個人としましては即中止という判断はあまりしたくないですね。

当校には生徒の自主性を重んじる伝統もあります。

計画上不備のある部分を適宜修正し、保護者の皆様にご理解ご協力  
いただけるよう

継続協議すべきでは……………、というのが私の意見です」

俺達にとって唯一有利と思える材料、それはこの場にいる学校側の  
出席者が

平塚先生だけということだけだった。

学校の理事であり、地元の有力者、まして保護者会の代表として来  
ている雪ノ下母の

意向に逆らうにはそれ相応の覚悟がいる。

並みの教師なら委縮してプロムをやめさせる、いやそこまでは言わ  
ないでも

やめさせる方向で検討しますと答えるだろう。

それはどつちでも同じことで、プロムをやめさせるということが決定事項となる。

だが平塚先生なら、俺は平塚先生ならプロムをやめさせるとは言わないことがわかっていた。

生徒の自主性を重んじる。

それは俺の人生で唯一尊敬する恩師、この人、平塚静の平塚静たる所以である。

保護者の圧力に押されそれを否定することは、平塚静そのものを否定することになる。

だがそれは有力者の意向に逆らうことであり、平塚先生にリスクを背負わせることになる。

だがそれでも俺は平塚先生に……姑息だな。

「先生の意見はごもつともだと思えます」

平塚先生の言葉に異論がないのであろう。

雪ノ下母はゆつくり頷いた。

「では、また改めて伺いますので。」

今後は学校側とご相談させて頂いても？」

「上に伝えておきます。」

すぐに日程を確認してご連絡差し上げます」

そんな姑息な俺の計算などこの人はお見通しなんだろう。

それでもこの人は自身へのデメリットなど気にせず、

平塚静たる所以を貫いた。

そして継続協議という今時点で最高の答えを引き出してくれた。

……やっぱりこの人にはかなわない。

「お手数をおかけいたします。」

宜しく願います。

……陽乃、皆様にご挨拶して戻りましょう」

「あ、わたしこのコーヒーを飲んでから出るから」

「そう。」

では、先に戻りますから」

そういつて立ち上がると、俺達に会釈をして雪ノ下母は応接室の扉の方に向かった。

玄関まで送るのであろう、平塚先生も続いて立ち上がり扉の方に、  
“にぎ”

「へ？」

俺の後ろを通り過ぎる時、ふいに先生が俺の肩をつかんだ。

そして微笑みながら耳元でつぶやいた。

「比企谷、後でブリット三連発だ」

そう言い残して、平塚先生は雪ノ下母の後に続いて応接室を出て行った。

俺の肩に先生の温もりを残しながら。

・・・か、帰らせてえ。

ただでさえ入試の後で耐久力の下がった状態なのに、ここであるの、

『衝撃のファーストブリット』

“ベシツ”

『ぐはあ』

『撃滅のセカンドブリット！』

“バキツ”

『ぐえっ』

『抹殺のラストブリット!!』

『ひでぶー』

“ぞわ”

そ、そんなもの、ブ、ブリット三連発なんて食らったら……………死ぬ。

間違いなく死ぬ。

まじ帰ろかなあ。

“テクテクテク”

「そ、それでどんな感じなの舞ちゃん？」

「あ、いえそこまでは。」

なんか誰かがプロムの件で怒鳴り込んできたってことしか」

「そう。」

あ、応接室でよかったよね」

「はい。」

えっと、中入りますか？」

「ん、どうしようつか」

“ガチャ”

「あつやば、舞ちゃんあつちに」

「え、あ、はい」

“ダー”

「今日はご足労頂きありがとうございます」

「いえ、先生の方こそ、お忙しいところお時間を頂きありがとうございます。」

あ、ここでよろしいですよ」

「いえ、玄関までお見送りさせて頂きます」

“スタスタスタ”

「舞ちゃん、怒鳴り込んできたってあの？」

「あの、恐らくそうかと。」

一色からは、結構お偉いさんが怒鳴り込んできたって聞いたただけだから。

その、誰かまでは。

あ、応接室入りますか？」

「ん、ちよつと待って。」

中の様子を確認してから」

“ピタ”

「盗み聞きですか？」

「シー」

ふう、とにかく最悪の事態は免れた。

だが問題はこれからだ

与えられた時間はそう長くはない。

早速対策を検討しないとイケないのだが、その前に一応確認してお



きたいことがある。

まず間違いはないと思うのだが、これからの方向性にもかかわってくる以上、

確認しておかないわけにはいかない。

そこですつとまずそうにコーヒを飲んでいるあの人に。

「あの……、保護者会の一人つて言っていましたけど、会長かなんかですか？」

「違う違う、まあ理事とかいう意味の分からない役職だし、仕事柄地元とのつながりも

あるし、娘二人がこここの高校でしょ？」

だからお願いされて出張ってきたわけ」

やはりそういうことでよかつたんだな。

なら対策のターゲットはあの人じゃない。

「……だから、あの人の意見なんてほとんど関係ないのよ。

頼まれちゃった以上、体裁として一言言いに来ないといけなかったんでしよう。

でも……まあ今回はそれだけじゃないけどね」

そういうことだよな……えっそれだけじゃないって？

それ以外に何かあるのか？

“ジー”

ん、陽乃さんどこを見てるんだ？

あれって確か副会長の……誰だったっけ。

まあ、あの男子の名前なんてどうでもいいが、陽乃さんのあの睨むような視線は何なんだ？

「ジミ子先輩、何か聞こえます？」

「ん、あんまり話の内容までは」

「何をやってんだね三ヶ木、蒔田」

「え、あつ」

「まったく、ほらそんなところで盗み聞きしていないで、君たちも中に入りたまえ」

「あ、は、はい」

“ガチャ”

「いや、参ったな」

「し、失礼します。」

「……………あ、結衣ちゃん」

「……………や、やつはろー、美佳っち」

「失礼します。」

ん、ジミ子先輩どうかしました？」

「うううん、何でもない」

“スタスタスタ”

三ケ木？

やっぱり学校に来てたんだな。

あれ、でもなんか俺すげー睨まれてんだけど。

俺、またなにかしたっけ？

ま、まあいい、後でちゃんと謝っておこう。

……………なんかよくわからんけど。

「あ、三ケ木ちゃん、久しぶり。」

どう、受験落ちた？」

「……………あ、あの受かりました」

「ち、それは残念」

「ね、ねえさん」

「えく、だって駄目だったら、一応もう一回うちに来ないって誘ってみようよ」

ようよ

思ってたのに。

本当に残念」

「……………あ、ありがとうございます」

いや本当に残念がってんだけどこの人。

まあ陽乃さん、結構三ケ木のこと気にいってたからな。

もし三ケ木があのまま大学に進学するって気にならなかつたら、

今頃は魔王様の下で社畜としての第一歩を歩んでいたはずだ。

ふむ、間違いない、確か面接に行ってたって言ってたし。

そうならば入試後の泊まりがけの温泉旅行など夢のまた夢。  
そうならなくて良かった。

……泊まりがけ。

「ここに」

「ヒッキーなんかキモい」

「え？」

「……学校側の対応としては、どうなりそうですか？」

雪ノ下。

雪ノ下の暗く沈んだ声が俺を現実の世界へと連れ戻した。

そうだ、プロムは継続協議となったが、それはいつ打ち切られるか  
何の保証もない。

そして学校側の対応は恐らく……

「何とも言えんな。」

実のところ、SNSに上がっていた画像くらいなら、私も……

まあ、私の上もそこまで問題にはしてないんだ」

そう、問題はそこじゃない。

「さすがにこう来られてしまうと、問題としては大きく見られてしま  
うからな。」

……それなりの対応をしないといけなくなる」

それなりの対応つか。

先生は言葉を濁したが、意味するところは一つでプロムの中止だ。

今日のところは先生のおかげで、何とか結論を先延ばしにすること  
はできた。

だが、理事であり地元の有力者が保護者の要望を受けて乗り込んで  
きた以上、

このままプロムを続けられるものではない。

学校側としてもそれなりの回答をする必要がある。

それはプロムの中止。

まあよくて内容を再度見直した上で、来年度に改めて行うかどうか  
を検討しますっという

ところが妥当だろう。

だがそのような理由で、一度先延ばしにされたプロムが改めて行われる可能性は

……極めて低い。

来年になれば、きつとまた来年にと持ち越され、そしていつの間にかたち切れになつてる

そういうものだ。

それに俺達……雪ノ下は三年だ、来年はない。

「それで、……どうする？」

「どうするといわれても……」

計画上の不備を修正して」

先生に答えながら雪ノ下が頭を振る。

学校側の対応がそうである以上、それが無意味であることに、あるいは不可能になったことに

自分で気付いているのだろう。

「継続協議をしている間に、理解を得られる方法を何か考えます……」

雪ノ下はそう口にしたものの、そこにはほとんど望みがないことを確信しているように見えた。

それは俺も同じ意見だ。

だが、現状では他にできることはない。

それでも俺は……

『そうしないと私自身先に進めない』

あの人に追いつけない。

いつかあの人を超えたいから』

このプロムをやり遂げたいといった雪ノ下の想いをかなえてやりたい。

それに折角平塚先生にリスクを負わせてまでもらった時間だ。

絶望なほどに可能性はないかもしれない、希望はほとんどないかもしれないが、

それでもなんとか足掻いてみるか。

『押しても駄目ならあきらめろ』

『千里の道もあきらめろ』

はあく、こんな往生際の悪さ、俺のポリシーではなかったはずだが。いつも間にか変わってしまったのだろうか。

多分それはきつと……………

“ちら”

「えっと柄沢君。

ね、ど、どうしたの？

何があつたの？」

「あ、えつとですね、三ヶ木先輩実は」

“ガシガシ”

なら最後までもがき足掻いてみるか。

そうと決めたら。

「まあ、そうだな。

とりあえず説得材料を揃えて、それから……………」

“ぎゅ”

雪ノ下？

ソファに横並びに座っていた雪ノ下が、俺のジャケットの袖を掴んで止めた。

「待って。

そこから先はわたし達の仕事よ。

……………わたしがやるべきことなの」

「……………そこにこだわっている場合じゃないだろ」

「……………」

本末転倒だ。

既にプロムには生徒会を初め多くの人が関わっている。

雪ノ下の想いもわかるが、だからと言ってその人達の想いを無碍にするわけには

いかない。

今はまずプロムをやり遂げることが先決だ、雪ノ下のためにも他のやつらのためにも。

だが、そんなことは雪ノ下にもわかっているはず。

それならなぜ……それだけ余裕がないのか。  
それなら、やっぱりそれなら俺が雪ノ下を。

「ゆきの」

「……まだ『お兄ちゃん』するの?」

お兄ちゃん?

その冷たい声の持ち主、陽乃さんがまるで憐れむような視線を俺達に向けた。

「は? 何の話ですか」

「雪乃ちゃんが自分でできるって言うことに無闇に手を貸しちゃうだめだよ。」

君は雪乃ちゃんのお兄ちゃんでも何でもないんだから」

「そういうことじゃ、ないです」

違う、そんなつもりじゃない。

俺は、俺はただ雪ノ下の……雪ノ下を……

「……大事な人だから。」

助けたり、手伝うのは当たり前です」

由比ヶ浜。

その弱々しく、震えるような声の持ち主、由比ヶ浜が陽乃さんを睨みつけて言った。

「大事に思うなら、相手の意思を尊重してあげるべきだと思うけどね」

「……」

「いくら相手のことを思っているからって、いつも手を貸すことが正しいとは  
限らないのよ。」

限らないのよ。

「……君たちのような関係、何て言うかわかる?」

「姉さん、やめて。」

「……わかっているから」

雪ノ下はゆっくりと落ち着いた声音で言った。

その表情に水晶のように透き通った微笑みを浮かべて。

そして俺達の方に姿勢を向け言葉を続けた。

「私は、ちゃんと自分の力でできるって証明したいの。」

だから、……比企谷君、あなたの力はもう借りないわ。  
勝手なお願いで申し訳ないけれど……。  
お願い、私にやらせて」

「……………」

「じゃないと、私、どんどんダメになる。

……………わかってているの、依存してること。

あなたにも由比ヶ浜さんにも、誰かに頼らないなんて言いながら  
いつも押し付けてきたの」

依存？

押し付け？

何を言ってるんだ、俺はただ……俺は自分が自分で望んだことを  
やってきただけだ。

誰のためでもなく、それは全て俺自身のために。

だから、だからそれは、

「それは違う……………」

全然違うだろ」

「違わないわ、結果はいつもそうだもの。

もっとうまくやれると思ったのに、結局何も変われてない……………

……………だから、お願い」

雪ノ下に濡れた瞳で見つめられ、儂い声で告げられて、微かな笑み  
を向けられて、

俺はもう何も言えなかった。

「ヒツキー……………」

由比ヶ浜に袖を引かれ、その瞳に促され、ようやく答えることがで  
きた。

“こく”

「……………わかった」

“ガタツ”

「生徒会室に戻って今後の対応を検討します」

俺の答えを聞いて雪ノ下はスクツと席を立て言った。  
その表情にはもう迷いは無かった。

あるのは決意だけだった。

〃ペコ〃

「行きましよう一色さん」

「はい」

・  
・  
・

〃ジャ〜、キュツ〃

「よしつと。」

先生、終わりました。

もう洗うものないですか？」

「おう、ご苦労。」

ほらこつちに来てコーヒーでも飲みたまえ」

「げ、またカップ出してきたんですか！

やっと片付け終わったのに」

「まあそう言うな。」

いやこの豆はな、なかなか高級なやつでな。

学校でもめつたに出さないものなんだ。

こんな時ぐらいしか、なっ」

「え、ほ、ほんと？」

仕方ないなく、ちよ、ちよつとだけだよ」

〃ごく〃

「お、美味しい！」

〃ごくごく〃

「ふう〜、美味しい。」

さつきはあまりよく味わえなかったからな」

「でも大丈夫ですか？」

高級ってやっぱり結構するんでしょ？」

「まあ一人では心苦しいのでな。」

だからこうやって共犯者を作り上げたんだ」

「ひ、ひどー！」



「ところで三ヶ木。

さっきの陽乃と比企谷たちの話だが、君はどう思う」

「え、あ、ああ。

「……わたし……わたしは陽乃さんが正しいと思う」

「ほう」

「最初に会長からプロムの話があった時、ゆきのんは自分の力でやり遂げたいって

言ったんです。

それを見届けてほしいって。

だからゆきのんのことほんとに大切に思うのなら、やっぱりここは手を出すべきじゃない」

「だが、それでは肝心のプロムが中止になるかもしれないが」

「それでも……それでもやっぱり手を出すべきじゃない。

ゆきのんが自分の力で頑張って、一生懸命頑張って……

それでだめになってもそれでいいと思います。

だって大事なものは、そこからだと思うから。

なんでそうなったのか反省して、次はもっとうまくできるように頑張ればいい。

大事なものは、失敗してもそれを糧にして成長することだと思うから」

「そうか。

君はそう考えるのだな」

「はい」

「ふふふ、三ヶ木、君は強いな」

「何度失敗してもいいんです。

わたし達には絶対次があると思いますから。

今度のプロムは駄目かもしれない、でもまた次頑張れることがきつとあるはず。

だって、わたし達まだ若いですから。

えっと大事なことからもう一回言いますね。

わたし達若いですから、わ・か・い・ですか」

「抹殺のラストブリット！」

“ボゴ”

「ぐはあく」

「わ、わたしも若手だからな・・・先生の中では若手なんだからな。

うろうろうろう」

「せ、先生、冗談、冗談ですって。

先生」

「うろう、ぐす。

まったく、君は、いや君たちはか。

そこまでわかっていながら、時々平気で自分を傷つける。

・・・いいかね、君が傷つくことでそれ以上に傷つくものも

いるんだ。

君はもう少し自分を大切にしまえ。

君も私にとって大切な教え子なんだからな」

「先生」

「ごほん。

これは少し早い卒業する君への送る言葉だ。

さして聞きたいことは聞いたし、言いたいことは言った。

私はまだ仕事があるのでな」

「はい」

「三ヶ木、後片付けよろしく」

“スタタタタ”

「え？」

げ、せ、先生！

く、くそ、逃げやがった。

また洗い物かよ。

・・・ふう

でもさ、そんなことぐらい、ほんとは比企谷君わかってる。

でも頭ではわかっていても、心は別。

だからプロムが中止になりそうになったら、きっと彼は……………」

“ぐくぐく”

「……その時は……わたし……わたしが」

“ガチャ”

「ただいま」

“しーん”

って、そうか小町は生徒会だったな。

親父たちもまた残業だろうし。

しっかし。

「はあく疲れた」

“どき”

そういえば今日入試だったんだよな。

つ、疲れた。

腹も減ったが今は少しこのまま休んでいたい。

“ブゥ、ブゥ”

ん、電話？

だ、だれだ、今は正直しんどいんだが。

“カシヤ”

ん、三ヶ木？

“カシヤカシヤ”

「もしもし、どうした？」

「あ、ごめん三ヶ木」

「ん、ああ、わかってる。」

「画面にお前の名前出てるから」

「そ、そだね。」

あ、あのね、今学校から帰るとこなんだけど、ちよつと家に寄つてもいいかなあ？」

「ん、ああ構わないが、だが時間が時間だ。」

もう外は暗くなってるし、用事があるのなら俺がお前の家にまで行くが」

「うううん、いいよ。」

だって今日は入試だったし、それにほらいろいろあつて疲れたと思うし。

わたしが行くよ」

「そうか」

「うん。」

じゃ、また後でね」

「おう」

“プー、プー”

ふう。

確かにそのほうがありがたい。

正直、こうやって横にしていると自然と瞼が塞がって、深い闇に落ちそうだし。

まあ今日一日いろいろあつて………つてあり過ぎんだろ。

入試による睡眠不足と疲れ、そしてそれよりも

『………わかつているの、依存してること。』

あなたにも由比ヶ浜さんにも、誰かに頼らないなんて言いながら

いつも押し付けてきたの』

雪ノ下の言葉、それが俺の心を押し潰すように重くにのしかかっている。

……依存つか。

あの時はそうじゃないそう思った。

俺は俺のため、俺自身が望んだことをやってきただけなのだ。

だがあの後、学校からの帰りに追っかけてきた陽乃さんに捕まり、そして告げられた。

俺達の関係は共依存だと。

「あの子に頼られるのって気持ちいいでしょ？」

陽乃さんにそう言われて思い知らされた。

俺は雪ノ下に頼られ必要とされることで、自分の存在意義を見出し、

満足感や安心感を得ていたのだ。

羞恥と自己嫌悪で吐き気がする。

心底気持ち悪いな俺。

「でも俺は、それでも俺はきつと。」

「うとうと」

『あいつは……、何を諦めて、大人になるんですかね』

『……わたしと同じくらい、たくさんのものだよ』

俺は、なにかを諦めることができるのだろうか……か。

「スゥ、スゥ」

・  
・  
・

「ピンポーン」

「はっ」

やべ、熟睡してたんじゃない俺？

ちよつと横になってるだけのはずだったんだが。

「ふあくあ」

「ピンポーン」

ん、あ、そうだった。

三ヶ木、学校の帰りによるって言ってたな。

何の用事だ？

まああいつのことだ、こんな時間に来るって言うからには  
きつと何か大事な用事があるんだろう。

「スタスタスタ」

「お、おう、遅かったな三ヶ木」

「ガチャ」

「え、あ、あれ？」

「や、やつはろーヒッキー」

「……由比ヶ浜？」